

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第130集

石田II・寺領・西光田 I 遺跡発掘調査報告書

国道397号道路改良工事関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

頁	行 等	誤	正
7	7	時代中・	時代・
11	下12	interfaec	interface
11	下8	埋設	埋没
22	15	煙道上	煙道状
25	下8	中・	・
29	下10	P 1 中・	P 1 ・
33	2	上限中・	上限・
39	表中器種形式	霰石	擦石
46	6. 下3	layer	layer
48	7	埋土中・	埋土・
64	表中実測図	78-1	79-1
67	表中実測図	86-1	85-1
68	表中実測図	85-	86-
70	下2	堆没	埋没
72	8	埋積	埋没
74	下3	法定	決定
84	6	埋堆	埋没
84	8	底積	堆積
85	表中器種形式	高台付	高台付坏
94	1	溝路	溝跡
95	1	埋没後に質と	埋土の性質と
95	2	堆没	埋没
97	下3	著しく	著しく
119	6	a 中・	a ・
119	下15	長胴	長胴甕の底径中に
122	下11.10	だとすれと	だとすれば
122	下9	用意	容易
125	下15	22号住居跡中・37号住居跡中・	22号住居跡・37号住居跡・
126	下15	-形式	一形式
127	表中 文献	菊地()三上()	菊地(1980)三上(1979)
127	表中	板橋他()八重樫他()	板橋他(1972)八重樫他(1979)
129	16	中型甕	中形甕

石田Ⅱ・寺領・西光田Ⅰ遺跡発掘調査報告書

国道397号道路改良工事関連遺跡発掘調査

序

本県には縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、7,300箇所にあふ遺跡が確認されております。これら先人の残した貴重な文化遺産を保護し、後世に伝えていくことは、県民に課せられた責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発に伴う交通網の整備も重要な一施策であります。一般国道をはじめとする幹線道路の改良事業は、高速交通時代に対応して多方面から期待されるところであります。

このような埋蔵文化財の保護と開発との調和ある施策も今日的課題であり、当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によって消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告の水沢市街地西端に位置する3遺跡は、胆沢扇状地の中央部北側に立地し、昭和62年の調査によって奈良・平安時代の集落跡であることが明らかになりました。竪穴住居跡は微高地の縁辺に占地し、溝や土坑とともに集落景観の一端を知ることができる資料であります。

本報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず埋蔵文化財に対する理解の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成に御協力、御援助を賜りました水沢土木事務所、水沢市教育委員会をはじめとする関係各位に衷心より感謝申し上げます。

昭和63年7月

財団法人岩手県文化振興事業団

理事長 中 村 直

例 言

1. 本書は、岩手県水沢市寺領126-1ほかに所在する石田II遺跡・寺領遺跡・西光田I遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は国道397号の石田地区道路改良工事に関連して記録保存を目的に行った緊急発掘調査であり、岩手県土木部と岩手県教育委員会文化課との協議をへて、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
3. 各遺跡の遺跡番号、調査略号、調査対象面積はそれぞれ以下のとおりである。

石田II遺跡	NE16-2018、IDII-87	2,000㎡
寺領遺跡	NE16-2016、JR-87	1,500㎡
西光田I遺跡	NE16-2023、NKI-87	500㎡
4. 野外調査期間は、昭和62年8月1日～同年10月31日である。
5. 野外調査は、三浦謙一と佐藤嘉広が担当した。
6. 本報告書の作成に関しては、下記の鑑定・分析を依頼した。(敬称略)

樹種鑑定	早坂松次郎(財団法人岩手県木炭協会)
土器の胎土分析及び火山灰の同定	三辻利一(奈良教育大学)
7. 図版の縮尺は特に示さない限り、住居跡・溝跡60分の1、土坑40分の1、遺物の実測図3分の1、拓本2分の1とした。
8. 本文及び図版中に用いた記号は、以下のとおりである。

J	住居跡
P	土坑
M	溝跡
p.h.	柱穴跡
9. 野外調査・室内整理に際して、以下の方々から御教示・御協力をいただいた(敬称略)。

伊藤博幸	佐久間賢(水沢市教育委員会)	石川長喜(県立水沢農業高校)	鈴木明美
(胆沢町教育委員会)	土沼章一	西野修	千葉周秋(金ヶ崎町教育委員会)
10. 本書の作成は、当センター室内作業員の協力を得て佐藤嘉広が行った。
11. 調査にかかわる諸記録、遺物等の資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

目 次

序	
例言	
I 調査に至る経過	1
II 遺跡の立地と環境	1
1 遺跡の立地	1
2 基本層序	3
3 周辺の遺跡	3
III 調査の経過と方法	5
1 調査経過	5
2 調査方法	5
3 整理方法	5
IV 調査の成果	7
V 検出された遺構と遺物	11
1 住居跡と住居状遺構	11
2 土坑	70
3 溝跡	94
4 掘立柱建物跡	112
5 遺構外出土の遺物	115
VI 分析と考察	118
1 竪穴住居跡について	118
2 国分寺下層式土器について	118
3 線刻のある土器について	123
4 平安時代の土器について	123
5 緑釉陶器について	126
6 その他の遺物	128
参考・引用文献	
付編 須恵器の胎土分析と火山灰の分析	
1 水沢市周辺の遺跡出土須恵器	131
2 寺領遺跡出土火山灰	134

図版目次

<p>第1図 石田Ⅱ・寺領・西光田Ⅰ遺跡の 位置と周辺の遺跡……………2</p> <p>第2図 遺跡内の基本層序……………3</p> <p>第3図 石田Ⅱ・寺領・西光田Ⅰ遺跡全 体図および遺構配置図……………9.10</p> <p>第4図 1号住居跡平面図および埋土断 面図……………11</p> <p>第5図 1号住居跡内出土遺物……………11</p> <p>第6図 2号住居跡炭化材・焼土等検出 状況……………12</p> <p>第7図 2号住居跡平面図および埋土断 面図……………14</p> <p>第8図 2号住居跡内出土遺物(1)……………15</p> <p>第9図 同 (2)……………16</p> <p>第10図 同 (3)……………17</p> <p>第11図 同 (4)……………18</p> <p>第12図 3号住居跡平面図および埋土断 面図……………19</p> <p>第13図 4号住居跡平面図および埋土断 面図……………20</p> <p>第14図 4号住居跡内出土遺物……………21</p> <p>第15図 5号住居跡平面図および埋土断 面図……………22</p> <p>第16図 6号住居跡平面図および埋土断 面図……………23</p> <p>第17図 6号住居跡内出土遺物……………23</p> <p>第18図 7号住居跡平面図および埋土断 面図……………24</p> <p>第19図 7号住居跡炭化材・焼土等検出 状況……………24</p> <p>第20図 7号住居跡内出土遺物……………25</p> <p>第21図 8号住居跡炭化材・焼土等検出 状況……………26</p> <p>第22図 8号住居跡平面図および埋土断 面図……………26</p> <p>第23図 8号住居跡内出土遺物……………28</p> <p>第24図 9号住居跡平面図および埋土断 面図……………29</p> <p>第25図 9号住居跡内出土遺物……………30</p> <p>第26図 10号住居状遺構平面図……………30</p> <p>第27図 10号住居状遺構内出土遺物……………30</p> <p>第28図 11号住居状遺構平面図および埋 土断面図……………31</p> <p>第29図 11号住居状遺構内出土遺物……………32</p>	<p>第30図 12号住居状遺構平面図および埋 土断面図……………32</p> <p>第31図 12号住居状遺構内出土遺物……………32</p> <p>第32図 13号住居跡平面図および埋土断 面図……………33</p> <p>第33図 13号住居跡内出土遺物(1)……………34</p> <p>第34図 同 (2)……………35</p> <p>第35図 同 (3)……………36</p> <p>第36図 14号住居跡平面図および埋土断 面図……………38</p> <p>第37図 14号住居跡内出土遺物……………39</p> <p>第38図 15号住居跡平面図および埋土断 面図……………40</p> <p>第39図 15号住居跡内出土遺物(1)……………40</p> <p>第40図 同 (2)……………41</p> <p>第41図 16号住居跡平面図および埋土断 面図……………42</p> <p>第42図 16号住居跡内出土遺物(1)……………43</p> <p>第43図 同 (2)……………44</p> <p>第44図 18号住居跡平面図および埋土断 面図……………45</p> <p>第45図 18号住居跡内出土遺物……………46</p> <p>第46図 19号住居跡平面図および埋土断 面図……………46</p> <p>第47図 19号住居跡内出土遺物(1)……………47</p> <p>第48図 同 (2)……………47</p> <p>第49図 20号住居状遺構平面図……………48</p> <p>第50図 20号住居状遺構出土遺物……………49</p> <p>第51図 21号住居状遺構平面図……………49</p> <p>第52図 22号住居跡平面図および埋土断 面図……………49</p> <p>第53図 22号住居跡内出土遺物(1)……………50</p> <p>第54図 同 (2)……………51</p> <p>第55図 23号住居跡平面図および埋土断 面図……………52</p> <p>第56図 24号住居跡平面図および埋土断 面図……………53</p> <p>第57図 24号住居跡内出土遺物(1)……………54</p> <p>第58図 同 (2)……………54</p> <p>第59図 25号住居跡平面図および埋土断 面図……………55</p> <p>第60図 25号住居跡内出土遺物(1)……………55</p> <p>第61図 同 (2)……………55</p> <p>第62図 26号住居状遺構平面図……………56</p>
---	---

第63図	27号住居跡平面図	57	第97図	土坑内出土遺物(6)	80
第64図	27号住居跡内出土遺物	57	第98図	39~50号土坑平面図および埋土断面図	81
第65図	28号住居状遺構平面図	58	第99図	51~59号土坑平面図および埋土断面図	83
第66図	28号住居状遺構内出土遺物	58	第100図	土坑内出土遺物(7)	85
第67図	29号住居状遺構平面図	58	第101図	土坑内出土遺物(8)	86
第68図	29号住居状遺構内出土遺物	58	第102図	土坑内出土遺物(9)	86
第69図	30号住居跡平面図および埋土断面図	59	第103図	土坑内出土遺物(10)	86
第70図	30号住居跡内出土遺物(1)	60	第104図	60~69号土坑平面図および埋土断面図	87
第71図	同(2)	60	第105図	土坑内出土遺物(11)	88
第72図	31号住居跡平面図および埋土断面図	60	第106図	土坑内出土遺物(12)	88
第73図	31号住居跡内出土遺物(1)	61	第107図	土坑内出土遺物(13)	88
第74図	同(2)	61	第108図	土坑内出土遺物(14)	89
第75図	32号住居跡平面図および埋土断面図	62	第109図	土坑内出土遺物(15)	90
第76図	32号住居跡内出土遺物	62	第110図	土坑内出土遺物(16)	91
第77図	33号住居跡平面図	63	第111図	土坑内出土遺物(17)	92
第78図	33号住居跡内出土遺物(1)	63	第112図	土坑内出土遺物(18)	93
第79図	同(2)	64	第113図	1号溝跡平面図および埋土断面図	94
第80図	34号住居跡平面図および埋土断面図	64	第114図	1号溝跡内出土遺物(1)	94
第81図	34号住居跡内出土遺物	65	第115図	1号溝跡内出土遺物(2)	94
第82図	35号住居跡平面図および埋土断面図	65	第116図	2号溝跡平面図および埋土断面図	95
第83図	35号住居跡内出土遺物	66	第117図	2号溝跡内出土遺物	95
第84図	37号住居跡平面図および埋土断面図	66	第118図	3号溝跡平面図および埋土断面図	95
第85図	37号住居跡内出土遺物(1)	67	第119図	3号溝跡内出土遺物	95
第86図	同(2)	68	第120図	5号溝跡平面図および埋土断面図	95
第87図	1~7号土坑平面図および埋土断面図	71	第121図	6号溝跡平面図および埋土断面図	95
第88図	土坑内出土遺物(1)	72	第122図	7号溝跡平面図および埋土断面図	95
第89図	同(2)	72	第123図	6号溝跡内出土遺物	96
第90図	8~13号土坑平面図および埋土断面図	73	第124図	8号溝跡平面図および埋土断面図	96
第91図	土坑内出土遺物(3)	74	第125図	8号溝跡内出土遺物	96
第92図	同(4)	74	第126図	9号溝跡平面図および埋土断面図	96
第93図	14~20号土坑平面図および埋土断面図	75	第127図	9号溝跡内出土遺物	97
第94図	21~29号土坑平面図および埋土断面図	76	第128図	11号溝跡平面図および埋土断面図	97
第95図	土坑内出土遺物(5)	77	第129図	12号溝跡平面図および埋土断面図	97
第96図	30~37号土坑平面図および埋土断面図	79			

第130図	13号溝跡平面図および埋土断面 図……………	98	第161図	31号溝跡平面図および埋土断面 図……………	107
第131図	13号溝跡内出土遺物……………	98	第162図	32号溝跡平面図および埋土断面 図……………	107
第132図	14号溝跡平面図および埋土断面 図……………	98	第163図	31号溝跡内出土遺物……………	108
第133図	14号溝跡内出土遺物……………	98	第164図	32号溝跡内出土遺物……………	108
第134図	15号溝跡平面図および埋土断面 図……………	98	第165図	33号溝跡平面図および埋土断面 図……………	108
第135図	17号溝跡平面図および埋土断面 図……………	99	第166図	34号溝跡平面図および埋土断面 図……………	108
第136図	17号溝跡内出土遺物……………	99	第167図	34号溝跡内出土遺物(1) ……	108
第137図	18号溝跡平面図および埋土断面 図……………	99	第168図	34号溝跡内出土遺物(2) ……	109
第138図	18号溝跡内出土遺物……………	99	第169図	35号溝跡平面図および埋土断面 図……………	110
第139図	19号溝跡平面図および埋土断面 図……………	100	第170図	37号溝跡平面図および埋土断面 図……………	110
第140図	19号溝跡内出土遺物……………	100	第171図	37号溝跡内出土遺物……………	110
第141図	21号溝跡平面図および埋土断面 図……………	100	第172図	35号溝跡内出土遺物……………	111
第142図	21号溝跡内出土遺物……………	100	第173図	92号柱穴跡内出土遺物……………	112
第143図	22号溝跡平面図および埋土断面 図……………	101	第174図	柱穴跡群・掘立柱建物跡平面図…	113
第144図	22号溝跡内出土遺物……………	101	第175図	遺溝外出土遺物(1) ……	115
第145図	23号溝跡平面図および埋土断面 図……………	101	第176図	同 (2) ……	116
第146図	23号溝跡内出土遺物……………	101	第177図	同 (3) ……	117
第147図	24号溝跡平面図および埋土断面 図……………	102	第178図	同 (4) ……	117
第148図	24号溝跡内出土遺物……………	102	第179図	国分寺下層式期の竪穴住居跡の 床面積……………	118
第149図	25号溝跡平面図および埋土断面 図……………	102	第180図	石田I遺跡出土甕の分類……………	119
第150図	26号溝跡平面図および埋土断面 図……………	102	第181図	石田II遺跡出土甕の大きさ……………	120
第151図	25号溝跡内出土遺物(1) ……	103	第182図	石田II遺跡出土坏の口径……………	120
第152図	同 (2) ……	103	第183図	岩手県内各遺跡の坏の口径とそ の累積グラフ……………	120
第153図	28号溝跡平面図および埋土断面 図……………	104	第184図	石田II遺跡出土坏の扁平指数(f) と県内各遺跡との比較……………	121
第154図	26号溝跡内出土遺物……………	105	第185図	県内各遺跡における甕の内面調 整……………	122
第155図	28号溝跡内出土遺物(1) ……	105	第186図	石田II遺跡出土坏底部の線刻…	123
第156図	29号溝跡平面図および埋土断面 図……………	105	第187図	石田II遺跡および県内各遺跡出 土の線刻を有する土器……………	124
第157図	28号溝跡内出土遺物(2) ……	106			
第158図	29号溝跡内出土遺物……………	107			
第159図	30号溝跡平面図および埋土断面 図……………	107			
第160図	30号溝跡内出土遺物……………	107			

写真図版目次

写真図版 1	(遺跡近景基本層序)……………137	写真図版35	(遺構34)……………171
写真図版 2	(遺構 1)……………138	写真図版36	(遺構35)……………172
写真図版 3	(遺構 2)……………139	写真図版37	(遺構36)……………173
写真図版 4	(遺構 3)……………140	写真図版38	(遺構37)……………174
写真図版 5	(遺構 4)……………141	写真図版39	(遺構38)……………175
写真図版 6	(遺構 5)……………142	写真図版40	(遺構39)……………176
写真図版 7	(遺構 6)……………143	写真図版41	(遺構40)……………177
写真図版 8	(遺構 7)……………144	写真図版42	(遺構41)……………178
写真図版 9	(遺構 8)……………145	写真図版43	(遺構42)……………179
写真図版10	(遺構 9)……………146	写真図版44	(遺構43)……………180
写真図版11	(遺構10)……………147	写真図版45	(遺構44)……………181
写真図版12	(遺構11)……………148	写真図版46	(遺物 1)……………182
写真図版13	(遺構12)……………149	写真図版47	(遺物 2)……………183
写真図版14	(遺構13)……………150	写真図版48	(遺物 3)……………184
写真図版15	(遺構14)……………151	写真図版49	(遺物 4)……………185
写真図版16	(遺構15)……………152	写真図版50	(遺物 5)……………186
写真図版17	(遺構16)……………153	写真図版51	(遺物 6)……………187
写真図版18	(遺構17)……………154	写真図版52	(遺物 7)……………188
写真図版19	(遺構18)……………155	写真図版53	(遺物 8)……………189
写真図版20	(遺構19)……………156	写真図版54	(遺物 9)……………190
写真図版21	(遺構20)……………157	写真図版55	(遺物10)……………191
写真図版22	(遺構21)……………158	写真図版56	(遺物11)……………192
写真図版23	(遺構22)……………159	写真図版57	(遺物12)……………193
写真図版24	(遺構23)……………160	写真図版58	(遺物13)……………194
写真図版25	(遺構24)……………161	写真図版59	(遺物14)……………195
写真図版26	(遺構25)……………162	写真図版60	(遺物15)……………196
写真図版27	(遺構26)……………163	写真図版61	(遺物16)……………197
写真図版28	(遺構27)……………164	写真図版62	(遺物17)……………198
写真図版29	(遺構28)……………165	写真図版63	(遺物18)……………199
写真図版30	(遺構29)……………166	写真図版64	(遺物19)……………200
写真図版31	(遺構30)……………167	写真図版65	(遺物20)……………201
写真図版32	(遺構31)……………168	写真図版66	(遺物21)……………202
写真図版33	(遺構32)……………169	写真図版67	(遺物22)……………203
写真図版34	(遺構33)……………170		

表目次

表 1	石田Ⅱ・寺領・西光田Ⅰ遺跡検出遺構の時期区分…………… 8	表 4	溝跡属性表…………… 114
表 2	竪穴住居跡属性表……………69	表 5	柱穴跡属性表…………… 114
表 3	土坑属性表……………93	表 6	岩手県内出土の緑釉陶器…………… 127

I 調査に至る経過

一般国道397号石田地区道路改良工事は、水沢市横町から同市石田まで総延長2,400mの現況幅員6mを20mに拡幅する工事であり、昭和46年に事業着工し、同63年度に完了の予定である。

この間に所在する埋蔵文化財包蔵地は、石田Ⅱ・寺領・西光田Ⅰの3遺跡であり、この取り扱いについては岩手県土木部と岩手県教育委員会との間で分布調査を含む事前協議が行われた。

経過の概要は、昭和61年8月5日付け水土第806号による分布調査の依頼、昭和61年8月20日付け教文第291号による埋蔵文化財関連土木工事等の調査について照会、昭和61年9月12・13日岩手県教育委員会による分布調査の実施、昭和61年9月18日付け教文第347号分布調査結果の回答、昭和61年11月7・8日岩手県教育委員会による現地確認調査の実施である。これにより、県教育委員会文化課は調整のうえ、3遺跡を一括して調査することとし、昭和62年度における県文化振興事業団埋蔵文化財センターの発掘調査事業に編入し、昭和62年7月21日付け委託契約により調査に着手することとなった。

II 遺跡の立地と環境

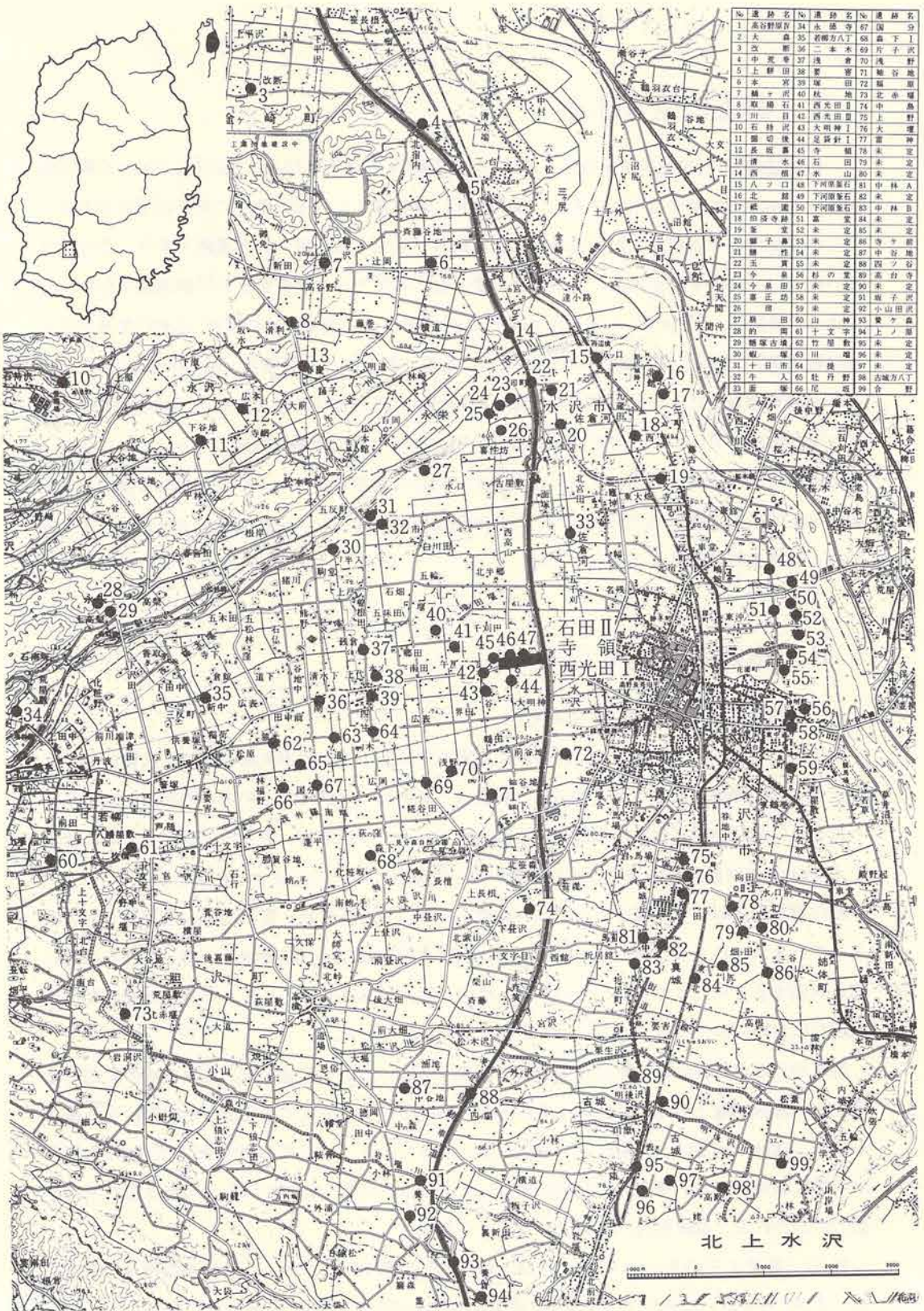
1. 遺跡の立地（第1図、写真図版1）

石田Ⅱ・寺領・西光田Ⅰ遺跡は、岩手県を南北に流れる北上川中流域の西側に位置している。北上川上・中流域では、北から雫石川・和賀川・胆沢川・砂鉄川などの中小の河川が合流し、それぞれに扇状地形または河岸段丘が形成されている。3遺跡は、胆沢川と衣川との間に発達した北上川流域最大の胆沢扇状地中央部からやや北寄りの河岸段丘上に立地する。

胆沢扇状地において発達する段丘は、高位から順に一首坂段丘・胆沢段丘・水沢段丘と大別されている。これらは、豊沢川～胆沢川間における西根段丘・村崎野段丘・金ヶ崎段丘にそれぞれ対応するといわれている。その形成年代は、胆沢段丘においてリス・ヴェルム間氷期、水沢段丘においてはヴェルムクライマックスが想定されている。

遺跡ののる水沢段丘は、胆沢川南岸および北上川沿いによく発達する。水沢市域の北部では現河川の流域低地との比高は約10mであるが、下流に行くに従って段丘崖が不明瞭になる場合がある。遺跡付近では、沖積面との比高が1～2mであり、段丘崖は比較的なだらかであるが明瞭に識別される。発掘区の北側に平行して段丘崖が東西に延びている。南側は広く平坦な面でおおわれる。遺跡付近の標高は60～65mである。

現在、遺跡とその付近は宅地・水田・畑地として利用されている。水沢市街地中心部から西へ2kmとほど近いためか、近年は宅地・団地等の造成が盛んで遺跡の景観も年々変容しつつある。



第1図 石田Ⅱ・寺領・西光田Ⅰ遺跡の位置と周辺の遺跡

2. 基本層序 (第2図、写真図版1)

3遺跡は同一の河岸段丘上にのるものの、地点によって段丘堆積物の構成が多少異なっている。また、遺跡層序はその複雑な様相から本来柱状図としては表せないものであるが(Harris 1979)、本遺跡の場合東西に長く、地点によっては広く後世の攪乱をうけている。そのため、2地点における層序柱状図に代える。

I層は現在の耕作土で、腐食土のI a層とグライ化した土壌で旧水田部分において見られるI b層に分かれる。さらにII層への漸移層的なI c層を認めることができる。遺物は散漫に含まれている。層厚は30~40cmである。

II層は、地山を構成している水成堆積層である。石田II遺跡ではほぼ純粋なシルト、寺領・西光田I遺跡ではシルトにその約2分の1の量の細砂を含んでいる。この上面で奈良・平安時代の竪穴遺構が確認される。なお、縄文時代晩期の遺構は同一面上で検出されている。B、C、300年頃からA、D、900年頃まで、新たな土壌堆積はほとんどなかった。遺物はまったく含まれていない。層厚は30~50cmである。

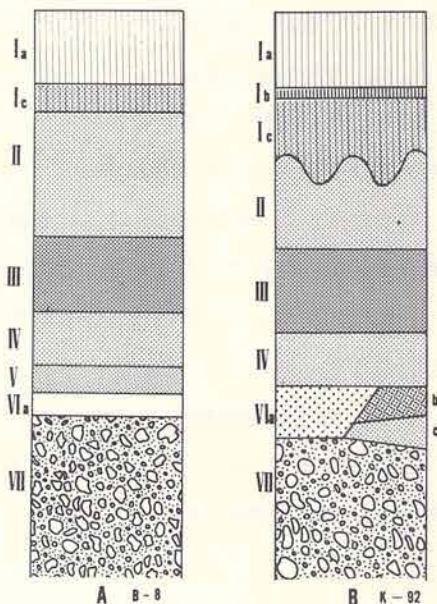
III層は、石田II・寺領遺跡を広くおおっているが、西光田I遺跡では欠落している。人頭大の円礫を多量に含む地点があることから、河川作用による一時的な堆積もしくはその再堆積によって形成されたものと考えられる。層厚30cm前後、無遺物層である。

IV層以下はシルト層、砂層が地点によって互層をなしている。無遺物層である。

VII層はいわゆる段丘礫層である。構成礫はかなり丸味を帯びた礫であるが風化は進んでおらず、硬い。

3. 周辺の遺跡 (第1図)

胆沢扇状地には、縄文時代以降各時代各時期の遺跡が多数確認されている。これらのうち、奈良・平安時代の集落跡の分布状況を示した。特に、東北新幹線・東北縦貫自動車道の建設に関連した調査によって、北上川兩岸の当該期の遺跡が数多く調査された。石田I遺跡は今回調



- I a 耕作土
- I b 耕作土(旧水田)
- I c 耕作土下の漸移層
- II 褐色~黄褐色シルト(一部細砂)
- III 黒色シルト
- IV 褐色~黄褐色シルト
- V 黒褐色シルト
- VI a にぶい黄褐色細砂
- VI b オリーブ灰色粗砂(一部礫)
- VI c 褐色シルト
- VII 灰色粗砂(一部礫)

第2図 遺跡内の基本層序

査の石田Ⅱ遺跡の東に隣接する集落跡であり、8世紀後半の集落の形態をかなりの程度明らかにした。やや時期は前後するが、8世紀代の集落跡として水沢市膳性遺跡、同市今泉遺跡、金ヶ崎町上餅田遺跡、8世紀代から9世紀の集落跡として水沢市林前遺跡、江刺市宮地遺跡、同市力石Ⅱ遺跡が代表的である。

奈良時代から平安時代にかけての集落立地の変遷やその背景については、すでにいくつかの観点から論じられている（伊藤 1980など）。胆沢川兩岸の縁辺部または水沢段丘の微高地あるいは段丘崖縁辺部の集落は、平安時代には北上川左岸の自然堤防上または胆沢段丘縁辺部にも拡散するといわれている。

この地域の当該期集落・集落群についての理解は、当遺跡の北北東約4.5kmに位置した胆沢城の建設と関連づけられて考えられている。胆沢城跡は、水沢市教育委員会によって昭和49(1974)年から継続的に調査が行われている。

III 調査の経過と方法

1. 調査経過

発掘対象区域が、道路の両側であり、片側4m幅、長さ560m以上に亘っているため、調査区全体で作業を同時に進めていくことは不可能であった。そのため、行程を大きく2段階に分け、一旦発掘区のところどころに表土等の排土を集積し、調査の終了とともに排土を移動しながら、それぞれ石田II遺跡の東端から西光田I遺跡の西端へ向かって調査を行った。

粗掘は、発掘開始当初発掘区に接する水田が滞水状態であったために人力で行っていたが、秋口に水がひいたため重機を使用した。順次精査を行い、記録をとった地区は直ちに土捨て等に使用して作業の効率化はかった。遺跡は水はけが悪く、降雨等によって発掘区が冠水した場合には、揚水機を使用した。第1段階で全調査面積の70%にあたる2,800㎡を終了し、調査2か月を経て第2段階へ進んだ。作業行程に多少の遅れがあったが予定どおり野外調査の全行程を終了した。

2. 調査方法


発掘調査区域の任意の2点をそれぞれ基準点1・2とし、両者を結ぶ線と基準点1においてこれと直交する線をそれぞれ基準線1・2として、これに基づいて4m×4mのグリッドを設定した。グリッドによる発掘区の区分は遺構配置全体図(第3図)のとおりである。基準線1がB-Cライン、基準線2が20-21ラインとなるようにグリッドを命名した。

基準点1・2の測量成果は以下のとおりである。

基準点1	B	39° 8' 30"	.645	X-95218m	.218
	L	141° 7' 20"	.212	Y	24974m .988
	N	0° 10' 57"		H	62.81m
基準点2	B	39° 8' 30"	.718	X-95216m	.076
	L	141° 7' 18"	.534	Y	24934m .708
	N	0° 10' 56"		H	62.74m

3. 整理方法

室内整理は、通常どおり遺跡・遺構の把握と出土遺物の記録保存を行った。特殊な保存や記録を必要とする遺物は出土していない。なお、調査の経緯から石田II・寺領・西光田I遺跡は併行して整理し、一連の遺構名を付した。

挿図における遺構の表現方法は通例に従ったが、焼土については、炭化材のうち比較的

原形をとどめているものは≡≡≡、炭化材が細粒となっている部分について⋮⋮⋮で表現した。また、より新しい遺構によって破壊されている部分を⋮⋮⋮⋮⋮で表した。

竖穴遺構の堆積土層注記は『新版標準土色帖』（1976）に従った。

遺物の表現方法についても通例に従ったが、土師器・須恵器・あかやき土器の別は、それぞれ断面を白ヌキ、黒ツブシ、網で示した。

土器観察表における略号は以下のとおりである。

種類

- H 土師器
- S 須恵器
- A あかやき土器

調整

- k ケズリ
- h ハケ
- n ナデ
- m ミガキ

分類 土師器

- a～c 非ロクロ土師器坏
- d 糸切り無調整土師器坏
- e 糸切り再調整土師器坏
- f ヘラ切り無調整土師器坏
- g ヘラ切り再調整土師器坏

須恵器

- (1) 糸切り無調整須恵器坏
- (2) 糸切り再調整須恵器坏
- (3) ヘラ切り無調整須恵器坏
- (4) ヘラ切り再調整須恵器坏

あかやき土器

- 1. 糸切り無調整あかやき土器坏
- 2. 糸切り再調整あかやき土器坏
- 3. ヘラ切り無調整あかやき土器坏
- 4. ヘラ切り再調整あかやき土器坏

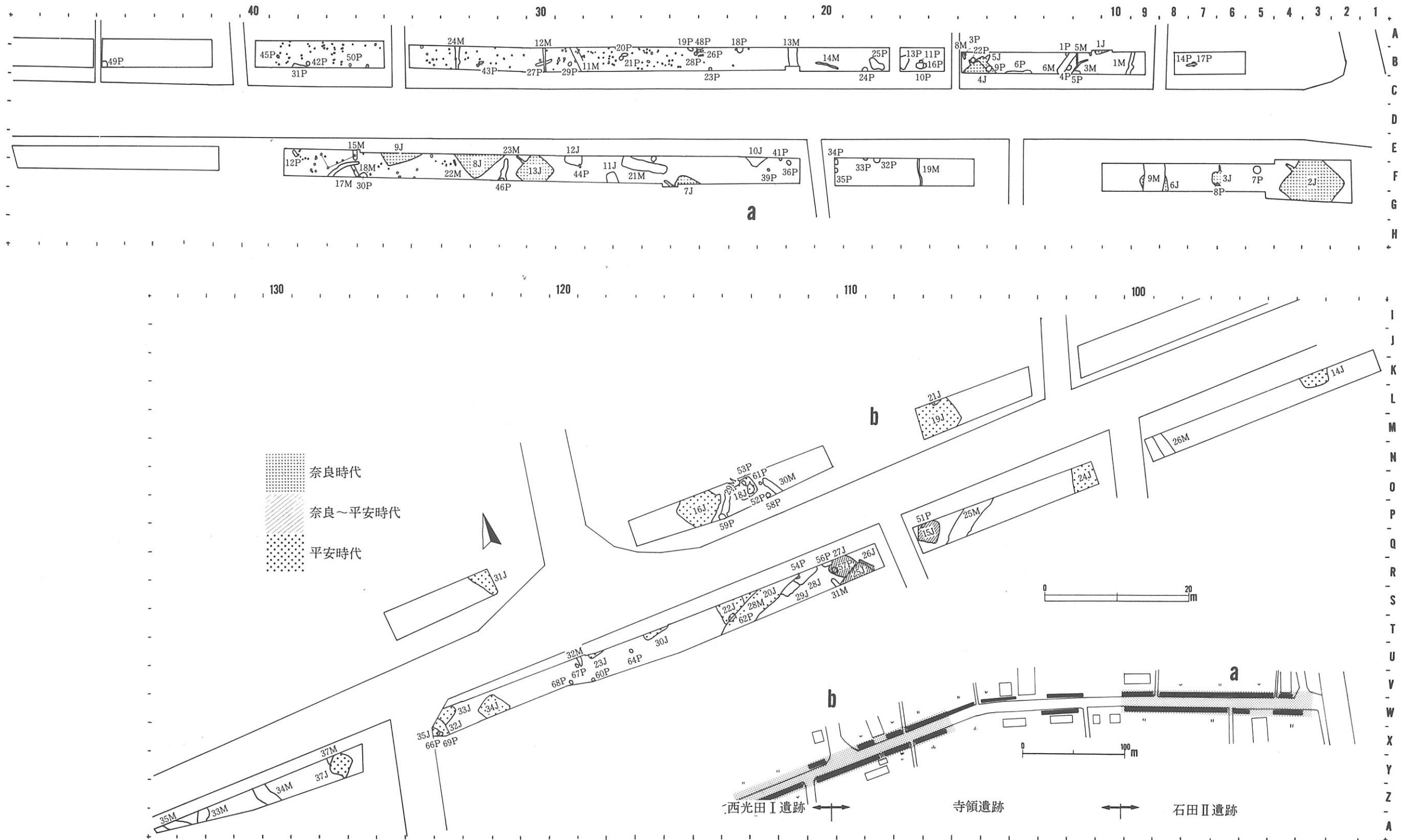
Ⅳ 調査の成果

今回の石田Ⅱ・寺領・西光田Ⅰ遺跡の発掘調査によって、胆沢扇状地における奈良時代後半期から平安時代にかけての集落跡の様相が明らかになった。検出された遺構のうち、竪穴住居跡についてはほとんどが部分的な検出にとどまり、他の遺構についても発掘調査区域が限定されていることから、一集落跡における位置付けは不明な部分が多かった。以下、調査成果のいくつかの点について要約する(第3図)。

1. 遺跡は水沢段丘の縁辺部に形成された。時代中・時期によって住居跡等の選地が多少異なっている。
2. 縄文時代晩期ごろ、この地域に土坑や他の遺構が部分的に構築されていた。しかし、それらはそれ以降の時代の自然作用あるいは奈良時代もしくは平安時代における遺跡の形成によって、今日わずかの遺物を残しているだけである。
3. 奈良時代後半～終末にかけて、発掘調査区域の東側石田Ⅱ遺跡を中心として集落が形成されていた。それらは、ほぼ同時に廃絶されている。
4. 平安時代前半からなかばにかけて、発掘調査区域の西側寺領・西光田Ⅰ遺跡を中心として集落が形成された。それらは遺構相互の重複関係により2時期以上の廃絶の時間差が認められるが、直接新旧関係を判断できる遺構を除いて個々の遺構の同時性・時間差の把握は大まかなものにとどまり、集落景観の完全な復元は不可能であった。
5. 平安時代以降、発掘調査区域の東側石田Ⅱ遺跡に掘立柱建物跡が構築されたが、具体的棟数・規模・年代幅は明らかでないものがほとんどである。
6. 発掘調査区域中央部寺領遺跡東側について遺構が検出されなかったが、水沢段丘上においては奈良・平安時代の遺物が散見される。この区域は近代～現代に水田として利用されており、それ以前の遺構は破壊されたものと考えられる。
7. 遺構の時代・時期と検出数・重複関係については、以下のとおりである。本表中の国分寺下層式期～Ⅲ-1期、Ⅲ-1期～Ⅲ-2期としたものは、それぞれ両期のいずれかあるいは両期に亘る可能性をもつものである。遺構存続時期の細部は確定できないものが多い。従って、例えば57号土坑が14号住居跡と同時あるいはより新しいということはある。なお、→は直接の新旧関係を、()は時期不明の遺構を表わしたものである。時期区分は、国分寺下層式期は、高橋(1982)のⅡ-2群、遠藤・相原(1983)の7-b群の土器区分と、Ⅲ-1期、Ⅲ-2期は高橋のⅢ-1群、Ⅲ-2群とほぼ対応している。

表1 石田II・寺領・西光田I遺跡検出遺構の時期区分

国分寺下層式期	国分寺下層式期~III-1期	III-1期~III-2期	III-2期	中世以降	その他重複する遺構
1 J 2 J 3 J 3 P → (8 M) 4 J → 9 P 5 J → 4 J → 9 P 6 J 7 P 7 J 13 P 30 P 8 J 27 P → (12 M) 9 J (18 M) → 17 M 11 J 13 J 1 P → 6 M 4 P 3 M 46 P → 23 M	(51 P) ← 15 J 26 J → 25 J 26 J → 25 J 27 J 31 M 21 J → 19 J 22 J → 20 J 24 J 29 J → 28 J → 54 P 56 P 57 P 25 M	62 P (52 P) → 18 J 23 J → 29 M → 59 P 30 J 31 J 33 J → 32 J 37 M → 37 J → 69 P → 66 P 9 M 34 J	14 J 21 P 58 P 63 P 61 P 29 M → 59 P 67 P 68 P 35 J 69 P → 66 P	2 M 5 M 5 P 6 P 26 M P.h. (1~209)	12 J → 44 P 10 P → 16 P → 11 P 28 P → 26 P 48 P
(遺構数) J=11, P=9, M=5	J=4,	J=7, P=3, M=1	J=11, P=10, M=5	P=2, M=2	(計) J=35, P=61, M=31, P.h.=208

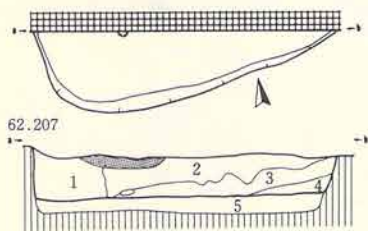


第3図 石田Ⅱ・寺領・西光田Ⅰ遺跡全体図および遺構配置図

V 検出された遺構と遺物

1. 住居跡と住居状遺構

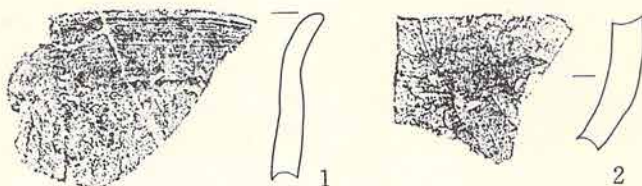
1号住居跡 (第4, 5図、写真図版2, 46)



層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒褐色(10YR2/2)	シルト	やわらかい、やや粘性あり
2	黒褐色(10RY2/2)	シルト	にぶい黄褐色シルトを含む
3	黒色(2.5Y2/1)	シルト	粘性あり、にぶい黄褐色シルトを含む
4	黒褐色(10YR2/3)	シルト	やわらかい、粘性あり
5	黒褐色(10YR3/2)	シルト	貼り床、田層がブロック状に混在

第4図 1号住居跡平面図
および埋土断面図 (S = 1/60)

本住居跡は、その一部分が発掘調査区域にかかっただけであった。従って規模・構造に不明な部分が多い。竖穴に堆積している土層は、その色調・含有物等から4層に分けられる。しかし、それらは堆積の過程で著しい中断があったことを示すようなものではなく、連続した比



第5図 1号住居跡内出土遺物 (S = 1/2)

1号住居跡観察表

重複	壁	床	カマド		柱穴	周溝	その他
			本体	煙道			
→2号溝跡埋土の上部でわずかに切り合っている。	1層を壁面とする。たち上がりは明瞭で比較的急である。	平坦な床面である。床面は比較的やわらかいが、土色の変化で明瞭に識別できる。10cmの厚さで貼り床されている。掘り方は田層上部に及んでいる。	北東壁、中央付近にカマドの存在が予想される	不明	認められない	認められない	特になし

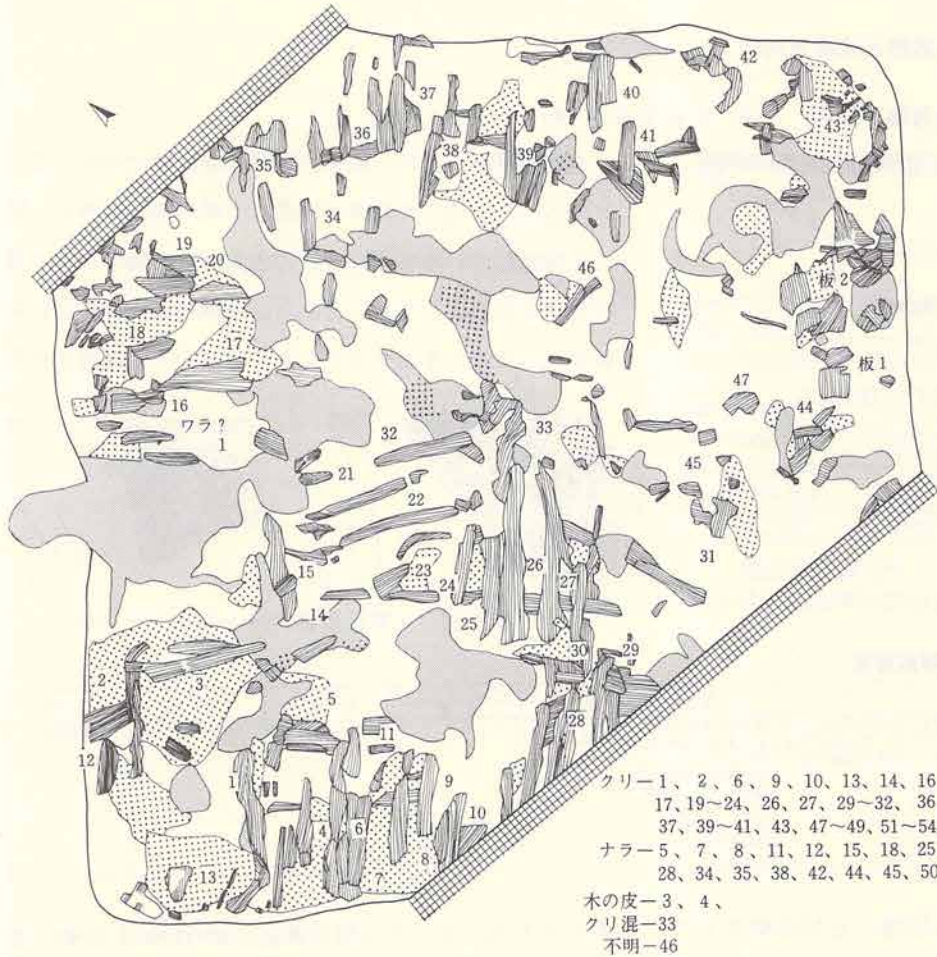
較短的な期間の自然堆積であろうと考えられる。各々の土層の界面 (interfaec) に他に比して固い部分は認められず、また、過去のある時点で特定の一面だけが極端に露出していた様子も認められないからである。

遺物は埋土の各層から少量出土している。いずれも非ロクロ使用の土師器である。坏・甕が認められるが、いずれも小片である。住居廃絶後の埋設過程で偶然に混入したものか、住居跡内に遺棄または廃棄された土器が何らかの要因によって小片となり、埋土中に混じったものであろう。両者は区別できなかった。

住居跡床面が比較的やわらかいことは、この部分が土間以外として利用された可能性を示唆している。貼り床は住居構築に際して行われていたと考えられる。貼り床下の地山はやや起伏があって自然の礫を含み、しかも非常に軟質であるため床面として使用されたとは考えられないからである。

住居としての存続年代は不明であるが、廃絶の時期は出土遺物から国分寺下層式期であろう。

2号住居跡 (第6~11図、写真図版3~6、46、47)



第6図 2号住居跡炭化材、焼土等検出状況 (S=1/60)

2号住居跡観察表

重複	壁	床	カマド		柱穴	周溝	その他
			本体	煙道			
なし	III層を壁面としている。本来はII層上面から掘り込まれていたであろうが、すでに欠失していた。たち上がりは明瞭である。	III層中に貼り床されている。平坦である。床面中央部で非常にかたく、南西壁、北東壁、南東壁際は比較的やわらかい。また、床面上に広く焼土が形成されている。焼土に伴う焼土とは色調、かたさの点で明らかに異なっている。	北西壁中央に構築されている。すでに大部分崩壊している。掘り込まれ、焼土が形成される。両袖は粘性の強いシルトと凝灰岩の板石で構築されていたと考えられる。天井部も同様にシルトで構築されていたと考えられるが、大部分崩壊し、下層にブロック状をなしている。	浅く掘り込まれ、北東に延びている。天井部は失われている。煙出し部は、わずかに掘り込まれ、円礫で構築していたと考えられる。	円礫を伴う掘り方と柱あたりを有する柱穴跡が3個検出されている。おそらく前者がもう一つ伴い、主柱をなしたと予想される。柱あたりは長方形を呈している。円礫は地山を掘り込んだ際のもをそのまま転用している。埋土は住居跡埋土よりやわらかい。	ほぼ全周に伴っている。幅20cm、深さ5~10cm前後。	焼土住居である。炭化材の遺存状況は比較的良好で、その原形が推定できるものもある。北東壁および南西壁は、丸材が壁から中央に向かってほぼ規則的に並んでいる。

本住居跡は、全体の80%が検出、精査された。従って平面的な規模・形態はおおむね知ることが出来る。しかし、発掘調査時において本来存在したと考えられるⅡ層は、畑耕作等の要因によってすでに失われており、遺構確認面はⅢ層の上面であった。そのため、住居跡の壁の上部は失われていると考えられる。

住居の廃絶は、焼失と同時であろう。焼失の要因が予想されたものであるか偶発的なものであったかの説明は困難である。しかし、焼失時において日常生活用土器の一部は床面直上に置かれたままであったことは明らかである。当時の使用形態を一部とどめたままの焼失であったことは确实である。

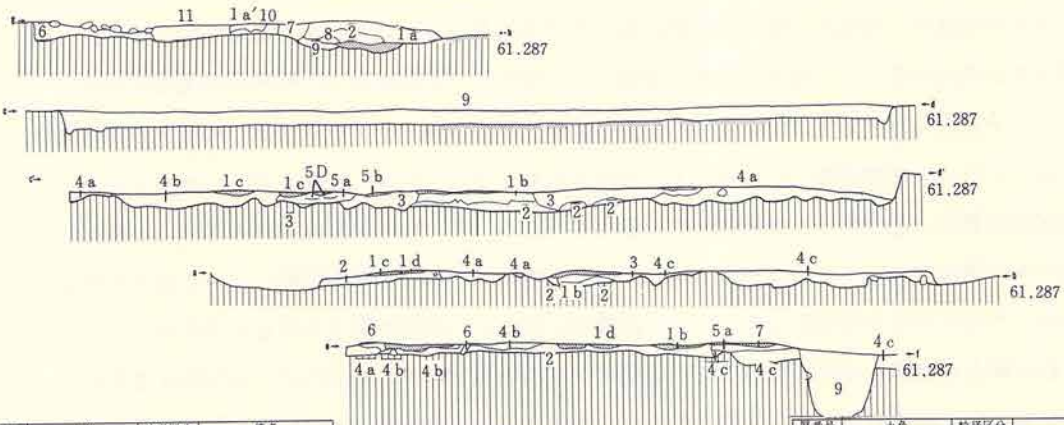
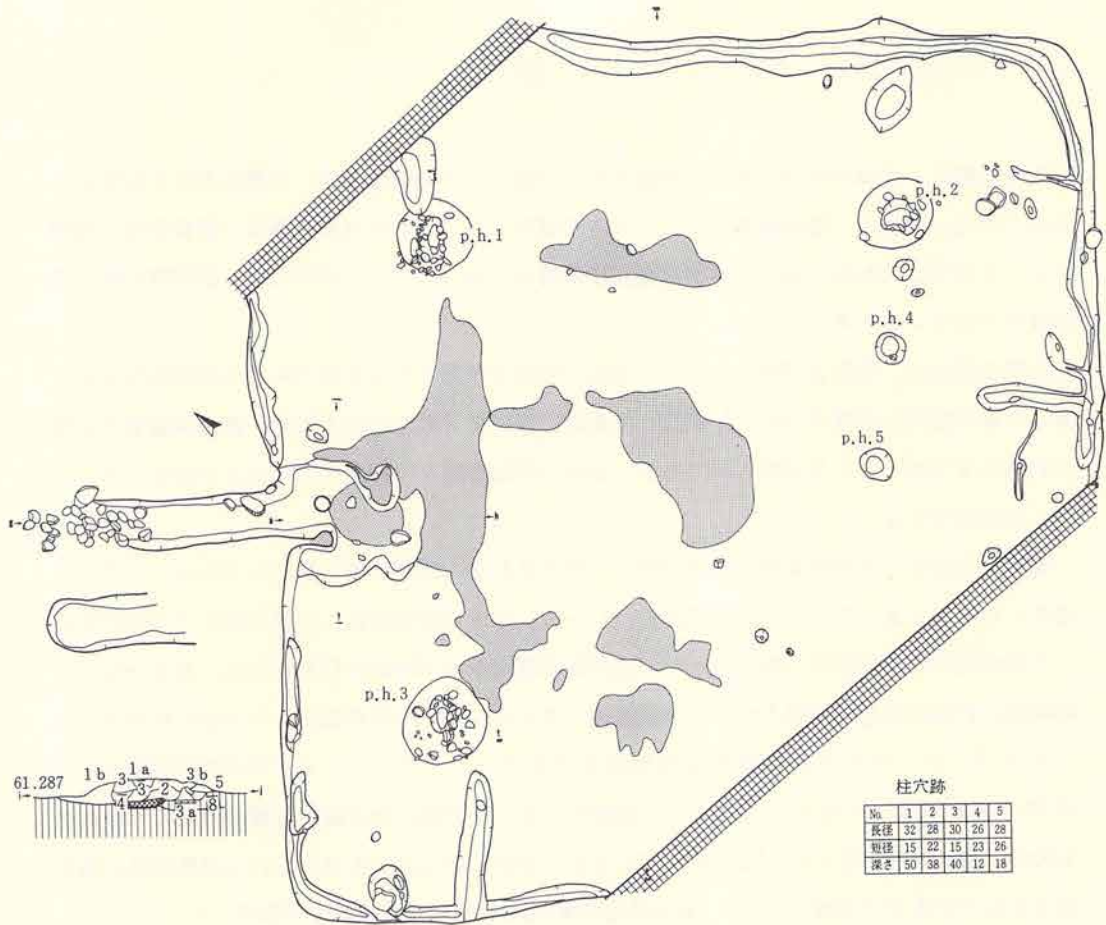
焼失炭化材は、住居跡床面からやや浮いて検出される。遺存状態の良好なものも、くだけて細かくなってしまったものも同様である。しかし、埋土の観察ではこの炭化材より上位のものと下位のものの識別は不可能であった。住居跡の埋没がほぼ瞬時に行われたか、あるいはごく短期間に行われたものと解される。出土遺物の多くは、埋土中の炭化材より上位に検出された。小片も多いが、かなりの程度復元可能な土器も出土している。これらは両者が混在し、住居跡の埋没に伴って混入したものと、意図的あるいは偶然に住居跡焼失後の凹地に置かれたものの二者があると考えられる。炭化材の下位に堆積土が存在する点については興味深い報告がなされているが(大塚 1987)、本住居跡の場合は、埋没後の移動も考慮される。

床面の状態は、同時代の他の住居跡に比してやや特異な点がある。全面に貼り床されるが、掘り方は凹凸が著しい。掘り方の面を床面として使用した形跡はない。住居跡中央部は土間であったと考えられ、非常に堅くなっている。壁際でややレベルが下がるのは、板敷き等の施設があったためと住居跡埋土の重量による沈降であると考えられる。特異な点は、カマドを中心に床面北西の一部に焼土が形成されていることである。この焼土が形成される部分の内側は、貼り床に使用された土が還元状態を示している。焼土はそれほど厚く堆積しているわけではないが、少なくとも一時的なものではなく継続的に何らかの熱作用をうけたものである。

柱穴跡から周溝に向かって延びている間仕切り状の溝と周溝の底面には、貼り床はなされない。両者が住居構築当初から存在していたものか、新たに掘り込まれたものであるか不明である。しかし、両者の埋土は住居跡埋土と異なるものとは識別されず、住居跡廃絶時まで使用されていたと考えられる。

カマドは、本体の崩壊のほとんどは焼失の際のものと考えられる。しかし、カマドの使用によって形成された焼土が、住居跡埋土に少量混在しているため、後世その部分が多少の攪乱をうけていると解される。本体と煙道部のつくりかえは認められない。なお、西側4mに位置している7号土坑は、本住居跡に付属する可能性がある。

住居としての存続年代は不明であるが、焼失・廃絶の時期は国分寺下層式期である。

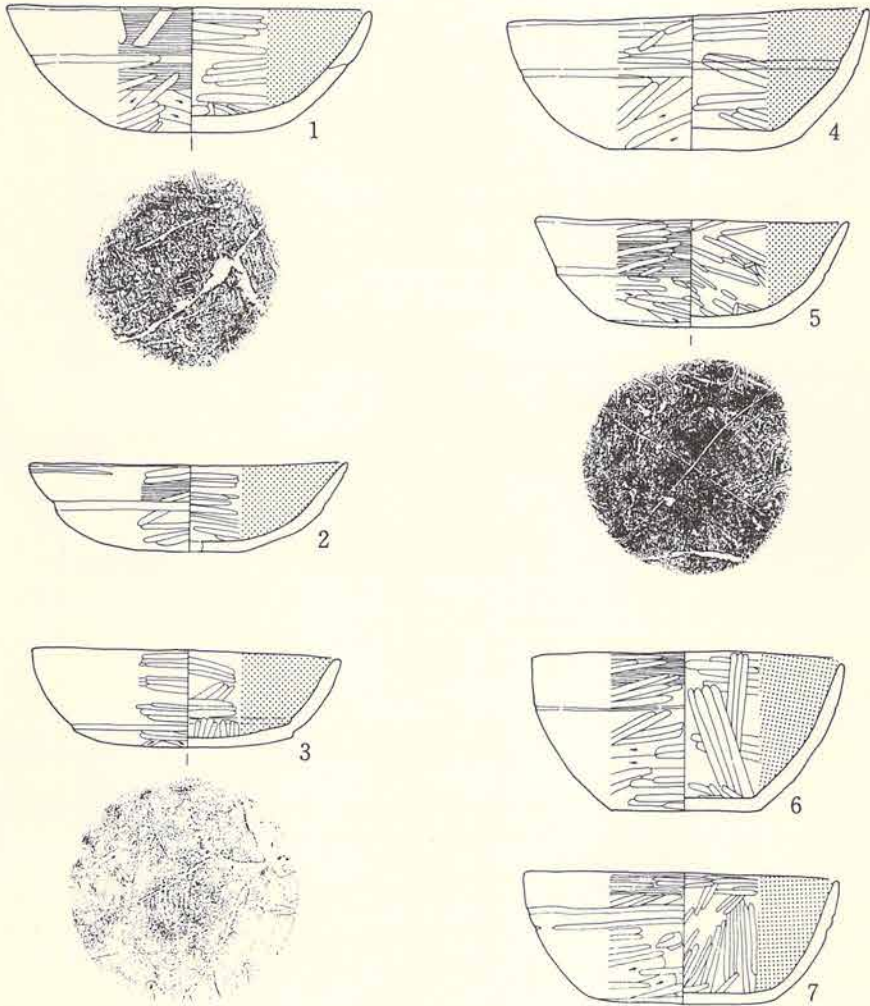


層番号	土色	粒径区分	備考
1 a	明赤褐色(2.5YR5/6)	シルト	焼土、きわめて硬い
1 b	明黄褐色(10YR7/6)	シルト	
1 c	橙色(5YR7/8)	シルト	貼り床の焼けたもの、きわめて硬い
1 d	明赤褐色(2.5YR5/6)	シルト	床面の焼け、赤色変化強い
2	黒褐色(10YR2/1)	シルト	掘り方埋土面側にII層が小ブロック状に混在
3	明黄褐色(10YR7/6)	シルト	黒褐色シルトを含む、掘り方埋土
4 a	黒褐色(10YR2/2)	シルト	明黄褐色シルトをわずかに含む、掘り方埋土
4 b	黒褐色(10YR2/3)	シルト	やわらかい焼土を含む、掘り方埋土
4 c	黒褐色(10YR2/2)	シルト	明黄褐色シルトを含む、掘り方埋土
5 a	にぶい褐色(5YR6/4)	シルト	焼土、やわらかい
5 b	黒色(10YR2/1)	シルト	掘り方埋土
6	黒色(10YR2/1)	シルト	還元作用によるもの
7	黒色(10YR2/1)	シルト	II層とIII層が混在、掘り方埋土
8	暗褐色(10YR3/3)	シルト	住居跡埋土
9	黒褐色(10YR2/2)	シルト	住居跡埋土

層番号	土色	粒径区分	備考
2			
3 a	赤褐色(2.5YR4/6)	粘土	焼けている。カマド右側壁
3 b	にぶい黄褐色(10YR7/4)	粘土	カマド右側壁
4	黒褐色(10YR3/2)	シルト	明黄褐色シルト、黒色シルトがブロック状に混在、住居掘り方埋土
5	黒褐色(10YR2/2)	シルト	先端部わずかに焼土ブロックを含む

層番号	土色	粒径区分	備考
(構造)			
1 a	黒褐色(10YR2/2)	シルト	焼土塊、還元土塊、未焼成シルト塊をブロック状に含む、カマド崩壊土
1 b	黒褐色(10YR2/2)	シルト	カマド崩壊土
2	灰黄褐色(10YR6/4)	シルト	灰床部を覆う、微細骨片を含む
3	明黄褐色(10YR6/6)	シルト	粘性あり、カマド崩壊土
4	褐色(10YR4/4)	シルト	焼土粒を含む、カマド崩壊土
5	赤褐色(2.5YR4/6)	シルト	焼土、かたい、カマド崩壊土
6	黒褐色(10YR2/2)	シルト	焼土ブロックをわずかに含む
7	橙色(5YR7/8)	シルト	焼土、かたい
8	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	
9	黒褐色(10YR2/2)	シルト	8が混在、上部に焼土粒を多く含む、やわらかい
10	明黄褐色(5YR5/8)	シルト	焼土を多く含む、やわらかい
11	黒褐色(10YR2/2)	シルト	焼土粒をわずかに含む

第7図 2号住居跡平面図および埋土等断面図 (S=1/60)

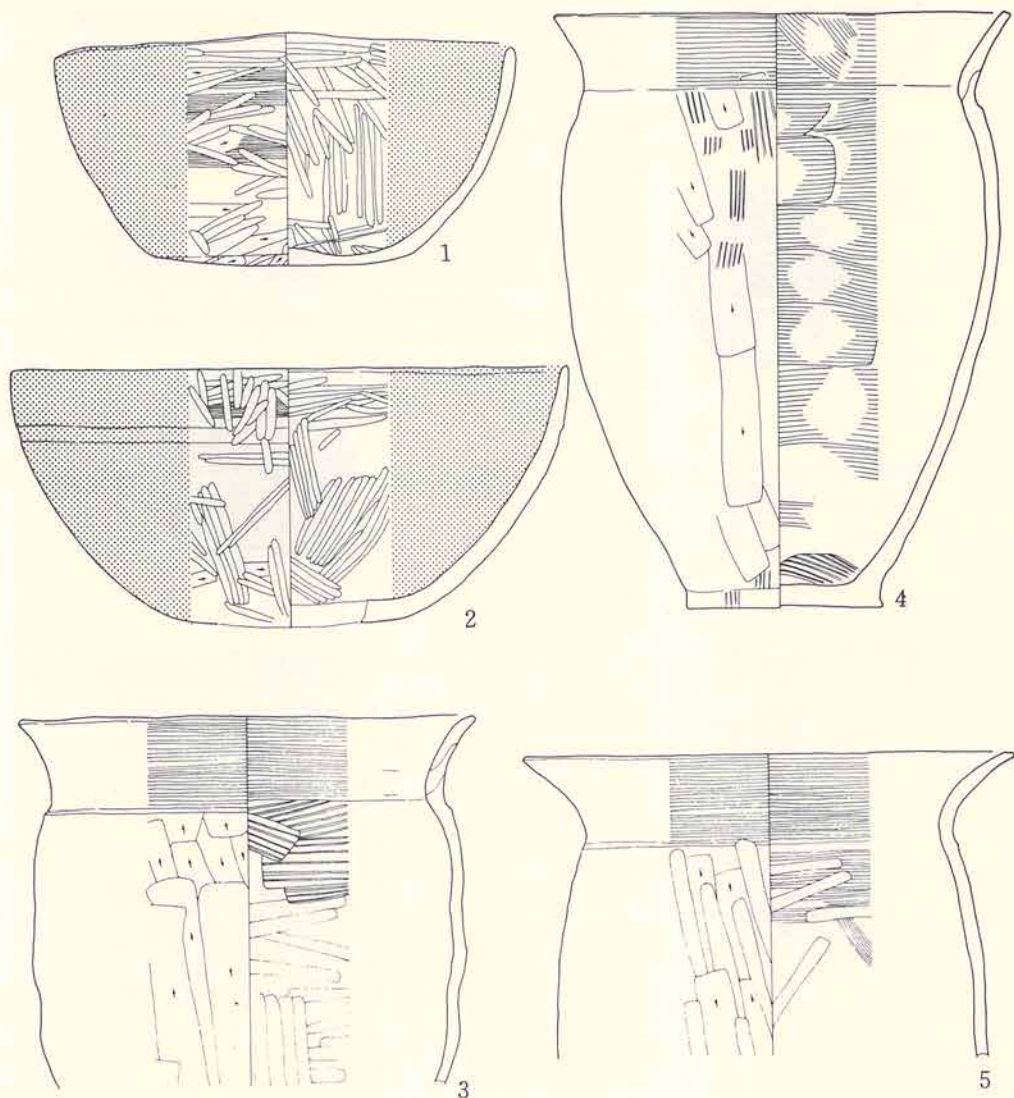


S=1/3

(土器観察表)

実測図	写真	登録番号	種類	器種形式	容量			外面調整			内面調整			成形	切り離し	分類	その他
					口縁径	底径	器高	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部				
8-1	46-7	2J-478	H	环	14.7	-	5.0	k→n→m	k→n→m	k→m	m	m	非ロクロ	-	a		
8-2	46-12	2J-481	H	环	12.8	-	3.4	n→m	k→m	k→m	m	m	非ロクロ	-	a	底面直上	
8-3	46-80	2J-482	H	环	12.3	-	3.9	n→m	k→m	k→m	m	m	非ロクロ	-	a	底部外面 Xへラがき	
8-4	47-3	2J-479	H	环	14.5	-	5.3	k→n→m	k→m	k→m	m	m	非ロクロ	-	a		
8-5	46-10 (a)	2J-487	H	环	12.5	-	4.2	k→n→m	k→m	k→m	m	m	非ロクロ	-	a	底部外面 Xへラがき	
8-6	46-9	2J-480	H	环	12.5	-	6.3	k→n→m	k→m	k→m	m	m	非ロクロ	-	a		
8-7	46-13	2J-485	H	环	12.5	7.3	5.2	k→n→m	k→m	k→m	m	m	非ロクロ	-	a		

第8図 2号住居跡内出土遺物(1)

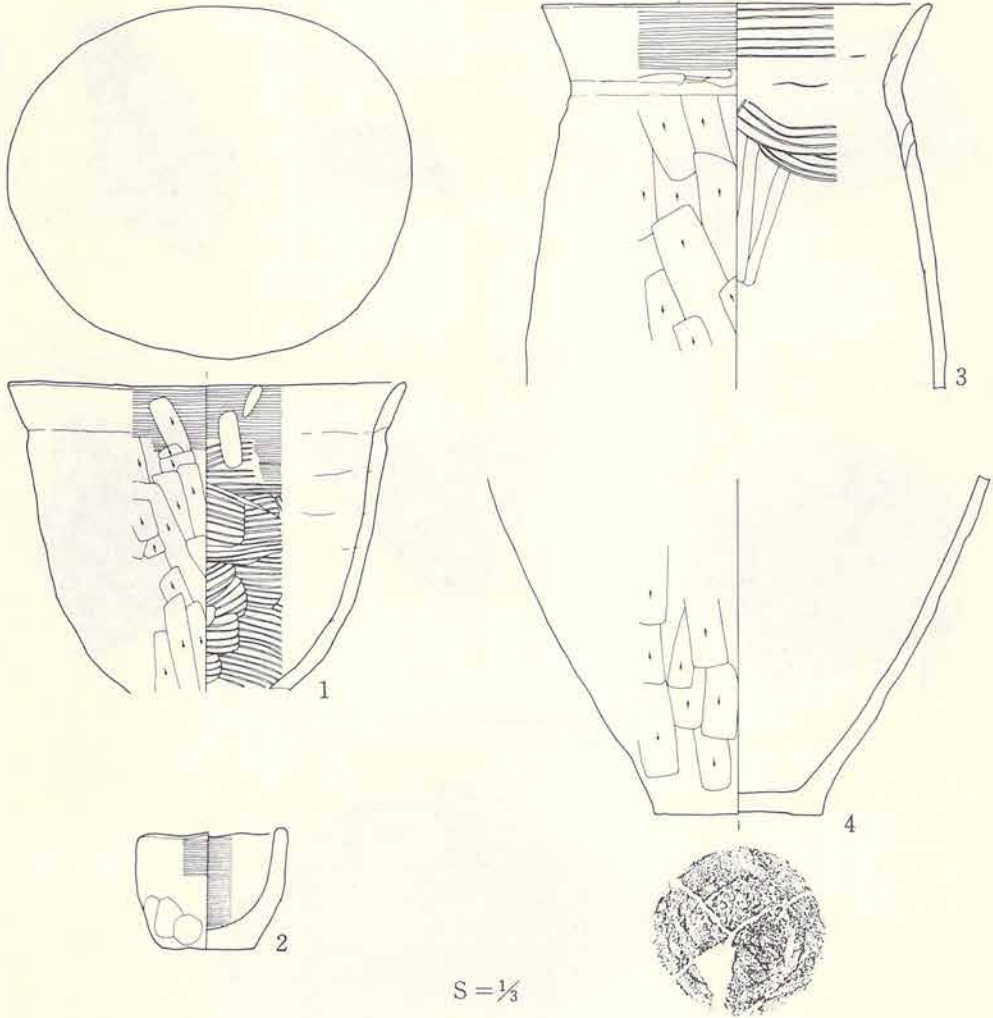


S = 1/3

(土器観察表)

実測図	写真	登録番号	種類	器種形式	坯量			外面調整			内面調整			成形	切り離し	分類	その他
					口縁径	底径	器高	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部				
9-1	47-1	2 J-478	H	杯	18.7	10.5	9.3	k→n→m	k→m	k→m	m	m	m	非ロクロ	—	a	
9-2	47-2	2 J-489	H	杯	22.4	8.2	10.3	k→m→m	k→m	k→m	m	m	m	非ロクロ	—	c	
9-3	46-5	2 J-494	H	甗	18.3	—	—	n	k	—	n	m	m	非ロクロ	—	中	
9-4	46-4	2 J-493	H	甗	18.0	77	23.8	n	k→h k	h m	n	n	n	非ロクロ	—	中	
9-5	—	2 J-492	H	甗	19.7	—	—	n	k-n	—	n	n→m	m	非ロクロ	—	中	

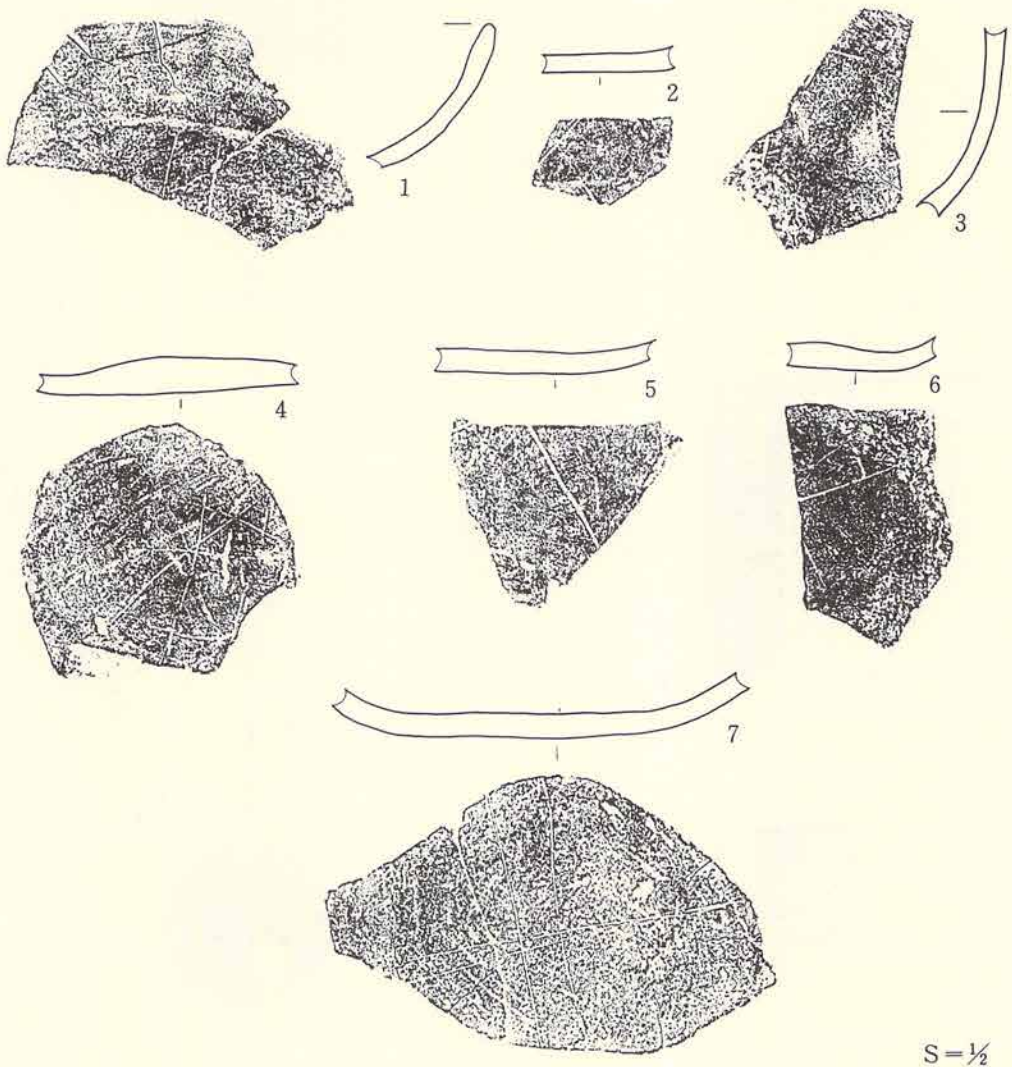
第9図 2号住居跡内出土遺物(2)



(土器観察表)

実測図	写真	登録番号	種類	器種形式	坯量			外面調整			内面調整			成形	切り離し	分類	その他
					口縁径	底径	器高	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部				
10-1	38-7	2.J-491	H	鉢	15.9	6.0	12.5	k→n→k	k	k	h→n	h	h	非ロクロ	-	小	
10-2	47-4	2.J-490	H	小型鉢	5.9	3.7	4.6	n	-	-	n	-	-	非ロクロ	-		
10-3		2.J-495	H	鉢	15.6	-	-	n	k	-	h	m	-	非ロクロ	-	中	
10-4	46-11	2.J-497	H	鉢	-	5.7	-	-	k	k	-	n	-	非ロクロ	-	中	

第10図 2号住居跡内出土遺物(3)



第11図 2号住居跡内出土遺物(4)

3号住居跡 (第12図、写真図版2, 48)

本住居跡は、東側が電柱の架設と畑耕作によって失われている。しかし、残存部分からおおよその規模・形態を知ることができる。残存している壁がわずかであるが、この付近でII層が他に比して薄いことから、上部が多少削られているようである。従って堆積土層はきわめて薄く、さらに細分することは不可能である。

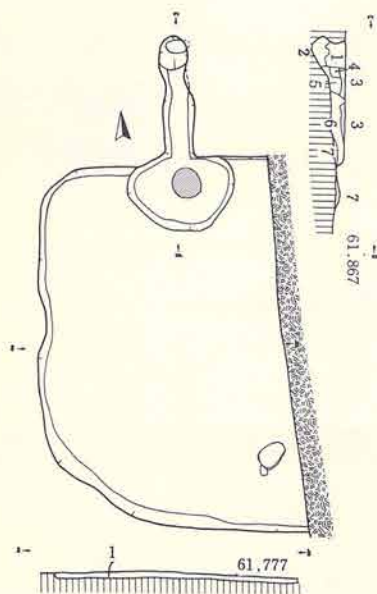
遺物は、埋土中に土師器の小片が少量含まれるだけである。住居跡廃絶時の状態をとどめていると考えられるものはなく、住居跡埋土とともに混入したものか、遺棄または廃棄された土

器が小片となって混在したものかのいずれかであろう。

8号土坑上部にはわずかに貼り床されるが、この貼り床は住居跡構築当初からなされていたものと考えられる。貼り床下の8号土坑が自然堆積によって埋まっていると考えられるからである。

カマドはほとんど残っておらず、焼土の形成も明瞭でないが、これは廃絶後において上方からの攪乱をうけたためであり、それによって住居としての存続時間が短いことの原因とはならない。むしろ、煙道部にも焼土が堆積していることを見る必要があろう。

住居廃絶の時期は、出土遺物から国分寺下層式期と考えられるが、他の住居跡ほど決定的なものではない。



層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒褐色(10YR2/2)	シルト	粘性あり
層番号 (煙道)	土色	粒径区分	備考
1	黒褐色(10YR2/2)	シルト	ややかたい、炭化物粒含む
2	黒褐色(10YR2/2)	シルト	II層がブロック状に混在、粘性あり
3	暗褐色(10YR3/3)	シルト	やや粘性あり、II層がブロック状に混在
4	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	粘性なし、II層がブロック状に混在
5	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	粘性なし、II層がブロック状に混在
6	黒褐色(10YR3/1)	シルト	粘性なし
7	暗褐色(7.5YR3/3)	シルト	粘性なし、ややかたい、焼土粒をわずかに含む

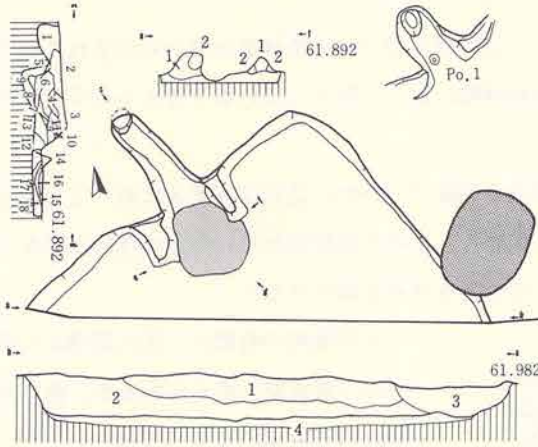
3号住居跡観察表

第12図 3号住居跡平面図および埋土等断面図 (S=1/60)

重複	壁	床	カマド		柱穴	周溝	その他
			本体	煙道			
8号土坑→南側壁に沿った床面で切り合っている。	II層を壁面とする。残存高は5cm程度である。	II層上面で床面とするが、8号土坑の上部に貼り床されている。平坦である。北半ではややかたく、南半はやわらかい。	北壁に沿って形成されている。わずかに残存する。構造は全く不明である。中央部がわずかに掘り込まれ、焼土が形成されている。	II層上面から掘り込まれている。カマド付近の底面にわずかに焼土が形成される。煙出し部ではやや深く掘り込まれている。	認められない	認められない	床面南側の小穴は攪乱によるものである。東側3分の1は、大きく削られている。

4号住居跡 (第13, 14図、写真図版7, 48)

本住居跡は、北側30%程度発掘区域内で検出することができた。規模・形態等はおおよそ推定することができる。住居跡北東壁が9号土坑によって破壊されている。5号住居跡と重複する部分においても、壁面は他の部分に比してかなり脆くなっている。しかし、遺構確認面はほぼ当時の地山であると考えられ、4号住居跡の当時の壁高が保持されていると思われる。



層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒褐色(10YR2/1)	シルト	やわらかい、やや粘性あり
2	黒褐色(10YR2/2)	シルト	II層がブロック状に存在
3	黒褐色(10YR2/1)	シルト	炭化物を層状にはさまむ
4	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	貼り床、II層、III層がブロック状に存在

層番号	土色	粒径区分	備考
1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	カマド袖 やわらかい
2	暗褐色(10YR3/4)	シルト	カマド袖 やわらかい

層番号(燻道)	土色	粒径区分	備考
1	黄褐色(10YR5/6)	シルト	焼土、ややかたい
2	暗褐色(7.5YR3/3)	シルト	焼土、やわらかい
3	黒色(7.5YR2/1)	シルト	貼り床、炭化物粒を含む
4	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	II層
5	黒褐色(7.5YR3/1)	シルト	炭化物粒、焼土粒を含む
6	褐色(10YR4/4)	シルト	粘性あり、カマド袖を構成
7	褐色(10YR4/4)	シルト	焼土を含む
8	黒色(10YR1.7/1)	シルト	III層
9	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	
10	黒褐色(10YR3/1)	シルト	炭化物粒を含む、燻道天井部分
11	黒褐色(10YR3/2)	シルト	やや粘性あり、10とほぼ同じ
12	黒褐色(10YR3/2)	シルト	焼土粒を多く含む
13	黒色(10YR2/1)	シルト	やや粘性あり、燻道部分
14	黒褐色(10YR3/1)	シルト	焼土粒をおすかに含む
15	黒色(10YR2/1)	シルト	
16	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	
17	黒褐色(10YR2/2)	シルト	焼土粒多い
18	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	炭化物粒混在

第13図 4号住居跡平面図および埋土等断面図 (S = 1/60)

4号住居跡観察表

重複	壁	床	カマド		柱穴	周溝	その他
			本体	煙道			
5号住居跡→ →9号土坑 22号土坑→	II層を壁面とする。一部9号土坑によって破壊されている。5号住居跡と重複する北東壁は壁面がやや不明瞭である。	平坦な床面である。カマド付近でやややわらかい。III層上面が掘り込まれ、厚さ10cm前後に貼り床されている。	北西壁に沿って形成されている。両袖は、II層とはほぼ同質の土によっているがややかたく再構築されたと考えられる。燃焼部は、ほぼ床面と同レベルである。天井部構築物は明らかではない。支脚と考えられる坏が、煙道部に残存していた。	つくりかえが認められる。最初のもは、床面からさらに下がって、短くつくり出されている。2度目のものは、最初の燻道に地山の土を貼りつけ、やや上がり気味に延びる。焼出し部分は深くなる。いずれも掘り込んだものである。	認められない	認められない	特になし

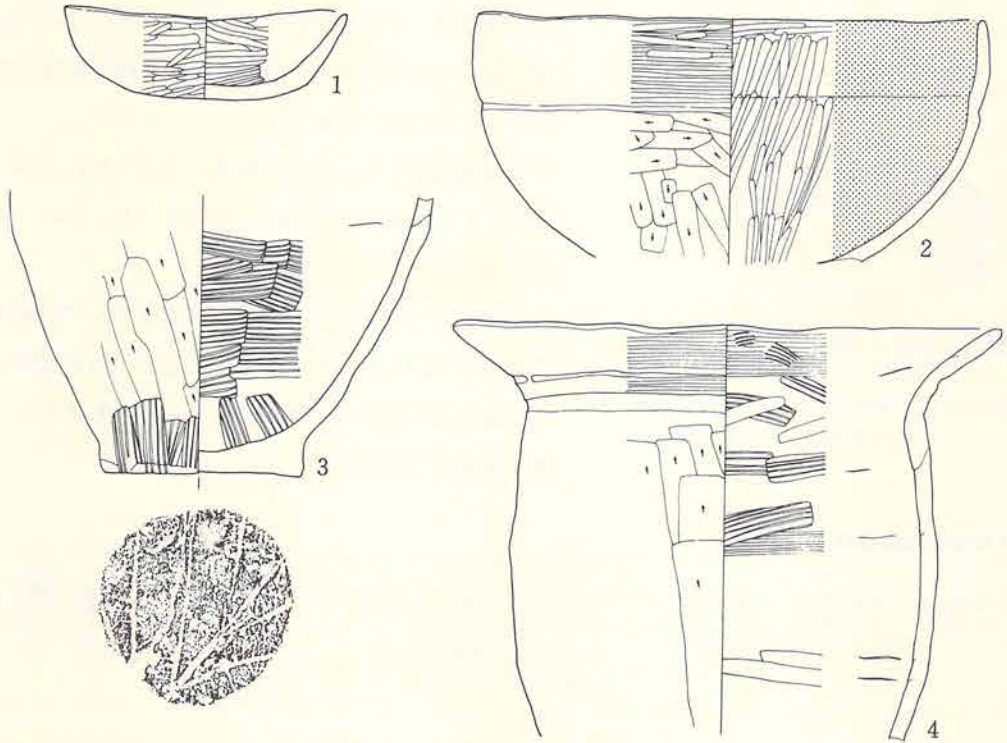
埋土は3層に区分されるが、著しく時間的不連続を示すような状態は観察されず、比較的短期間に埋没したものと考えられる。また、埋没後に極端な上方からの攪乱作用があったことも認められない。

遺物は埋土の各層から出土する。大部分は小片となった土師器である。住居跡廃絶後の埋没の過程で混入したものがほとんどであると考えられる。なぜなら、本住居跡カマド付近およびカマド内部には、住居跡廃絶当時の状況ほぼそのまま土器が発見されているからである。この箇所のみ良好に保存されていた様子はない。

床面は非常に堅く、この部分が土間として使用されていたことを示している。貼り床は住居跡当初からなされていたと考えられ、掘り方部分を床面として使用していた形跡はない。

カマドは、本体の一部が杭穴によって破壊されているが、全体としてはよく残っている。煙道部分のつくりかえ時期や理由は明らかでないが、古い時期の煙道より新しい時期の煙道底面により明瞭に焼土が形成されている。

住居の存続年代は不明であるが、5号住居跡が国分寺下層式期を大きくさかのぼるものではないと考えられるところから上限が推定され、廃絶時期はカマド付近の遺物から国分寺下層式期であると考えられる。



S = 1/3

(土器観察表)

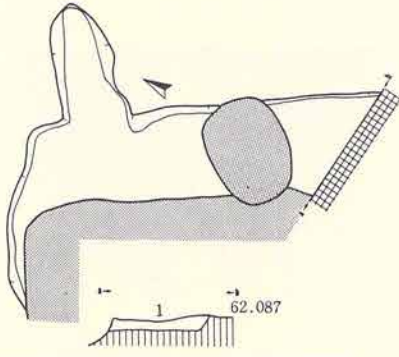
実測図	写真	登録番号	種類	器種形式	環量			外面調整			内面調整			成形	切り離し	分類	その他
					口縁径	底径	器高	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部				
14-1	48-8	4 J-75	H	環	11.3	8.4	3.2	m	m	m	m	m	m	非ロクロ	-	h	p.o., 1
14-2	48-7	4 J-74	H	環	20.3	-	10.2	n→m	k	-	m	m	-	非ロクロ	-	a	
14-3	48-6	4 J-79	H	甕	-	-	8.0	-	k	-	-	h	-	非ロクロ	-	-	カマド脇力
14-4		4 J-78	H	甕	21.4	-	-	n	k	-	h→n	h→m	h→n	非ロクロ	-	中	

第14図 4号住居跡内出土遺物

5号住居跡（第15図、写真図版7）

本住居跡は、4号住居跡および9号土坑によって大部分が破壊されている。特に4号住居跡とは大部分重複する。そのため規模・形態に不明な点が多い。この付近で遺構確認面がほぼ当時の地山であると考えられるところから、当初から掘り込みの浅い竪穴住居跡であったと考えられる。

埋土は浅いためもあって、さらに細分することは困難である。また、4号住居跡埋土2層と土色、粘性等共通する部分が多い。これより本住居跡の堆積は、4号住居跡堆積と同時あるいはその直前であったとも考えられる。5号住居跡廃絶後まもなく4号住居跡が構築されたためであろう。



層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	やわらかい、やや粘性あり、II層が混在

第15図 5号住居跡平面図および埋土等断面図（ $S = \frac{1}{60}$ ）

出土遺物はない。床面は壁際においてやわらかく、土間としての使用がきわめて短期間であったか、使用されなかったことを示している。

カマドは不明瞭である。焼土が形成されず関連する施設も認められない。煙道上に延びている遺構は、住居跡と新旧関係を有する土坑の可能性もあるが、野外調査では確認できなかった。

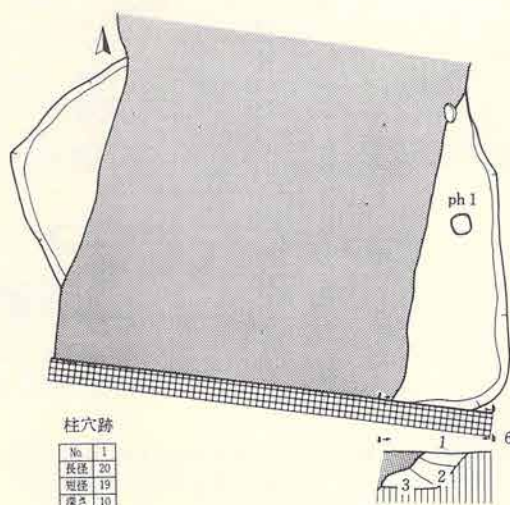
5号住居跡観察表

重複	壁	床	カマド		柱穴	周溝	その他
			本体	煙道			
→4号住居跡 →9号土坑	II層を壁面とする。残存高は3～8cm程度である。	II層を床面とする。4号住居跡と重複する部分ではなだらかに下がる。全体的にやわらかい。	北東壁に沿って北寄り形成されていた可能性がある。ただし、関連する施設は残っていない。	北東方向に煙道状の土坑が延びている。焼土、炭化物等が見られず、形状からの判断である。	認められない	認められない	新しい遺構に大部分が破壊され、不明の点が多い。

住居としての存続年代は不明であるが、遺跡全体から出土する土師器の中に国分寺下層式以前のものが無いことから、上限は国分寺下層式期に、4号住居跡構築以前に廃絶されるところから、下限もその中で考えられよう。

6号住居跡（第16、17図、写真図版2、48）

本住居跡は、9号溝跡にその大部分が破壊されているが、3方向に壁の一部が残存しているため、その規模・形態を推定しうる。9号溝跡の形成時に6号住居跡が完全に埋没していたことは埋土の観察結果から明瞭である。住居跡は自然堆積と考えられ、所要時間は比較的短期間であったと考えられる。9号溝跡上部からの掘り込みに際して、本住居跡との重複部分と他の地山部分に著しい差異が認められないことから、9号溝跡形成時において本住居跡埋土はかな



No	1
長径	20
短径	19
深さ	10

層番号	土色	粘性区分	備考
1	黒褐色(10YR3/1)	シルト	粘性あり、ややかたい
2	黒褐色(10YR3/2)	シルト	粘性あり、炭化物粒混在
3	黒褐色(10YR2/3)	シルト	粘性あり、やわらかい

第16図 6号住居跡平面図および埋土等断面図 (S=1/60)

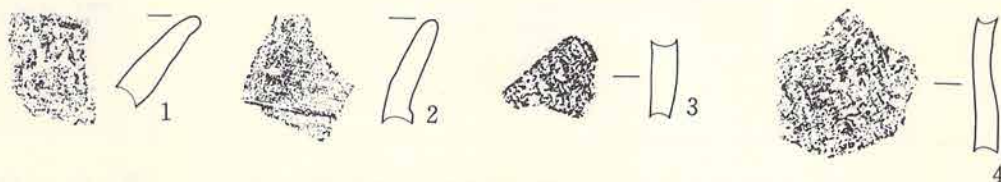
6号住居跡観察表

重複	壁	床	カマド		柱穴	周溝	その他
			本体	煙道			
→9号溝跡	II層を壁面とする。明瞭にたち上がる。	III層上面付近まで掘り込まれた後、貼り床されている。床面は平坦で、やや、やわらかい。	9号溝に破壊された北西壁に、カマドの存在が予想される。		東壁に沿って、中央付近内側に1個確認された。	認められない	中央部が大きく9号溝跡によって破壊されている。

しても、本住居跡廃絶とあまり離れない時期のものであると考えられる。

床面に検出された柱穴跡は明瞭である。他の柱穴の配置は不明である。下端が住居跡掘り方に達している。この部分の貼り床が他の床面と区別されないため、住居の構築順序として掘り方→柱穴配置→貼り床が考えられる。

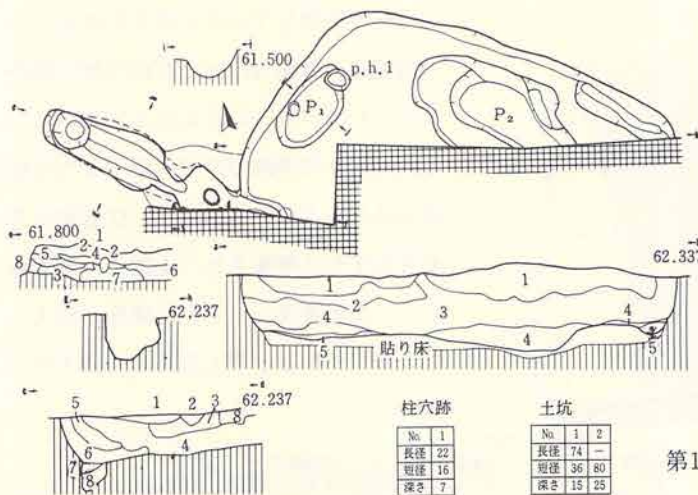
住居としての存続年代は不明であるが、出土遺物からその廃絶は国分寺下層式期であろうと考えられる。



第17図 6号住居跡内出土遺物 (S=1/2)

7号住居跡 (第18, 19, 20図、写真図版8, 9, 48)

本住居跡は北側20%程度が発掘区域において検出された。南東隅がわずかに現れており、カマドが北西壁のほぼ中央に位置していると仮定すれば、規模・形態をおおよそ予測できる。



層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒褐色(10YR3/1)	シルト	やや粘性あり
2	明褐色(7.5YR5/6)	シルト	熱変化する。ややかない
3	暗褐色(10YR3/3)	シルト	焼土粒、炭化物粒わずかに混入
4	暗褐色(10YR3/3)	シルト	やや粘性あり
5	暗褐色(10YR3/3)	シルト	ややかない
6	黒褐色(10YR2/2)	シルト	やわらかい
7	黒褐色(10YR2/2)	シルト	焼土粒わずかに混入
8	黒褐色(10YR2/2)	シルト	II層がブロック状に混入

層番号	土色	粒径区分	備考
1	褐色(10YR4/4)	シルト	やや粘性あり、天井部分
2	黒褐色(10YR2/2)	シルト	やや粘性あり
3	褐色(10YR4/4)	シルト	焼土粒含む、天井部分
4	黒赤褐色(10YR3/3)	シルト	炭化物多い、溝道部分
5	黒赤褐色(10YR3/3)	シルト	II層が崩れて混入
6	黒褐色(10YR3/1)	シルト	やや粘性あり
7	黒褐色(10YR2/2)	シルト	やや粘性あり、炭化物混入
8	黒色(10YR2/1)	シルト	やや粘性あり

柱穴跡

No.	1
長径	22
短径	16
深さ	7

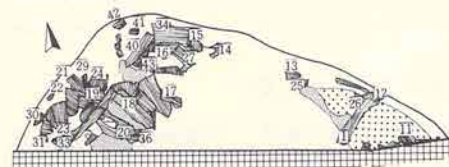
土坑

No.	1	2
長径	74	-
短径	36	80
深さ	15	25

第18図 7号住居跡平面図および埋土等断面図 (S=1/60)

層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒色(10YR2/1)	シルト	やや粘性ありやわらかい
2	黒色(10YR2/1)	シルト	粘性あり、炭化物粒、焼土粒混入
3	黒色(10YR2/1)	シルト	II層が3~5cmのブロック状に混入
4	黒褐色(10YR2/2)	シルト	粘り埋土、やわらかい、粘性あり、炭を多量に含む
5	黒色(10YR2/1)	シルト	周溝埋土、II層を多量に含む
6			貼り床

クリー1~16、19、21~29、
31、34~44
ナラー17、18
ススキー20、30



第19図 7号住居跡炭化材・焼土等検出状況 (S=1/60)

7号住居跡観察表

重複	壁	床	カマド		柱穴	周溝	その他
			本体	煙道			
なし	II層を壁面とする。たち上かりは明瞭ある。	II層中に貼り床されている。貼り床は、壁面から中央に向かって次第に厚く15cm程度となる。全体的にややかない。	北西壁中央付近に構築されている。発掘調査区域の制約で、全体は明らかでない。右袖は、II層の土で再構築している。燃焼部に焼土が形成されている。天井部構築物は不明である。支脚には細長い礎が使用されている。	II層上面より掘り込まれ、天井部分を再構築している。床面からやや上方にゆるやかに延び、煙出し部分で急に下がる。壁から60cm付近まで、やや広い掘り方が認められる。	北西隅に柱穴状の小坑が認められる。	一部認められる。貼り床後に形成されたものである。	焼失住居である。炭化材は埋土の上部で細かく、下部で大きくなる。土層を再構築できるような遺存状況ではない。土坑が2基検出されている。P2は埋土中に炭化物、焼土等が混入している。

器がやや広く壊れて分布していることから明らかである。炭化材は、埋土1・2層において細かく、床面近くの層では比較的良好な原形をとどめているものがある。これは、住居跡堆積の過程において本来の炭化材が崩れ、その後の土壌作用によってより細かいものが上部へ浮いたものと考えられる。

このことは遺物の出土状態からもいえる。接合した土器片のより小さい破片は上層から出土

している傾向がある。遺物の小破片の中には、堆積の過程において混入したものも少量含まれると考えられる。起源の異なる両者の区別は困難であった。

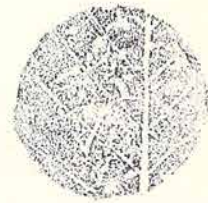
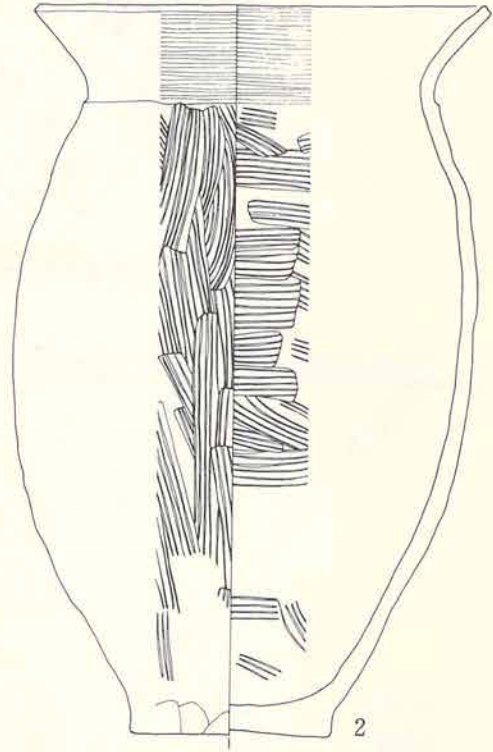
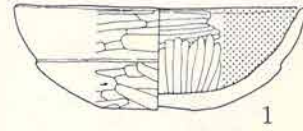
住居内の2基の土坑のうち、P2の埋土中には焼失に伴う炭化材が含まれることから、住居廃絶時に堆積しておらず、一方住居跡埋土とはことなるP1は、その時点ですでに堆積していたものと解される。周溝も同様に住居廃絶時まで使用されていた。

貼り床は住居構築と同時になされていると考えられ、掘り方面を床面として使用していた形跡はない。カマドはつくりかえ等認められず、住居存続期間使用されていたと考えられる。

住居としての存続年代は不明であるが、出土遺物からその焼失・廃絶を国分寺下層式期と考えることができる。

8号住居跡(第21~23図、写真図版10,49)

本住居跡は南側40%程度検出された。検出部分から住居跡全体の規模中・形態をおおよそ推定できる。住居跡の廃絶は焼失に伴うものである。焼失の際の炭化材・焼土は、ほぼ全面に散在している。しかし、住居の上屋構造を知りうるほどのものではない。炭化材は、中央部においては住居跡床面にほぼ接するように検出されるが、壁際に向かって炭化材と床面間に埋土が存在する。

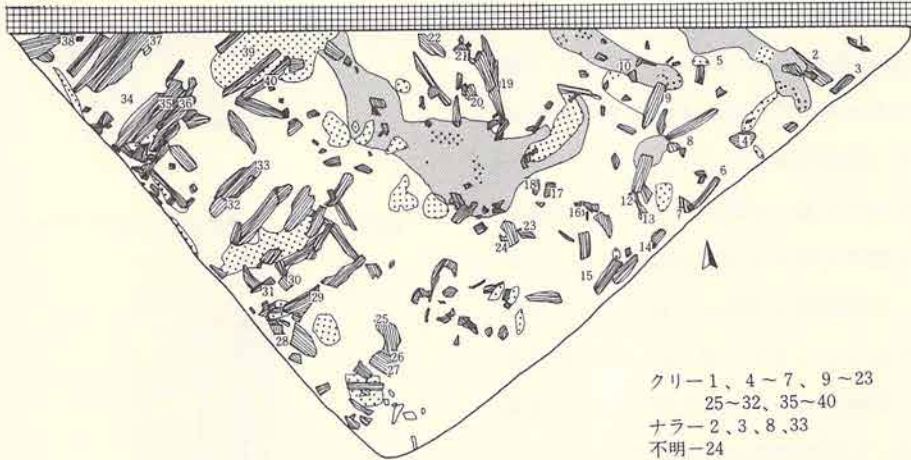


S = 1/3

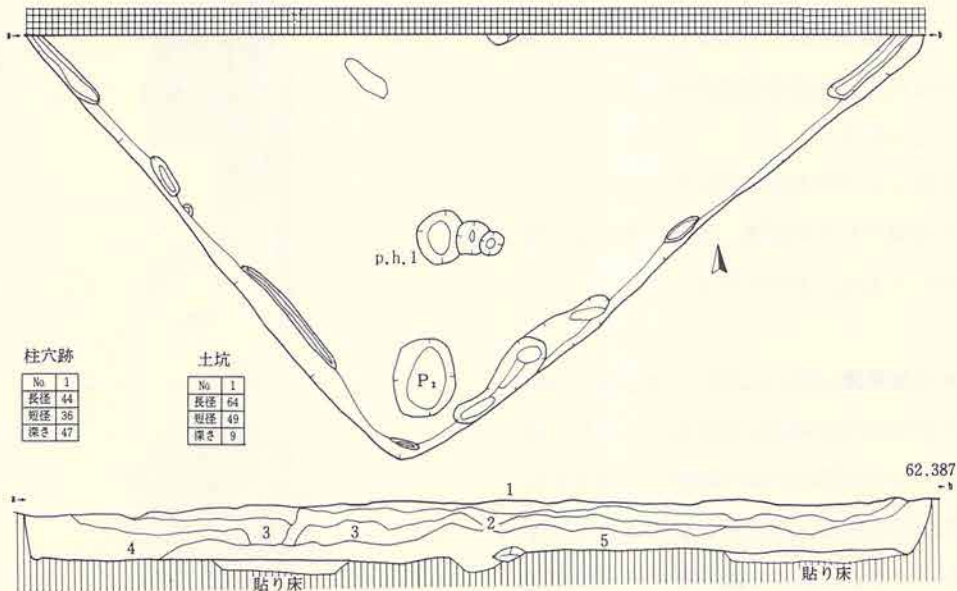
第20図 7号住居跡内出土遺物

(土器観察表)

実測図	写真	登録番号	種類	器種形式	容量			外面調整		内面調整			成形	切り離し	分期	その他	
					口縁径	底径	器高	口縁部	体部	口縁部	体部	底部					
20-1	48-15	7J-24	H	杯	11.6	3.6	4.0	k→m	k→m	—	m	m	m	非ロクロ	—	a	
20-2		7J-25	H	甕	18.1	8.0	28.9	n	h		n	h		非ロクロ		中	



第21図 8号住居跡炭化材、焼土等検出状況 (S=1/60)



柱穴跡

No	1
長さ	44
短径	36
深さ	47

土坑

No	1
長さ	64
短径	49
深さ	9

第22図 8号住居跡平面図および埋土等断面図 (S=1/60)

層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒褐色(10YR2/2)	シルト	やや粘性あり、やや細かい炭化物が混在、目層がアロック状に混在やや粘性あり、やや細かい
2	黒色(10YR2/1)	シルト	目層が混在する、やや粘性あり、やや細かい
3	黒褐色(10YR3/1)	シルト	目層が混在、炭化物が混在、粘性あり
4	黒褐色(10YR2/2)	シルト	粘性あり、やや細かい、わずかに焼土粒を含む
5	黒褐色(10YR3/1)	シルト	

他の焼失住居跡と同様に、焼失から住居跡埋没までの期間が短期間であったことと、住居跡埋没後の炭化材のレベル

の移動を考える必要があるだろう。埋土自体、炭化材をはさんで多数異なっている。

遺物は、ほとんどが炭化材より上位から出土する。比較的原形をとどめるものと小片とが混在しているため、住居廃絶時に住居内に置かれていたものと、その後一定の埋没の後に廃棄さ

8号住居跡観察表

重複	壁	床	カマド		柱穴	周溝	その他
			本体	煙道			
なし	II層を壁面としている。たち上がりは明瞭である。壁面のはは中央に、部分的に10cm程度の掘り込みが左右に数10cm伸び、炭化材が埋もれている。	II層中に貼り床されている。貼り床は厚い部分で15cm、平均10cm前後である。中央部では貼り床が重層し、床面もかたくなっている。	北西壁に沿って存在が予想される。		南隅に1個検出された。全体で4個の支柱が予想される。	部分的に途切れながらも、全体にめぐっている。深さは10cm前後である。	焼失住居である。炭化材は小さく、出土状況も散漫で、土層構造は復元できない。南隅柱穴跡よりさらに外側に土坑が1基検出されている。埋土中に焼土粒を少し含んでいる。

れたもの、埋没過程において混入したものの三者の存在が考えられるが、区別することは不可能であった。いずれ、長期に亘って埋没したものではない。

掘り方面はかなりの凹凸があり、貼り床は住居構築時になされていたと考えられる。ただし中央の土間と考えられる部分では貼り床が重層し、床面の貼り加えがあったことを示している。

土坑・周溝埋土中にはわずかながら炭化材を含み、住居焼失以降に埋没したことを示している。また、壁面に見られる炭化材は以前から注意されていたものであるが本住居跡にも認められ、壁面につくりつけた何らかの施設があったことを予想させる。今後、焼失住居跡に限らず、より注意していくことが必要となろう。

住居としての存続年代は不明であるが、その廃絶時期は出土遺物から国分寺下層式期と考えられる。

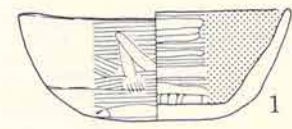
9号住居跡（第24、25図、写真図版11、49）

本住居跡は南側20%程度発掘区域内において検出された。規模・形態は不明な点が多い。床面直上において炭化材が少量検出されているが、住居廃絶の要因を火災に求めることは困難であろう。住居跡埋土は4層に区分されるが、それぞれの堆積層間において著しい時間差は認められない。住居廃絶後比較的短期間に埋没したものと考えられる。

遺物は埋土各層および床面直上から出土する。小片がほとんどであるが、一部原形をよく残しているものもある。これらは住居廃絶時において住居内に遺棄または廃棄されていたものが多いと考えられる。住居跡埋土に、埋没後の多少の土壌攪乱が認められるからである。

(土器観察表)

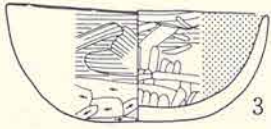
実測図	写真	登録番号	種類	器種形式	容量			外面調整			内面調整			成形	切り離し	分類	その他
					口縁径	底径	器高	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部				
23-1	49-3	8J-43	H	杯	10.9	—	4.2	n→m	k→n	k	n→m	n→m	m	非ロクロ	—	a	
23-2	49-4	8J-44	H	杯	9.9	—	4.5	n→m	k→m	k	n→m	n→m	m	非ロクロ	—	a	床面直上
23-3	49-5	8J-45	H	杯	10.5	—	4.4	n	n	k	n→m	n→m	m	非ロクロ	—	b	
23-4	49-6	8J-46	H	杯	—	—	—	—	k→m	k	n→m	n→m	m	非ロクロ	—		
23-5	49-7	8J-41	H	壺	16.5	—	—	n	h	h	—	n	h	—	非ロクロ	—	
23-6	49-2	8J-42	H	壺	19.2	—	—	n	k→h	—	n	n	—	非ロクロ	—		中
23-7	49-1	8J-40	H	壺	20.6	—	30.6	n	k→h	—	n	h	—	非ロクロ	—		長



1



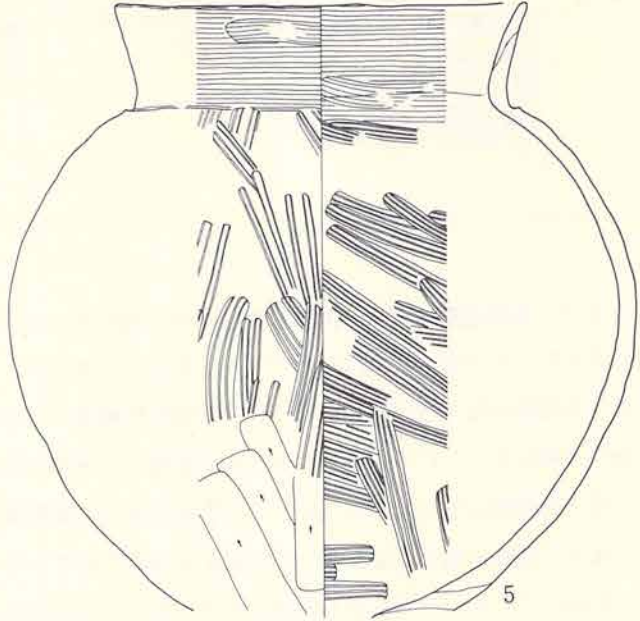
2



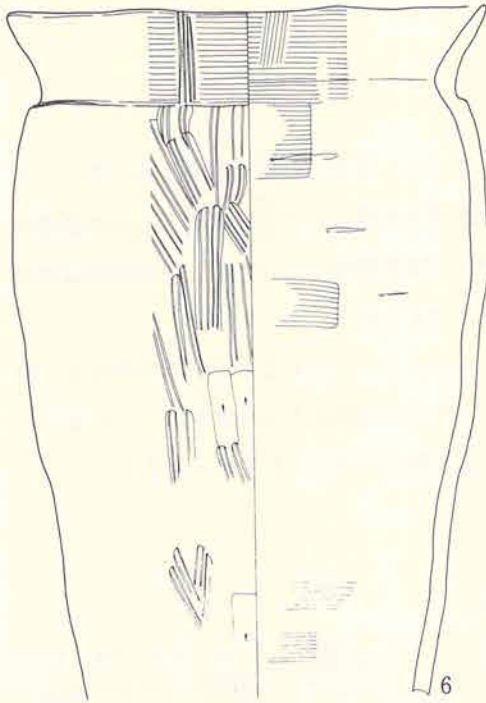
3



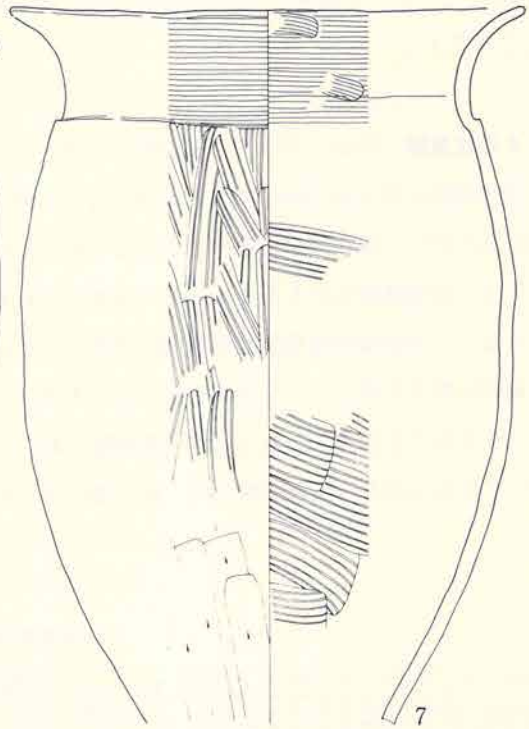
4



5



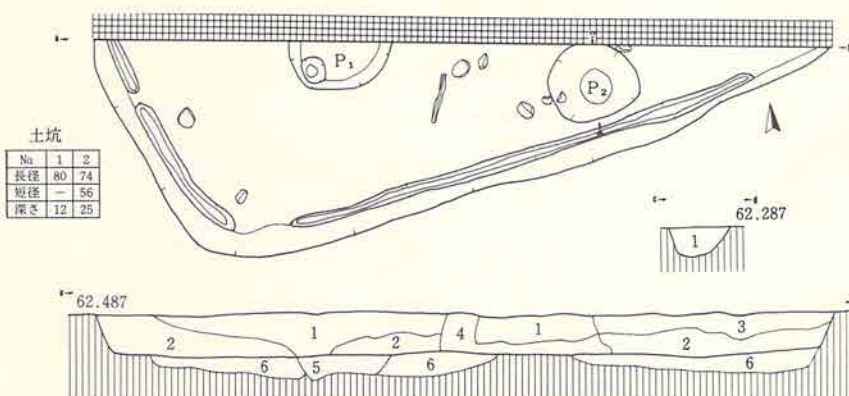
6



7

S = 1/3

第23图 8号住居跡内出土遺物



土坑

Na	1	2
長径	80	74
短径	-	56
深さ	12	25

層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒色(10YR2/1)	シルト	焼土粒、炭化物粒を多量に含む、粘性あり、やわらかい
2	黒褐色(10YR3/1)	シルト	粘性あり、やわらかい
3	黒褐色(10YR3/2)	シルト	
4	黒褐色(10YR3/1)	シルト	後世の攪乱をうけている
5		シルト	P1埋土
6	にじい黄褐色(10YR4/3)	シルト	貼り床、やや粘性あり、II層・III層が張在

第24図 9号住居跡平面図
および埋土等断面図
(S = 1/60)

床面は、壁に沿って貼り床されていないが、貼り床の有無にかかわらずよく踏み固められており、土間として使用された箇所であることを示している。

掘り方上面は凹凸があり、大小の円礫を含んでいることから、壁際と中央部で床面にレベル差のあった可能性はない。しかし、当初地山を床面として使用し、一定期間経過後に床面の一部を掘り込み貼り床を行った可能性はある。

9号住居跡観察表

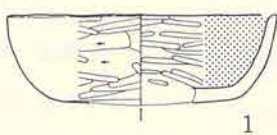
重複	壁	床	カマド		柱穴	周溝	その他
			本体	煙道			
なし	II層を壁面としている。たらしがりは明瞭であるが、東側一部不明瞭である。	II層中に一部貼り床される。壁付近は、地山をそのまま床面としている。全体的にかなりかたい。	北西壁に沿って存在が予想される。		認められない	一部途切れるが、ほぼ全体にめぐっている。深さは3~5cm程度である。	床面付近におそらく炭化材が残るが、焼失住居ではないと考えられる。土坑が、南西隅と南東壁に沿って検出されている。

住居跡に付属する土坑P1中・P2はその堆積の経過が異なるようである。埋土に明瞭な相違が認められるからである。しかし、いずれも住居跡埋土とは異なっており、住居廃絶時にはすでに人為的に堆積されていたものと考えられる。両者の新旧関係は不明である。なお、周溝は底面貼り床されず、埋土は住居跡埋土と同様である。

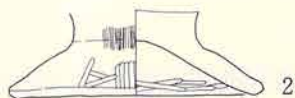
住居としての存続年代は明らかではないが、その廃絶時期は国分寺下層式期であると考えられよう。

10号住居状遺構 (第26, 27図、写真図版11, 49)

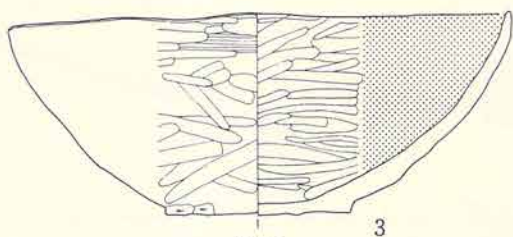
本遺構は、検出時においてその平面の形状から住居跡状遺構として扱ってきたものである。近接する7号住居跡の遺存状態から判断して、この付近で当時の地山と遺構確認面がほぼ同レベルであるとすれば、壁高はきわめて低く、縁辺の形状もやや不安定である。埋土が同一土層



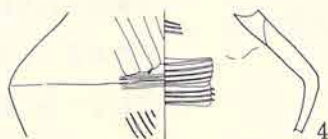
1



2



3



4

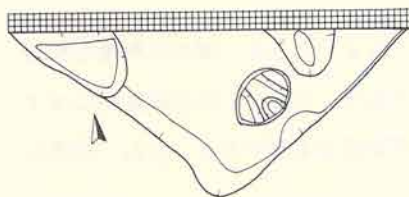


$S = \frac{1}{3}$

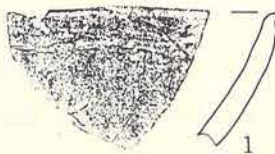
(土器観察表)

実測図	写真	登録番号	種類	器種形式	坯量			外面調整			内面調整			成形	切り離し	分類	その他
					口縁径	直径	器高	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部				
25-1	49-8	9.J-78	H	杯	10.8	7.2	3.6	n→m	k→m	k	m	m	m	非ロクロ	-	b	底部外面 底部外面 Xへうがき
25-2	49-11	9.J-77	H	高杯	-	10.5	-	-	-	m	-	-	-	非ロクロ	-	-	外面未彩
25-3	49-10	9.J-79	H	杯	20.0	7.4	8.1	n→m	m	k	m	m	m	非ロクロ	-	b	
25-4	49-9	9.J-76	H	壺	-	-	-	-	m h→m	-	-	h	-	非ロクロ			

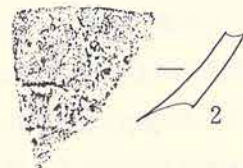
第25図 9号住居跡内出土遺物



第26図 10号住居状遺構平面図
($S = \frac{1}{60}$)



1



2

第27図 10号住居状遺構内出土遺物 ($S = \frac{1}{2}$)

10号住居状遺構観察表

重複	壁	床	カマド		柱穴	周溝	その他
			本体	煙道			
なし	II層を壁面とする。たち上がりはゆるやかで、部分的に不明瞭である。	II層を床面とする。全体的にやわらかく、凹凸がある。床面中に土坑状のものが検出されたが、自然の落ち込みと考えられる。	不明	不明	認められない	認められない	平面形状は方形を呈すると考えられるが、竪穴住居跡と認めうる積極的根拠はない。

であるところから、ごく短期間に埋没したとも考えられる。

床面の凹凸は、埋没後掘り込まれたものではなく、本来この遺構に伴っているものである。埋土は、遺構の埋土と同様である。堅く踏み固められた部分は認められない。

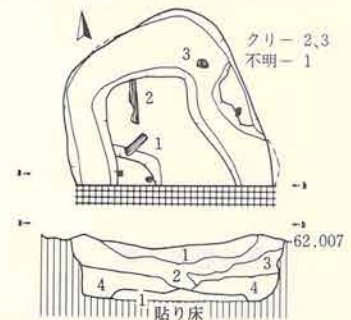
埋土中より土師器の小片が出土する。いずれも、遺構内に置かれていた状態もしくはそれが何らかの要因で破壊されて埋土中に散在したものではなく、埋土とともに偶然に流入したものであると考えられる。出土量が少量で、1個体の土器をなさないからである。

本遺構は、精査中の湧水が著しく土層断面の観察も充分に行えなかった。遺構の形成年代と廃絶年代について、出土遺物から判断すると国分寺下層式期が考えられる。

11号住居状遺構（第28、29図、写真図版12、50）

本遺構は、平面形状が台形もしくは長方形を呈しており、他の同様の遺構と異なっている。従ってその規模等不明確であるが、全体の50%程度検出しているものと考えられる。

当時の地山面と考えられる遺構検出面から比較的深く掘り込まれている。埋土は4層に区分されるがやや漸移的であり、連続する時間帯において形成されているものと考えられる。自然堆積である。埋土中には細かな炭化材がやや多量に含まれる。遺構廃絶に伴う火災によるものかどうか明らかではない。同様に、床面付近、周溝内部には焼土も伴っているが、これらは炭化材に伴うものであろうと考えられる。いずれ、埋土と炭化材は、時間的にきわめて密接していると考えられる。



層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	II層がブロック状に混在、ややかたい
2	黒色(10YR2/1)	シルト	粘性あり、やわらかい
3	黒褐色(10YR3/1)	シルト	II層をブロック状に含む、炭化物混在、やや粘性あり、やわらかい
4	黒色(10YR2/1)	シルト	II層が多量に混在、炭化物混在、粘性あり、やわらかい

第28図 11号住居状遺構平面図および埋土断面図
(S = 1/60)

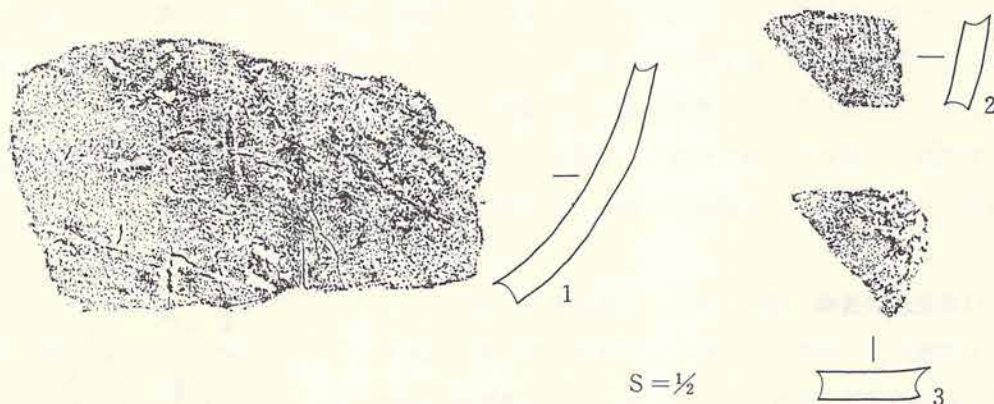
11号住居状遺構観察表

重複	壁	床	カマド		柱穴	周溝	その他
			本体	煙道			
なし	II層を壁面とする。たち上がりは明瞭である。全体的にやわらかい。	II層中に貼り床されて形成されている。厚さは10~20cm。	不明	不明	認められない	幅25cm、深さ10~20cm程度のものである。底面は平坦になる。	埋土中に、焼土、炭化物を多く含んでいるが、いずれも細かいものである。床面積が小さく、整穴住居跡であるとすれば、きわめて小規模なものである。

貼り床は周溝部分にはなされていない。周溝の底面は掘り方の上面でもある。このことから掘り方→貼り床の関係によって周溝をつくり出していると考えられることができる。

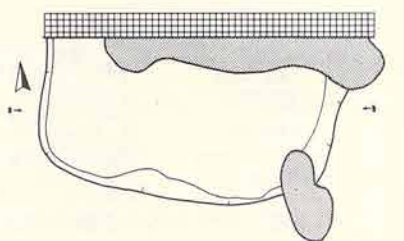
遺物は埋土各層にごく少量検出されただけである。土層の観察だけでは、これらの遺物が遺構廃絶時に置かれていたものであるか、堆積に伴う後世の混入であるか判断できなかった。

遺構の存続年代は明らかではないが、廃絶時期は出土遺物から国分寺下層式期であろうと考えられる。



第29図 11号住居状遺構内出土遺物

12号住居状遺構 (第30, 31図、写真図版12, 50)



層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒褐色(10YR2/2)	シルト	やや粘性あり、ややかたい、炭が多量に混在

第30図 12号住居状遺構平面図および埋土断面図 (S = 1/60)



第31図 12号住居状遺構内出土遺物

本遺構は、南側約40%検出されたと考えられる。44号土坑により壁と床面の一部が破壊されている。この付近においても遺構確認面と当時の地山面はほぼ同レベルであることから考えて、本遺構はきわめて浅い竪穴遺構であった。

12号住居状遺構観察表

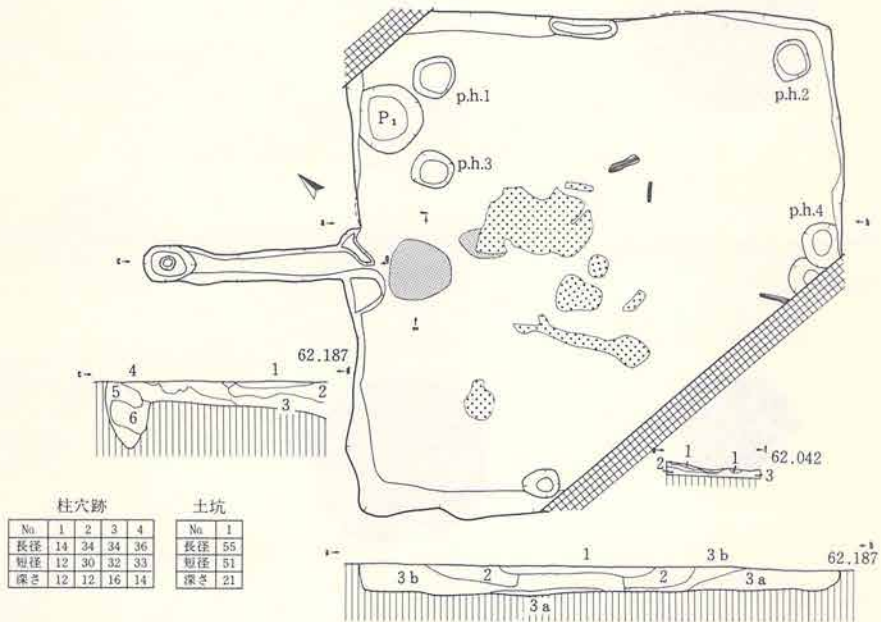
重複	壁	床	カマド		柱穴	周溝	その他
			本体	煙道			
→44号土坑	II層を壁面としている。たち上がりは明瞭であるが、ゆるやかである。	II層を床面としている。ほぼ平坦である。特にかたい箇所は認められない。	不明	不明	認められない	認められない	床面積が小さく、埋土も他の住居跡とやや性質が異なることから、竪穴住居状遺構として扱う。

埋土の観察より、本遺構は短期間に埋没したものと考えられる。埋土の性質が、色調・粒度・粘性において他の住居跡とは異なることから、埋没の年代の違いが考えられる。遺物はわずかに1点埋土中にあっただけである。所属時期は不明。遺構廃絶後において埋土とともに遺構内

に混入したものと考えられる。

本遺構については、その存続年代の上限中・下限を決定するには資料が不足している。

13号住居跡 (第32~35図、写真図版13, 50, 51)



層番号	土色	粒径区分	備考
(構造) 1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	
2	黒褐色(10YR2/2)	シルト	
3	黒褐色(10YR2/2)	シルト	灰黄褐色シルトをブロック状に含む
4	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	黒褐色シルト混在、天井部構成物
5	黒色(10YR2/1)	シルト	天井部構成物
6	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	天井部構成物

層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒色(10YR2/1)	シルト	II層をブロック状に含む、ややかたい
2	黒色(10YR2/1)	シルト	炭化物、焼土を多量に含む、粘性あり、やわらかい
3 a	黒褐色(10YR2/2)	シルト	焼土混在する、粘性あり、やわらかい
3 b	黒褐色(10YR2/3)	シルト	粘性あり、ややかたい II層が混在

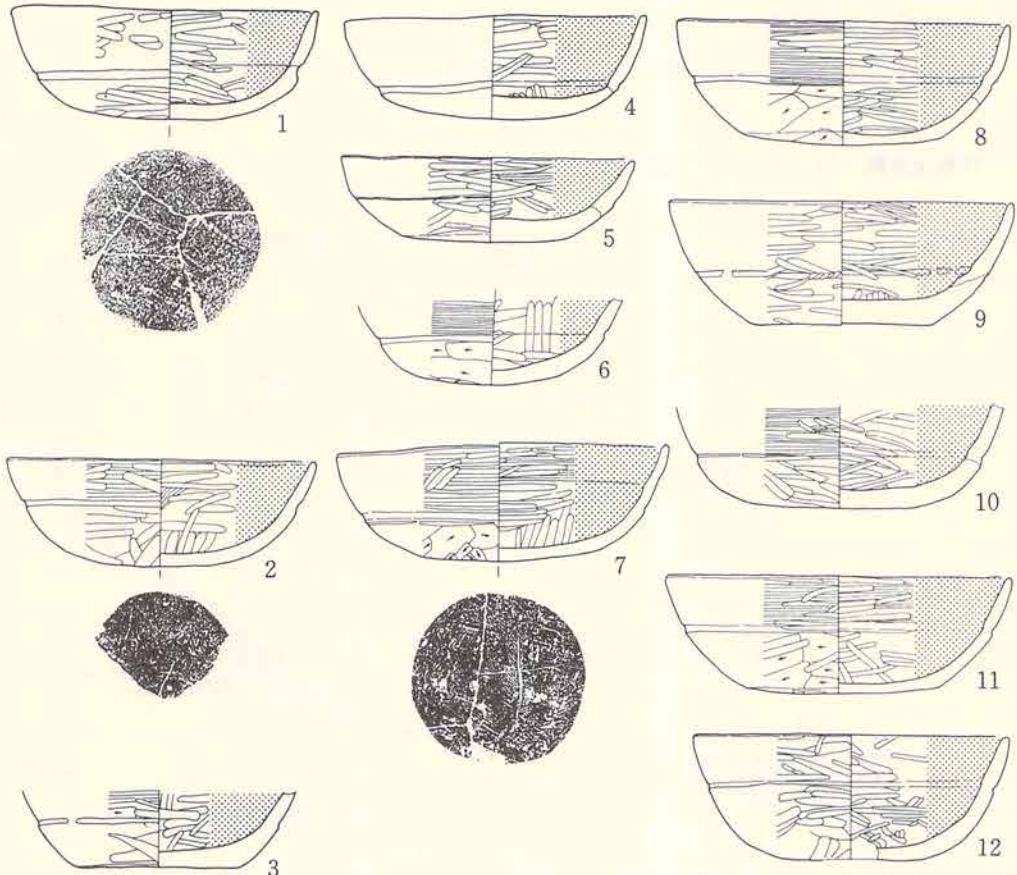
層番号	土色	粒径区分	備考
(土質) 1	褐色(7.5YR4/6)	シルト	焼土、やわらかい
2	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	貼り床
3	オリーブ褐色(2.5Y4/4)	シルト	II層

第32号 13号住居跡平面図および埋土等断面図 (S = 1/60)

13号住居跡観察表

重複	壁	床	カマド		柱穴	周溝	その他
			本体	煙道			
なし	II層を壁面としている。たち上がりは明瞭である。	II層中に貼り床されている。厚さは5~6cm、床面中央部はかたくなっている。ほぼ平坦である。	北西壁に沿って形成されている。燃焼部はわずかに掘り込まれ、焼土が形成される。両袖はやわらかく、地山そのものか再構築されたものか判然としない。天井部分は不明である。	床面からゆるやかに上がりながら延びている。煙出し部では深く落ち込んでいる。掘り込まれてつくられる。	北隅に2個、東隅に1個、南東隅に沿って1個検出された。p.h. 1は小さいがp.h. 2, 3, 4はほぼ同規模である。柱あたりは不明である。	北東壁に周溝状の溝がごく一部認められる。	焼失住居である。炭化材は小さなものが数多く含まれ、上層構造は復元できない。北隅に土坑が1基認められた。浅皿状のものであり、埋土は住居跡埋土4層と同質である。

本住居跡は全体の80%以上が発掘区域内において検出されている。その廃絶は焼失に伴うものと考えられるが、他の同様の住居跡に比して炭化材・焼土の出土量は少ない。特に廃絶の年

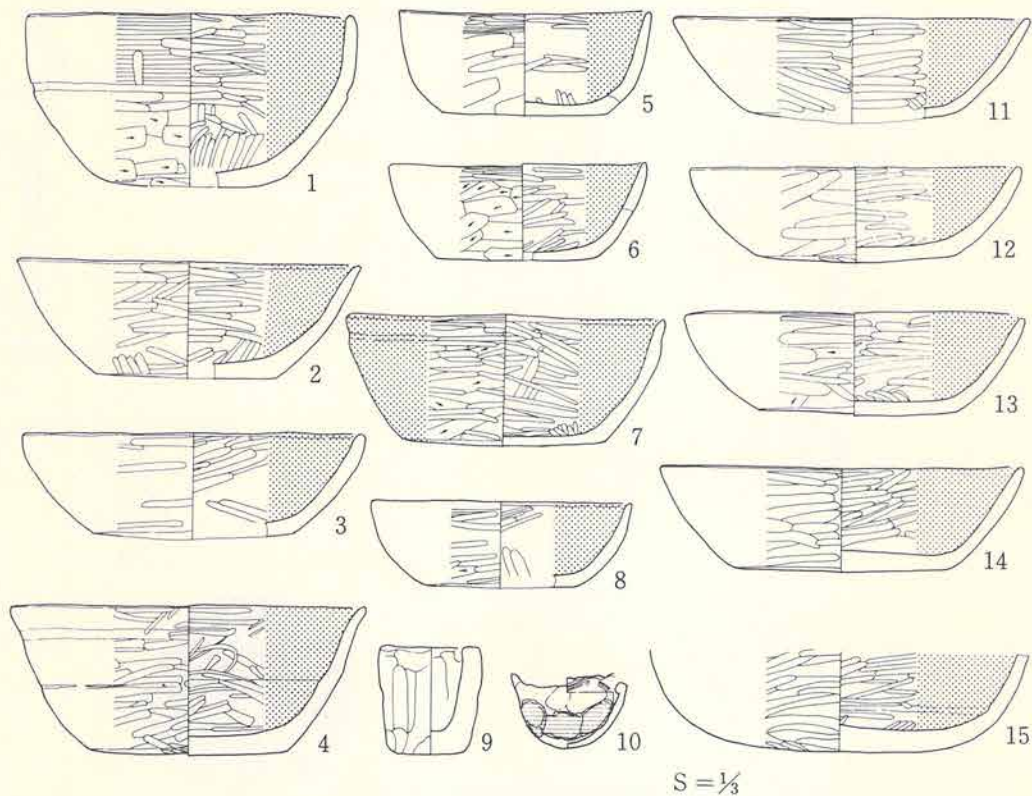


S = 1/3

(土器観察表)

実測図	写真	登録番号	種類	器種形式	坯量		外面調整			内面調整			成形	切り離し	分類	その他	
					口縁径	底径	器高	口縁部	体部	底部	口縁部	体部					底部
33-1	50-	13J-163	H	杯	12.2	-	4.3	k→n→m	k→m	k→m	m	m	非ロクロ	-	a	底部外面 Xへらがき	
33-2	50-1	13J-180	H	杯	12.3	-	4.2	n→m	k→m	k→m	n→m	n→m	非ロクロ	-	a	底部外面 Xへらがき	
33-3	50-5	13J-191	H	杯	-	-	-	k→n→m	k→m	-	m	m	非ロクロ	-	a		
33-4	50-9	13J-164	H	杯	12.1	-	4.1	m	k	m	m	m	非ロクロ	-	a	床面直上	
33-5	50-4	13J-169	H	杯	11.7	-	3.4	n→m	k→m	k→m	m	m	非ロクロ	-	a		
33-6	50-13	13J-162	H	杯	-	-	-	n→m	k	-	m	m	非ロクロ	-	a	底部外面 Xへらがき	
33-7	50-80	13J-175	H	杯	13.2	-	4.6	n→m	k	k	n→m	m	m	非ロクロ	-	a	底部外面 Xへらがき
33-8	50-7	13J-167	H	杯	13.4	-	4.8	n→m	k→m	k→m	m	m	m	非ロクロ	-	a	
33-9	50-11	13J-168	H	杯	13.8	-	4.8	k→m	k→m	k→m	m	m	m	非ロクロ	-	a	
33-10	50-17	13J-166	H	杯	-	-	-	-	k→n→m	k→m	-	m	m	非ロクロ	-	a	
33-11	50-6	13J-171	H	杯	13.8	-	4.7	n→m	k→m	k→m	n→m	m	m	非ロクロ	-	a	
33-12	51-2	13J-179	H	杯	12.5	-	5.0	n→m	k→m	k→m	m	m	m	非ロクロ	-	a	

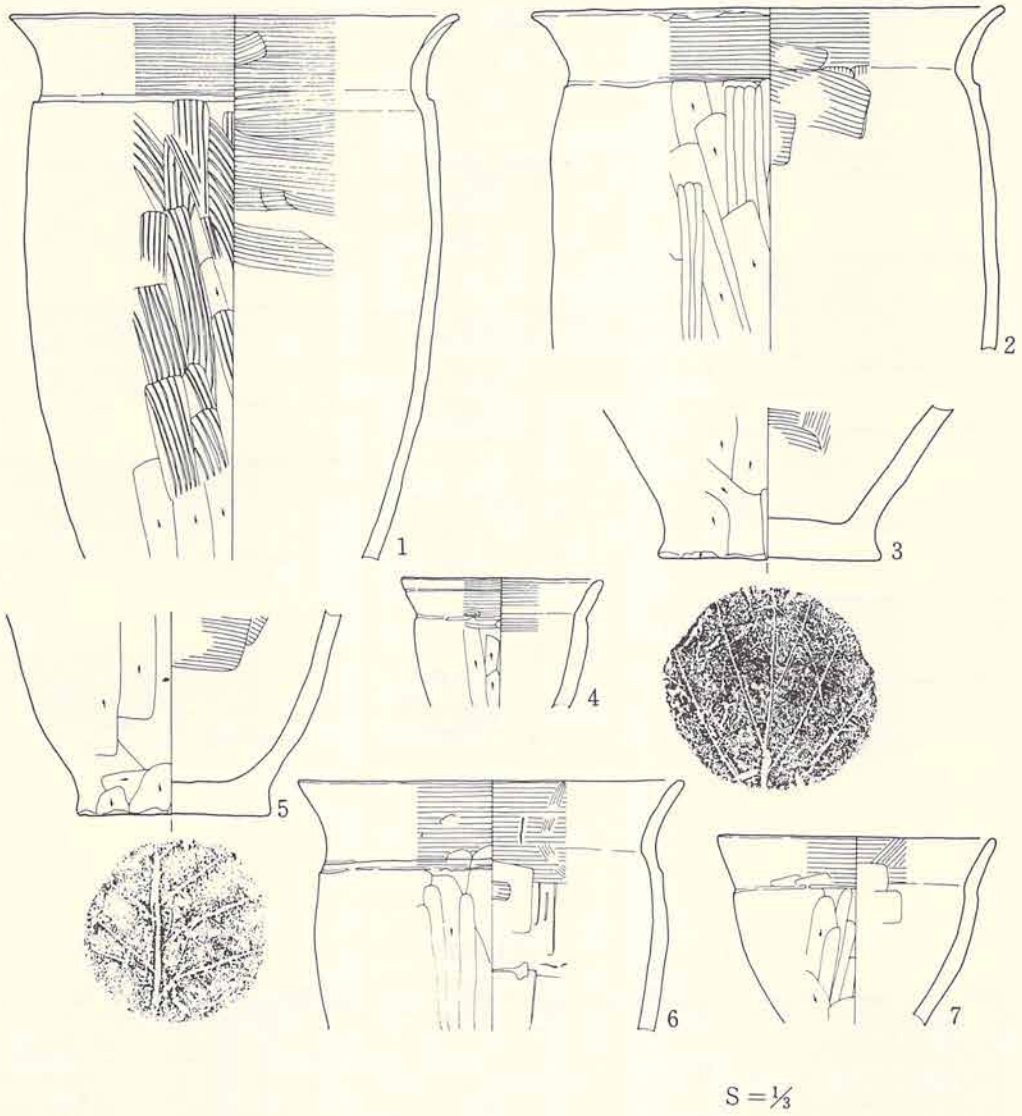
第33図 13号住居跡内出土遺物(1)



(土器観察表)

実測図	写真	登録番号	種類	器種形式	坯量			外面調整			内面調整			成形	切り離し	分類	その他
					口縁径	底径	器高	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部				
34-1	50-19	13J-177	H	杯	13.0	—	6.8	n→m	k→m	k→m	m	m	m	非ロクロ	—	a	
34-2	50-16	13J-177	H	杯	13.6	7.1	4.6	m	m	m	m	m	m	非ロクロ	—	b	
34-3	50-23	13J-176	H	杯	13.6	7.8	4.1	m	m	m	m	m	m	非ロクロ	—	b	床面直上
34-4	51-3	13J-174	H	杯	14.1	—	6.0	m	m	m	m	m	m	非ロクロ	—	c	
34-5	50-21	13J-160	H	杯	10.0	6.6	4.0	k→m	k→m	k→m	m	m	m	非ロクロ	—	b	
34-6	50-18	13J-170	H	杯	10.3	6.3	3.8	k→m	k→m	k→m	m	m	m	非ロクロ	—	b	
34-7	50-20	13J-159	H	杯	12.7	8.1	5.2	k→m	k→m	k→m	m	m	m	非ロクロ	—	e	
34-8	50-14	13J-181	H	杯	10.3	6.0	3.3	n→m	k→m	k→m	m	m	m	非ロクロ	—	b	
34-9	51-7	13J-183	H		4.0	3.2	4.2	m	m	m	n	n	n	非ロクロ	—	b	
34-10	51-8	13J-184	H		4.6	—	3.0	—	—	—	m	n	n	非ロクロ	—	b	
34-11		13J-161	H	杯	14.2	8.1	4.7	m	m	—	m	m	—	非ロクロ	—	b	
34-12	50-22	13J-173	H	杯	13.2	7.8	3.9	m	m	m	m	m	m	非ロクロ	—	b	
34-13	50-15	13J-178	H	杯	13.5	7.9	4.0	k→m	k→m	k→m	m	m	m	非ロクロ	—	b	
34-14	50-24	13J-198	H	杯	14.5	8.5	4.1	m	m	k→m	m	m	m	非ロクロ	—	b	
34-15	50-10	13J-165	H	杯	—	—	—	—	k→m	m	—	m	m	非ロクロ	—	b	

第34図 13号住居跡内出土遺物(2)



(土器観察表)

実測図	写真	登録番号	種類	器種形式	坯量			外面調整			内面調整			成形	切り離し	分類	その他
					口縁径	底径	器高	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部				
35-1	51-9	13J-185	H	罍	17.9	-	-	n	k→h	-	n	n	-	非ロクロ	-	中	
35-2	51-10	13J-186	H	罍	18.9	-	-	h→m	k→m	-	n	-	-	非ロクロ	-		
35-3	51-12	13J-190	H	罍	-	8.9	-	-	k	-	n	n	-	非ロクロ	-		
35-4	51-6	13J-182	H	小型鉢	8.0	-	-	n	k	-	n	n	-	非ロクロ	-		
35-5	51-14	13J-189	H	罍	-	7.7	-	-	k	-	-	-	-	非ロクロ	-		
35-6	51-11	13J-187	H	罍	15.5	-	-	h→n	k→m	-	n	n, m	-	非ロクロ	-	中	
35-7	51-13	13J-188	H	罍	11.1	-	-	n→m	k→m	-	n→m	m	-	非ロクロ	-	小	

第35図 13号住居跡内出土遺物(3)

代差を大きく見積もることができるわけでもなく、包含状態もほぼ同じであることから、両者の差は焼失の程度の差によるものと考えることが可能である。

住居跡埋土は4層に区分されるが、それぞれの層の形成に著しい時間差のあったことは認められず、埋土界面の連続性を考えると、ごく短期間の堆積が考えられる。

遺物はむしろ住居跡埋土の上層から出土する傾向にあり、細かな炭化材が成層化してその下部に頻出する。しかし、これらは埋土とともに流入したものと、本来的な住居跡廃絶時の遺物が後世にかなり移動し、再編成されたものとが考えられる。土器の出土量はカマド付近にもっとも多い。床面上で、当時の原位置をとどめている土器は検出されなかった。

土坑は住居跡埋土と同質の堆積土で満たされ、住居廃絶後の埋没であることは明らかである。柱穴跡は、すべて焼土粒・炭化物を微量に含む埋土で、柱穴跡状の小坑も含めてほぼ同時期に埋没していると考えられる。

貼り床は、床面ほぼ全域が掘り込まれた後になされている。住居跡構築の際のものと考えられる。土坑・柱穴・周溝部分はいずれも貼り床されていないが、それらが貼り床と同時につくられているか後につくられたものであるかの判断は不可能であった。

カマドは、住居跡廃絶に際してかなりの程度崩壊していたものと考えられる。煙道部の残存状況が良好であるからである。燃焼部において焼土の形成が顕著でないのは、地山の土質によるものではないかと考えられる。

住居としての存続年代は不明である。廃絶の年代は国分寺下層式期であると考えられるが、埋土中から出土した坯の形態は、他の住居跡に比してやや新しい様相を示す。しかし、遺物の起源を確定できない以上、本住居跡のみをとり上げて廃絶年代を他と異なるものとするには慎重に対処したい。

14号住居跡（第36、37図、写真図版14、52）

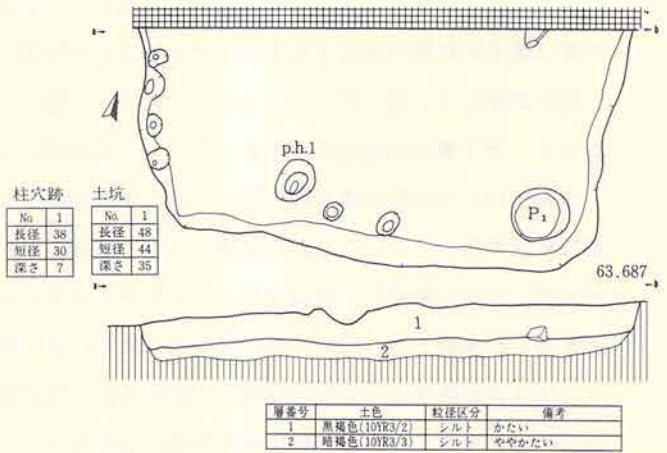
本住居跡は、南側40%程度発掘調査区域内で検出されている。この付近において、当時の地山がどの程度削平されているか知る手がかりに乏しい。現代の耕作土の上にさらに整地層があるため、II層上面は地表下60cm前後に位置する。

住居跡埋土は明確な区分を行うことができず、埋没は短期間に行われたものと考えられる。

遺物は埋土中の上・下を問わず小片となって出土するものがほとんどである。少数ではあるが、床面より5cm浮いた住居跡埋土中より復元可能な個体が出土している。一地点からの一括出土というより、かなり広い部分からの断片的な出土であるため、本来住居跡に伴ったものであるとすれば著しく原位置から移動しているものであり、埋土とともに混入したものであるとしても流入後に位置を変えていると考えられる。

住居跡掘り方上面は非常に凹凸に富み、しかも、中央部分については地山をそのまま床面として利用している箇所もある。柱穴跡としたものは深さが掘り方上面にまで達しており、住居構築時のものと考えられるが、その他の壁際の小坑は、貼り床の途中にとどまり、貼り床後のものであると考えられる。

住居跡に付属する土坑の埋土は住居跡のものとは異なり、埋没時期に差



第36図 14号住居跡平面図および埋土断面図 (S = 1/60)

14号住居跡観察表

重複	壁	床	カマド		柱穴	周溝	その他
			本体	煙道			
なし	II層を壁面としている。西壁はやや不明瞭であるが、東南壁は明瞭にゆるやかに立ち上がる。	III層上面まで掘り込み貼り床している。厚さは一定しないが、東側では20cm程度となる。やや凹凸のある床面である。	不明	不明	南壁に沿ってやや西寄りに柱穴状の小坑が検出されている。他の小坑は柱穴かどうか不明。	認められない	南東隅に土坑が1基検出されている。円筒状を呈することから、住居跡に伴う柱穴跡となる可能性もある。埋土は住居跡と異質であり、下方にいくに従って粘性を増す。

があることを示している。土坑の堆積が古いと考えられるが、貼り床されていない点から、住居跡埋没後につくられた可能性もある。野外調査では確認できなかった。

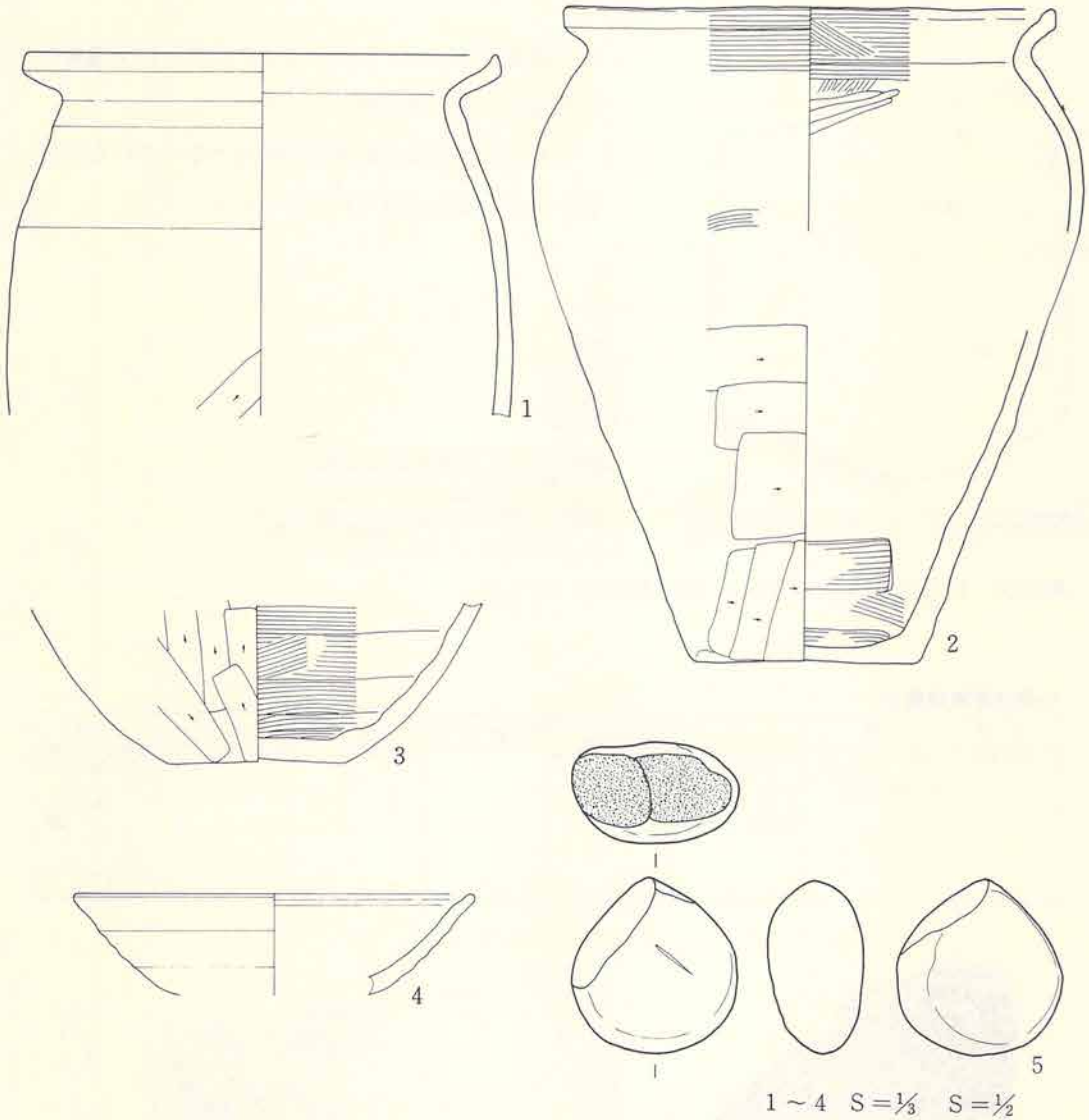
住居としての存続年代は不明であるが、廃絶の時期は出土遺物からIII-2期(高橋 1982)であると考えられる。

15号住居跡(第38~40図、写真図版14, 52)

本住居跡は、北側のごく一部を除いてほぼ全域を検出することができた。ただし、北壁・東壁の一部は確認が困難であった。

床面直上での遺物の出土状況から、住居跡の埋没はかなり短期間に行われたものと考えられる。住居跡埋土の観察によっても同様の推論を導き出すことができる。しかし、遺物の復元にあってその一部を欠失する場合がほとんどで、住居跡の上部は後世にやや削平されていると考えられる。

遺物の出土状況から、床面直上で検出された土師器は、住居跡廃絶当時のものであろうと考えられる。また、住居構築の上限年代は明らかでないが、床面下で検出された51号土坑の廃絶



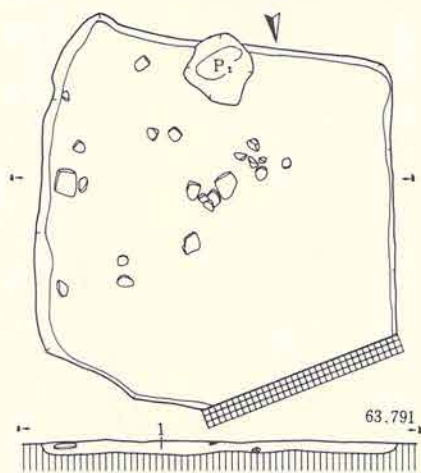
(土器・石器観察表)

実測図	写真	登録番号	種類	器種形式	坯量			外面調整			内面調整			成形	切り離し	分期	その他
					口縁径	底径	器高	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部				
37-1	52-4	14J-19	H	甕	18.8	-	-	-	k	-	-	-	-	ロクロ	-	[中]	
37-2	52-2	14J-20	H	甕	19.5	8.8	26.1	n	n k	-	n	m n	-	非ロクロ	-	中	
37-3	52-3	14J-18	H	甕	-	6.8	-	-	k	k	-	h	-	非ロクロ	-		
37-4	52-1	14J-17	A	埴	16.0	-	-	-	-	-	-	-	-	ロクロ	-		
37-5	52-6	14J-27	石器	掌石	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	砂岩 ε=1/2

第37図 14号住居跡内出土遺物

より確実に新しい。住居の廃絶年代は、出土遺物から国分寺下層式期と考えられる。

しかし、型式決定の最大の根拠となっている坏には、良好な資料が見られなかった。



土坑

No	1
長径	58
短径	55
深さ	8

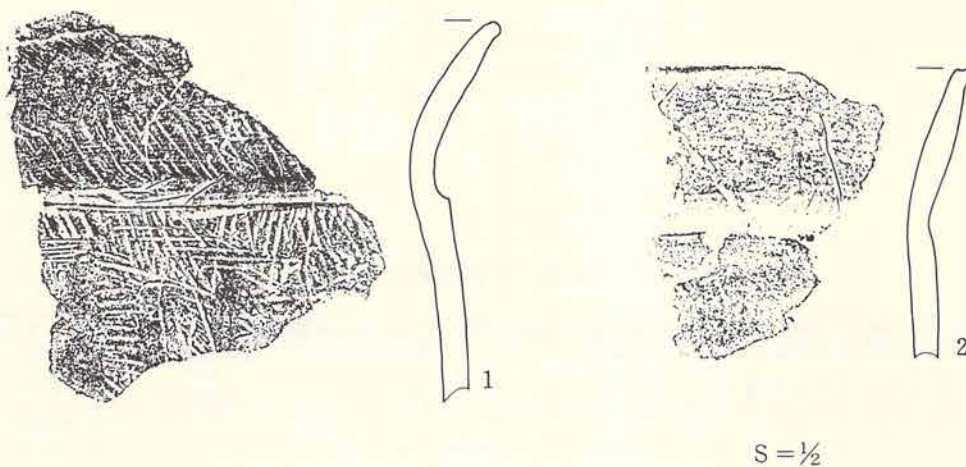
層番号	土色	粒径区分	備考
(P1) 1	黒色(10YR2/1)	シルト	粘性あり、ややかたい

層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒色(10YR2/1)	シルト	粗砂混在、やや粘性あり、かたい

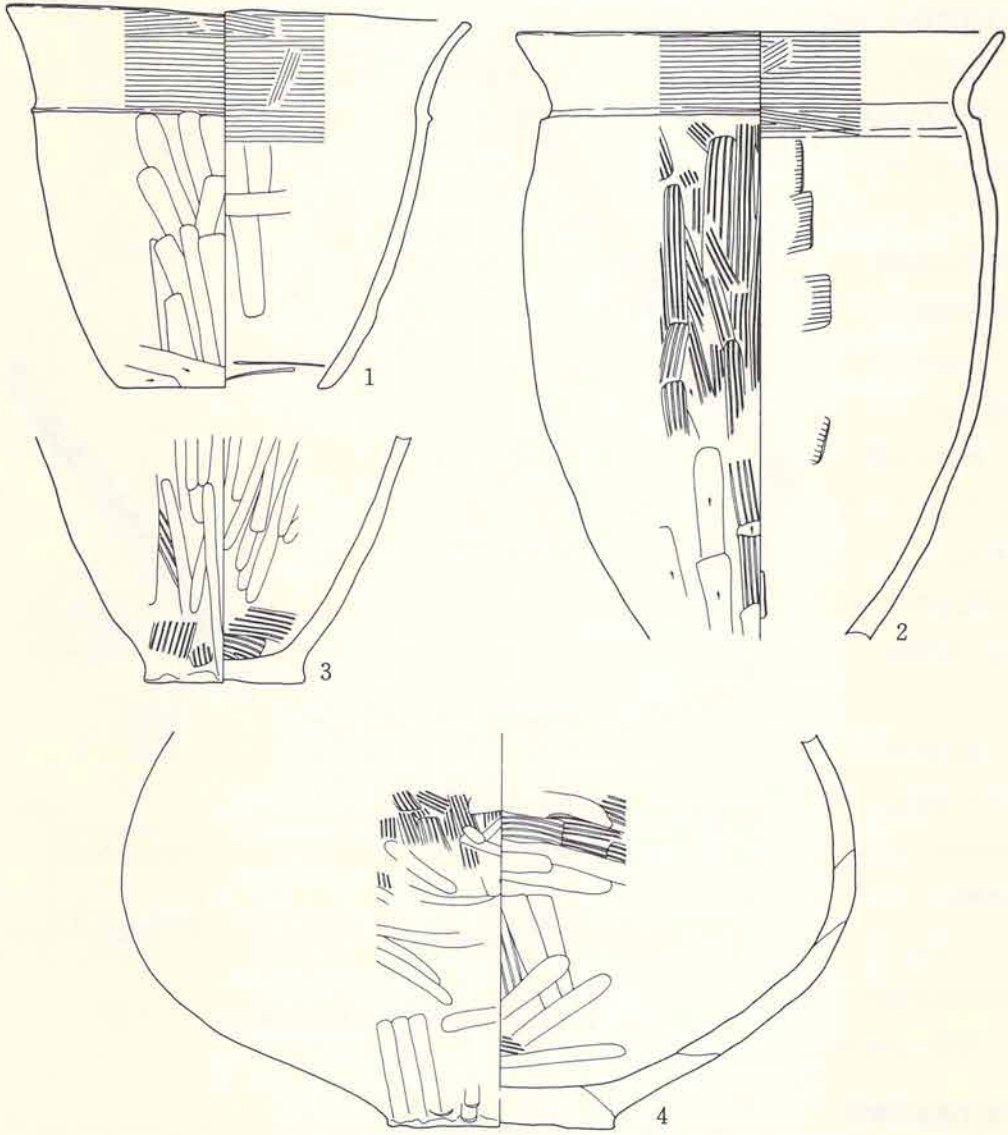
第38図 15号住居跡平面図および埋土断面図 (S = 1/60)

15号住居跡観察表

重複	壁	床	カマド		柱穴	周溝	その他
			本体	煙道			
51号土坑	II層を壁面としている。たち上がりは明瞭である。	II層を床面としている。径1~2cm前後の小礫が床面に浮き出ており、全体的にかたい。	不明	不明	認められない	認められない	床面直上で土器がややまとまって出土している。南壁に沿って土坑が1基確認されている。浅皿状を呈し、埋土はやわらかい。



第39図 15号住居跡内出土遺物(1)



S = 1/3

(土器観察表)

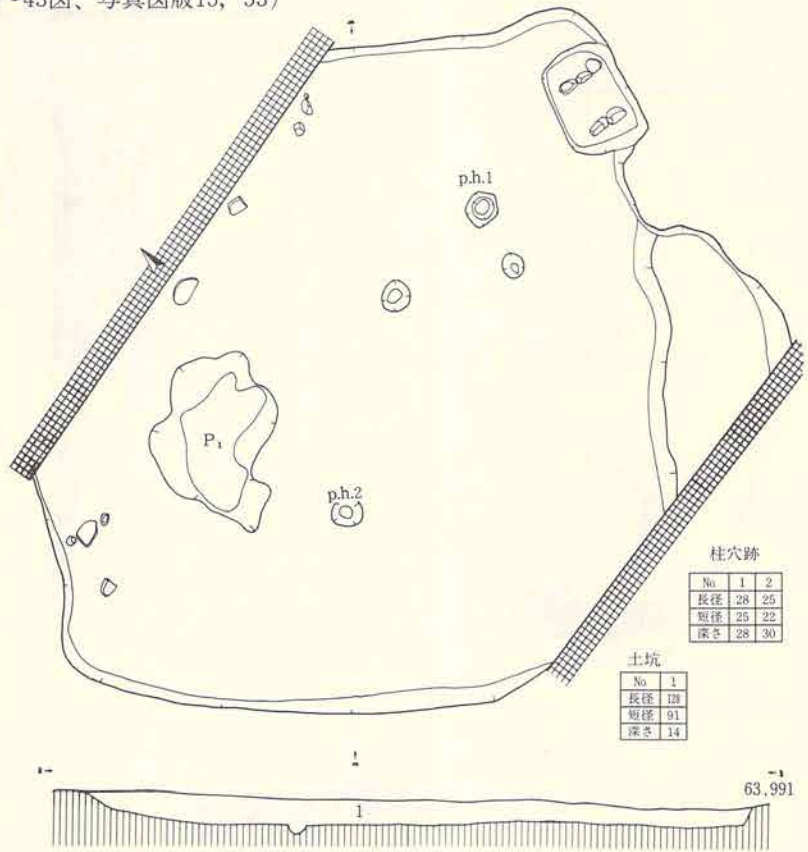
実測図	写真	登録番号	種類	器種形式	杯量			外面調整			内面調整		成形	切り難し	分類	その他
					口縁径	底径	器高	口縁部	体部	底部	口縁部	体部				
39-1	52-14	15J-37	H	罎	18.5	8.2	15.1	n	m	k	n	m	非ロクロ	-	-	-
39-2	52-13	15J-39	H	罎	19.4	-	-	n	k→h	-	n	m	非ロクロ	-	中	-
39-3	52-12	15J-40	H	罎	-	6.4	-	-	h→m	k	-	m	h	非ロクロ	-	-
39-4	52-10	15J-38	H	壺	-	9.0	-	-	h→m	-	-	h→m	非ロクロ	-	-	-

第40図 15号住居跡内出土遺物(2)

16号住居跡（第41～43図、写真図版15、53）

本住居跡は、全体の80%程度が発掘区域内で検出されている。ただし、住居跡の南西壁は遺構確認面上部において後世の著しい攪乱をうけており、検出が困難であったとともに遺存状況も良くない。

住居廃絶後の埋没は、短期間に行われたということが、住居跡埋土の状況と床面直上の遺物の出土状況から理解される。ただし、床面上の遺物は後世の攪乱によってだいぶ破損



層番号	土色	粒径区分	備考	層番号	土色	粒径区分	備考
1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	礫を含む、かたい	(P1)	黒褐色(10YR2/2)	シルト	暗褐色シルトを含む、粘性あり

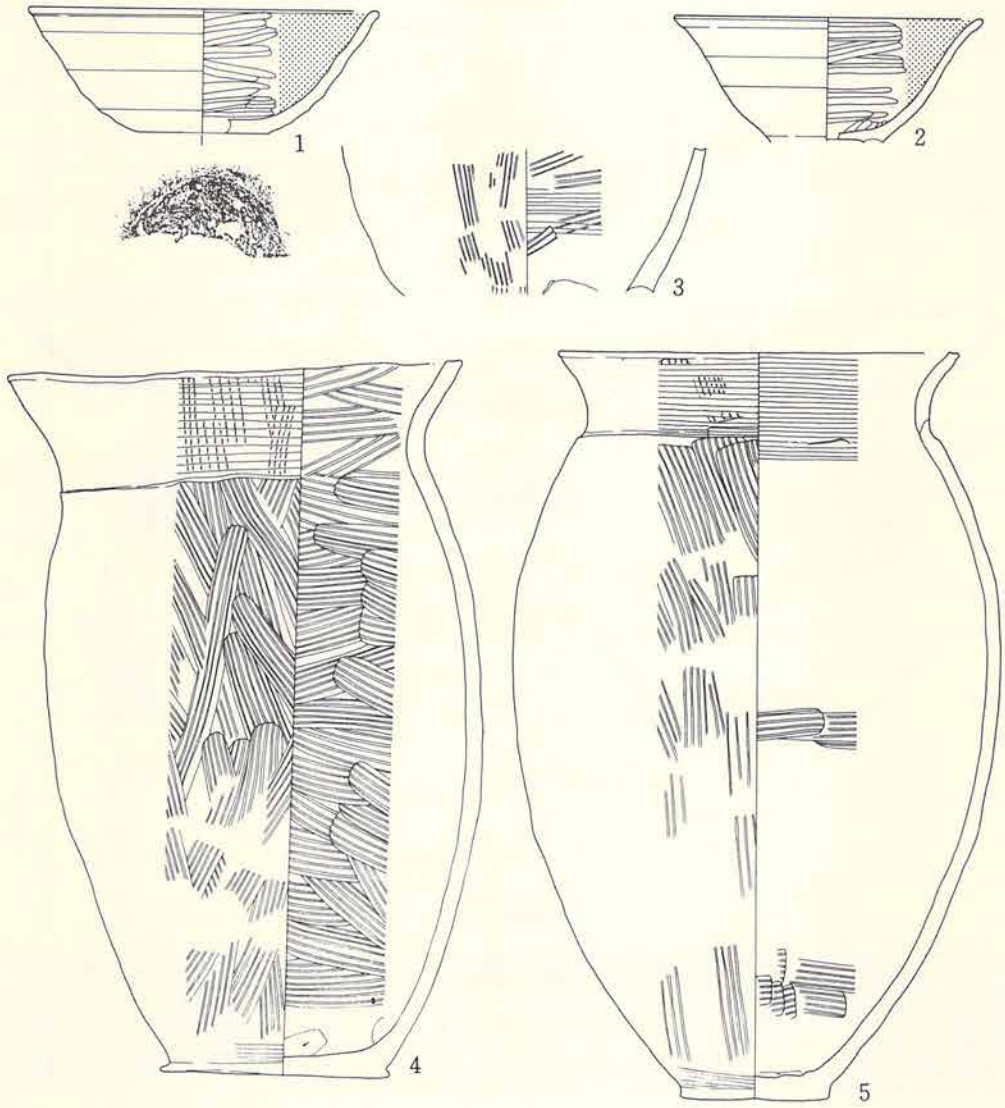
第41図 16号住居跡平面図および埋土断面図（S=1/60）

16号住居跡観察表

重複	壁	床	カマド		柱穴	周溝	その他
			本体	煙道			
なし	II層を壁面としている。北西、南西壁はやや不明瞭であるが、他は明瞭なたち上がりを見せる。	II層を床面としている。面上に大小の礫を多く含んでいる。全体的にかなりかたい。	不明	不明	2個認められる。p.h.1は掘り方、柱あたりを識別しうる。p.h.1の近くに小坑が認められるが、他のものと比して浅く、柱穴跡となりうるかどうか検討を要する。	認められない	北東隅に、5cm程度掘り下げられ礫を配した出入口状の施設が認められる。東壁南半が張り出しているが、他の遺構との重複ではないと考えられる。不整形な土坑が1基確認されている。

し原位置を移動していると考えられる。

遺物は上記のほか、住居跡埋土中からやや多量に散漫に出土する。これらの多くは埋没後の土壌作用による位置の移動を伴っていると考えられる。

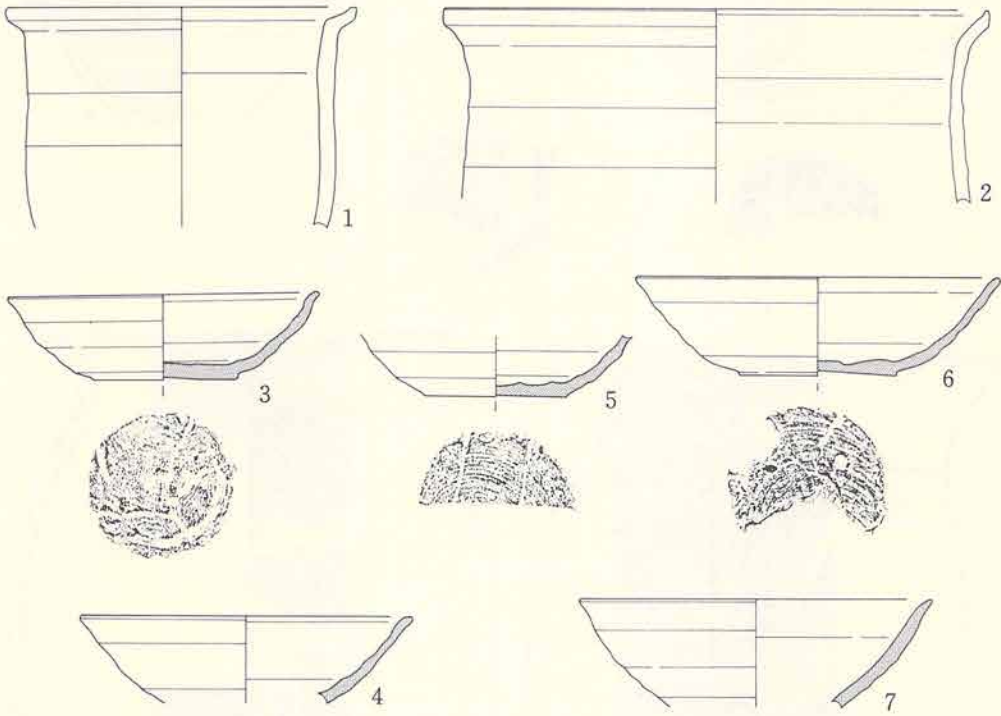


S = 1/3

(土器観察表)

実測図	写真	登録番号	種類	器種形式	杯量			外面調整			内面調整			成形	切り離し	分類	その他
					口縁径	底径	器高	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部				
42-1	53-6	16J-107	H	杯	14.0	5.1	5.0	-	-	-	m	-	ロクロ	糸切り	e	底部ケズリ	
42-2	53-7	16J-106	H	高台付杯	7.3	-	-	-	-	-	m	-	ロクロ	-	-	-	
42-3	-	16J-109	H	甕	-	-	-	h	-	-	h→n	-	非ロクロ	-	-	-	
42-4	53-9	16J-111	H	甕	18.2	9.7	28.1	h→n	h	n	h	h	k	非ロクロ	-	中	
42-5	53-8	16J-117	H	甕	16.0	5.9	29.7	h→n	h	n	n	h	非ロクロ	-	中	-	

第42図 16号住居跡内出土遺物(1)



S = 1/3

(土器観察表)

実測図	写真	登録番号	種類	器種形式	坯量			外面調整			内面調整			成形	切り離し	分類	その他
					口径	底径	器高	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部				
43-1		16J-110	H	壺	14.0	-	-	-	-	-	-	-	-	ロクロ		(小)	
43-2		16J-108	H	壺	21.8	-	-	-	-	-	-	-	-	ロクロ		(中)	
43-3	53-1	16J-101	A	杯	12.3	6.7	3.3	-	-	-	-	-	-	ロクロ	糸切り	2	底部ケズリ
43-4	53-5	16J-102	A	杯	13.2	-	-	-	-	-	-	-	-	ロクロ			
43-5	53-4	16J-103	A	杯	-	5.6	-	-	-	-	-	-	-	ロクロ	糸切り	d	
43-6	53-2	16J-105	A	杯	14.4	6.2	3.8	-	-	-	-	-	-	ロクロ	糸切り	e	底部ケズリ
43-7	53-3	16J-104	A	杯	14.0	-	-	-	-	-	-	-	-	ロクロ			

第43図 16号住居跡内出土遺物(2)

住居構築と同時と考えられる施設は柱穴跡のほか、出入口状の張り出し、南東壁の張り出し、住居跡床面の不整形な土坑である。いずれの埋土も住居跡埋土とほとんど同じであり、しかも床面・壁面構築との新旧関係は認められない。住居構築当初から、当時一般の住居平面形状とはやや異なったものであったと考えられる。

特に、北東隅の礫を配した出入口状の張り出しは注意すべきである。本住居跡はカマドの位

置が不明確で、それとの位置関係を把握することはできない。出入口状の張り出しを伴う竪穴住居跡の例として報告されているものに上の山Ⅶ遺跡のEⅢ-3住居跡がある（光井他 1983）。上の山Ⅶ遺跡の例は、北壁西寄りに長さ1.5 m、幅2.2 m前後隅丸形状に張り出しがつくられるものである。さらに、間仕切り状の溝が、張り出し部の両側から1.5 m程床面中央に延びている。カマドは東壁やや北寄りに設けられる。ただし、張り出し部のレベルは床面よりやや高くなる。絶対年代は9世紀後半から11世紀の中間頃が与えられている。本住居跡の例はこれとは異なり、浅い掘り下げと礫の配置がなされる。これらは何らかの機能的意味を有するものと考えられる。

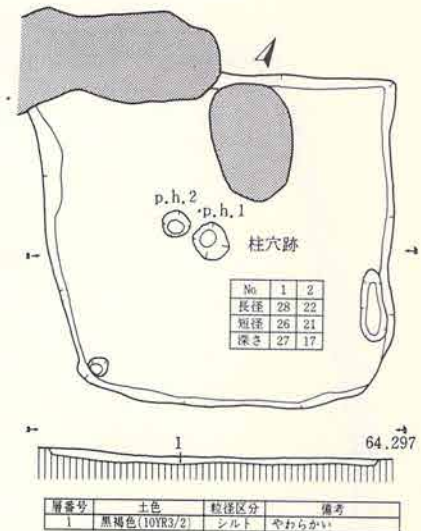
住居としての存続年代は不明であるが、廃絶の年代は出土遺物からⅢ-2期であったと考えられる。

18号住居跡（第44、45図、写真図版14、53）

本住居跡は、29号溝跡によって北壁中・西壁の一部と、63号土坑によって床面の一部が破壊されているが、発掘区域内で全体が検出されている。

壁高は低いが、この付近は畑耕作土の堆積が厚く、ごく最近遺構確認面が削平されたという事実はないと思われる。近接する他遺構の状態から観察すると、わずかに上部が削平されている可能性がある。

堆積土は区別することができず、時間的断絶がなく、しかもほぼ原形をとどめる坏が床面直上から出土していることから、短期間の堆積であったと考えられる。遺物量は埋土中に少なく、本来住居跡に伴っていた遺物も少量であったと考えられる。

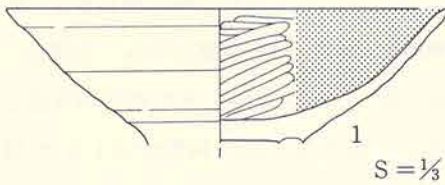


第44図 18号住居跡平面図および埋土断面図（ $S = \frac{1}{60}$ ）

18号住居跡観察表

重複	壁	床	カマド		柱穴	周溝	その他
			本体	煙道			
52号土坑→ →6号土坑 →29号溝跡	Ⅱ層を壁面としている。壁残存高はわずかながら土上がりは明瞭である。北壁の一部が29号溝跡に破壊される。	Ⅱ層を床面としている。全体的にやや凹凸がある。ややかたい。52号土坑と重複する部分では、5 cm程度貼り床されている。	不明。当初から構築されなかったと推定される。		床面中央に柱穴跡状の小坑が存在する。埋土は、住居跡埋土と同質である。	東壁に沿って一部溝状に認められるが、周溝とは異なるものである。	特になし。

床面南側は52号土坑上部に貼り床がなされているが、52号土坑は住居構築時にはすでに堆積していたと考えられる。なぜなら、貼り床と土坑埋土が全く異なる土質であるからである。柱



第45図 18号住居跡内出土遺物

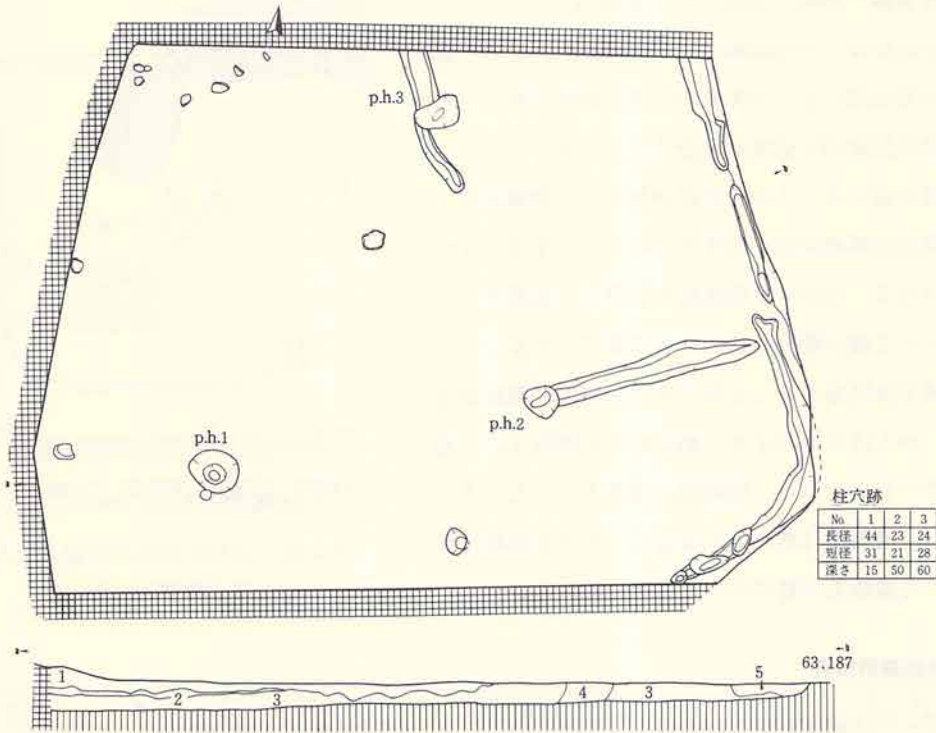
穴跡、周溝状のつくられている部分は貼り床
されない。

住居としての存続年代は不明であるが、廃
絶年代は出土遺物からⅢ-2期と考えられる。

(土器観察表)

実測図	写真	登録番号	種類	器種形式	杯量			外面調整			内面調整			成形	切り離し	分類	その他
					口縁径	底径	器高	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部				
45-1	53-11	18J-15	H	高台付杯	17.6	6.2	5.4	-	-	-	m	m	m	ロクロ	糸切り		床面直上

19号住居跡 (第46~48図、写真図版16, 53)



No	1	2	3
長径	44	23	24
短径	31	21	28
深さ	15	50	60

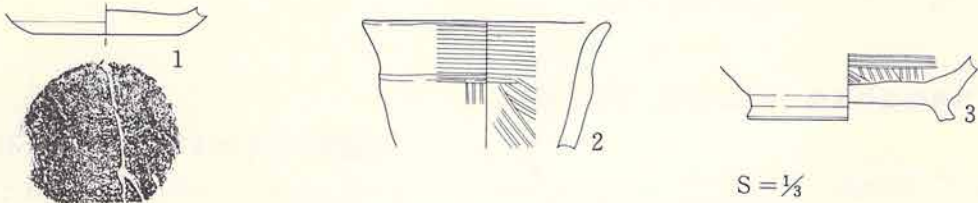
層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒褐色(10YR2/2)	細砂まじりシルト	やや粘性あり、かたい
2	黒色(10YR2/1)	シルト	粘性あり
3	黒褐色(10YR2/2)	シルト	やわらかい
4	黒褐色(10YR3/2)	シルト	耳層をブロック状に含む
5	黒色(10YR2/1)	シルト	やや粘性あり、かたい

第46図 19号住居跡平面図
および埋土断面図
($S = \frac{1}{60}$)

本住居跡は、南東部分40%程度発掘区域内において検出
された。埋土は4層に分けられるが、層界面(layer interface)
は明確な部分と漸移的な部分とがあり、住居跡埋没過程に
おいて長期に亘る時間的断絶はなかったものと考えられる。

19号住居跡観察表

重複	壁	床	カマド		柱穴	周溝	その他
			本体	煙道			
21号住居状遺構 →	II層を壁面としている。たち上がりは明瞭である。北東壁から南東壁にかけて、壁面が外壁し、一部オーバーハングする箇所がある。	II層を床面としている。21号住居状遺構と重複する部分では、わずかに貼り床されている。ほぼ平坦である。p.h. 1から北側へ、p.h. 2から東側へそれぞれ間仕切り状の溝が延びている。	不明	不明	3個検出された。p.h. 1はp.h. 2・3に比して浅く、平面形状がやや大きくなる。柱あたり掘り方は認められない。南側の小坑は柱穴跡かどうか判然としない。	わずかに途切れながらも、壁に沿ってめぐっている。部分的に深くなるが、おおむね4~5cm前後の深さである。	p.h. 1の上部からベンガラが採取された。

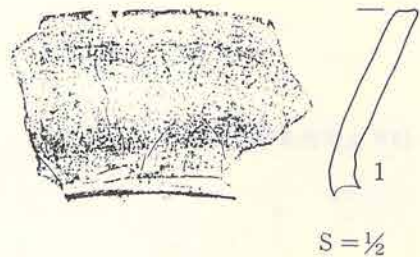


第47図 19号住居跡内出土遺物(1)

(土器観察表)

実測図	写真	登録番号	種類	器種形式	坯量			外面調整			内面調整			成形	切り離し	分類	その他
					口縁径	底径	器高	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部				
47-1	53-12	19J-	皿	杯	-	4.9	-	-	-	-	-	-	-	ロクロ	糸切り	a	不明
47-2	53-14	19J-	皿	盤	9.9	-	-	n	h	-	-	-	h→m	非ロクロ	-	-	-
47-3	53-13	19J-	皿	盤	-	7.8	-	-	-	-	-	-	h	ロクロ	へら切り	-	-

遺物は埋土中、床面からやや多量に出土する。床面直上においても小片のものが多く、わずかにやや大きめの破片も出土している。埋土中と床面直上において、遺物の出土状態に顕著な差異は認められない。こうしたことから、遺物は埋土の流入とともにそれに混在する形で現在に至ったものと考えられる。



第48図 19号住居跡内出土遺物(2)

床面全体に貼り床がなされる。住居跡掘り方は全体的にはほぼ均一になされている。柱穴跡の掘り込みと貼り床の前後関係が確定できないため、貼り床の時期に時間差のあった可能性も考えられるが、堅い面の認められたのは貼り床上面のみであった。

柱穴跡付近で採取されたベンガラは詳細不明である。径2cm前後のブロック上に数個認められたもので、朱彩された柱穴のものである可能性は薄いと思われる。柱穴跡の深さは不統一で

あるが、より深い柱穴が主柱的役割を果たしたとも考えられる。

周溝埋土は住居跡埋土2層と共通することから、住居跡廃絶時に至るまで使用されていたと考えられる。壁面のオーバーハングは南東隅で特に顕著であるが、埋土は周溝と共通し、埋没が住居跡の埋没と同時であることを示している。なお、オーバーハングする部分はそのままで直ちに崩落するような状態であることから、使用時においてこの空隙部分を満たすものがあったと考えなければならない。

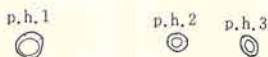
住居としての存続年代は不明であるが、廃絶の時期は埋土中・床面の出土遺物から判断すると、Ⅲ-1~2期であると考えられる。

20号住居状遺構 (第49, 50図、写真図版16, 54)



柱穴跡

No.	1	2	3
長径	22	16	18
短径	20	14	12
深さ	20	22	5



第49図 20号住居状遺構平面図 (S = 1/60)

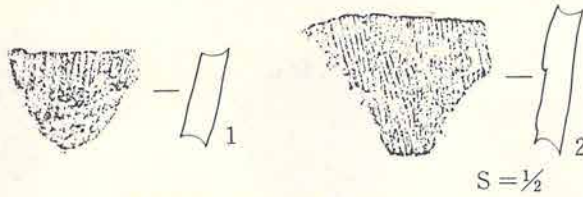
本遺構は、他遺構との重複関係を有するため、全体のどの程度が検出されているのか不明である。形態も明らかでない。埋土の観察によれば隣接する22号住居跡とはやや異なり、22号住居跡の埋没の後には本遺構が掘り込まれていたと考えられるが、その後本遺構の大部分を28号溝跡によって破壊されている。28号溝跡による破壊はほぼ床面直上までであり、本遺構の床面として地山の堅い面が残されている。西壁についても28号溝跡によってほとんど破壊されているようである。

20号住居状遺構観察表

重複	壁	床	カマド		柱穴	周溝	その他
			本体	煙道			
22号住居跡→ →28号溝跡	現場では確認が困難であった。南西壁と考えられる部分がわずかに認められる。南東壁は不確定であるが、28号溝跡のやや張り出した部分があることが可能である。	Ⅱ層を床面としている。平坦である。	不明	不明	確実なものはない。床面北半に3個の小坑が認められる。	南東壁に沿って認められる。埋土中に灰白色の火山灰を含んでいる。	平面形状を確実にとらえることができないため、この遺構に関して不明の点が多い。周溝状、柱穴状遺構の存在から壁穴住居状遺構として扱う。

ただし、住居跡の周溝と考えられる部分の埋土である灰白色の火山灰は、28号溝跡の埋土と共通し、両者の埋没の時間的近接を考えることができる。本遺構埋没以前に28号溝跡が掘り込まれ、その廃絶とともに両者ほぼ同時に埋没したとも考えられよう。

遺構の廃絶の時期は、出土遺物と降下火山灰の同定からⅢ-1~2期と考えられる。

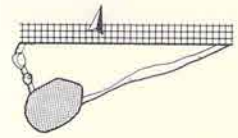


第50図 20号住居状遺構出土遺物

21号住居状遺構 (第51図、写真図版17)

本遺構は、ごく一部が検出されている。本遺構の廃絶と同時あるいはそれ以後に19号住居が構築されている。本遺構の埋土はすべて19号住居跡の貼り床で構成されており、両者の間の時間幅は確定できない。

埋土中の出土遺物もなく、その構築・使用・廃絶の年代は不明である。19号住居跡と比較的近い時間帯を想定しておきたい。

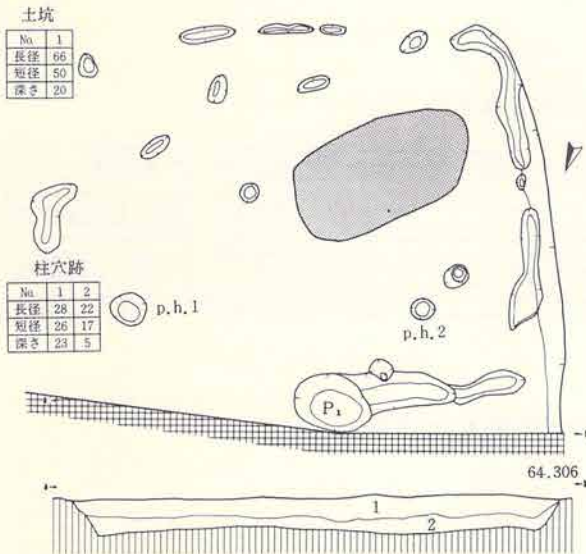


第51図 21号住居状遺構平面図 (S = 1/60)

21号住居状遺構観察表

重複	壁	床	カマド		柱穴	周溝	その他
			本体	煙道			
→19号住居跡	II層を壁面としている。残存部が少なく、たち上がりもやや不明瞭である。	II層を床面としている。面はかたい。	不明	不明	不明	不明	平面形状と床面のかたさから竪穴住居状遺構とする。

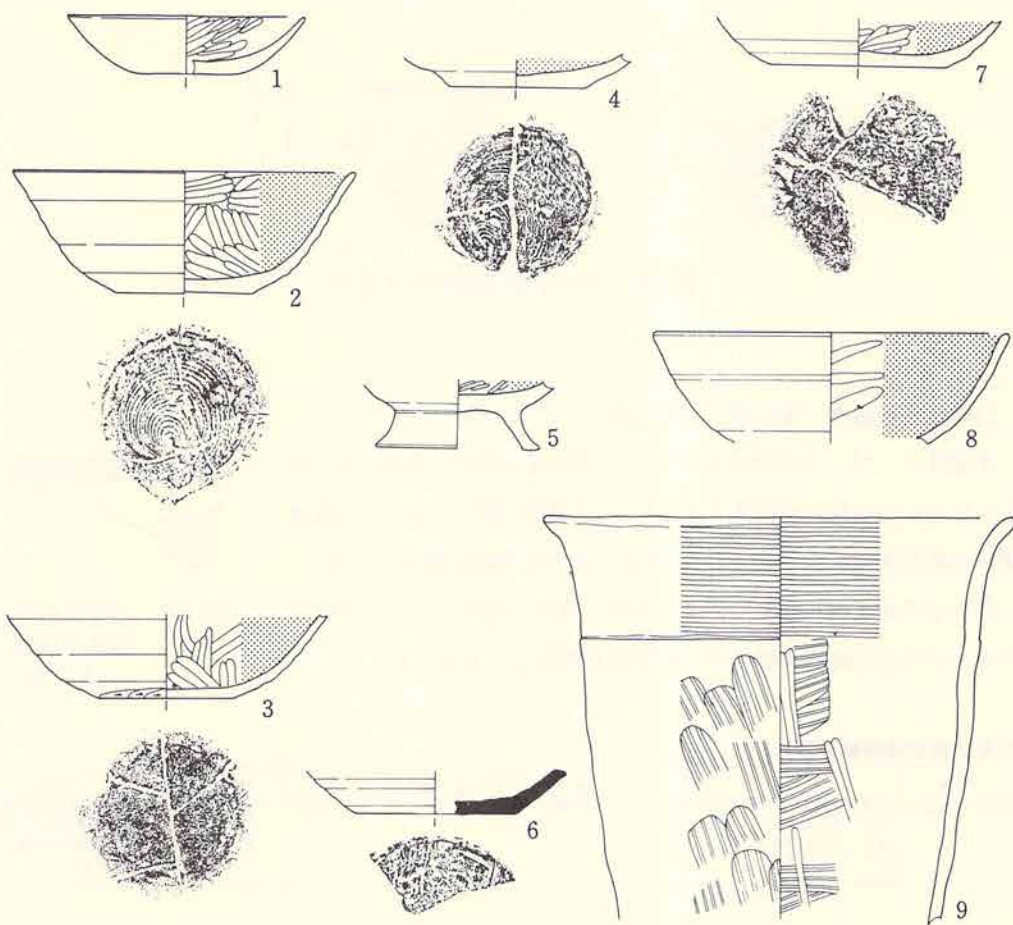
22号住居跡 (第52~54図、写真図版17、54)



第52図 22号住居跡平面図および埋土断面図 (S = 1/60)

本住居跡は、南側のかなりの部分が発掘区域内にかかっていたが、20号住居状遺構および28号溝跡によって東壁から南壁まで失われている。さらに、62号土坑は本住居跡が完全に堆積した後に、堆積後の上面から掘り込まれ、床面の一部を破壊している。

層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒色(10YR2/1)	シルト	粘性あり、やわらかい
2	黒褐色(10YR2/2)	シルト	粘性あり、やわらかい、わずかに粗砂が混在

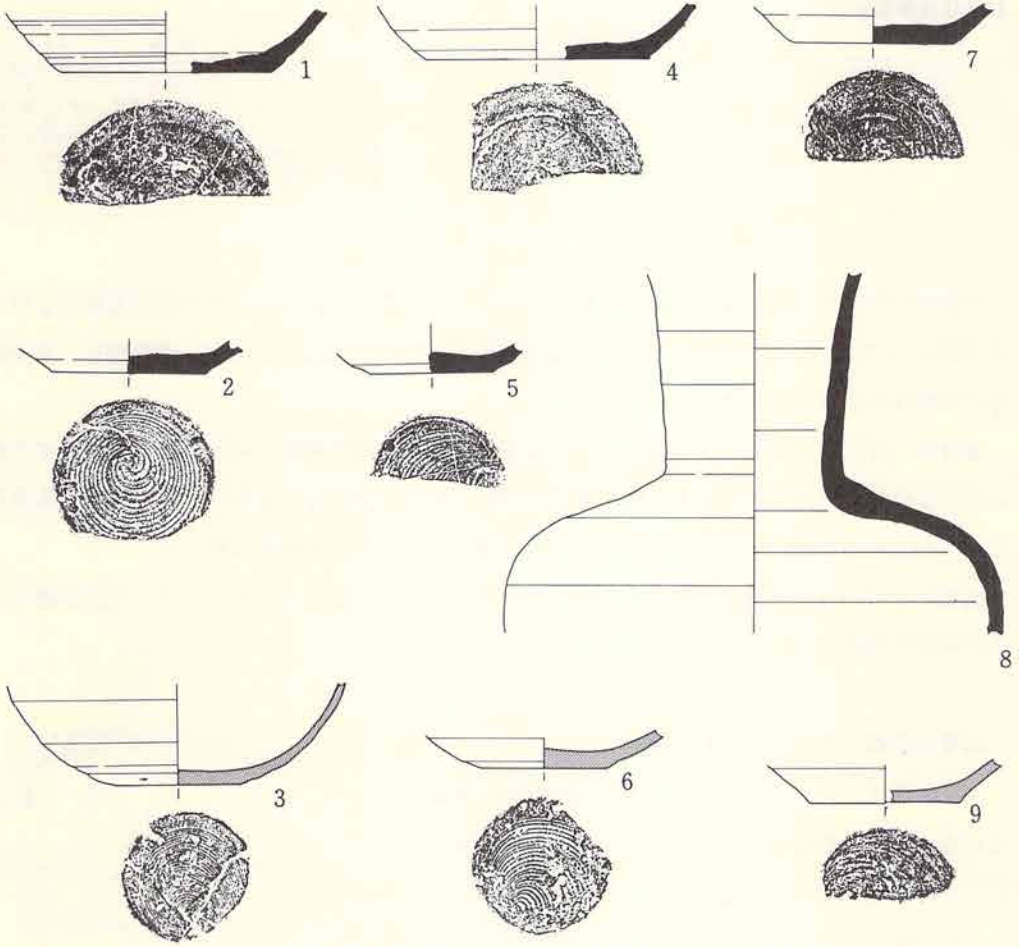


S = 1/3

(土器観察表)

実測図	写真	登録番号	種類	器種形式	坯量			外面調整			内面調整			形成	切り離し	分類	その他
					口縁径	底径	器高	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部				
53-1	54-9	22J-24	H	杯	9.5	3.5	2.3	-	-	-	m	m	m	非ロクロ	-		
53-2	54-6	22J-25	H	杯	13.7	5.5	4.9	-	-	-	m	m	m	ロクロ	糸切り	d	
53-3	54-8	22J-28	H	杯	-	5.4	-	-	-	-	-	-	m	ロクロ	糸切り	e	底部ケズリ
53-4	-	22J-26	H	杯	-	5.4	-	-	-	-	-	-	-	ロクロ	糸切り	d	
53-5	54-2	22J-34	H	高台付杯	-	5.0	-	-	-	-	-	-	-	ロクロ	-		
53-6	54-11	22J-36	S	杯	-	6.5	-	-	-	-	-	-	-	ロクロ	ヘラ切り	(4)	底部ケズリ
53-7	54-7	22J-27	H	杯	-	7.0	-	-	-	-	-	m	ロクロ	ヘラ切り	g	底部ケズリ	
53-8	54-10	22J-30	H	杯	14.3	-	-	-	-	-	m	m	-	ロクロ	-		
53-9	54-1	22J-35	H	鉢	18.9	-	-	n	h	-	n	h→m	-	非ロクロ	-	中	

第53図 22号住居跡内出土遺物(1)



S = 1/3

(土器観察表)

実測図	写真	登録番号	種類	器種形式	坯量			外面調整			内面調整			形成	切り難し	分類	その他
					口縁径	底径	器高	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部				
54-1	54-12	22J-37	S	坏	-	8.4	-	-	-	-	-	-	-	ロクロ	ヘラ切り	(4)	底部ケズリ
54-2		22J-40	S	坏	-	7.2	-	-	-	-	-	-	-	ロクロ	糸切り	(1)	
54-3	54-5	22J-32	A	坏	-	4.9	-	-	-	-	-	-	-	ロクロ	糸切り	2	ケズリ
54-4	54-14	22J-38	S	坏	-	8.9	-	-	-	-	-	-	-	ロクロ	ヘラ切り	(4)	底部ケズリ
54-5	54-13	22J-41	S	坏	-	4.9	-	-	-	-	-	-	-	ロクロ	糸切り	(1)	底部ヘラガキ
54-6	54-4	22J-29	A	坏	-	5.0	-	-	-	-	-	-	-	ロクロ	糸切り	1	
54-7	54-15	22J-39	S	坏	-	6.4	-	-	-	-	-	-	-	ロクロ	ヘラ切り	(4)	底部ケズリ
54-8		22J-42	S	長頸壺	7.1	-	-	-	-	-	-	-	-	ロクロ			
54-9	54-18	22J-31	A	坏	-	6.0	-	-	-	-	-	-	-	ロクロ	糸切り	2	底部ケズリ

第54図 22号住居跡内出土遺物(2)

22号住居跡観察表

重複	壁	床	カマド		柱穴	周溝	その他
			本体	煙道			
→20号住居跡 →52号土坑 →28号溝跡	II層を壁面として いる。南西壁のみ 残存し、たち上 がりは明瞭である。 南東壁、北東壁は 28号溝跡、20号住 居によって破壊さ れている。	II層を床面として いる。ほぼ平坦で ある。	不明	不明	床面に小坑がいく つか確認されてい るが、柱穴跡とし てp.h. 1とp.h. 3 が考えられる。他 は、形状、配置が 不規則である。埋 土はほぼ同質であ る。	部分的に認めら れ、壁欠夫の穴を 補い住居跡の範囲 を推定することが できる。	土坑が1基確認 される。そこから 西側へ溝が延び ている。底面 にはやや凹凸が ある。埋土は、住 居跡埋土よりや ややわらかい。

住居跡の埋土は自然堆積で短期間に形成されたものと考えられる。20号住居状遺構および28号溝跡は、本住居跡がほぼ完全に堆積した後の掘り込みであると考えられるが、遺構相互の重複部分の界面は必ずしも明瞭に認められなかった。

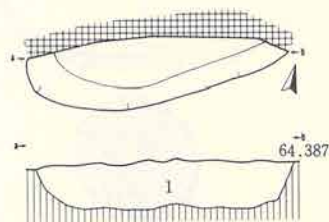
遺物は、埋土中の上部から下部にかけて散見されるが、28号溝跡との界面付近によって比較的大きな破片が検出されている。住居跡埋没後の土壌作用等による遺物の移動も充分に考慮され、すべてが埋没当初からの本住居跡に伴う遺物であるかどうか判断は難しい。

住居としての存続年代は不明であるが、埋土中に灰白色火山灰を含まない点と出土遺物から、その廃絶の時期をⅢ-1～2期と考えておきたい。

23号住居跡（第55図、写真図版17）

本住居跡は、南西隅のごく一部が発掘区域内で検出されている。規模・形態とも不明である。埋土は区分することができず、短期間の自然堆積であったと考えられる。

この付近において、遺構検出面は当時の地山面よりわずかに下がっていると考えられる。そのことは、特に68号土坑の検出状態が、わずかに上部が削平されその内部より遺物が出土していることから考えられる。従って、本住居



層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒色(10R2/1)	シルト	粘性あり

第55図 23号住居跡平面図
および埋土断面図
(S = 1/60)

23号住居跡観察表

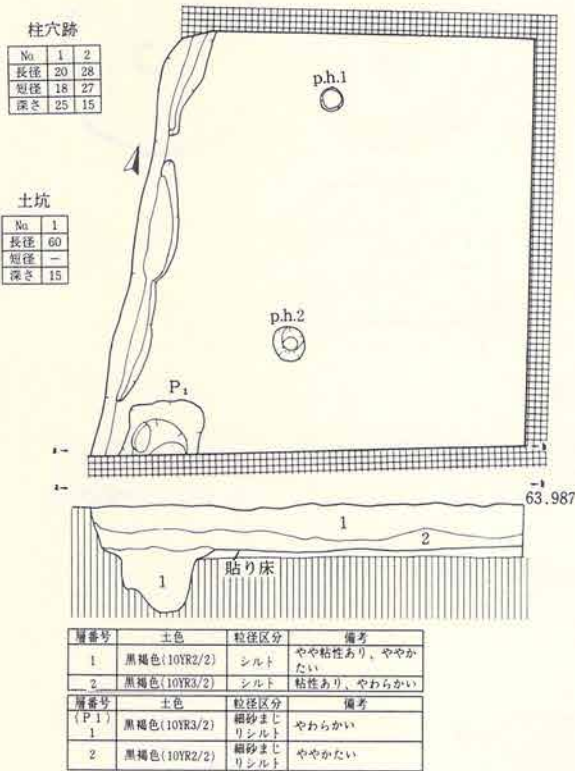
重複	壁	床	カマド		柱穴	周溝	その他
			本体	煙道			
なし	II層を壁面として いる。たち上がり は明瞭であるが、 ややゆるやかであ る。	II層を床面として いる。比較的やわ らかい。平坦であ る。	不明	不明	不明	なし	部分的な検出で 不明の点が多い

跡の壁高もやや低くなっていると考えられる。

壁面がややゆるやかなたち上がりを見せることは、この付近の地山が非常に粘性なく崩れやすいことと無関係ではないと思われる。

住居としての存続年代は不明である。埋土中より土師器片が1点出土しているが、時期不明である。埋土の状態は平安期のものと類似する。

24号住居跡（第56～58図、写真図版17，54）



第56図 24号住居跡平面図および埋土断面図
(S = 1/60)

本住居跡は、全体の70%程度発掘区域内で検出されていると考えられる。ただし、規模・形態については不明であり、検出された柱穴跡からわずかに推測できるだけである。

埋土は2層に区分されるが界面には著しい時間的断絶を示すような現象は認められない。遺物の出土状況が、埋土上方1層からのものは少なく、ほとんどが下方の2層からのものであるため、この間にやや時間の経過があったか、あるいは埋土1層の流入に伴う遺物の混入がほとんどなく、後世の埋土1層と2層間の遺物の移動が少なかったと考えられるが、前記の理由で後者を取りたい。ただし、遺物自体は小片がほとんどで、本来住居跡に伴ったものはほとんどなく、埋土2層の流入によってもたらされたと考えられよう。

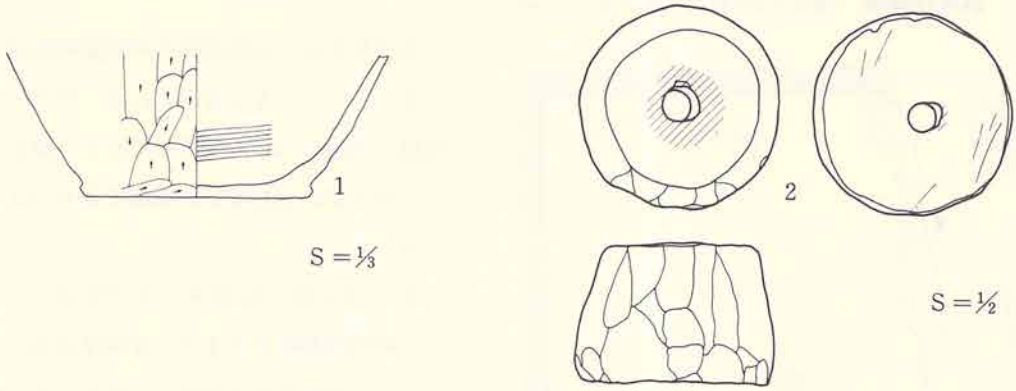
24号住居跡観察表

重複	壁	床	カマド		柱穴	周溝	その他
			本体	煙道			
なし	II層を壁面としている。たち上りは急で、明瞭である。	II層を掘り込んで、貼り床されている。厚さ10cm程度、平坦である。全体的にややかたい。	不明	不明	西側に1対認められる。他に小坑等は検出されていない。	西壁に沿って認められる。幅10～20cm、深さ5cm前後である。	土坑が1基認められている。この土坑は、住居跡堆積以前に独自に堆積している。埋土には焼土粒が多少混在する。

住居跡に付属していた土坑の埋没は、明らかに住居跡の埋没と時間帯を異にしている。土坑は貼り床と同時あるいはその後掘り込まれたものであり、住居使用のある時期にその機能を果たしていたことは明らかである。一方、柱穴跡は住居跡と埋土が共通し、その埋没時期が両者ほぼ同時であったことを示している。

床面が全体に堅いところから、土間として踏み固められていたと考えられる。掘り方上面はそれに比してはるかにやわらかい。

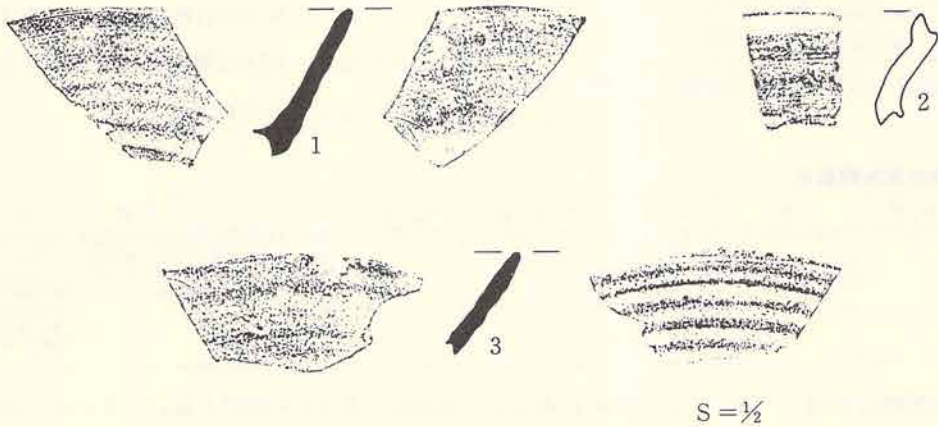
住居としての存続年代は不明であるが、その廃絶の時期は出土遺物より判断するとIII-1～2期であると考えられる。



(遺物観察表)

実測図	写真	登録番号	種類	器種形式	径量			外面調整			内面調整			形成	切り離し	分類	その他
					口縁径	底径	器高	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部				
57-1	54-19	24J-54	H	鉢	—	8.5	—	—	k	k	—	n	n	非ロクロ	—	—	—
57-2	54-22	24J-59	土製	紡錘車	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	側面ケズリ

第57図 24号住居跡内出土遺物



第58図 24号住居跡内出土遺物

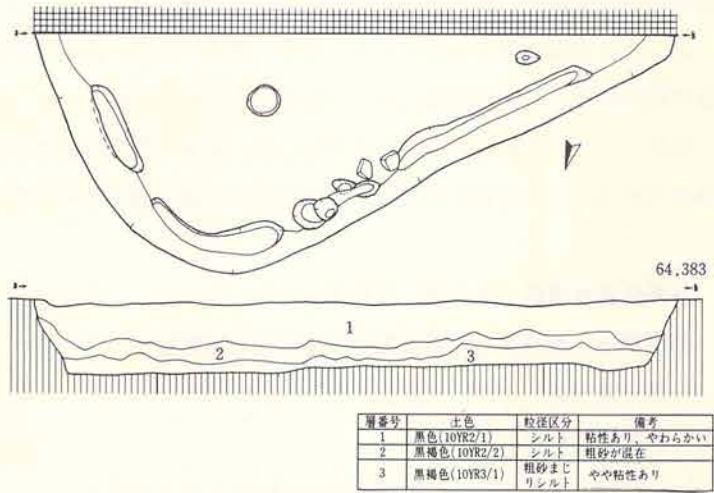
25号住居跡 (第59~61図、写真図版18、55)

本住居跡は、北側の一部約20%から発掘区域内で検出されたのみである。26号住居状遺構・27号住居跡と重複するが、本住居跡が新しく壁面等は破壊されていない。

埋土は3層に区分されるが、漸移的でしかも自然堆積であると考えられるところから、埋没

に要する時間はそれほど長くなかったと考えられる。本住居跡の場合、掘り込みがこの付近の他の住居跡に比して深いが、埋没時間の長短とどのような相関関係があるか明らかにできなかった。

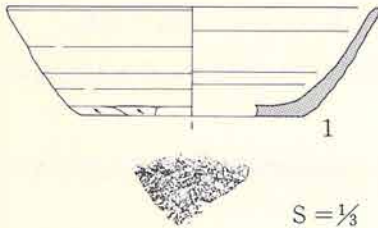
遺物は埋土の1～3層全体に亘って少量出土する。ほとんどが小片であり、わずかに土師器甕の



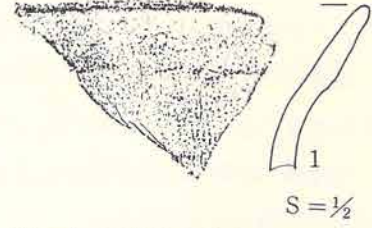
第59図 25号住居跡平面図および埋土断面図 (S = 1/60)

25号住居跡観察表

重複	壁	床	カマド		柱穴	周溝	その他
			本体	煙道			
26号住居跡→ 27号住居跡→	II層を壁面とする。たらしがりはゆるやかである。	II層中に貼り床されている。平坦である。全体的にかたい。	不明	不明	明確に柱穴跡と認められるものはない。床面上に見られる小坑は、浅い落ち窪み状のものである。	部分的に途切れながら認められる。幅10～15cm、深さ5～8cmである。	特になし



第60図 25号住居跡内出土遺物



第61図 25号住居跡内出土遺物

(土器観察表)

実測図	写真	登録番号	種類	器種形式	環量			外面調整			内面調整			形成	切り離し	分類	その他
					口縁径	底径	器高	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部				
60-1	55-1	25J-52	A	杯	14.7	8.7	4.3	-	-	-	-	-	-	ロクロ		4	セズリ

やや大形の破片が2層から3層にかけて出土している。このような遺物出土のあり方は、出土遺物が住居跡に伴ったものである場合、原位置を相当程度移動したものであるが、もしくはその大部分が埋土とともに流入したものであることを示している。

住居跡に付属している周溝の埋土は、住居跡の埋土と共通し両者の埋没がほぼ同時であったことを示しているが、床面上の柱穴状の小坑は埋土がそれらと異なり、柱穴跡と仮定すれば住居廃

絶時にはすでにその機能が失われていたものと解される。

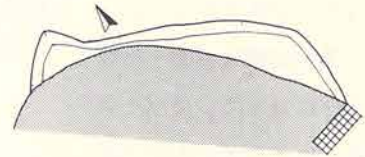
貼り床は床面ほぼ全体に及んでいるが、周溝・小坑の部分はそれがなされず、周溝・小坑が住居構築時ないしそれ以後につくられたことを示している。

住居としての存続年代は明らかでないが、26号・27号住居跡がほぼ埋没した後の構築であり、廃絶の時期は出土遺物から判断すると国分寺下層式期～Ⅲ-1期であると考えられる。

26号住居状遺構（第62図、写真図版18）

本遺構は、他遺跡との重複関係により、北東壁に近いごく一部が検出されただけである。しかも壁が多少歪んでおり、全体的な形態も不明である。

この付近は他の遺構の遺存状態が良好であることを考えると、ほぼ当時の地山面と遺構確認面が同レベルであると



第62図 26号住居状遺構平面図
($S = \frac{1}{60}$)

層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒褐色(10YR2/2)	シルト	やや粘性あり

26号住居状遺構観察表

重複	壁	床	カマド		柱穴	周溝	その他
			本体	煙道			
→25号住居跡	Ⅱ層を壁面としている。たち上がりゆるやかであるが、明瞭である。	Ⅱ層を床面としている。ごく一部しか検出されていないが、かたい面は見られない。	不明	不明	不明	認められない	平面形状は竪穴住居跡と類似しているが、床面の状態などから竪穴住居状遺構とする。

考えられる。従って、本遺構は本来掘り込みの浅いものであったことが理解される。

遺物は出土していない。埋土の状態から、本遺構の埋没はごく短期間に行われたものと考えられる。自然堆積か人為的なものか不明である。

本遺構の存続年代は不明であるが、廃絶の時期は25号住居跡構築時期からそれほどさかのぼらない時期と考えられる。

27号住居跡（第63、64図、写真図版18、55）

本住居跡は80%程度が発掘調査区域内にあったと考えられるが、他遺構との重複関係により南東壁等が破壊されている。しかし、その規模・形態は残存部分よりおおよそ知ることができる。

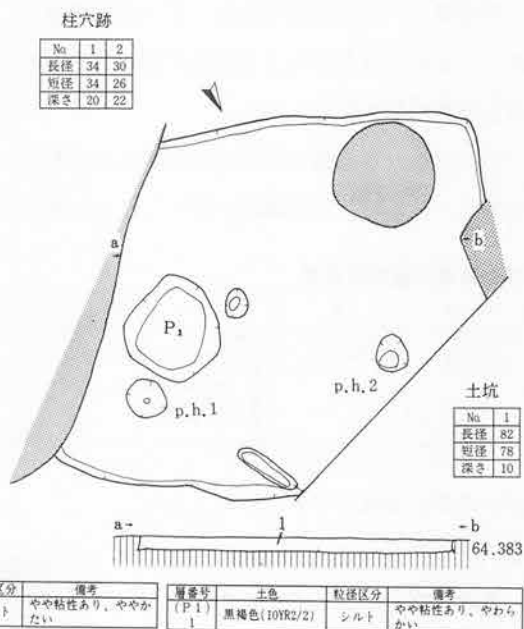
埋土は住居跡の掘り込みが浅いためか区分されず、埋没が短期間に行われたことを示している。自然堆積であると考えられる。

付属する柱穴跡・土坑は、埋土が住居跡と同様であることから、住居跡廃絶時において機能していたと考えられる。床面は全体的にやわらかく、堅く踏み固められたような形跡は認められなかった。板敷き等が考えられるであろう。

カマドの存在が明らかでないが、本来構築されなかったものであるのか破壊によって消滅し

たか不明である。カマドの存在を示すような遺物等は一切ない。

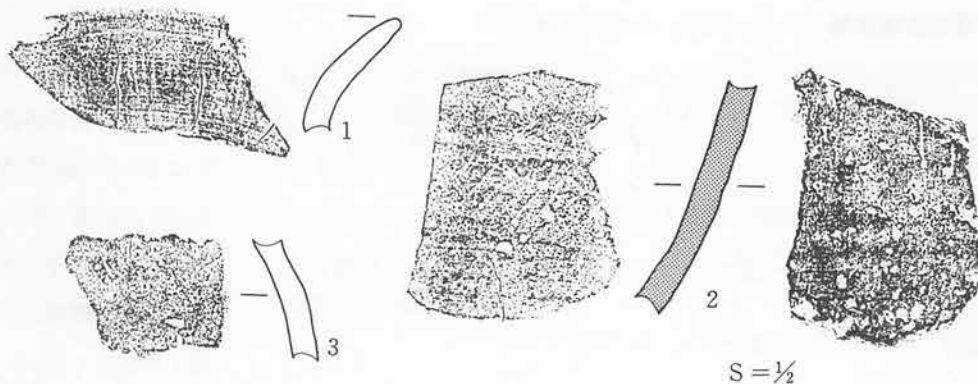
住居としての存続年代は不明である。26号住居状遺構との新旧関係も不明である。25号住居跡・57号土坑構築以前にはほぼ埋没が完了している。さらに出土遺物からもその廃絶の時期は国分寺下層式期～Ⅲ-1期であると考えられる。



第63 27号住居跡平面図 (S = 1/60)

27号住居跡観察表

重複	壁	床	カマド		柱穴	周溝	その他
			本体	煙道			
→25号住居跡 →57号土坑	II層を壁面としている。東壁の立ち上がりは明瞭であったが、西壁は部分的に不明瞭であった。25号住居跡と重複する箇所では破壊されている。	II層を床面としている。かたい面は見られない。平坦である。床面部分の地山が粘性に富んでいる。	不明	不明	床面中央やや東寄りに2個検出された。規模はほとんど同じである。埋土は住居跡と同質。	部分的に溝状の掘り込みが見られるが、方向が周溝とは異なっている。	床面南側に土坑が1基検出されている。埋土は住居跡埋土と同一である。浅皿状を呈する。

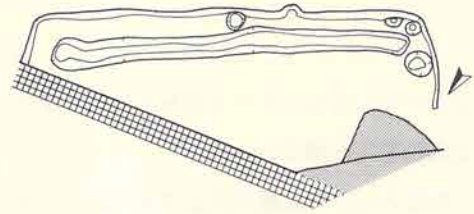


第64図 27号住居跡内出土遺物

28号住居状遺構 (第65, 66図、写真図版18, 55)

本遺構は、28号溝跡等によって一部が破壊されているが、残存部分より全体の規模・形態をある程度推測できる。

埋土から、本遺構の埋没が短期間に行われたと考えられるが、28号溝跡が掘り込まれた時点



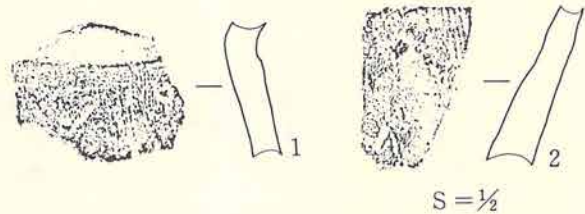
第65図 28号住居状遺構平面図 (S = 1/60)

28号住居状遺構観察表

重複	壁	床	カマド		柱穴	周溝	その他
			本体	煙道			
29号住居跡→ →54号土坑 →28号溝跡	II層を壁面とする。壁は浅く、た ら上がりもゆるや かである。	II層を床面として いる。凹凸がある。 全体的にややかた い。28号溝跡と重 複する部分はゆる やかに下がってい る。	不明	不明	不明	南東壁に沿って周 溝が認められる。 しかし、埋土が遺 構のものとは異な り、堆積の時間差 が考えられる。	床面、壁面の形 状から、整穴住 居状遺構として 扱う。

では完全に埋没していたと考えられる。

遺物は埋土中より小片となつてごく少量出土しているが、埋没の際に外部から流入したものであると考えられる。非常に散漫な状態で出土する。

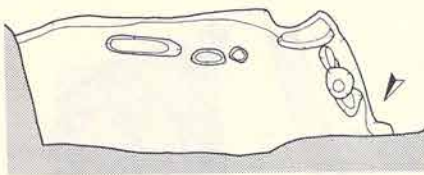


第66図 28号住居跡内出土遺物

床面がやや堅いところから、遺構の使用期間中多少踏み固められていた可能性がある。

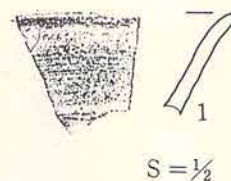
本遺構の上・下限はそれぞれ明確ではないが、28号溝跡廃絶以前のIII-1~2期には機能が失われていたと考えられる。

29号住居状遺構 (第67, 68図、写真図版18, 55)



層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	やわらかい

第67図 29号住居状遺構平面図 (S = 1/60)



第68図 29号住居状遺構内出土遺物

本遺構は、28号住居状遺構・28号溝跡等によって破壊され、その形態もやや不整な形であると考えられるか推定は困難である。

埋没はおそらく短期間に行われたものと考えられる。埋没の途中で時間的断絶があったことも認められない。また、28号住居状遺構との界面も明確ではなく、両者の時間的近接も考えな

29号住居状遺構観察表

重複	壁	床	カマド		柱穴	周溝	その他
			本体	煙道			
→28号住居跡 →28号溝跡	II層を壁面としている。一部不規則な形状を呈する。28号住居跡と重複する部分では、壁が破壊されている。	II層を床面としている。凹凸に富み、かたい。28号溝跡と重複する部分では、ゆるやかに下がる。	不明	不明	明確に柱穴跡として認められるものはない。壁面に沿って、2・3小坑が認められる。	一部溝状の掘り込みが見られるが、柱穴とは認定できない。	壁面、床面の形状から整穴住居状遺構として扱う。

ければならない。

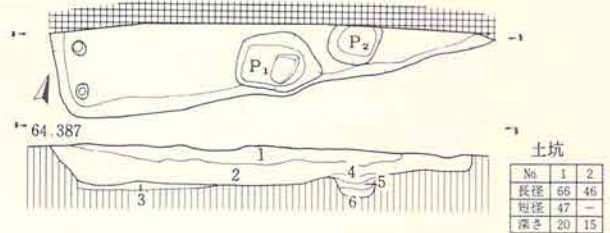
28号溝跡掘り込み時には完全に埋没を終了していたようである。遺物は、小片がわずかに出土するのみで、おそらく埋土に伴って流入したものであろう。

遺構の廃絶時期は他遺構との関係からⅢ-1～2期と考えられる。

30号住居跡（第69～71図、写真図版19、55）

本住居跡は、南側10%程度が発掘調査区域内において検出されている。全体の規模・形態は不明である。埋土は4層に区分されるが、その界面は漸移的で住居跡埋没の過程において著しい時間的中断があったとは考えられず、しかも短期間に埋没したと考えられる。

遺物は住居跡埋土中から少量、P1埋土中からやや多量に出土している。遺物の出土状態はやや散漫であるが住居跡埋



層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒褐色(10YR2/2)	シルト	やや粘性あり
2	黒色(10YR2/1)	シルト	炭化物粒含む、粘性あり
3	黒褐色(10YR3/2)	細砂	
4	黒色(10YR2/1)	シルト	粘性あり
5	黒色(10YR2/1)	シルト	P1埋土
6	黒褐色(10YR3/2)	細砂	P1埋土、やや粘性あり

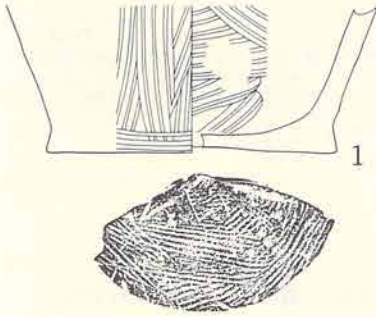
第69図 30号住居跡平面図および埋土断面図
(S = 1/60)

30号住居跡観察表

重複	壁	床	カマド		柱穴	周溝	その他
			本体	煙道			
なし	II層を壁面としている。たが上がりは明瞭である。	II層中に貼り床されている。平坦である。全体的にややかたい。	不明	不明	西壁に沿って小坑が検出されたが、柱穴跡としては底面が不規則で浅い。	認められない	土坑が2基検出されている。P1は貼り床面から掘り込まれ、埋土中に人頭大の礫を伴っている。P2は一部貼り床され埋土も住居跡とはやや異っている。いずれもやや深い皿状である。

土の下層に偏在する。このため、遺物は本来住居跡に伴っていたものが後世に若干その位置を移動したの多いと考えられる。また、P1埋土中のものは、本来的なものではなく住居跡の埋没と同時にP1が埋没し、その際に混入したものであると考えられる。

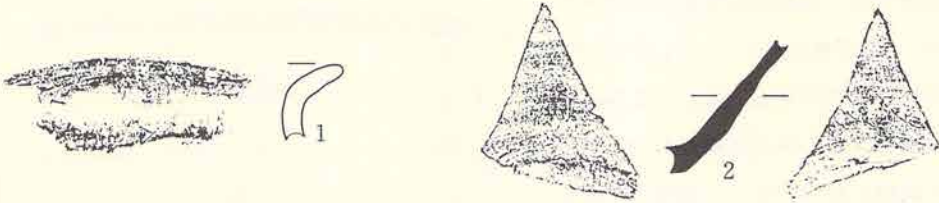
一方、P2は埋土が住居跡・P1とは異なり、しかも一部に貼り床されていることから、住居



第70図 30号住居跡内出土遺物(1) (S = 1/5)

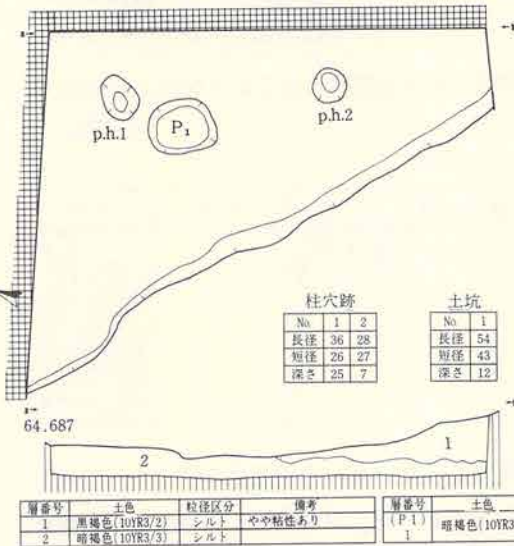
(土器観察表)

実測図	写真	登録番号	種類	器種形式	採量			外面調整			内面調整			形成	切り離し	分類	その他
					口縁径	底径	器高	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部				
70-1	55-13	30J-18	H	鉢	-	11.5	-	-	h→n	h	-	h	h	非フクロ	-	P1	



第71図 30号住居跡内出土遺物(2) S = 1/2

31号住居跡 (第72~74図、写真図版19, 56)



第72図 31号住居跡平面図および埋土断面図 (S = 1/60)

廃絶時においてはすでに機能を失って埋没していたものと考えられる。ただし、貼り床が部分的なものであることから、住居跡構築時にすでに埋没していたとは考えがたい。

住居としての存続年代は不明であるが、その廃絶の時期は出土遺物から判断するとⅢ-2期であると考えられる。

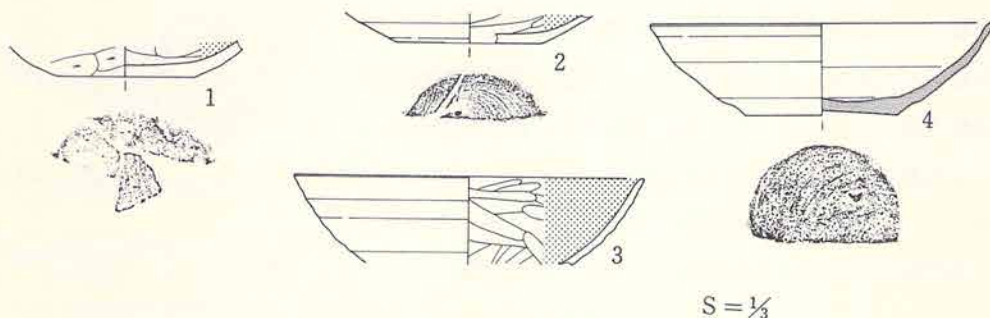
本住居跡は西側の約30%が発掘調査区域内で検出されている。しかし、全体の規模・形態は不明である。

埋土は2層に区分されるが、両者の堆積には相当の時間差があると考えられる。しかし、1層は部分的に堆積しているのみであり、2層によって住居跡が完全に埋没した後何らかの要因によって表面の一部が削平され、その窪地に堆積したものと考えられる。

遺物は2層の上部から下部全般に散在するが、いずれも小片であり、他に大きな破片

31号住居跡観察表

重複	壁	床	カマド		柱穴	周溝	その他
			本体	煙道			
なし	耳層を壁面としている。たち上かりは明瞭である。北西部分で一部後世の擾乱をうけている。	耳層を床面としている。特にかたい部分は認められない。	不明	不明	2個認められる。埋土はいずれも住居跡2層と同様である。	南側に一部周溝状の溝跡が検出されている。幅10cm、深さ5cm。	土坑が1基検出されている。浅皿状の土坑である。埋土は住居跡2層と同様である。



第73図 31号住居跡内出土遺物

(土器観察表)

実測図	写真	登録番号	種類	器種形式	容量			外面調整			内面調整			形成	切り離し	分類	その他
					口縁径	底径	器高	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部				
73-1		31J-24	H	杯	—	5.4	—	—	k	皿+k	—	m	m	非ロクロ	糸切り	e	ケズリ
73-2		31J-25	H	杯	—	5.9	—	—	—	—	m	m	m	ロクロ	糸切り	d	
73-3	56-1	31J-26	H	杯	13.9	—	—	—	—	—	m	m	m	ロクロ	—	—	
73-4	56-2	31J-27	A	杯	13.5	6.0	3.6	—	—	—	—	—	—	ロクロ	糸切り	4	



第74図 31号住居跡内出土遺物

が存在しておらず、しかも後世の著しい土壌攪乱作用も認められないところから、住居跡の堆積土とともに混入したものであると考えられる。

土坑および柱穴跡の埋土がいずれも住居跡の埋土2層と共通するところから、それらの付属遺構は住居跡の廃絶時に同時に廃絶されたものと考えられる。周溝状の施設も同様である。

住居としての存続年代は不明であるが、床面があまり堅く踏みしめられた形跡のないことから、もし板敷き等の施設がなかったとすれば、比較的短い時間と考えなければならない。その

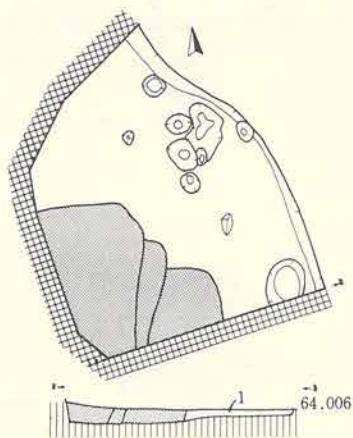
廃絶の年代は出土遺物から判断するとⅢ-2期であろう。

32号住居跡 (第75, 76図、写真図版20, 56)

本住居跡は、東側の半分程度が検出されていると考えられるが、他遺構によって床面中央部が破壊されている。全体の規模・形態は不明である。

遺構の重複が多いため、埋土の状態が不安定で、明確に本住居跡の当初の埋土と認定することが困難である。数度に亘る遺構の掘り込みによって、重複関係のない部分の埋土についても混乱が生じていると考えられる。

従って、出土遺物も、住居跡に本来伴っていたものの、住居跡の埋没とともに混入したもの、他の遺構

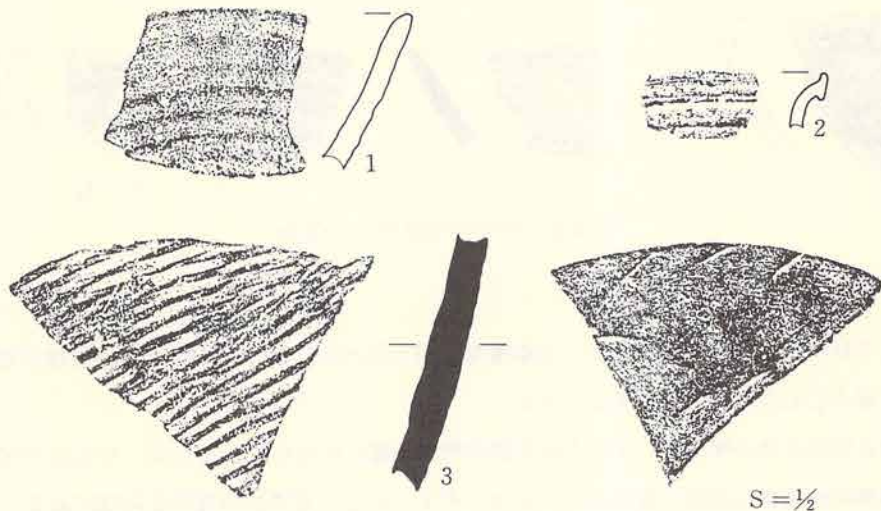


層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒褐色(10YR2/2)	シルト	粘性あり、炭化物粒、焼土粒を含む

第75図 32号住居跡平面図および埋土断面図 (S = 1/60)

32号住居跡観察表

重複	壁	床	カマド		柱穴	周溝	その他
			本体	煙道			
33号住居跡→ →35号住居跡 →66号土坑 →69号土坑	耳層を壁面として いる。たち上がり は明瞭である。33 号住居跡と重複す る部分では、ゆる やかなたち上がり となる。	耳層中に貼り床さ れている。全体的 にやわらかく、平 坦である。35号住 居跡、66号土坑、 69号土坑と重複す る部分では破壊さ れている。	不明	不明	いくつかの不規則 な小坑が検出され ているが、確実に 柱穴跡として認め うるものは存在し ない。	認められない	特になし



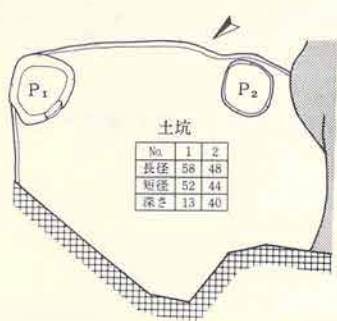
第76号 32号住居跡内出土遺物

の構築の際に混入したもの、他の遺構の堆積の際に本住居跡に同時に埋没したものの区別はほとんど不可能であった。

一部の貼り床は、こうした要因によって失われたものと考えられ、貼り床は当初床面ほぼ全面になされていたものと考えられる。

住居としての存続年代は不明であるが、廃絶の時期は出土遺物・他遺構との関係からⅢ-2期であろうと考えられる。

33号住居跡（第77～79図、写真図版20、56）



層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	礫(径3cm)混在。炭化物粒含む
層番号	土色	粒径区分	備考
(P1) 1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	やわらかい。炭化物混在

第77図 33号住居跡平面図
($S = \frac{1}{60}$)

本住居跡は全体の80%以上が発掘区域内に存在していたと考えられるが、南西部分は32号住居跡によって破壊されている。しかし、規模・形態をおおよそ推定できる。

埋土から判断すると、本住居跡は廃絶後短期間で埋没したのと考えられる。P1・P2の埋没も、住居跡の埋没と同時に進行したと考えられる。P1に包含されていた遺物は、廃絶当時のもので、埋没時に混入したものではないと思われる。

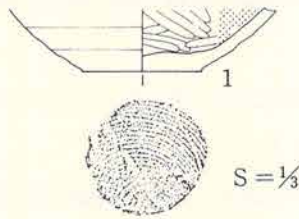
床面は大小の礫が露出しているが、貼り床されていた様子はない。床面が充分固められているところから、当時の床面そのものであろう。

33号住居跡観察表

重複	壁	床	カマド		柱穴	周溝	その他
			本体	煙道			
→32号住居跡	II層を壁面としている。たち上りは明瞭である。32号住居跡と重複する部分では破壊される。	II層を床面としている。大小の礫が床面に露出している。かたい。	不明	不明	認められない	認められない	土坑が2基検出されている。P1は皿状で、埋土中に土器を含んでいる。P2は円筒状を呈する。埋土は共通する。



第78図 33号住居跡内出土遺物(1)



第79図 33号住居跡内出土遺物(2)

(土器観察表)

実測図	写真	登録番号	種類	器種形式	容量			外面調整			内面調整			形成	切り離し	分類	その他
					口縁径	底径	器高	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部				
78-1	56-16	33J-22	H	杯	-	47	-	-	-	-	-	m	m	ロクロ	糸切り	d	

住居としての存続年代は不明であるが、廃絶の年代は出土遺物と他遺構との新旧関係からⅢ-2期であると考えられる。

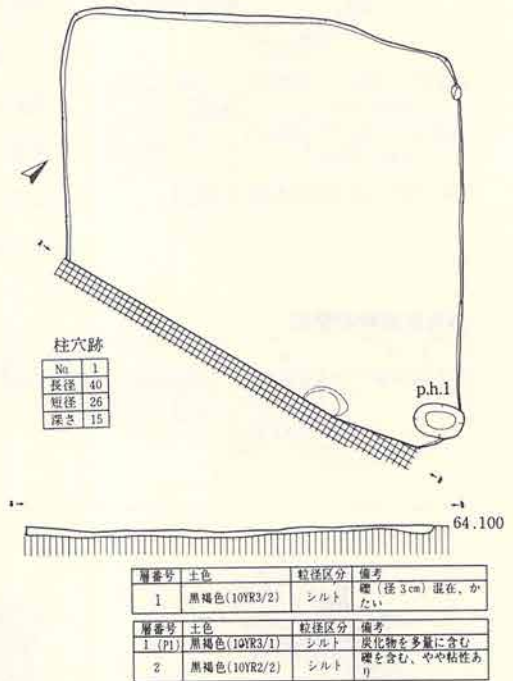
34号住居跡 (第80, 81図、写真図版20, 57)

本住居跡は、全体の70%以上発掘区域内で検出されており、その規模・形態をおおまかに知ることができる。

埋土は区分することが不可能で、比較的短期間のしかも時間的に連続した堆積過程が考えられる。壁の残存はわずかであるが、この付近で大幅に当時の地表面が削平されている事実はなく、本来の壁高に近いものと考えられる。

南東隅の焼土は、住居廃絶後の二次的なものや住居消失に伴うようなものではなく、床面の一部をその直上に形成されているところから、カマドに伴うものではないかと考えられる。

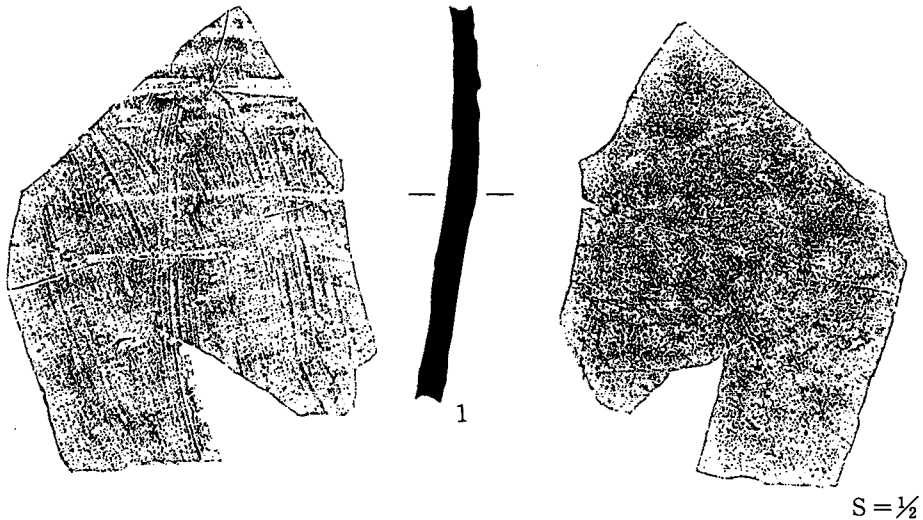
床面は礫が露出しているが貼り床されている形跡はなく、また相当程度堅いという点から、当時の床面であったと考えられる。柱穴跡は床面直上から掘り込まれているものの、埋土がやややわらかく、住居跡の堆積と多少時間差があると考えられよう。



第80図 34号住居跡平面図
および埋土断面図 (S=1/60)

34号住居跡観察表

重複	壁	床	カマド		柱穴	周溝	その他
			本体	煙道			
なし	II層を壁面とする。たち上がりは明瞭であるが、西壁は確認が困難であった。	II層を床面とする。大小の礫が面上に露出する。全体的にかたい。	不明。ただし住居南東壁付近東寄りにわずかに焼土が形成されており、カマドに伴う施設を予想される。	不明	南東隅に1個検出されている。埋土は、住居跡埋土よりさらにやわらかい。	認められない	特になし



第81図 34号住居跡内出土遺物

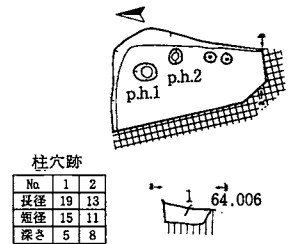
遺物は埋土中・床面直上から少量出土するが、いずれも小片で、埋土が部分的に後世の攪乱を伴っていることから判断すると、後世の混入であろう。

住居としての存続年代は不明であるが、その廃絶の年代は出土遺物から判断するとⅢ-2期であると考えられる。

35号住居状遺構 (第82, 83図、写真図版57)

本遺構は、北東隅のごく一部が検出されたのみである。全体の規模・形態については不明である。

32号住居跡・69号土坑と重複し、それらより新しいと考えられるが、発掘調査の過程では埋土断面図で確認できたのみであった。両遺構の埋土と本遺構の埋土間の相違は微かなものであり、本遺構の構築・使用・廃絶に際してかなりの土壌攪乱を伴っていると考えられる。本遺構自体の堆積は、短期間で連続的



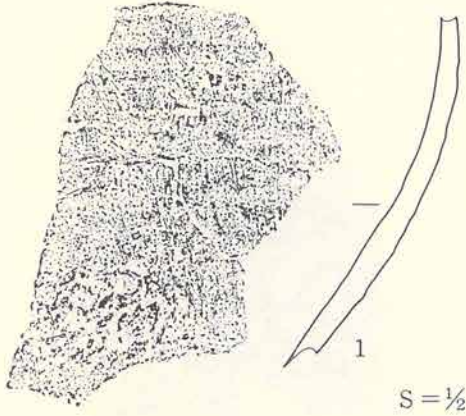
No.	1	2
長径	19	13
短径	15	11
深さ	5	8

層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒褐色(10TR2/2)	シルト	粘性あり、かたい

第82図 35号住居状遺構平面図および埋土断面図 (S = 1/60)

35号住居状遺構観察表

重複	壁	床	カマド		柱穴	周溝	その他
			本体	煙道			
32号住居跡→ 69号土坑→	II層を壁面とする。たち上がりは明瞭である。	II層中に貼り床されている。厚さ10cm前後。全体的にやわらかい。	不明	不明	東壁に沿って小坑が4個めぐっている。これらのうち、規模の大きいものを柱穴跡と考虑しておく。周溝の可能性もある。	左記の柱穴の一部が周溝を形成する可能性がある。	特になし



第83図 35号住居状遺構内出土遺物

に行われていると考えられる。

柱穴跡および柱穴状の小坑はいずれも遺構と同様の埋土で、ほぼ同時期の廃絶を示している。

本遺構の存続年代は不明であるが、他遺構特に32号住居跡との新旧関係から判断すると、その構築から廃絶はIII-2期であると考えられる。

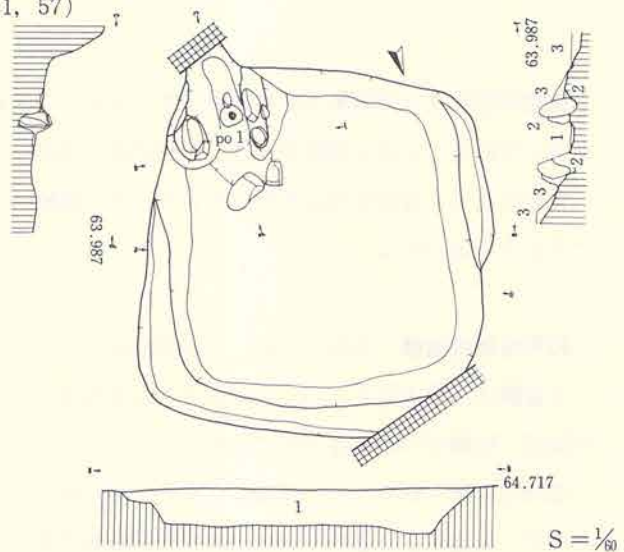
37号住居跡 (第84~86図、写真図版21, 57)

本住居跡は、ほぼその全体を発掘区域内で検出している。

埋土は単一層であり、しかも遺物を多量に含んでいる。小片・大片が混在する。さらに、遺構確認面の上部に厚さ20cmの遺物包含層が形成されており、この部分での遺物の出土状況も住居跡埋土中における遺物出土状況と類似する。両者は同一個体のものを含んでいる。

これらから、住居跡埋土と遺物包

含層は、同時にしかもきわめて短期間に形成されたものと判断される。埋



層番号	土色	粒径区分	備考	層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒褐色(10YR2/2)	礫まじりシルト	礫は角がとれている。かたい	(カマド) 1	赤褐色(5YR4/6)	シルト	焼土、やわらかい
				2	黒褐色(10YR2/2)	シルト	軸石の掘り方
				3	黒褐色(10YR2/2)	シルト	焼土、炭化物粒混在

第84図 37号住居跡平面図および埋土等断面図

37号住居跡観察表

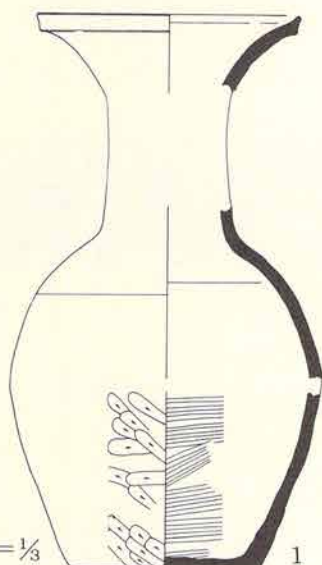
重複	壁	床	カマド		柱穴	周溝	その他
			本体	煙道			
37号溝跡→	II層を壁面としている。たち上がりは明瞭である。	II層を床面としている。平坦である。かたい。	南側に構築されている。燃焼部はわずかに張り込まれ、焼土が形成されている。両端は、細長い礎が2〜3個づつ地山に埋め込まれ、根元が地山の土でかためられて構築される。天井部は、やや偏平な礎が使用される。支脚に珪が使用され、その付近にも焼土が堆積している。	南側に延びる。煙道は短い。燃焼部からやや急に煙出し部へと続く。	認められない	認められない	南東壁から北東壁にかけての壁の外側と、西壁の外側に張り出しが見られる。また、遺構確認面の上部に多量の土器を含んだ包含層が形成されていた。

土と包含層の土質そのものも共通し、かなり堅くしまっているため、後世の攪乱ではなく、円礫を多量に含むことから旧河道からの洪水現象による埋没が考慮されうるであろう。遺物出土量と土量の多さは、この土砂の堆積作用が大がかりなものであったことを示している。

一方、本住居跡床面直上にはほぼ原形をとどめている坏が検出された。しかし、その他の日常生活用土器は原位置をとどめていると考えられるようなものではなく、もし、突然の住居跡廃絶を考慮するとすれば、その埋没の際に大幅な遺物の移動を考えなければならない。本住居跡に本来伴った土器が少量であったことは、包含層・埋土からの遺物の出土量から考えると蓋然性に乏しいだろう。

住居跡掘り込み面で確認された東西のわずかの張り出しは、偶然的なものあるいは後世の攪乱等によるものではなく、本住居跡の構造に由来するものであろう。柱穴跡をまったく伴っていない点、規模がきわめて小さい点なども同時に考慮する必要がある。

本住居跡の存続年代については不明であるが、埋土中および遺物包含層中の土器片は、その使用の年代と廃絶の年代を良く表していると考えられる。それからIII-2期に使用・廃絶された住居跡と考えることが可能であろう。

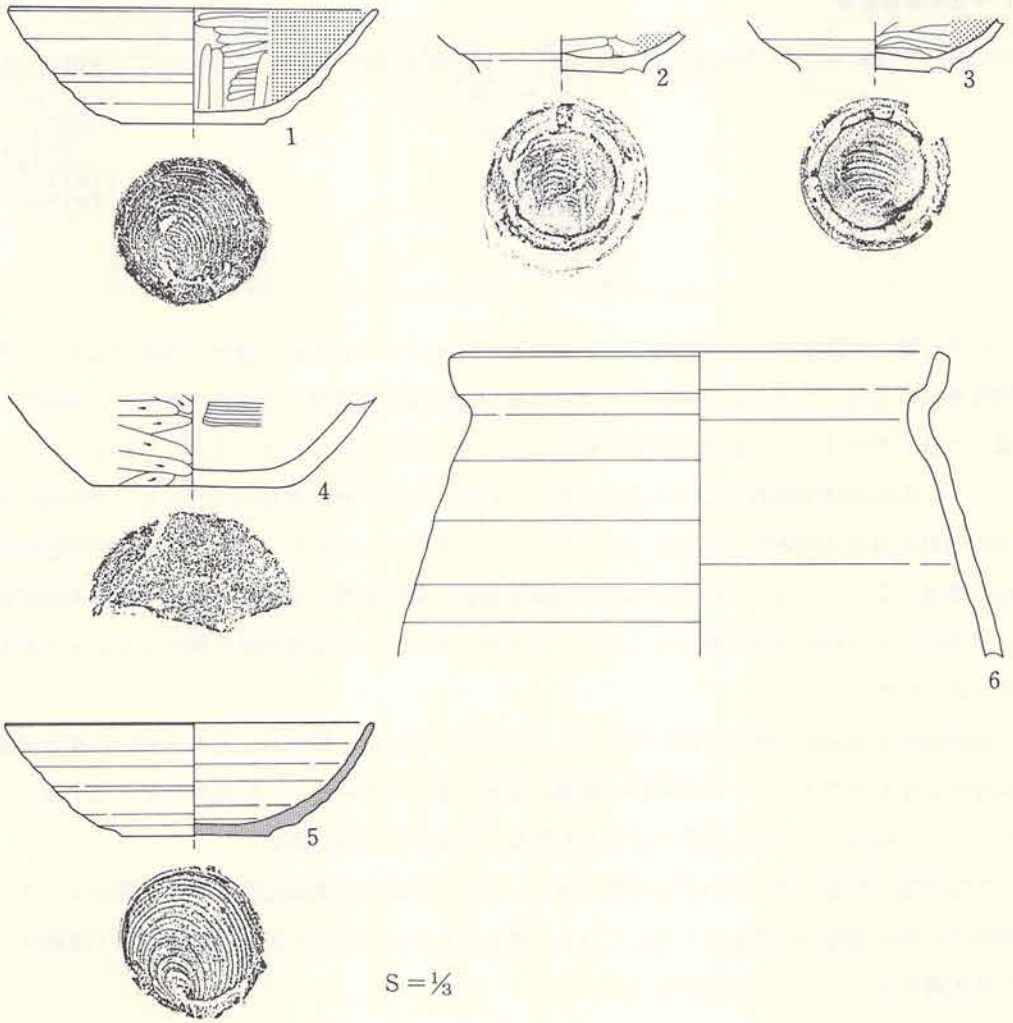


(土器観察表)

実測図	写真	登録番号	種類	器種形式	法量		
					口縁径	底径	器高
86-1	57-12	37J-77	S	長頸壺	13.9	8.6	—

外面調整			内面調整			形成	切り離し	分類	その他
口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部				
—	k	k	—	n	n	ロクロ			カマド付近

第85図 37号住居跡内出土遺物(1)



(土器観察表)

実測図	写真	登録番号	種類	器種形式	坯量			外面調整			内面調整			形成	切り離し	分類	その他
					口縁径	底径	器高	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部				
85-1		37J-70	H	环	14.7	5.9	4.6	-	-	-	m	m	m	ロクロ	糸切り	d	P. 1
85-2	57-11	37J-71	H	高台付环	-	6.6	-	-	-	-	-	m	m	ロクロ	糸切り		床面直上
85-3	57-10	37J-72	H	高台付环	-	6.0	-	-	-	-	-	m	m	ロクロ	糸切り		カマド付近
85-4		37J-75	H	钵	-	7.8	-	-	k	k	-	m	n	ロクロ	糸切り		
85-5	57-8	37J-74	A	环	14.6	5.8	4.5	-	-	-	-	n	-	ロクロ	糸切り	4	カマド脇
85-6	57-9	37J-76	H	钵	20.1	-	-	-	-	-	-	-	-	ロクロ	糸切り	4	(中)

第86図 37号住居跡内出土遺物(2)

表 2 竪穴住居跡属性表

No.	検出区	平面形態	規模				床面形状	柱穴	周溝	付属土坑	カマド形状	煙道方向	煙道長	その他
			長径 -m ²	短径 -m ²	壁高 0.3m ²	床面積 -m ²								
1	B11	隅丸方形	-	-	0.1	45.8	貼り床	?	なし	?	-	-	- m	
2	F 4	方形	6.8	6.8	0.1	45.8	貼り床	4	あり	なし	-	NW	1.6	
3	F 6	方形	3.0	(2.7)	0.03	(8.1)	地山	なし	なし	なし	-	N	1.0	
4	B15	方形	(2.5)	(2.6)	0.23	(6.5)	一部 貼り床	なし	なし	なし	-	NW	0.8	
5	B15	不整形	-	(3.0)	0.05	(9.0)	地山?	?	なし	なし	-	NE?	0.8?	
6	F 8	方形	(3.6)	(3.5)	0.18	(12.6)	貼り床	(1)	なし	?	-	-	-	
7	F25	隅丸方形	3.7	(3.7)	0.3	(13.7)	一部 貼り床	なし	一部	あり(2)?	-	NWW	1.6	
8	F32	方形	-	(5.7)	0.3	(32.5)	貼り床	(4)?	一部	あり	-	-	-	
9	F35	隅丸方形	-	(4.9)	0.3	(24.0)	一部 貼り床	?	あり	あり(2)	-	-	-	
10	F23	方形	-	-	0.05	-	凹凸	なし	なし	あり?	-	-	-	住居状
11	F27	隅丸方形	-	1.6	0.2	-	貼り床	なし	あり	なし	-	-	-	住居状
12	F29	隅丸方形	-	2.2	0.07	(4.8)	地山	なし	なし	なし	-	-	-	住居状
13	F30	方形	3.8	4.0	0.3	15.2	貼り床	3?	なし	あり	-	NW	1.6	
14	K94	不整形	-	3.9	0.15	(15.2)	貼り床	(2)	なし	?	-	-	-	
15	Q107	不整形	2.8	2.8	0.07	7.8	地山	なし	なし	あり	-	-	-	
16	P115	方形	(5.0)	5.2	0.15	(26.0)	地山	(2)	なし	あり?	-	-	-	
18	O114	不整形	2.4~ 2.8	2.6	0.07	6.8	凹凸	3?	なし	なし	なし	-	-	
19	M107	隅丸方形	-	-	0.16	-	一部 貼り床	(4)?	一部	なし	-	-	-	
20	S113	隅丸方形?	(3.6)	-	0.2	(12.8)	凹凸	?	一部?	なし	-	-	-	住居状
21	L107	方形	-	-	0.05	-	地山	?	なし	あり?	-	-	-	住居状
22	S114	隅丸方形?	(4.2)	-	0.25	(17.6)	地山	4?	一部	あり	-	-	-	
23	U119	隅丸方形	-	-	0.3	-	地山	?	なし	なし?	-	-	-	
24	O102	隅丸方形	-	-	0.27	-	貼り床	(4)?	あり	あり	-	-	-	
25	R110	隅丸方形	5.0	-	0.5	(25.0)	地山	(4)?	あり	?	-	-	-	
26	R109	不整形	-	2.6	0.05	(6.8)	地山	?	なし	?	-	-	-	住居状
27	R110	不整形	(3.3)	(3.1)	0.07	(10.2)	地山	(3)	なし	あり	-	-	-	住居状
28	R111	方形	3.4	-	0.03	(11.6)	凹凸	なし	一部?	なし	-	-	-	住居状
29	S112	不整形	(2.8)	-	0.03	(7.8)	凹凸	なし	一部?	なし	-	-	-	住居状
30	S113	方形	-	3.6	0.25	-	貼り床	(1)	なし	あり(2)	-	-	-	
31	T117	方形?	-	-	0.2	-	地山	(2)	一部	あり?	-	-	-	
32	X124	不整形	-	-	0.1	-	貼り床	?	なし	?	-	-	-	
33	W124	方形	(2.3)	-	0.03	(5.3)	貼り床	なし	なし	あり(2)	-	-	-	
34	W122	方形	3.3	3.2	0.05	10.6	地山	1	なし	なし	-	SE?	-	
35	X125	方形	-	-	0.2	-	貼り床	?	あり?	?	-	-	-	住居状
37	Y128	隅丸方形	2.9	2.7	0.25	7.8	地山	なし	なし	なし	-	S	0.3	

()内は推定

2. 土坑

1号土坑（第87図、写真図版22, 58）

埋没後、6号溝跡によって一部破壊されている。出土遺物は6号溝の掘り込みとは無関係のものであると判断され、本土坑の廃絶は国分寺下層式期と考えられる。

3号土坑（第87図、写真図版22, 58）

埋没後、8号溝跡によって一部破壊されている。出土遺物は8号溝の掘り込みとは無関係と考えられるが、後世の混入の可能性もある。廃絶の時期は特定しがたいが、埋土の状態から国分寺下層式期と考えられる。

4号土坑（第87図、写真図版22, 58）

埋没後、6号溝跡によって一部破壊されている。出土遺物から、その廃絶の時期は国分寺下層式期と考えられるが、埋土の状態がやや不安定で、後世混入の可能性もある。

5号土坑（第87図、写真図版22, 58）

3号溝跡が完全に埋没した後掘り込まれている。埋土の状態からごく新しい時期の廃絶と考えられ、出土遺物は遺構の廃絶時期を示していない。

6号土坑（第87図、写真図版58）

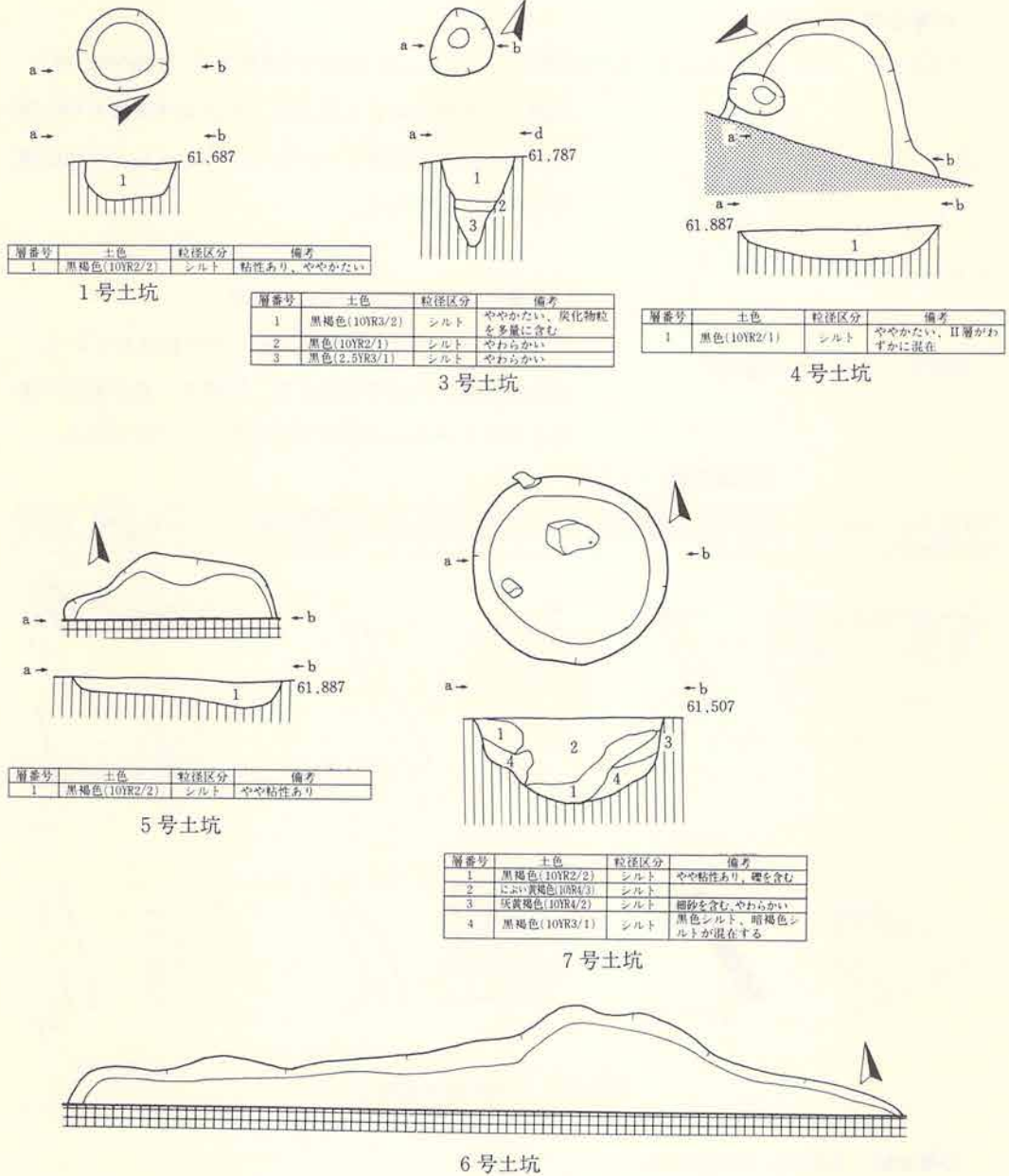
埋土の状態からごく新しい時期の廃絶と考えられる。出土遺物の製作・使用・廃棄は、遺構の廃絶よりずっと以前である。

7号土坑（第87図、写真図版22, 58）

埋土の状態は、やや時間差を有する自然堆積であることを示している。出土遺物から国分寺下層式期の廃絶であると考えられ、2号住居跡との位置関係からそれに付属する土坑であった可能性を有している。

8号土坑（第90図、写真図版23）

本土坑の堆没は、3号住居構築以前である。その時間差がどの程度であるか明らかではない。埋土の観察では自然堆積であるか人為的なものであるかを判断できなかった。



第87図 1～7号土坑 平面図および埋土断面図 (S = 1/40)

9号土坑 (第90図、写真図版23, 58)

5号住居跡・4号住居跡の埋没後に掘り込まれたと考えられるが、発掘調査の過程では5号住居跡床面で検出した。底面に沿って厚さ5cm程度炭化材が堆積している。焼土は見られない。出土遺物から、その廃絶の時期は国分寺下層式期と考えられる。

10号土坑（第90図）

11号土坑・16号土坑によって一部が破壊されている。両土坑との遺構界面（feature interface）が明瞭であることから、本土坑埋没後やや時間をおいて両者が堆積していると考えられる。具体的構築年代は不明である。



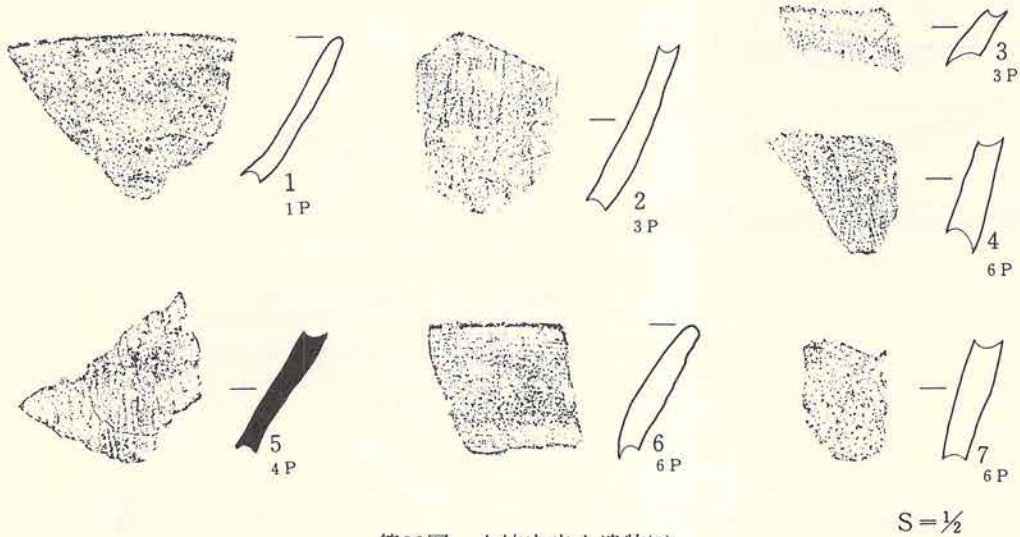
第88図 土坑内出土遺物(1)

11号土坑（第90図、写真図版23）

10号土坑・16号土坑埋積の後に掘り込まれている。具体的構築年代は不明である。埋積後、多少後世の攪乱をうけていることが埋土の状態よりうかがえる。

土器観察表

実測図	写真	登録番号	種類	器種形式	杯量			外面調整			内面調整			形成	切り廻し	分類	その他
					口縁径	底径	器高	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部				
88-1	58-1	1P-1	H	杯	-	-	-	-	k→m	k	-	m	m	非ロクロ	-		



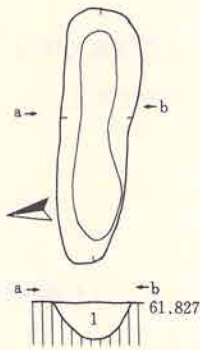
第89図 土坑内出土遺物(2)

12号土坑（第90図、写真図版23）

埋土の状態から、比較的短期間に埋没したと考えられる。出土遺物がなく、遺構の年代は不明である。

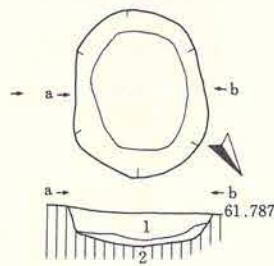
13号土坑（第90図、写真図版24, 58）

西側の一部が用水路部分と重なり検出が不可能であった。埋土中に焼土・炭化材が少量含まれている。自然堆積である。出土遺物からその廃絶の時期は国分寺下層式期と考えられる。



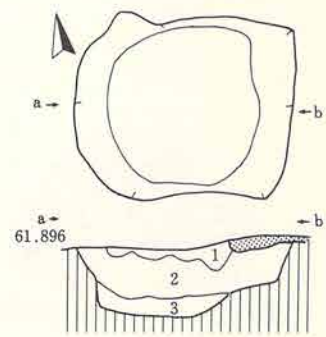
層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒褐色(10YR2/2)	シルト	やや粘性あり

8号土坑



層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	粘性あり、焼土粒、炭化粒を含む
2	黒褐色(10YR1.7/1)	シルト	炭化物粒多い

9号土坑

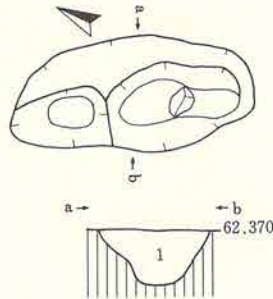


層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	ややかたい、やや粘性あり
2	黒褐色(10YR3/1)	シルト	一部褐色となる、粘性あり
3	黒褐色(10YR2/2)	シルト	褐色シルト混在、やや粘性あり

10号土坑

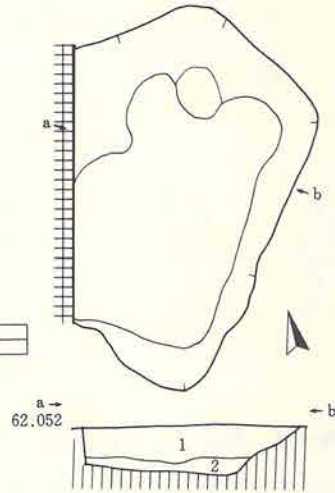


11号土坑



層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒色(10YR 2/1)	シルト	粘性あり、かたい

12号土坑



層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒褐色(10YR2/2)	シルト	ややかたい、粘性あり
2	黒褐色(10YR3/2)	シルト	ややかたい、粘性あり

13号土坑

第90図 8～13号土坑 平面図および埋土断面図 (S=1/40)

14号土坑 (第93図、写真図版24, 58)

溝状の土坑である。17号土坑埋没後に掘り込まれている。出土遺物は埋土中からのもので、後世の混入の可能性もあるが、遺構の廃絶時期をそれによって判断すると国分寺下層式期となる。



1
13P



S = 1/2

第91図 土坑内出土遺物(3)

16号土坑 (第93図、写真図版24, 58)

10号土坑より新しく、11号土坑掘り込み以前に埋没している。遺構の年代は出土遺物がなく不明である。

17号土坑 (第93図、写真図版25)

14号土坑によって大部分破壊されている。出土遺物がなく、遺構の具体的な年代は不明である。

(土器観察表)

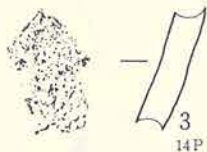
実測図	写真	登録番号	種類	器種形式	環量			外面調整			内面調整			形成	切り離し	分類	その他
					口縁径	底径	器高	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部				
91-1	58-14	13P-13	H	环	13.1	9.5	4.5	n	n	n	n	n	n	非ロクロ	-		



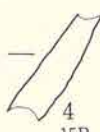
1
9P



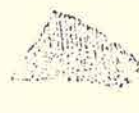
2
13P



3
14P



4
15P



5
15P

S = 1/2

第92図 土坑内出土遺物(4)

18号土坑 (第93図、写真図版25, 59)

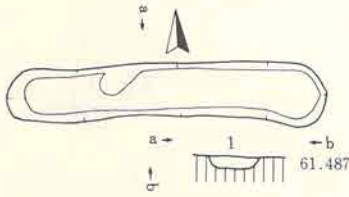
北側の一部が発掘調査区域外にかかり検出が不可能であった。埋土の状態から、自然堆積であると考えられるが、後世の攪乱によってか壁面がやや不安定であった。埋土中の遺物は小片で、時期決定が不可能である。

19号土坑 (第93図、写真図版25)

北側の一部が発掘調査区域外にかかり検出が不可能であった。埋土中に人頭大の礫が検出されているが、この付近で地山に礫を含んでいないため人為的配石であろうと考えられる。出土遺物がなく、時期法定はできない。

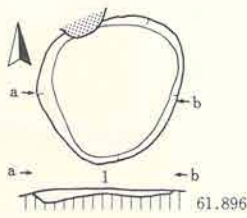
20号土坑 (第93図、写真図版26)

21号土坑と壁を接している。埋土の観察から廃絶後短期間に埋没したものと考えられる。出



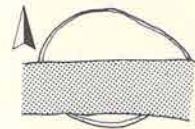
層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒褐色(2.5YR3/1)	シルト	粘性あり、やわらかい

14号土坑

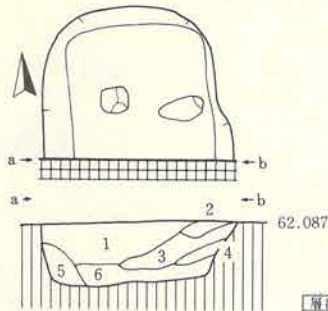


層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒色(10YR2/1)	シルト	炭化物粒を多く含む

16号土坑

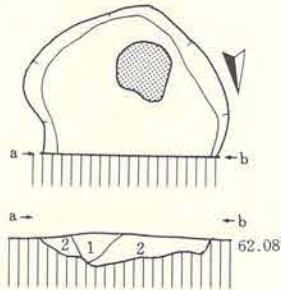


17号土坑



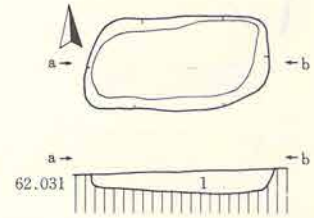
層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒褐色(10YR3/1)	シルト	やや粘性あり、酸化鉄を含む
2	黒色(10YR2/1)	シルト	かない
3	黒色(10YR2/1)	シルト	H層をブロック状に含む
4	黒色(10YR2/1)	シルト	粘性あり
5	黒褐色(10YR3/1)	シルト	やわらかいH層が混在
6	灰黄褐色(10R4/2)	シルト	

18号土坑



層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	やや粘性あり、酸化鉄含む
2	黒色(10YR2/1)	シルト	H層、炭化物を含む

19号土坑



層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒褐色(10YR3/1)	シルト	かない、H層が部分的に混在

20号土坑

第93図 14~20号土坑 平面図および埋土断面図 (S=1/40)

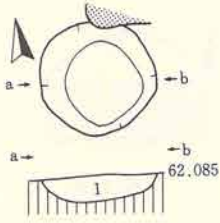
土遺物はない。

21号土坑 (第94図、写真図版26、59)

20号土坑と壁を接している。埋土は安定した状態で堆積している。埋土中の遺物より廃絶時期はⅢ-2期であろうと考えられる。

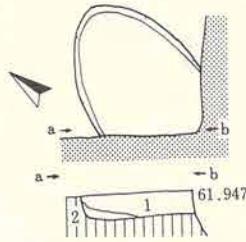
22号土坑 (第94図、写真図版26)

4号住居跡によって南側半分が破壊されている。本土坑埋没後、他遺構の構築によって多少埋土が乱れた可能性がある。出土遺物はないが、4号住居構築は本土坑埋没からさほど離れない時間帯になされていると思われる。



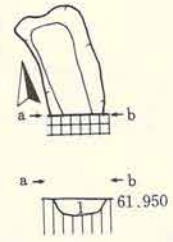
層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒褐色(10YR3/1)	シルト	II層が部分的に混在、炭化物(径2~3mm)を含む

21号土坑



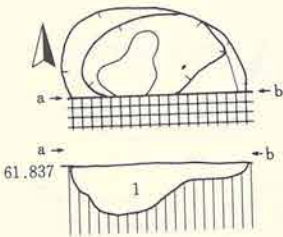
層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	ややかたい
2	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	やや粘性があり、やわらかい

22号土坑



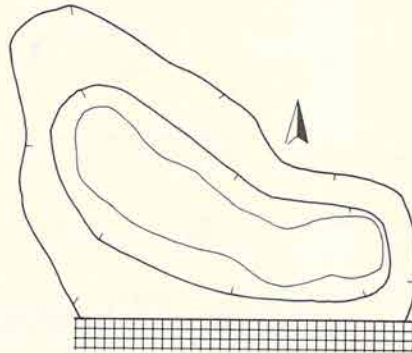
層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒褐色(10YR2/2)	シルト	やや粘性あり

23号土坑

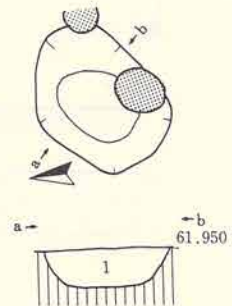


層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒褐色(10YR2/2)	シルト	やや粘性あり

24号土坑

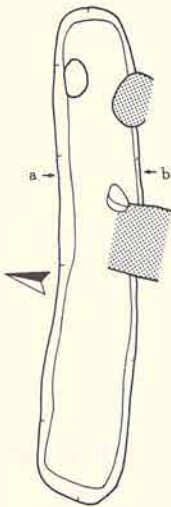


25号土坑



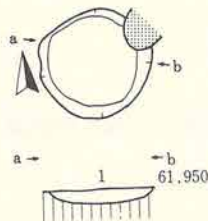
層番号	土色	粒径区分	備考
1	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	II層をブロック状に含む

26号土坑



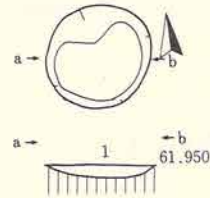
層番号	土色	粒径区分	備考
2	12.5Y黄褐色(10YR4/3)	シルト	物粒混在

27号土坑



層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒褐色(10YR2/2)	シルト	やや粘性あり

28号土坑



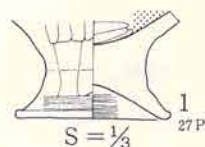
層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒褐色(10YR2/2)	シルト	やや粘性あり

29号土坑

第94図 21~29号土坑 平面図および埋土断面図 (S=1/40)

23号土坑（第94図、写真図版26）

溝状の土坑である。南側の一部が発掘調査区域外に出ている。壁面が安定しないのは、堆積に要した時間が長かったか、もしくは後世の攪乱によるものと考えられる。出土遺物なく、遺構の年代は決定できない。



第95図 土坑内出土遺物(5)

(土器観察表)

実測図	写真	登録番号	種類	器種形式	容量			外面調整			内面調整			形成	切り離し	分類	その他
					口縁径	底径	器高	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部				
95-1	59-5	26P-1	H	高台付杯	-	5.2	-	-	m	n	-	m	m	非ロクロ	-		

24号土坑（第94図、写真図版27、59）

本遺構の南側の一部が発掘調査区域外に出るため検出されていない。埋土中より少量の炭化物が出土している。堆積状況から、流れ込みの可能性が大きい。遺物は出土しておらず、時期決定できない。

25号土坑（第94図）

堆積の状態が不安定で、後世に相当攪乱をうけている可能性がある。出土遺物はなく、時期決定はできない。

26号土坑（第94図、写真図版27）

28号土坑・48号土坑の埋没の跡に掘り込まれている。しかし、当初の壁面が不安定であったためか、埋土が相互に動いている形跡がある。出土遺物はない。

27号土坑（第94図、第95図、写真図版27・59）

溝状の土坑である。12号溝跡によって一部破壊されている。底面付近で人頭大の礫が検出されているが、後世の攪乱でもなく、埋没の際の流れ込みでもない。人為的な配石か、12号溝掘り込みの際に流れ込んだもののいずれかであろう。出土遺物から、その廃絶の時期は国分寺下層式期であると考えられる。

28号土坑（第94図、写真図版27）

26号土坑掘り込み以前に埋没していたと考えられる。堆積の状態が不安定であるのは26号土

坑の掘り込みに際しての埋土の動きによるものであろう。出土遺物がなく、遺構の時期決定が不可能であった。

29号土坑（第94図、写真図版27）

堆積状態は安定している。遺物の出土等がなく、それによる時期決定は困難であるが、埋土の諸特徴が21号土坑と共通することから、それに近い廃絶の年代が考えられよう。

30号土坑（第96図、写真図版28、59）

南側部分が発掘調査区域内において検出されている。埋没はごく短期間に行われたと考えられる。壁面はやわらかく、やや不安定である。後世の著しい攪乱は認められない。埋土中の出土遺物から、廃絶の時期は国分寺下層式期と考えられる。

31号土坑（第96図、写真図版28、59）

北側部分が発掘調査区域内において検出されている。東西の長さから判断すると、やや大きな土坑となると推測される。埋土中～底面にかけてブロック状の焼土および炭化物がやや多量に検出された。いずれも埋没の際の流れ込みではなく、焼土は現地性で炭化物は土坑廃絶の際に第一次に投げ込まれた様相を呈する。底面東側のやや高くなる部分は、住居跡床面のような堅い面ではない。埋土中から土師器の小片が出土するが、それによる時期決定は不可能であった。

32号土坑（第96図、写真図版28）

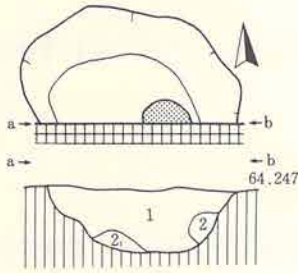
掘り込みが浅く、壁面・底面が埋土から漸移的な土色変化を示している。一部は発掘区域外に続き検出されていない。出土遺物はない。

33号土坑（第96図、写真図版28）

一部は発掘区域外に出るため検出されていない。埋土と壁面・底面の土壌が漸移的变化を示している。出土遺物はない。

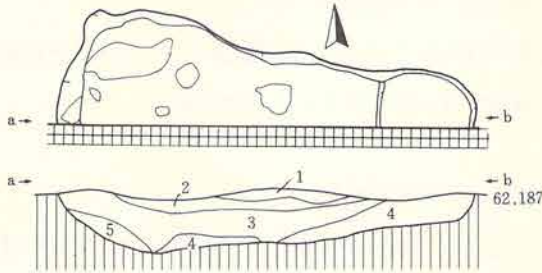
34号土坑（第96図、写真図版28）

埋土から壁面・底面にかけての土壌変化が漸移的である。遺物が出土していないため、時期決定はできない。



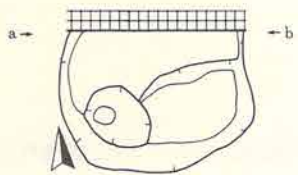
層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒色(10YR2/2)	シルト	黒褐色土が混在、炭化物を多量に含む、ややかたい
2	黒褐色(10YR5/3)	シルト	やわらかい、やや粘性あり

30号土坑



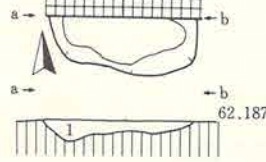
層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	かたい、やや粘性あり
2	黒褐色(10YR3/2)	シルト	焼土粒(径1mm)を含む
3	黒褐色(10YR2/2)	シルト	やや粘性あり、ややかたい、II層をブロック状に含む
4	黒色(10YR2/1)	シルト	粘性あり、かたい
5	赤褐色(10YR4/6)	シルト	焼土、炭化物粒が混在

31号土坑



層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	やや粘性あり、ややかたい

32号土坑

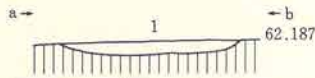


層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒褐色(10YR2/2)	シルト	やや粘性あり、ややかたい

33号土坑

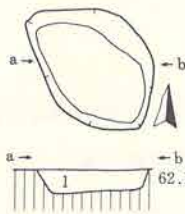


34号土坑



層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒褐色(10YR2/2)	シルト	やや粘性あり、ややかたい

35号土坑



層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒褐色(10YR2/2)	シルト	やや粘性あり、ややかたい

36号土坑



層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒色(2.5YR2/1)	シルト	やや粘性あり、やわらかい
2	黒褐色(10YR3/1)	シルト	やわらかい

37号土坑

第96図 30～37号土坑 平面図および埋土断面図 (S = 1/40)

35号土坑 (第96図、写真図版29)

一部は発掘調査区域外に出るため検出されなかった。遺物が出土しておらず、それによる時期決定はできない。

36号土坑（第96図、写真図版29、59）

埋没は短期間に行われている。出土遺物は小片で時期を特定できないが、古代のある時期のものである。後世の混入等ではないと考えられる。

37号土坑（第96図、写真図版29）

底面に沿って炭化材・焼土が存在した。埋没の際の流入や後世の混入物ではない。遺物は出土しておらず、廃絶時期等の決定は困難である。

39号土坑（第98図、写真図版30）

埋土から壁面・底面にかけて土壌が漸移的に変化を示している。後世の攪乱等の要因が考えられる。出土遺物はない。

41号土坑（第98図）

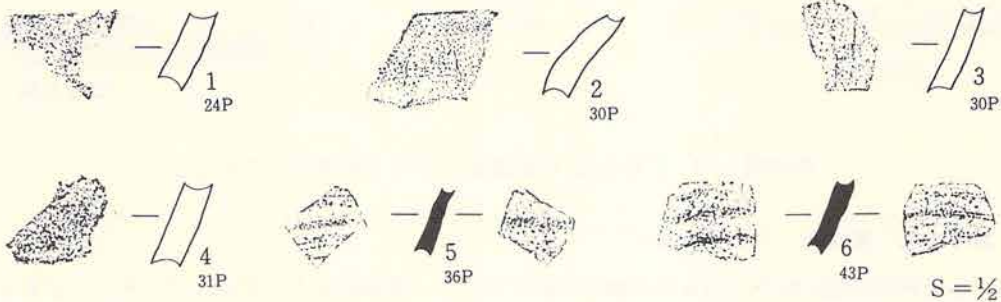
南側の一部が発掘調査区域内で検出されている。埋土から壁面・底面にかけての土壌変化が漸移的である。遺物は出土していない。

42号土坑（第98図、写真図版29、59）

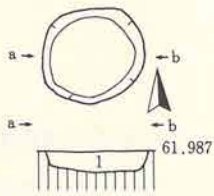
埋土の観察では、廃絶後の堆積状況を推定することが困難であった。埋土中より土師器片が少量出土しているが、時期決定はできなかった。

43号土坑（第98図、写真図版30、59）

堆積の状態は安定している。埋土中より須恵器片が出土しているが、小片のため時期決定は不可能である。埋土とともに流入した資料であろう。

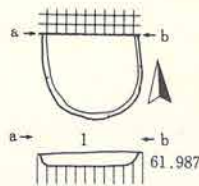


第97図 土坑内出土遺物(6)



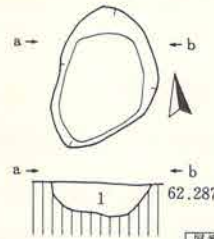
層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒褐色(10YR3/1)	シルト	粘性あり、やわらかい、炭化物粒混在

39号土坑



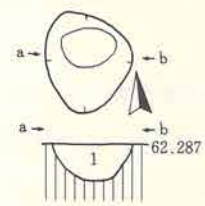
層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒褐色(10YR2/2)	シルト	やや粘性あり

41号土坑



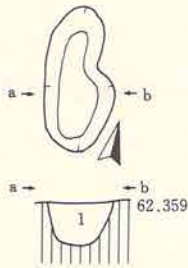
層番号	土色	粒径区分	備考
1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	かたい、炭化物を多量に含む

42号土坑



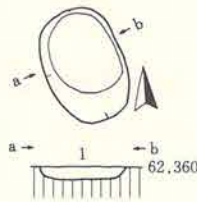
層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒褐色(10YR2/2)	シルト	やや粘性あり

43号土坑



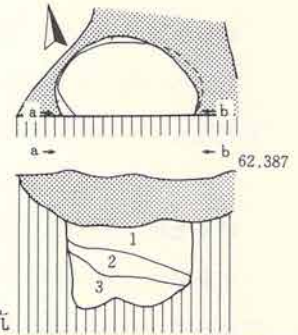
層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒色(10YR2/1)	シルト	粘性あり、やわらかい II層をブロック状に含む

44号土坑



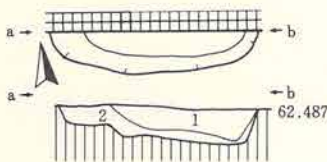
層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒褐色(10YR2/2)	シルト	やや粘性あり

45号土坑



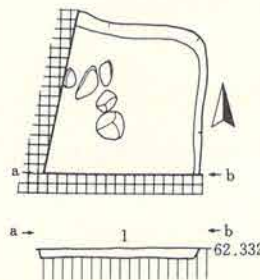
46号土坑

層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒褐色(10YR2/2)	シルト	II層をブロック状に含む、粘性あり、やわらかい
2	黒褐色(10YR2/2)	シルト	に深い黄褐色シルトが混在粘性あり、やわらかい
3	黒色(10YR2/1)	シルト	粘性あり、やわらかい



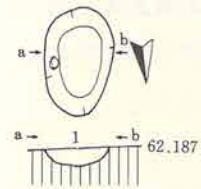
層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒褐色(10YR2/2)	シルト	粘性あり、やわらかい、炭化物粒多い
2	黒褐色(10YR3/2)	シルト	1よりさらにやわらかい

48号土坑



層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒褐色(10YR2/2)	シルト	やや粘性あり

49号土坑



50号土坑

第98図 39~50号土坑 平面図および埋土断面図 (S = 1/40)

44号土坑 (第98図)

12号住居状遺構の東南隅に掘り込まれている。埋土から壁面・底面への変化は漸米的である。出土遺物はなく時期決定は不可能である。

45号土坑 (第98図)

堆積の状態は安定している。比較的短期間の埋没を推測することができる。遺物の出土がな

く、遺構の時期決定は不可能である。

46号土坑（第98図、写真図版30）

23号溝跡の底面で検出された。南側は発掘調査区域外に出るため検出されていない。23号溝掘り込み時には、本土坑は完全に埋没していたと考えられる。埋土が区分されるが、埋没の過程で著しい中断があった様子はない。出土遺物はないが、埋土の性質は国分寺下層式期の他の遺構と共通する。

48号土坑（第98図、写真図版30）

南側の一部がわずかに検出されている。堆積の状態がやや不安定で、本土坑より新しい26号土坑掘り込みの際に多少それが乱れた可能性がある。出土遺物はない。

49号土坑（第98図、写真図版31）

北東隅の一部が確認されている。その形態から住居跡の可能性も有しているが、床面と認定できるような堅い面は存在していない。底面に配される礫は、この付近でⅢ層が一部露出していることから、埋没の際の流入かと考えられる。

50号土坑（第98図、写真図版31）

埋土の状態から、人為的な堆積であったと考えられる。出土遺物はなく、具体的な年代は不明である。

51号土坑（第99図、写真図版31）

15号住居跡貼り床下で検出されている。壁面・底面は安定している。出土遺物はなく、具体的な使用・廃絶の年代は不明である。

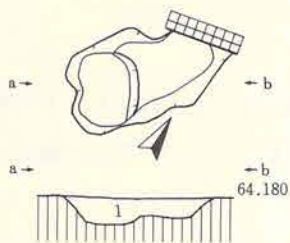
52号土坑（第99図、写真図版31, 59）

18号住居跡貼り床下で検出されている。その埋堆が18号住居構築からどの程度さかのぼるのかが不明であるが、埋土中の遺物は本土坑の廃絶・埋没に伴うものである。それから判断すると廃絶時期は平安時代Ⅲ-2期に近いと考えられる。

54号土坑（第99図、写真図版59）

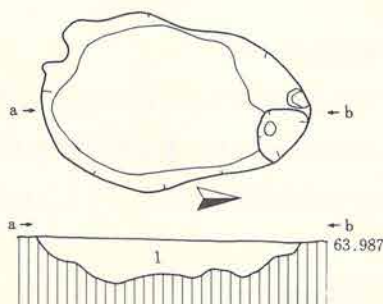
28号住居状遺構床面で形成され、北西部分は28号溝跡によって破壊されている。出土遺物は

小片で時期が不明であるが、他遺構との関係から本土坑の存続時期をⅢ-1~2期と考えることができる。



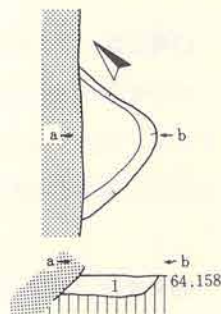
層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒褐色(10YR2/2)	シルト	やや粘性あり、ややかたい

51号土坑



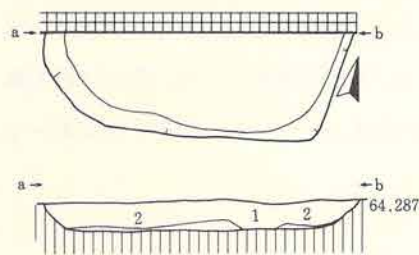
層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒褐色(10YR2/2)	シルト	やわらかい

52号土坑



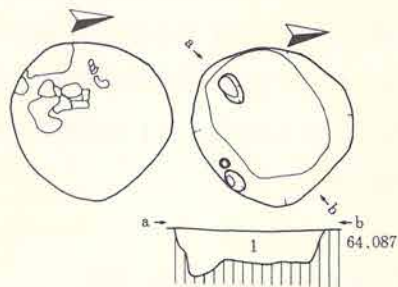
層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒褐色(10YR2/2)	シルト	やや粘性あり

54号土坑



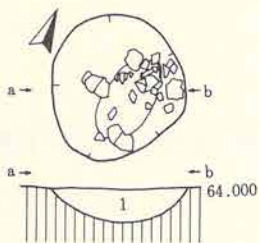
層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒褐色(10YR2/2)	シルト	やや粘性あり、ややかたい
2	黒褐色(10YR3/2)	シルト	粘性あり、ややかたい

56号土坑



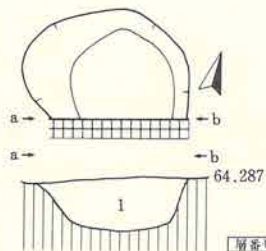
層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒褐色(10YR2/2)	シルト	ややかたい、やや粘性あり、炭化物粒多い

57号土坑



層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒色(10YR2/1)	シルト	粘性あり、やわらかい、炭化物粒多い

58号土坑



層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒褐色(10YR2/2)	シルト	礫(径1~3mm)混在、ややかたい

59号土坑

第99図 51~59号土坑 平面図および埋土断面図

56号土坑（第99図、写真図版32, 59）

27号住居跡と重複し、それより新しい。両者は埋土の諸特徴が大きく異なるが、遺構の界面はそれほど明瞭に把えることはできなかった。出土遺物と他遺構との重複関係から、その廃絶の時期をⅢ-1～2期と考えることができる。

57号土坑（第99図、写真図版32, 59）

27号住居跡埋土上面で検出されており、それが完全に埋堆した後に掘り込まれたものと判断される。底面からスラッグが確認された。焼土等の形成はまったく見られない。埋土の観察によれば、両者の底積にあまり時間差はないものと考えられる。

58号土坑（第99図、写真図版32, 60）

本土坑埋土中から多量の土器・陶器が出土している。それらは原形をとどめないものがほとんどであり、しかも一部を欠くことから、当初からすべて完形品を埋置したものではないと考えられる。しかし、埋土とともに流入したものではないと考えられるところから、完形品・非完形品を意図的に埋置したものと考えられる。ただし、土坑上部は多少後世に削平されている可能性がある。従って遺物は土坑廃絶時のものと考えられ、しかも絶対年代幅の限定される緑釉陶器が出土するところから、それが伝世等の作用をうけたものでないと仮定すればⅢ-2期の一括資料となろう。

59号土坑（第99図、写真図版33, 60）

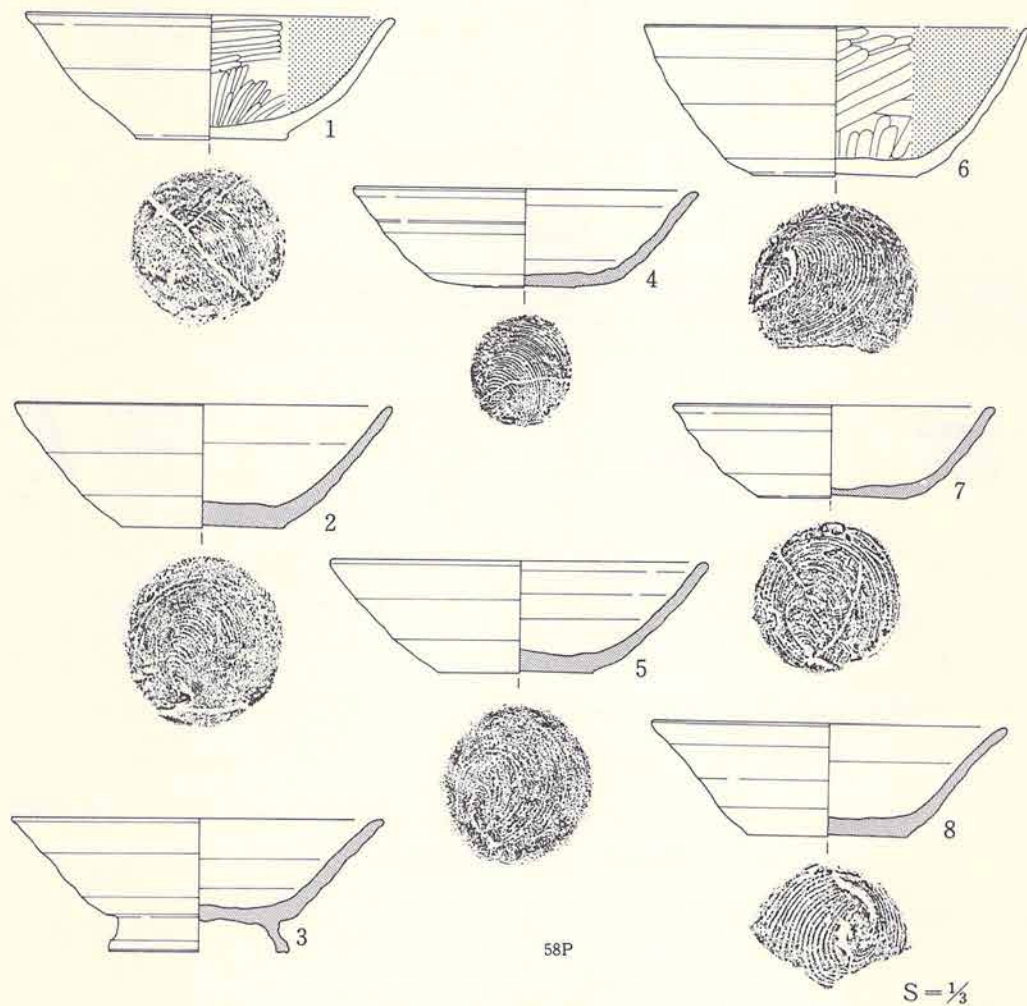
本土坑は、29号溝跡の埋土上面で検出されており、29号溝跡埋没後の掘り込みであると判断される。南側の一部は発掘調査区域外に出ており検出されていない。廃絶の年代は、出土遺物と他遺構との関係からⅢ-2期と考えられる。

60号土坑（第104図）

北側の一部が発掘調査区域内で検出されている。埋没後、後世の攪乱を相当うけている形跡がある。出土遺物はなく遺構の年代は不明である。

61号土坑（第104図、写真図版33, 60）

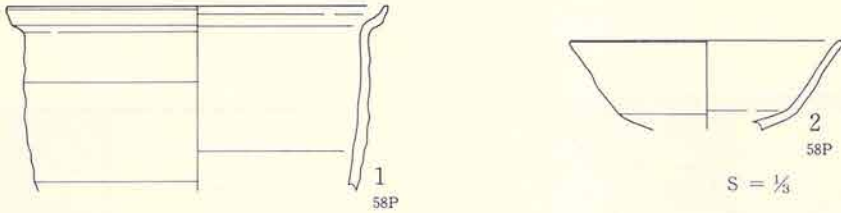
18号住居跡埋土上面で検出されている。29号溝跡とも壁を接しているが、新旧関係は不明である。埋土の状態から短期間の埋没であったと推測できる。出土遺物と他遺構との関係から、埋没時期はⅢ-2期であると考えられる。



(土器観察表)

実測図	写真	登録番号	種類	器種形式	口径			外面調整			内面調整			形成	切り離し	分類	その他
					口径	底径	器高	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部				
100-1	60-1	58P-20	H	杯	14.7	5.8	5.0	-	-	-	m	m	m	ロクロ	糸切り	d	
100-2	60-7	58P-23	A	杯	15.0	6.3	4.9	-	-	-	-	-	-	ロクロ	糸切り	4	
100-3	60-8	58P-25	A	杯	14.7	6.3	5.3	-	-	-	-	-	-	ロクロ	糸切り	4	
100-4	60-6	58P-24	A	高台付	13.7	4.0	3.9	-	-	-	-	-	-	ロクロ	糸切り	4	
100-5	60-3	58P-27	A	杯	15.7	6.1	4.4	-	-	-	-	-	-	ロクロ	糸切り	4	
100-6	60-4	58P-21	H	杯	15.3	6.5	5.9	-	-	-	m	m	m	ロクロ	糸切り	d	
100-7	60-2	58P-26	A	杯	12.8	5.9	3.7	-	-	-	-	-	-	ロクロ	糸切り	4	
100-8	60-9	58P-28	A	杯	14.1	6.3	4.5	-	-	-	-	-	-	ロクロ	糸切り	4	

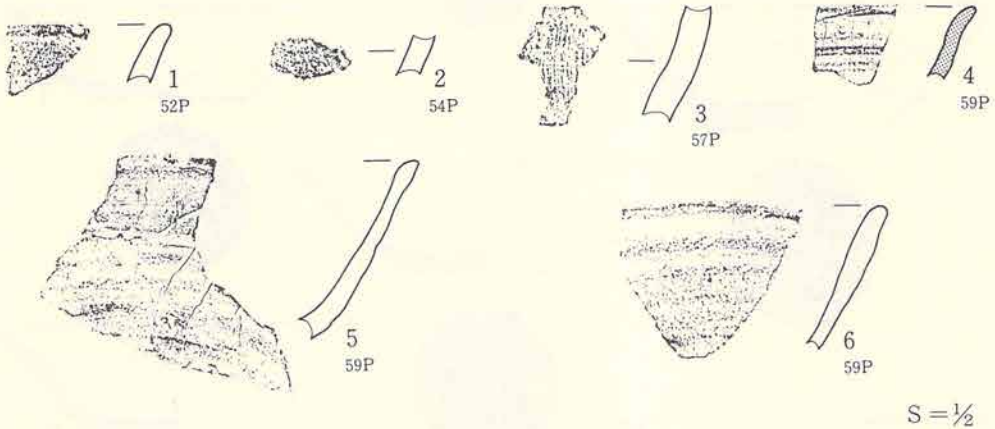
第100図 土坑内出土遺物(7)



第101図 土坑内出土遺物(8)

(遺物観察表)

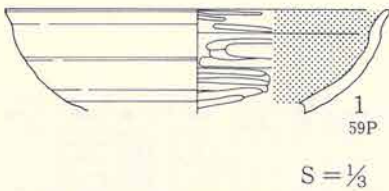
実測図	写真	登録番号	種類	器種形式	坯量			外面調整			内面調整			形成	切り難し	分類	その他
					口縁径	底径	器高	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部				
101-1	60-10	58P-22	H	甕	15.2	-	-	-	-	-	-	-	-	ロクロ		(小)	
101-2	60-5	58P-30	縁軸 陶器	椀柄	9.9	-	-	-	-	-	-	-	-	ロクロ			



第102図 土坑内出土遺物(9)

62号土坑 (第104図、写真図版33、60)

22号住居跡埋土上面で検出されている。しかし、遺構界面が明確でないことから、22号住居跡の埋没から本土坑掘り込みまでの時間差はそれほど大きくないと考えられる。出土遺物から本土坑の廃絶時期をⅢ-2期と考えたい。



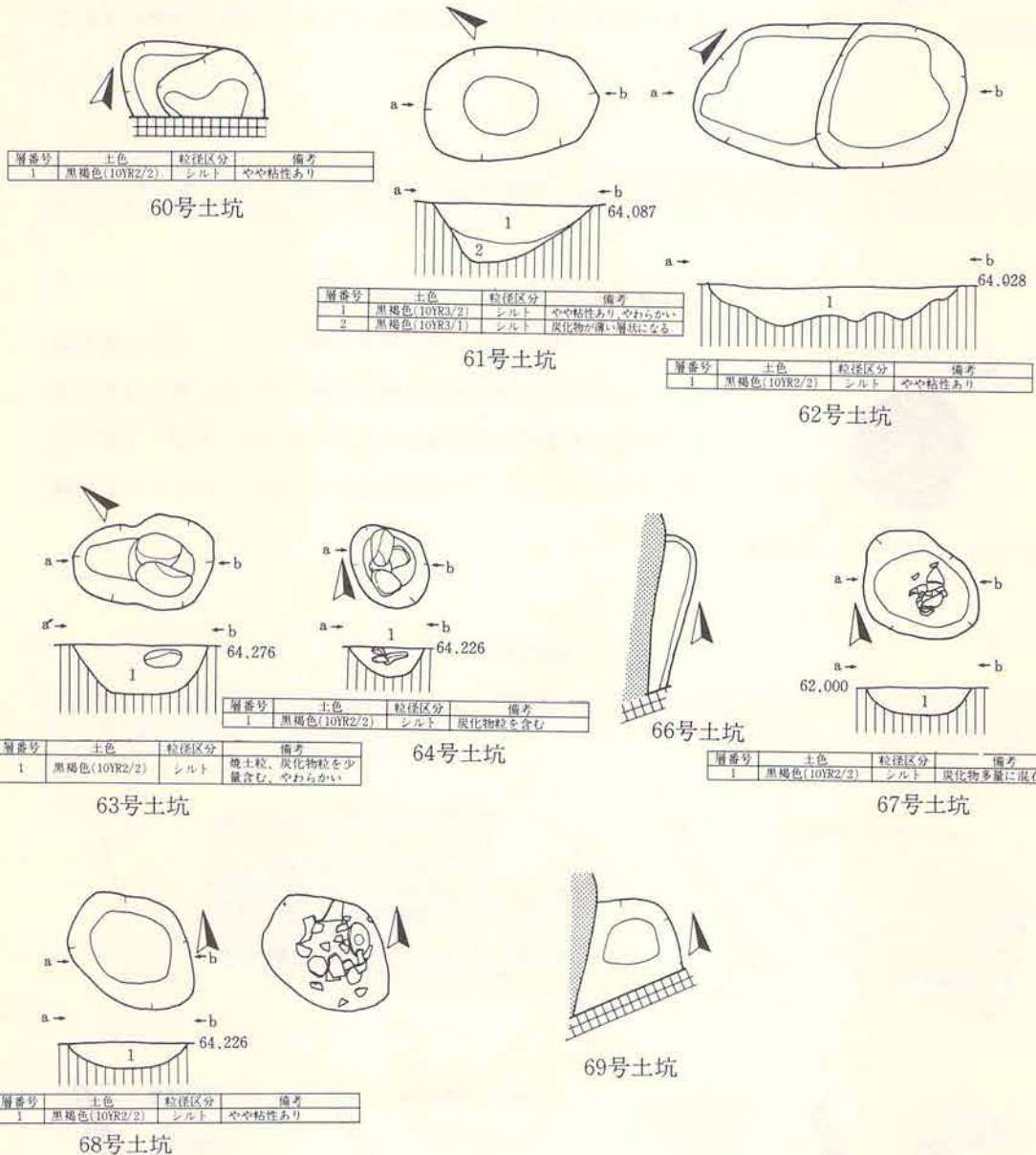
第103図 土坑内出土遺物(10)

(土器観察表)

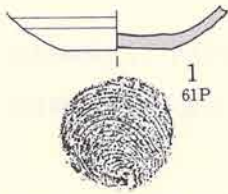
実測図	写真	登録番号	種類	器種形式	坯量			外面調整			内面調整			形成	切り難し	分類	その他
					口縁径	底径	器高	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部				
103-1	60-11	59P-12	H	椀	15.3	-	-	-	-	-	m	m	m	ロクロ	?		

63号土坑 (第104図、写真図版34, 61)

土坑の底面に人頭大の礫が検出された。埋土の観察から後世の流入等ではなく、土坑廃絶時の人為的な配石であると考えられる。遺物は埋土中に散在し、それより本土坑の廃絶時期はⅢ-2期であると考えられる。



第104図 60~69号土坑 平面図および断面図 (S = 1/40)



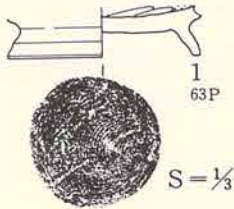
第105図 土坑内出土遺物(11)
($S = \frac{1}{3}$)

64号土坑 (第104図、写真図版33)

埋土上部から遺構確認面の上に突き出るような形で礫が検出された。ただし、この付近で多少当時の地山面が削平されていると考えられ、本来はすべて土坑の埋土におおわれていたものである可能性がある。遺物は出土しておらず、遺構の時期が決定できない。

(土器観察表)

実測図	写真	登録番号	種類	器種形式	坯量			外面調整			内面調整			形成	切り離し	分類	その他
					口縁径	底径	器高	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部				
105-1	60-15	61P-3	A	環	-	4.2	-	-	-	-	-	-	-	ロクロ	糸切り	4	



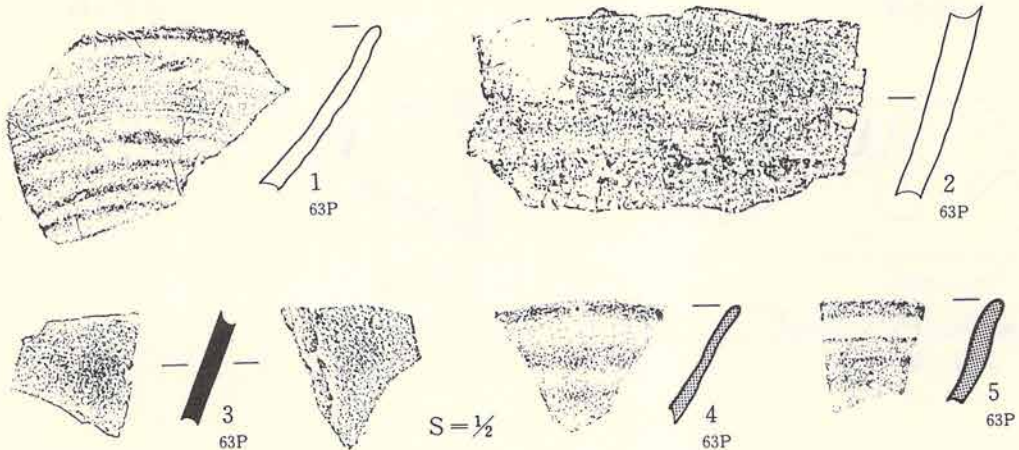
第106図 土坑内出土遺物(12)

66号土坑 (第104図)

本土坑は32号住居跡の貼り床下で確認された。69号土坑を破壊し、35号住居状遺構構築以前に堆積している。埋土は相当乱れている。他遺構との関係より、本土坑の年代をⅢ-2期と見なしようが、出土している磨石はその時期のものかどうか明確ではない。

(土器観察表)

実測図	写真	登録番号	種類	器種形式	坯量			外面調整			内面調整			形成	切り離し	分類	その他
					口縁径	底径	器高	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部				
106-1	61-1	63P-15	H	高台付環	-	6.7	-	-	-	-	-	m	m	ロクロ	糸切り	[小]	

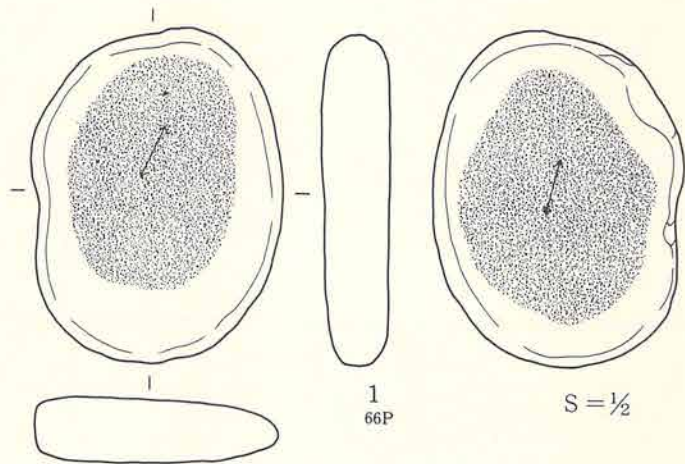


第107図 土坑内出土遺物(13)

67号土坑（第104図、

写真図版34, 61）

埋土中より比較的大きな破片の土器片が出土している。埋土の状態よりこれらは後世の流入等ではなく、遺構廃絶時のものであると考えられる。ただし、埋土は多少攪乱をうけ、またこの付近で当時の地山面がわずかに削平されていると考えられることから、土器の残



第108図 土坑内出土遺物(14)

(遺物観察表)

実測図	写真	登録番号	機種形式	環量			表面調整	裏面調整	その他
				長径	短径	厚さ			
108-1	61-8	66P-1	磨石	8.9	6.6	1.7	ミガキ	ミガキ	安山岩?

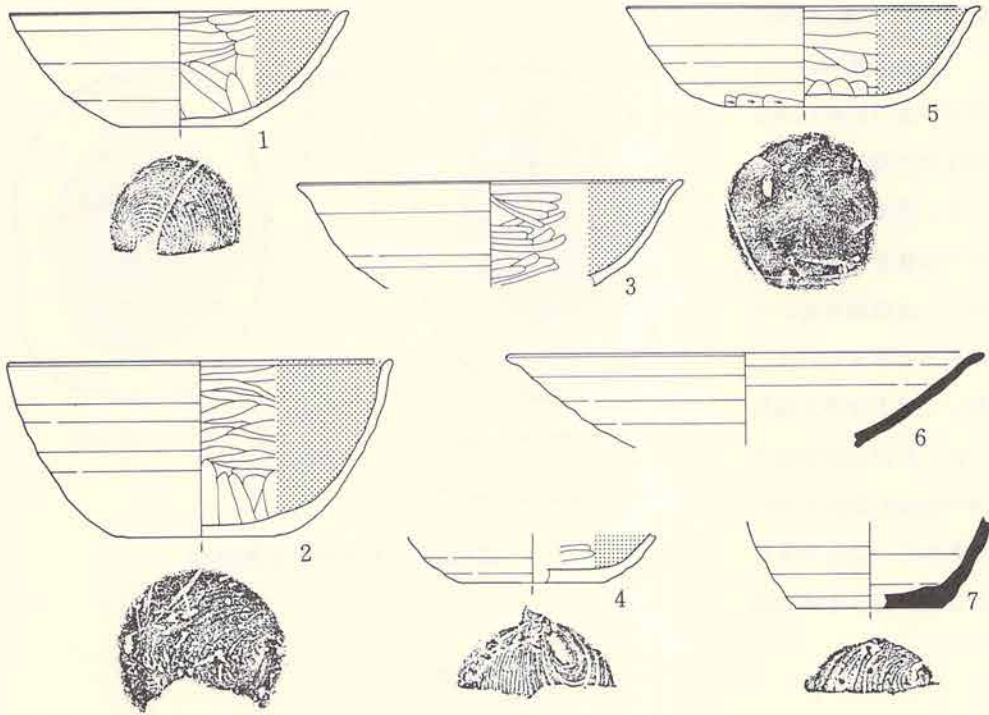
存度がやや低いものになったと考えられる。本遺構の廃絶時期は、遺物よりⅢ-2期であると考えられる。

68号土坑（第104図、写真図版34, 62）

埋土中よりやや多量の、大破片の土器が出土している。残存度は比較的良好である。埋土の状態より、これらの土器は後世の混入ではない。土坑の埋没と土器の埋置はほぼ同時であると考えてよからう。土坑の上部が後世にやや削平されているようである。Ⅲ-2期であると考えられる。

69号土坑（第104図、写真図版34, 61, 62）

32号住居跡床面で検出されている。66号土坑によって一部破壊されている。埋土は、それらの遺構の掘り込みや土壌作用等によってやや乱れている。出土遺物と他遺構との関係から、その年代をⅢ-2期と考えることができる。

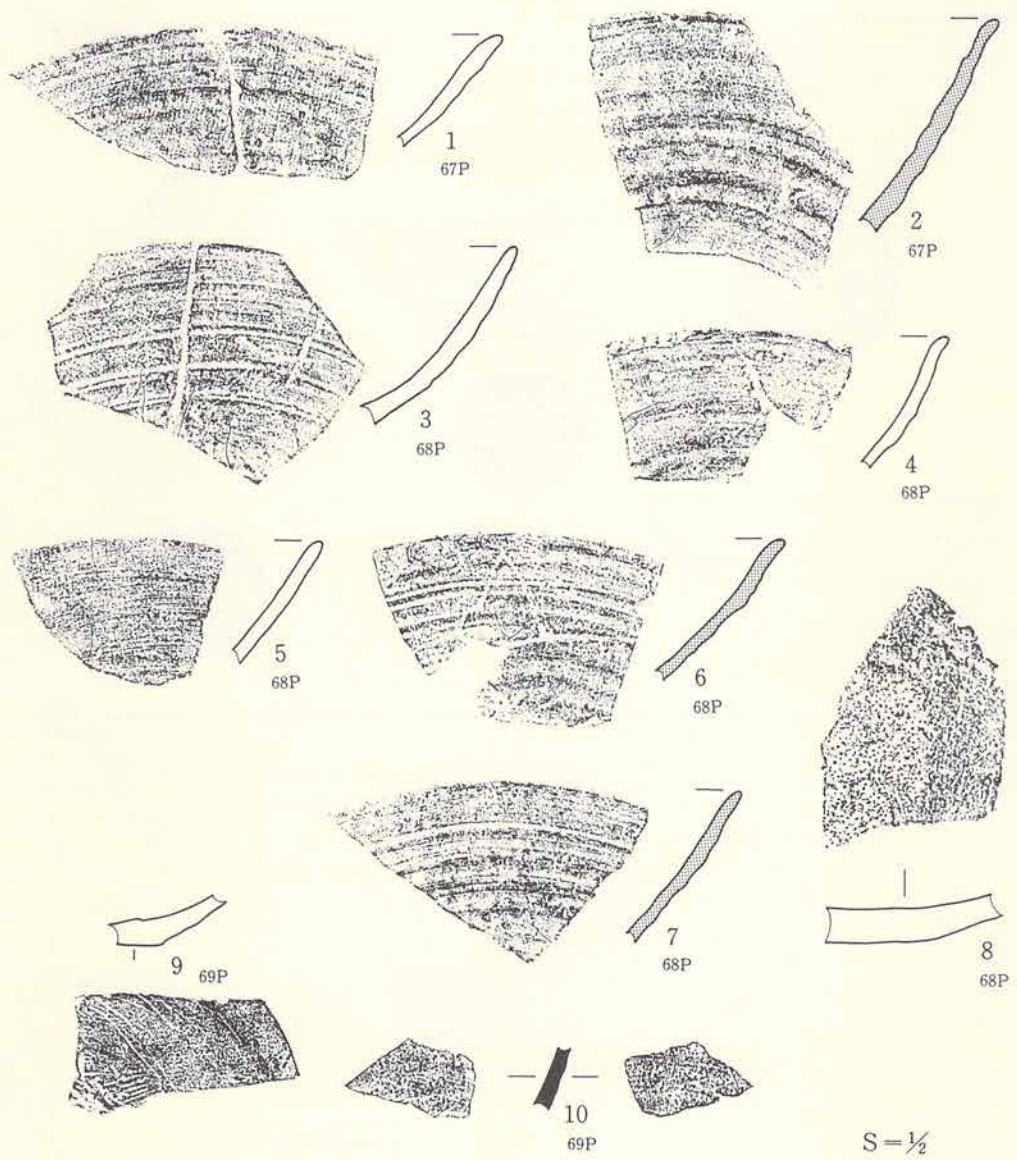


S = 1/3

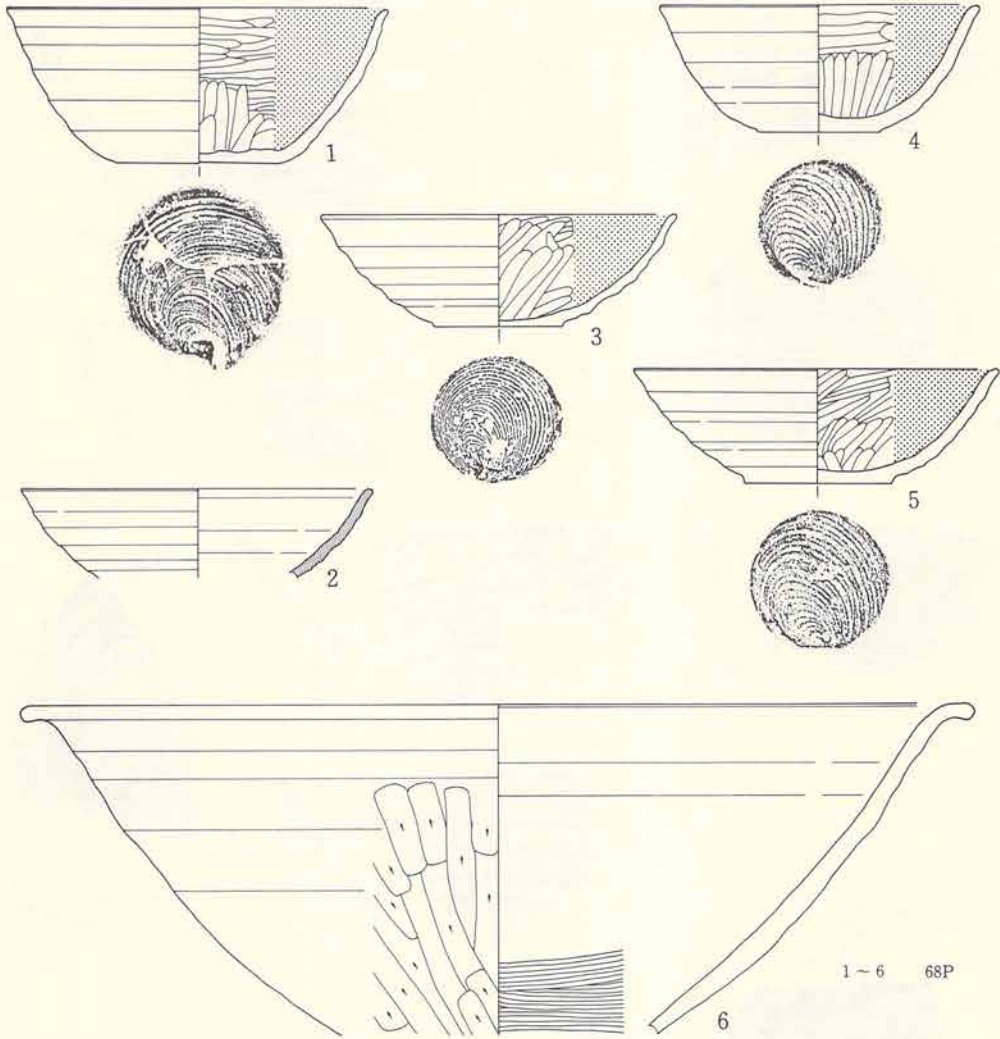
(土器観察表)

実測図	写真	登録番号	種類	器種形式	杯量			外面調整			内面調整			形成	切り離し	分類	その他
					口縁径	底径	器高	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部				
109-1	61-9	67P-11	H	杯	13.6	4.8	4.6	-	-	-	m	m	m	ロクロ	糸切り	d	
109-2	61-12	67P-10	H	杯	15.4	5.9	7.0	-	-	-	m	m	m	ロクロ	糸切り	e	ケズリ
109-3	61-13	67P-13	H	杯	15.5	-	-	-	-	-	m	m	-	ロクロ	-	-	
109-4	-	67P-14	H	杯	-	5.8	-	-	-	-	-	m	-	ロクロ	糸切り	d	
109-5	61-10	67P-12	H	杯	14.2	6.1	4.1	-	-	k	m	m	m	ロクロ	糸切り	e	ケズリ
109-6	61-13	67P-16	A	杯	19.1	-	-	-	-	-	-	-	-	ロクロ	-	-	
109-7	-	67P-15	A	杯	-	5.9	-	-	-	-	-	-	-	ロクロ	糸切り	4	

第109図 土坑内出土遺物(15)



第110図 土坑内出土遺物(16)



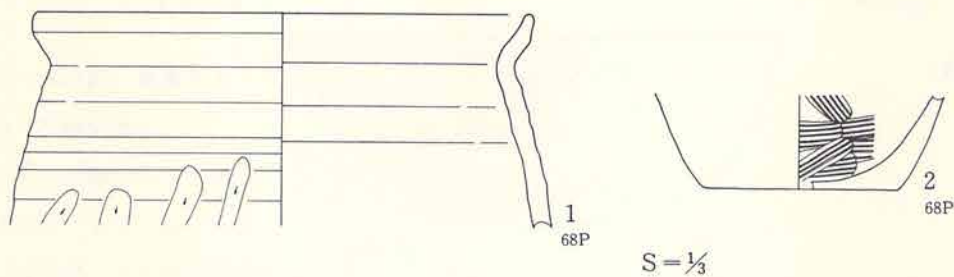
1 ~ 6 68P

S = 1/3

(土器観察表)

実測図	写真	登録番号	種類	器種形式	杯量			外面調整			内面調整			形成	切り離し	分類	その他
					口縁径	底径	器高	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部				
111-1	62-4	68P-30	H	杯	15.2	6.4	6.2	-	-	-	m	m	m	ロクロ	糸切り		
111-2	62-5	68P-36	A	杯	13.9	-	-	-	-	-	-	-	-	ロクロ	?	d	ケズリ
111-3	62-3	68P-38	H	杯	14.2	5.1	4.5	-	-	-	m	m	m	ロクロ	糸切り	d	
111-4	62-1	68P-31	H	杯	12.8	4.9	5.1	-	-	-	m	m	m	ロクロ	糸切り	d	
111-5	62-2	68P-32	H	杯	14.6	5.9	4.7	-	-	-	m	m	m	ロクロ	糸切り	d	ケズリ
111-6	62-8	68P-33	H					-	k	-	-	n	-	ロクロ	?		

第111図 土坑内出土遺物(17)



(土器観察表)

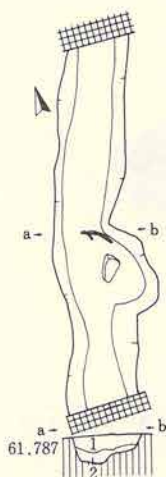
実測図	写真	登録番号	種類	器種形式	坯量			外面調整			内面調整			形成	切り離し	分類	その他
					口縁径	底径	器高	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部				
112-1	62-7	68P-34	H	甕	19.8	-	-	-	k	-	-	-	-	ロクロ		(中)	
112-2	62-6	68P-35	H	甕		7.8	-	-				h→ m	h→ m	ロクロ			

第112図 土坑内出土遺物(18)

(表3) 土坑属性表

No	検出区	平面形態	規模			床面形状	長軸方向	出土遺物	その他	No	検出区	平面形態	規模			床面形状	長軸方向	出土遺物	その他
			長径	短径	深さ								長径	短径	深さ				
1	B12	円形	0.5	0.46	0.2	平坦	-	H	42	B38	楕円形	0.78	0.52	0.2	浅皿状	N-S	-		
3	B15	円形	0.37	0.34	0.5	平坦	NW-SE	H	43	B32	不整形	0.53	0.46	0.1	浅皿状	N-S	S		
4	B12	?	1.05	-	0.17	浅皿状	-	H	44	F29	不整形	0.75	0.38	0.2	浅皿状	N-S	-		
5	B11	不整形	1.18	-	0.07	平坦	W-E	H	45	B39	楕円形	0.6	0.42	0.08	平坦	NW-SE	-		
6	B13	不整形	4.63	-	0.08	平坦	W-E	H, S	46	F31	隅丸方形?	0.77	-	0.45	平坦	-	-		
7	F5	円形	1.09	1.02	0.45	浅皿状	-	H	48	B24	?	-	-	0.1	平坦	W-E	-		
8	F6	溝状	1.34	0.46	0.18	浅皿状	W-E	-	49	B45	方形	-	-	0.05	平坦	-	-		
9	B14	楕円形	0.85	0.62	0.2	浅皿状	NE-SW	H	50	B37	楕円形	0.56	0.36	0.22	浅皿	N-S	-		
10	B17	隅丸方形	0.98	0.9	0.35	浅皿状	W-E	H, S	51	P107	不整形	-	0.49	0.1	平坦	N-S	-		
11	B17	不整形	0.53	0.35	0.08	平坦	NW-SE	-	52	O114	楕円形	1.43	0.95	0.25	凹凸	N-S	H, A		
12	F39	楕円形	1.28	0.63	0.25	凹凸	NW-SE	-	54	R111	方形?	-	-	0.1	平坦	-	H		
13	B17	不整形	2.0	1.34	0.3	浅皿状	N-S	-	56	R111	隅丸方形?	-	1.62	0.17	平坦	-	H		
14	B7	溝状	1.68	0.27	0.1	平坦	W-E	H	57	R110	円形	0.83	0.78	0.25	浅皿状	-	H, S	スラッグ	
16	B17	円形	0.78	0.74	0.04	平坦	-	-	58	O113	楕円形	0.78	0.74	0.2	浅皿状	N-S	H, A	土器、緑釉陶器	
17	B7	不整形	0.8	0.6	0.7	平坦	W-E	-	59	P114	不整形	0.89	-	0.3	浅皿状	-	H, A		
18	B23	隅丸方形	-	1.98	0.27	平坦	-	H	60	V119	隅丸方形	-	0.78	0.25	平坦(段)	-	H, A		
19	B25	不整形	1.06	-	0.2	浅皿状	-	-	61	O113	楕円形	0.95	0.63	0.3	浅皿状	NW-SE	-		
20	B27	隅丸長方形?	0.97	0.5	0.1	浅皿状	W-E	-	62	T114	楕円形	1.53	0.8	0.25	浅皿状(段)	NE-SW	H, A		
21	B27	円形	0.62	0.58	0.15	浅皿状	-	-	63	O114	不整形	1.4	0.93	0.25	浅皿状	NW-SE	H		
22	B15	楕円形	0.83	0.62	0.1	浅皿状	NE-SW	H	64	U118	楕円形	0.52	0.41	0.15	浅皿状	NW-SE	H, A		
23	B24	溝状?	-	0.29	0.15	平坦	N-S	H	66	X124	隅丸方形?	-	-	0.1	平坦	-	石器		
24	B19	円形?	1.0	-	0.3	浅皿状	W-E	H	67	U120	楕円形	0.7	0.56	0.15	浅皿状	NW-SE	H, S, A	土器	
25	B18	不整形	2.3	-	0.3	平坦	NW-SE	-	68	V120	楕円形	0.8	0.6	0.15	浅皿状	NW-SE	H, A	土器	
26	B24	楕円形	0.78	0.6	0.2	浅皿状	NE-SW	-	69	X124	隅丸方形	-	-	0.25	浅皿状	-	H, S		
27	B30	溝状	2.6	0.46	0.1	平坦	W-E	-											
28	B25	円形	0.6	0.59	0.08	浅皿状	-	-											
29	B29	円形	0.56	0.53	0.08	浅皿状	-	-											
30	F36	不整形	1.16	-	0.2	浅皿状	W-E	H											
31	B38	不整形	2.2	-	0.25	凹凸	W-E	-											焼土・炭化物
32	F18	隅丸方形	-	1.02	0.1	凹凸	-	H											
33	F19	不整形	0.8	-	0.05	浅皿状	W-E	-											
34	F20	楕円形	0.81	0.53	0.3	凹凸	N-S	-											
35	F20	不整形	0.61	-	0.06	平坦	N-S	-											
36	F21	楕円形	0.82	0.56	0.12	浅皿状	NW-SE	H, S											
37	F26	円形	0.78	0.69	0.2	平坦	-	H											焼土・炭化物
39	F22	円形	0.55	0.51	0.08	平坦	-	-											
41	F22	楕円形?	-	0.52	0.1	平坦	N-S	-											

規模の単位は m

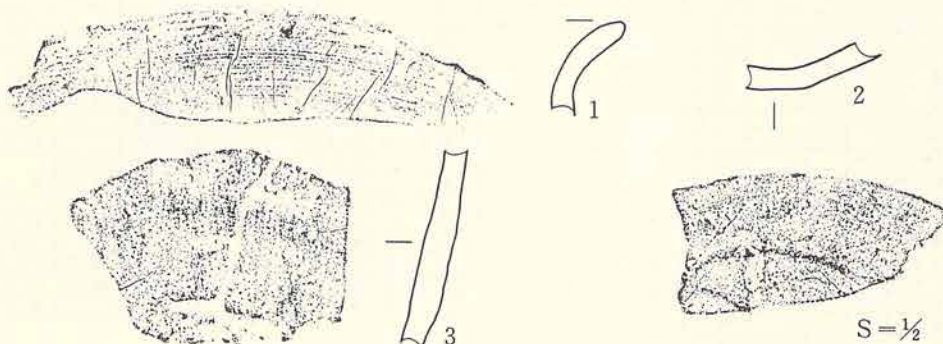


層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒褐色(10YR2/3)	シルト	ややかたい、粘性あり
2	黒褐色(10YR2/3)	シルト	1にII層がアロック状に混在

第113図 1号溝跡平面図および埋土断面図 ($S = \frac{1}{60}$)

(土器観察表)

実測図	写真	登録番号	種類	器種形式	杯量			外面調整			内面調整			形成	切り難し	分類	その他
					口縁径	底径	器高	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部				
114-1	63-1	1 M-37	H	杯	19.1	—	7.4	n→m	k→m	k	m	m	m	非口クロ	—	b	



第115図 1号溝跡内出土遺物(2)

2号溝跡 (第116, 117図、写真図版63)

片側が行き止まっている。浅い皿状の落ち込みが長く伸びている。一部1号住居跡と重複しそれより新しい。埋土の状態から、ごく新しい時期の遺構であると考えられる。

3号溝跡 (第118, 119図、写真図版35)

片側が行き止まっていることから人為的な掘り込みであろうと考えられる。堆積の状態は安

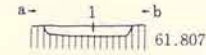
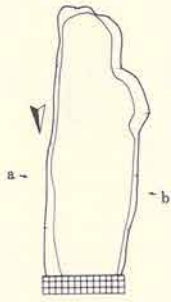
3. 溝路

1号溝跡 (第113~115図、

写真図版35, 63)

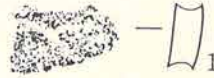
埋土中に土器片が小片と
なって出土する。ただし、
東側の壁面の一部が張り出
し、その部分でやや大きめ

の土器片が検出されている。また、
埋土中に径20cm、厚さ6cmの灰白色
粘土魂が検出され、単層ではあるが
自然堆積かどうか疑しい。張り出し
部分は他遺構との重複の可能性もあ
るが、調査過程では確認できなかつ
た。国分寺下層式期と考えられる。



層番号	土色	粒径区分	備考
1	灰色(10Y4/1)	シルト	一部明黄褐色

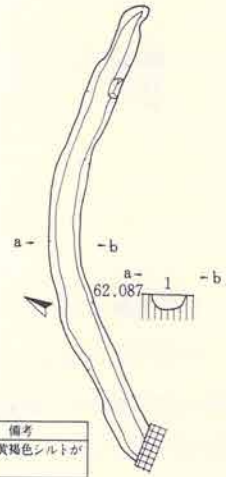
第116図 2号溝跡平面図
および埋土断面図 (S = 1/60)



第117図 2号溝跡内出土遺物 (S = 1/2)



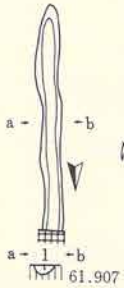
第119図 3号溝跡内出土遺物 (S = 1/2)



層番号	土色	粒径区分	備考
1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	にふい黄褐色シルトが混在

第118図 3号溝跡平面図
および埋土断面図 (S = 1/60)

定しているが、多少後世の攪乱をうけている。埋没後に質と出土遺物から、国分寺下層式期の堆没であろうと考えられる。



5号溝跡 (第120図、写真図版35)

3号溝跡・6号溝跡と重複し、それらの埋積後に掘り込まれている。埋土の状態は、かなり新しい時期に堆積したことを示している。

層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒褐色(10YR2/2)	シルト	やや粘性あり

第120図 5号溝跡平面図および埋土断面図 (S = 1/60)

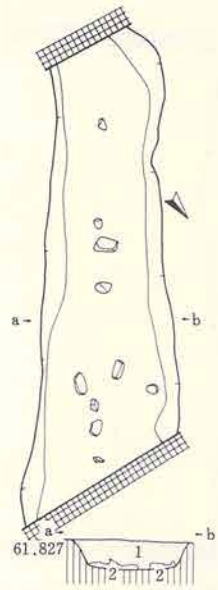
6号溝跡 (第121, 123図、写真図版36, 63)

1号土坑・4号土坑の埋没後に掘り込まれ、5号土坑・5号溝跡によって一部破壊されている。埋土中には土器の小片とともに人頭大の角のとれた礫が出土している。堆積が人為的なものであったのかどうか、埋土の観察からは判断できなかった。出土遺物から、国分寺下層式期に比較的短期間に埋没したものと考えられる。



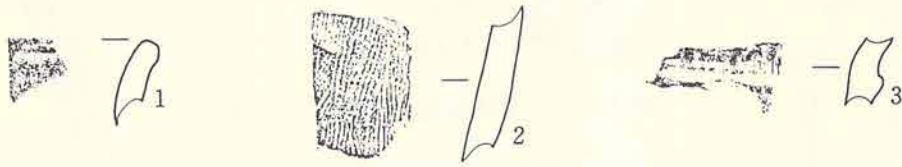
層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒褐色(10YR2/3)	シルト	粘性あり、かたい

第122図 7号溝跡平面図および埋土断面図 (S = 1/60)



層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒褐色(10YR2/2)	シルト	やや粘性あり
2	黒褐色(10YR3/3)	シルト	やわらかい

第121図 6号溝跡平面図
および埋土断面図 (S = 1/60)



第123図 6号溝跡内出土遺物

$S = \frac{1}{2}$

7号溝跡 (第122図、写真図版36)

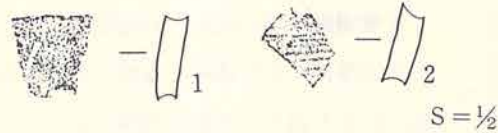
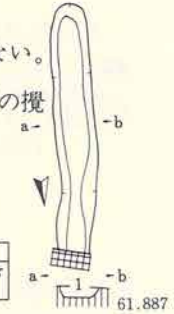
片側が行き止まることから、人為的な掘り込みであると解される。出土遺物はない。埋土の状態から、埋没に際して要した時間がきわめて長かったか、もしくは埋没後の攪乱をうけていると判断される。

8号溝跡 (第124, 125図、写真図版36, 63)

3号土坑と重複し、それより新しいと考えられる。ただし、3号土坑との埋土の性質の差は必ずしも明瞭ではない。土師器の小片が出土しているが、時期決定はできなかった。

層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒褐色(10YR2/2)	シルト	日層をブロック状に含む

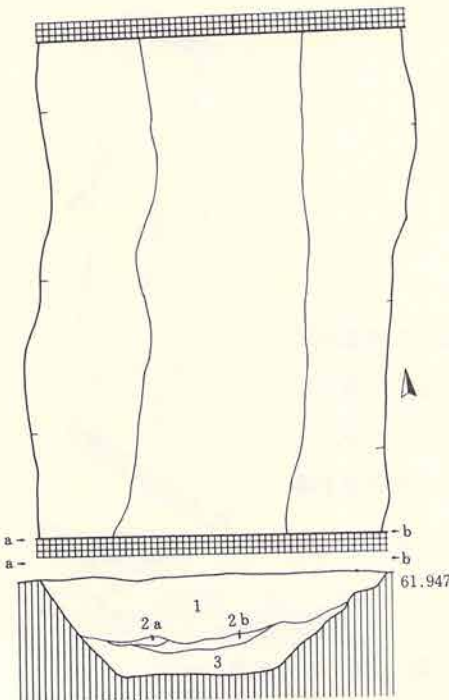
第124図 8号溝跡平面図
および埋土断面図 ($S = \frac{1}{60}$)



第125図 8号溝跡内出土遺物

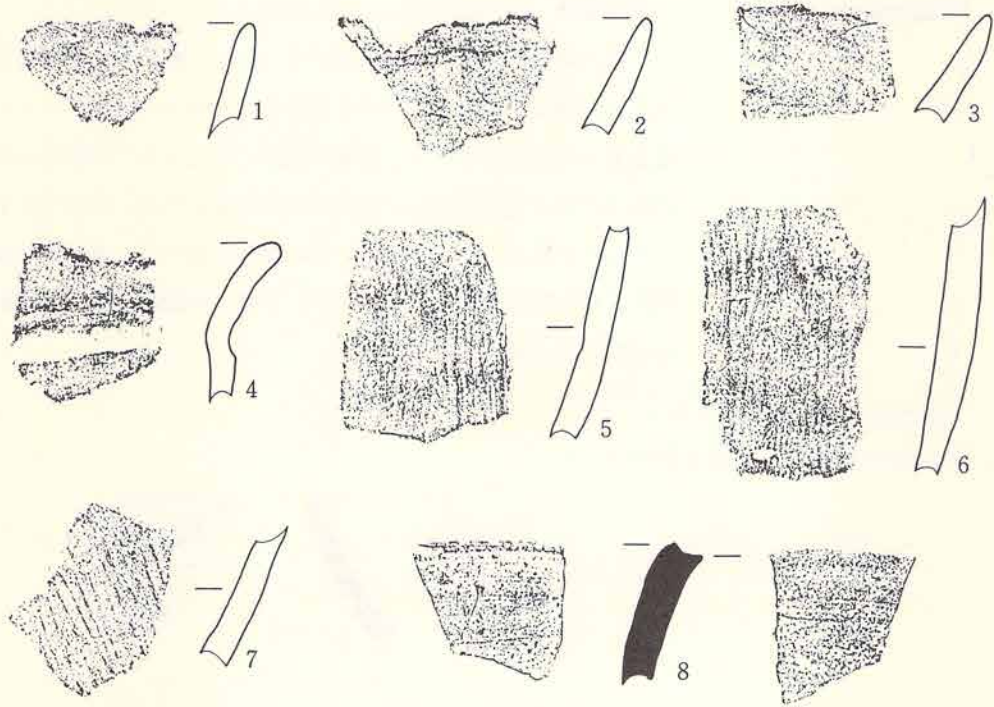
9号溝跡 (第126, 127図、写真図版37, 63)

ごく一部が検出されただけである。6号住居跡の埋没後に掘り込まれており、しかも地山面よりその部分がやわらかいためか、上場がやや広がり不明瞭になる。埋土中にかなりのレベル差をもって人頭大の円礫および土器の小片が出土している。溝跡の形態・埋土の状態・遺物の出土状況から判断すると、埋没が溝内における流水作用による漸次的な堆積であることが推測される。出土遺物から、その完全な埋没の時期はIII-2期であると考えられる。



第126図 9号溝跡平面図および埋土断面図 ($S = \frac{1}{60}$)

層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒褐色(10YR2/2)	シルト	礫を含む、炭化物粒混在
2 a	黒褐色(10YR3/1)	シルト	やや粘性あり、炭化物粒混在
2 b	褐灰色(10YR4/1)	細砂	炭化物粒混在
3	黒色(10YR2/1)	シルト	礫を含む、粘性あり



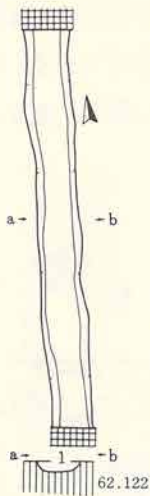
第127図 9号溝跡内出土遺物 (S=1/2)

11号溝跡 (第128図、写真図版37)

一部が検出された。埋土中に土器の小片が散在する。壁面はやや不安定である。多少後世の攪乱をうけている。埋土の状態から自然堆積であろうと考えられる。堆積の時期は決定できなかった。

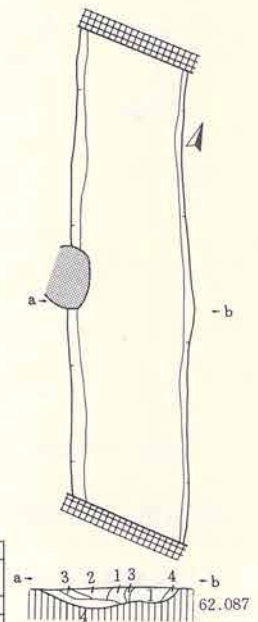
12号溝跡 (第129図、写真図版37)

27号土坑の埋積後に掘り込まれている。壁面・底面に27号土坑の埋土が表われることから、本溝跡の掘り込みから埋没に至るまで、著しく周囲が浸食されるような作用はなかったと考えられる。埋没の時期は、国分寺下層式期以降と考えられる。



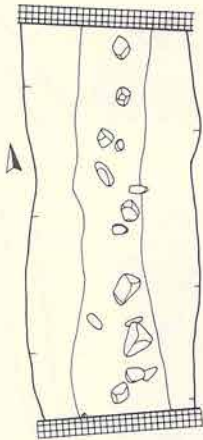
層番号	土色	粒径区分	備考
1	褐色(10YR2/2)	シルト	炭化物粒多い、やや粘性あり、ややかたい

第129図 12号溝跡平面図
および埋土断面図 (S=1/60)



層番号	土色	粒径区分	備考
1	にぶい黄褐色(10YR6/4)	シルト	
2	灰黄色(10YR4/2)	シルト	ややかたい
3	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	ややかたい
4	灰黄色(10YR5/2)	シルト	やや粘性あり、ややかたい

第128図 11号溝跡平面図および埋土断面図 (S=1/60)



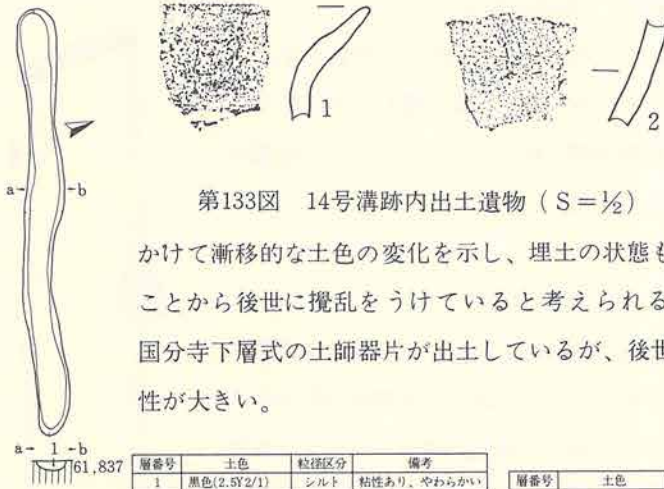
第130図 13号溝跡平面図および埋土断面図 ($S = \frac{1}{60}$)

13号溝跡 (第130, 131図、写真図版38, 64)

上端の溝幅に比して下端の幅が狭くなる、断面ややV字状を呈する。埋土中には土器の小片を含み、人頭大の円礫がレベル差をもって出土している。溝跡の底面に近い部分では埋土がその粒子の大小互層をなし、初期の堆積が流水作用によるものであることを推測させる。遺物と礫の出土状況から、その後の堆積も自然作用によると考えられる。堆積の時期は、出土遺物から判断するとⅢ-2期であろう。



第131図 13号溝跡内出土遺物



第133図 14号溝跡内出土遺物 ($S = \frac{1}{2}$)

14号溝跡

(第132, 133図、写真図版38, 64)

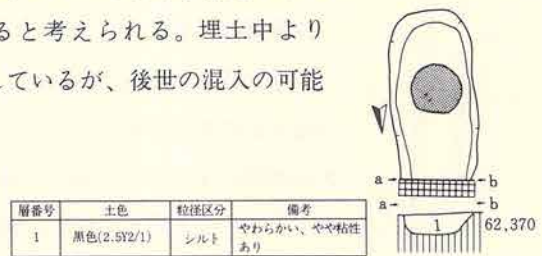
両端が行き止まる。人為的な掘り込みであろうと考えられる。埋土から壁面・底面に

かけて漸移的な土色の変化を示し、埋土の状態も不安定であることから後世に攪乱を受けていると考えられる。埋土中より国分寺下層式の土師器片が出土しているが、後世の混入の可能性が大きい。

第132図 14号溝跡平面図
および埋土断面図 ($S = \frac{1}{60}$)

15号溝跡 (第134図、写真図版38)

南端の一部が検出されている。1号掘立柱建物跡と重複し、それより古いと考えられるが埋土に明瞭な区別はみられなかった。遺構界面も不明確である。人為的な掘り込みであり、堆積

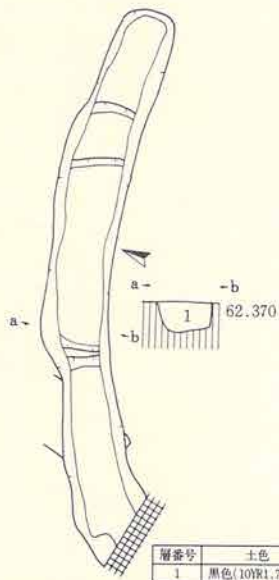


第134図 15号溝跡平面図
および埋土断面図 ($S = \frac{1}{60}$)

層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒色(2.5Y2/1)	シルト	粘性あり、やわらかい

層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒色(2.5Y2/1)	シルト	やわらかい、やや粘性あり

も比較的短期間になされたと考えられる。出土遺物はなく、遺構の時期は明確でないが、その形態と埋土は17号溝跡と類似する。



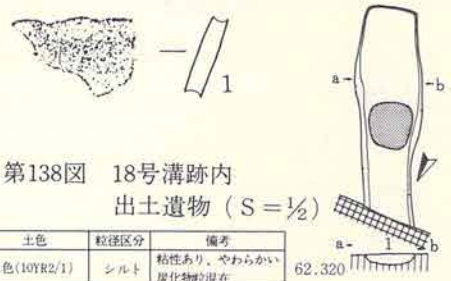
17号溝跡 (第135, 136図、写真図版39, 64)

18号溝跡と重複しそれより新しいと考えられるが、明確ではない。一端が行き止まるため、人為的な掘り込みと考えられる。堆積は比較的短期間になされたと考えられる。壁面・底面とも明瞭であるが、多少凹凸に富む。出土遺物から、埋没の時期は国分寺下層式期であろうと考えられる。

18号溝跡

(第137, 138図、写真図版64)

17号溝跡と重複しそれよ



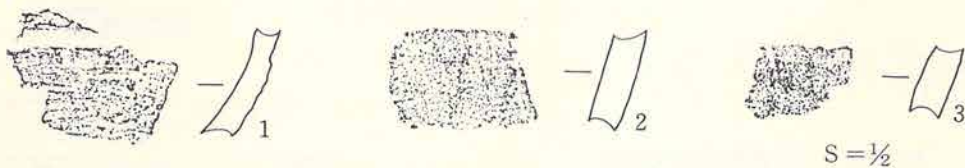
第138図 18号溝跡内出土遺物 (S=1/2)

層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒色(10YR1.7/1)	シルト	粘性あり、やわらかい

層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒色(10YR2/1)	シルト	粘性あり、やわらかい 炭化物混在

第135図 17号溝跡平面図および埋土断面図 (S=1/60)

第137図 18号溝跡平面図および埋土断面図 (S=1/60)



第136図 17号溝跡内出土遺物

り古いと考えられるが、明確ではない。一端が行き止まることから、人為的な掘り込みと考えられる。壁面・床面には埋土からやや漸移的に土色変化が見られる。小土器片が出土するが、時期決定は不可能であった。埋土の特徴は17号溝跡と類似し、比較的近接した時期の埋没が想定される。

19号溝跡 (第139, 140、写真図版39, 64)

南北に細長い。埋土の観察から、自然埋積したものと考えられる。出土遺物はない。埋土と壁面・底面の区別は明瞭である。埋没の時期は不明である。

21号溝跡 (第141, 142図、写真図版39, 64)

壁面・底面がかなり堅く、埋土との識別は容易である。埋土中に不規則に土器の小片が含ま



れている。握りこぶし大の円礫も全般に亘って出土する。一端が行き止まるため人為的な掘り込みと考えられる。埋土の状態から判断すると短期間の堆積と考えられ、礫が付近に見られないものであることから、人為的な堆積と判断される。その時期は出土遺物から判断すると、Ⅲ-2期であると考えられる。

22号溝跡 (第144図、写真図版40, 64)

ごく小規模なものである。両端が行き止まるため、人為的な掘り込みであろうと考えられる。壁

層番号	土色	粒径区分	備考
1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	やや粘性あり、やわらかい

第139図 19号溝跡平面図および (S=1/60) 埋土断面図



S = 1/2

第140図 19号溝跡内出土遺物

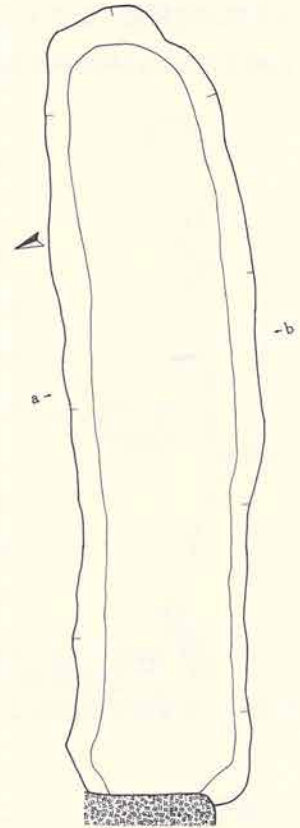
23号溝跡

(第145, 146図、写真図版40, 64)

46号土坑の埋没の後に掘り込まれている。北側の一部が検出されている。埋土から壁面・底面にかけての土色変化はやや漸移的である。一端が行き止まるため、人為的な掘り込みであろうと考えられる。出土遺物から、国分寺下層式器と考えられる。

24号溝跡 (第147, 148図、写真図版41, 64)

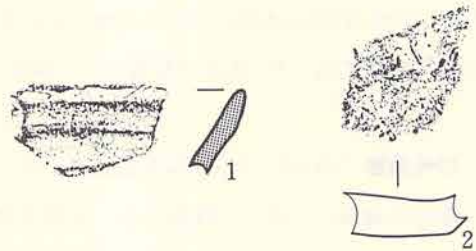
柱穴跡No.109によって一部破壊されている。埋土の一部が攪乱され、堆積が乱され



層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒色(10YR2/1)	シルト	粘性あり、ややかたい、炭化物粒を多量に含む

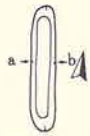
第141図 21号溝跡平面図および埋土断面図

S = 1/60



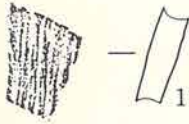
S = 1/2

第142図 21号溝跡内出土遺物



62.218	層番号	土色	粒径区分	備考
	1	黒色(10YR2/1)	シルト	やわらかい、粘性あり

第143図 22号溝跡平面図
および埋土断面図 S = 1/2



第144図 22号溝跡内出土遺物 S = 1/2

25号溝跡 (第149, 151, 152図、写真図版41, 64)

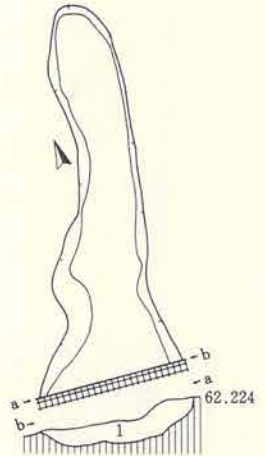
遺構確認面に近い部分ではやや地山との界面が不明瞭であるが、底部に向かうに従って壁・底面とも明瞭になる。遺物は埋土中に散在し、縄文時代以降のものを含んでいる。埋土中には握りこぶし大から人頭大の礫もやや多く検出されている。埋土はすべて横方向からの流れ込みである可能性が大きいが、堆積の過程で一時的な断絶

(土器観察表)

実測図	写真	登録番号	種類	器種形式	坯量			外面調整			内面調整			形成	切り離し	分類	その他
					口縁径	底径	器高	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部				
148-1	64-14	23M-1	H	杯	12.5	-	4.9	n	k	-	m	m	-	非ロクロ	-	a	

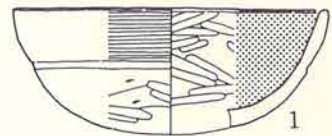
が2度認められる。ただし、遺物は埋土流入の際に混入したものと、以前に堆積されてあったものが相当混在しているようである。その埋没の完了はIII-1~2期と考えられる。

ている部分がある。遺物は埋土中に散在するが、いずれも小片であり、しかも後世の混入の可能性も存在するため、堆積時期を決定する資料にはなり得ない。



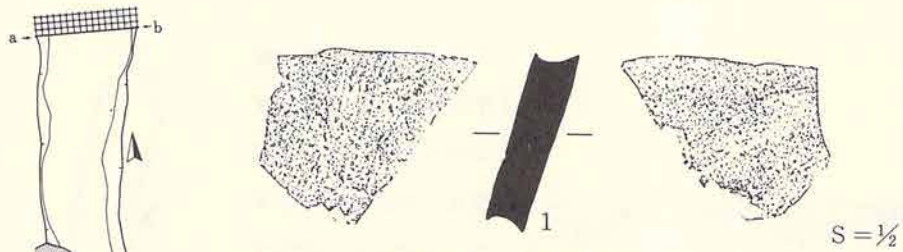
	層番号	土色	粒径区分	備考
	1	黒色(10YR2/1)	シルト	粘性あり

第145図 23号溝跡平面図
および埋土断面図 (S = 1/60)



S = 1/3

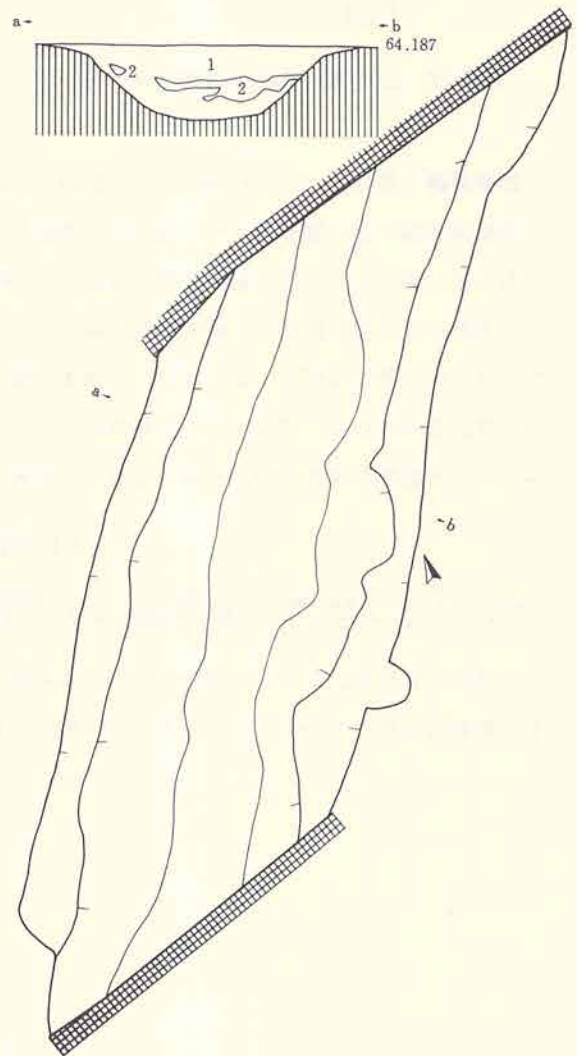
第146図 23号溝跡内出土遺物



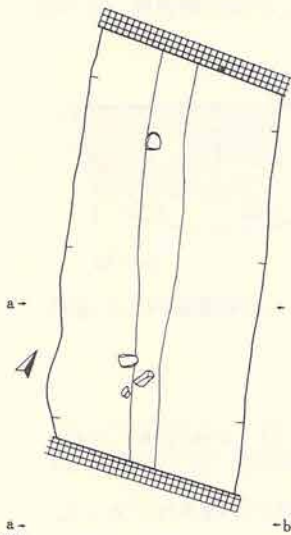
第148図 24号溝跡内出土遺物



第147図 24号溝跡平面図
および埋土断面図 (S = 1/60)



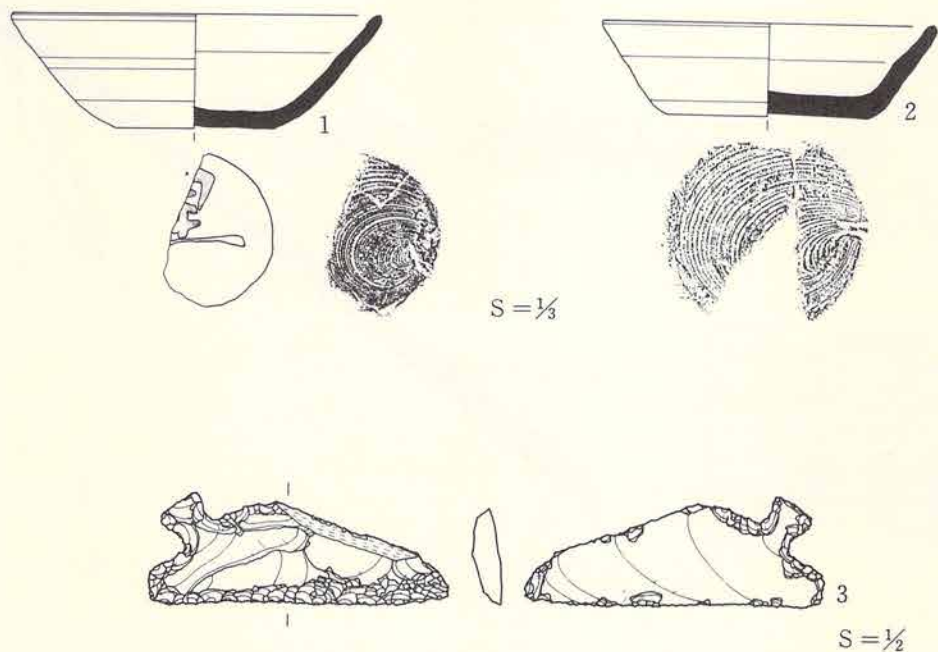
第149図 25号溝跡平面図および埋土断面図 (S = 1/60)



第150図
26号溝跡平面図
および埋土断面図
(S = 1/60)

層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒褐色(10YR2/3)	細砂	かたい

層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒褐色(10YR2/2)	シルト	礫、粗砂がわずかに混在、やや粘性あり
2	黒褐色(10YR2/2)	シルト	黄褐色粗砂が多量に混在



(遺物観察表)

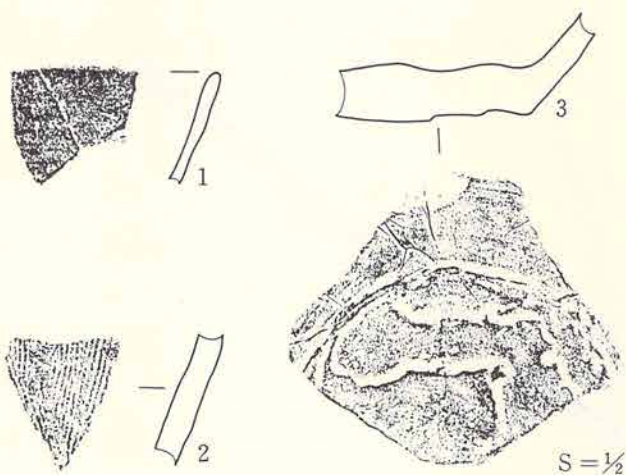
実測図	写真	登録番号	種類	器種形式	環量			外面調整			内面調整			形成	切り離し	分類	その他
					口縁径	底径	器高	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部				
151-1	64-16	25M-22	S	環	14.7	6.3	4.6	-	-	-	-	-	-	ロクロ	糸切り	(4)	墨遺物か?
151-2	64-17	25M-21	S	環	13.3	8.0	3.7	-	-	-	-	-	-	ロクロ	糸切り	(4)	-
151-3	64-1	25M-23	石器	石匙	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	硬質頁岩

第151図 25号溝跡内出土遺物(1)

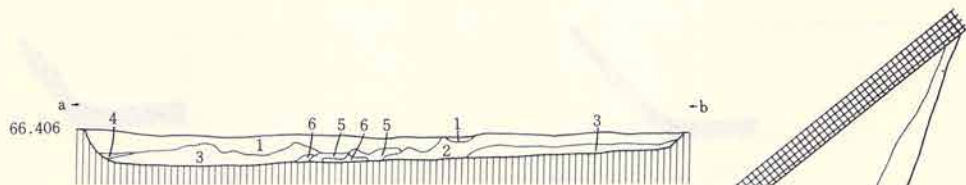
26号溝跡

(第150,154図、写真図版40,65)

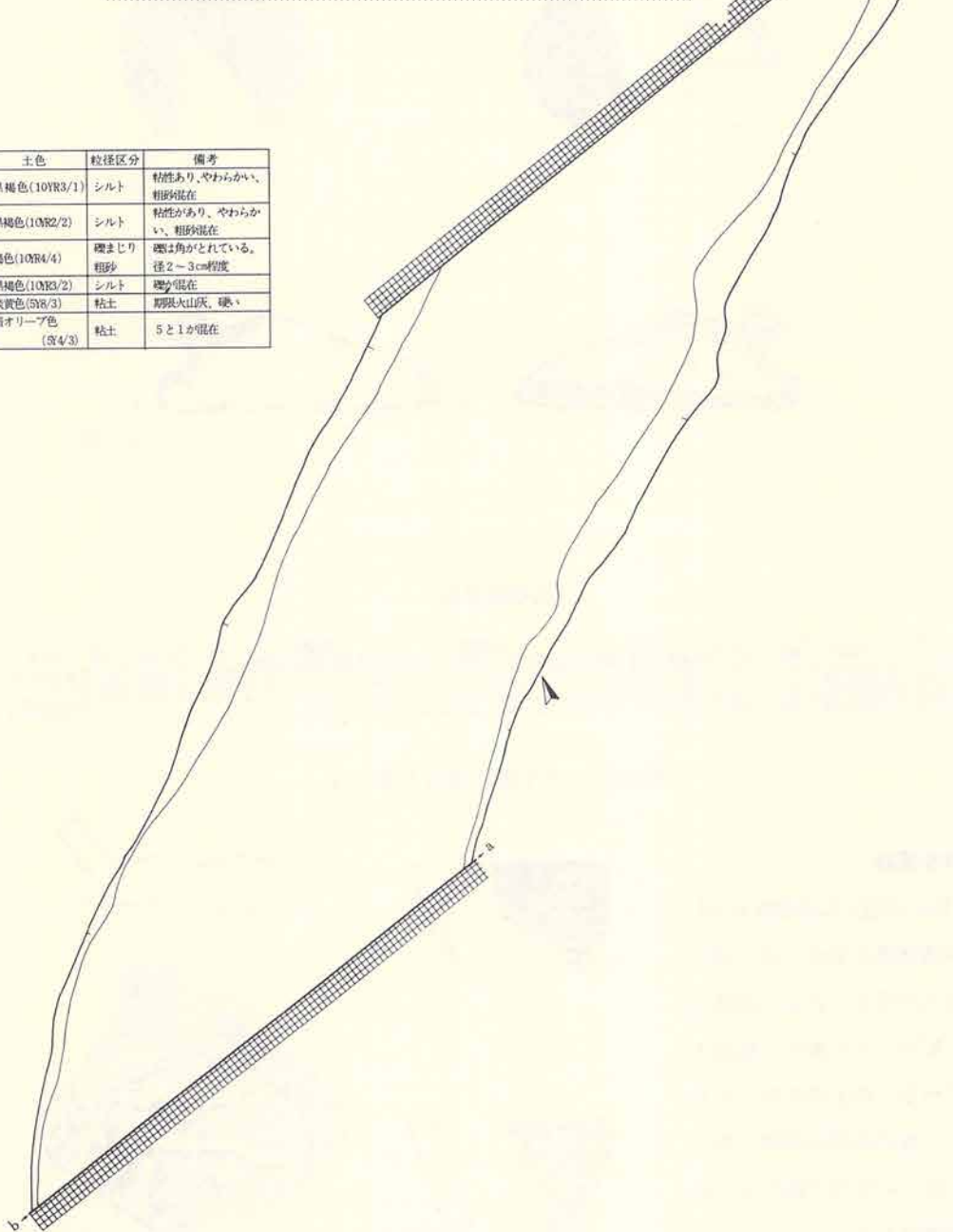
本溝跡埋土中からは、後世の混入が考えられない状態でゴム製ホースの断片が検出されている。埋土の性質そのものも、他の同様な溝跡と異なり、新しい時代の掘り込みおよび埋没と考えられるだろう。



第152図 25号溝跡内出土遺物(2)



層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒褐色(10YR3/1)	シルト	粘性あり、やわらかい、粗砂混在
2	黒褐色(10YR2/2)	シルト	粘性があり、やわらかい、粗砂混在
3	褐色(10YR4/4)	礫まじり粗砂	礫は角かたれている。径2~3cm程度
4	黒褐色(10YR3/2)	シルト	礫分混在
5	淡黄色(5YR/3)	粘土	厚層火山灰、礫
6	暗オリーブ色(5Y4/3)	粘土	5と1が混在



第153図 28号溝跡平面図および埋土断面図 (S=1/60)

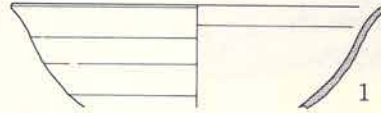


第154図 26号溝跡内出土遺物

$S = \frac{1}{2}$

28号溝跡 (第153, 155, 157図、写真図版42, 65)

20号住居跡・22号住居跡・54号土坑と重複し、それらより新しい。ただし、それらとの遺構界面はやや不明瞭である。底面に近い埋土は径2~3



第155図 28号溝跡内出土遺物(1) ($S = \frac{1}{3}$)

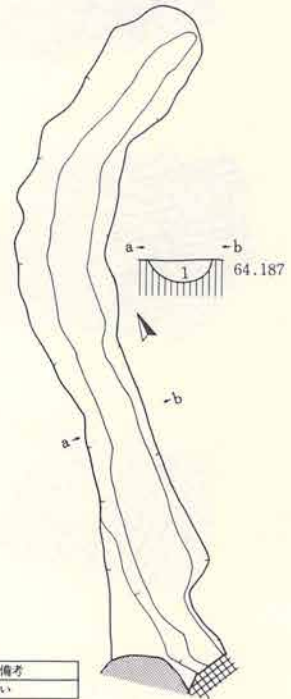
(土器観察表)

実測図	写真	登録番号	種類	器種形式	環量			外面調整			内面調整			形成	切り離し	分類	その他
					口縁径	底径	器高	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部				
155-1	65-9	28M-23	A	環	14.7	-	-	-	-	-	-	-	-	ロクロ			

cmの小礫と同程度の土器片を多量に含んでおり、明らかに溝内の流水とともに堆積している。しかし、溝跡の堆積は一旦中断し、その後は灰白色火山灰の流入が見られるなど、横方向からの堆積を示している。これらより、本溝跡は掘り込み後水が流れたもので、しかも古い遺構埋土をやや削っていたが、まもなく流水が見られなくなったと考えられる。

29号溝跡 (第156, 158 図、写真図版42, 65)

本溝跡は、18号住居跡より新しく、59号土坑の掘り込み以前に埋没している。埋土は安定しているが、壁面に近い部分に後世の攪乱をうけている箇所がある。埋土中から遺物が少量出土しているが、それより判断すると本溝跡の堆積はⅢ-2期であると考えられる。また、隣接する30号溝跡と1セットをなし、方形状あるいは円形状を呈する周溝跡の一部を形成している可能性がある。



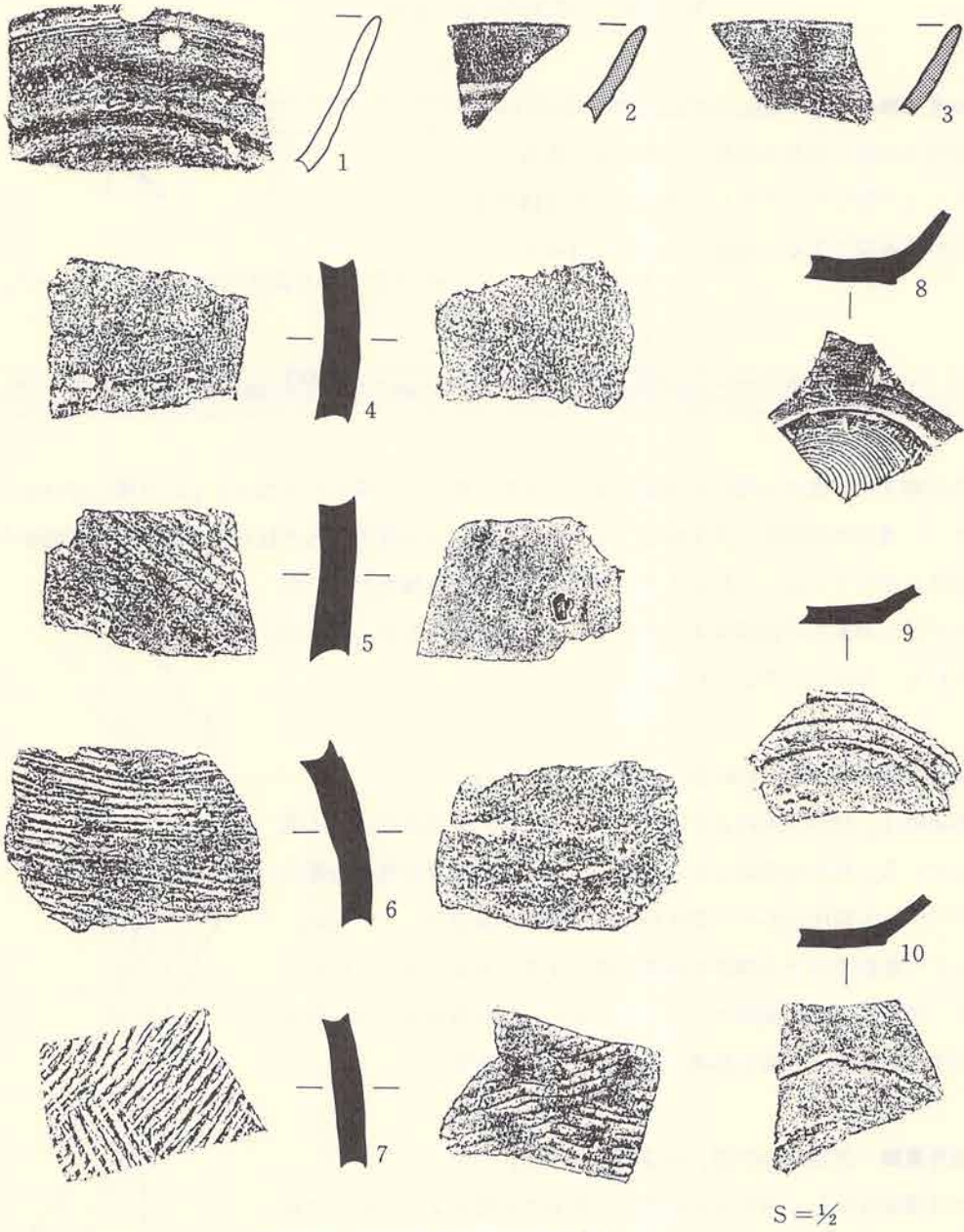
30号溝跡 (第159, 160図、写真図版41, 65)

29号溝跡に比して掘り込みが浅く、埋土の状態もより不安定であるが、29号溝跡とセットをなし、方形状あるいは円形状を呈する周溝跡の

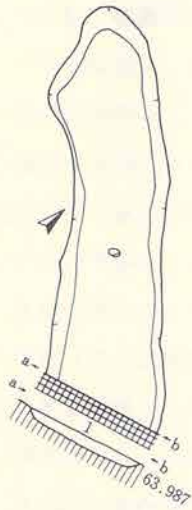
層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒褐色(10R3/2)	シルト	やわらかい

第156図 29号溝跡平面図および埋土断面図 ($S = \frac{1}{60}$)

一部を形成している可能性がある。埋土中の遺物から、本溝跡の堆積はⅢ-2期であると考えられる。



第157図 28号溝跡内出土遺物(2)



層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒褐色(10YR2/2)	シルト	やや粘性あり

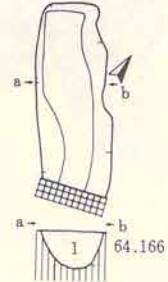
第159図 30号溝跡平面図
および埋土断面図 (S = 1/60)

31号溝跡 (第161, 163図、写真図版42)

本溝跡はII層上面で検出されているものの、壁上部の検出が必ずしも容易ではなかった。しかし、壁下部から底面にかけては良好に残存している。一端が行き止まることから、人為的な掘り込みと考えられる。堆積は自然作用によるものであろう。出土遺物は比較的大破片であり、溝跡埋没当時のものと考えられ、その時期は国分寺下層式~III-1期であろう。

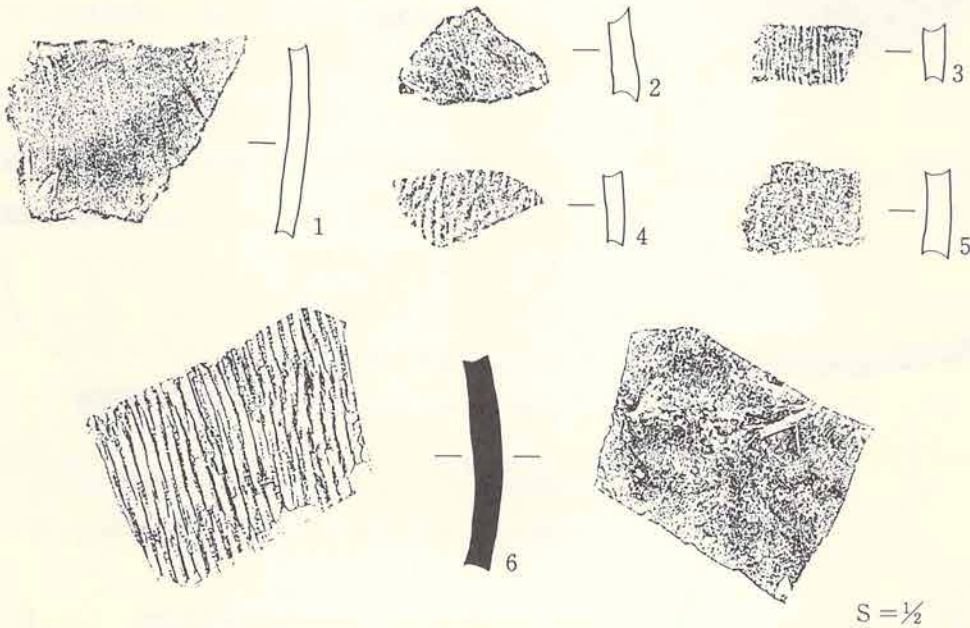


第158図 29号溝跡内
出土遺物



層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒色(10YR2/1)	シルト	粘性あり、やわらかい

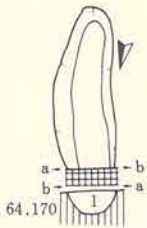
第161図 31号溝跡平面図
および埋土断面図 (S = 1/60)



第160図 30号溝跡内出土遺物

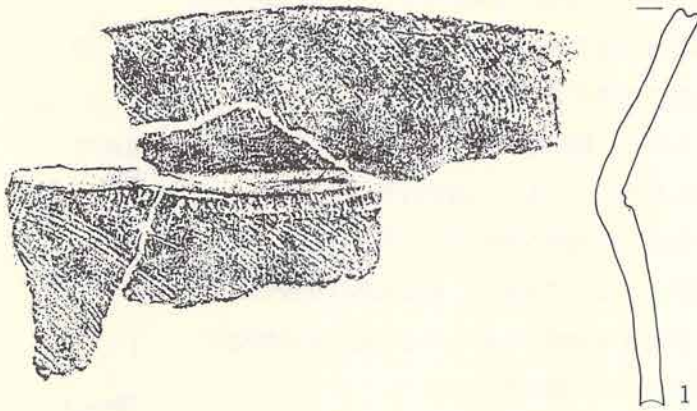
32号溝跡 (第162, 164図、写真図版43, 66)

本溝跡は、南側の一部のみ検出された。人為的な掘り込みである。埋土から、比較的短期間の埋没であると判断される。埋土中に土器片が少量見られる。埋土と出土遺物の特徴から、III-2期の遺構と考えられる。



層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒褐色(10YR2/2)	シルト	やや粘性あり

第162図 32号溝跡平面図
および埋土断面図 (S = 1/60)



第163図 31号溝跡内出土遺物 S=1/2

33号溝跡 (第165
図、写真図版43)

ごく一部検出され
ている。壁面・底面
が凹凸に富んでいる。
これらが掘り込みの
際のものか後世の土
壌作用によるもので
あるか、埋土が多少
攪乱をうけており判
断の決め手に欠ける。
出土遺物はない。



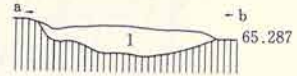
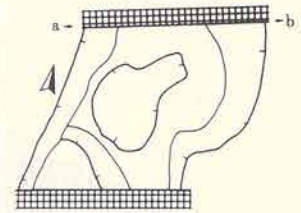
S=1/2

第164図 32号溝跡内出土遺物

34号溝跡 (第166~168図、写真図版43、66)

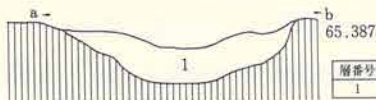
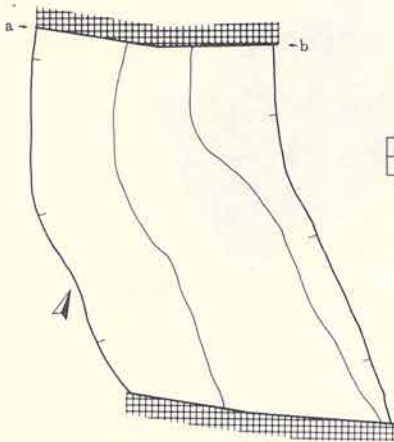
ごく一部検出されてい
ることから、短期間に堆積したと考えられるが
詳細は不明である。比較的大きな土器片が埋土

中から出土している。そ
れらは後世の攪乱による
混入とは考えられないこ
とから、遺構の埋没時期
はⅢ-2期と考えられる。



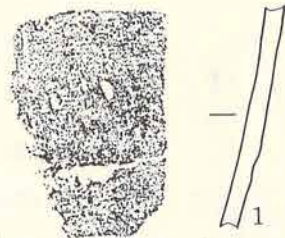
第165図 33号溝跡平面図および埋土断面図 (S=1/60)

層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒褐色(10YR2/2)	シルト	やや粘性あり



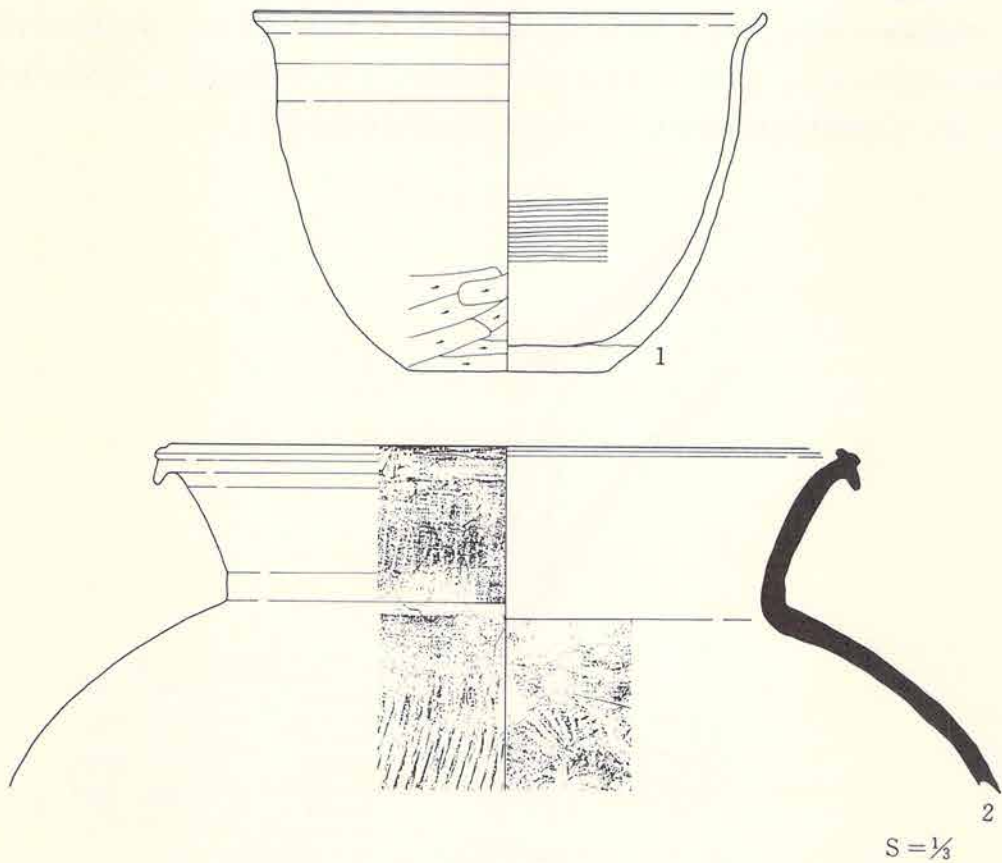
第166図 34号溝跡平面図および埋土断面図 (S=1/60)

層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒褐色(10YR2/2)	シルト	やや粘性あり



S=1/2

第167図 34号溝跡内出土遺物(1)



(土器観察表)

実測図	写真	登録番号	種類	器種形式	坯量			外面調整			内面調整			形成	切り離し	分類	その他
					口縁径	底径	器高	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部				
167-1	66-2	34M-3	H	鉢	20.6	7.8	14.3	-	k	k	-	-	-	ロクロ	-	(小)	
167-2		34M-4	S	大鉢										ロクロ		(小)	

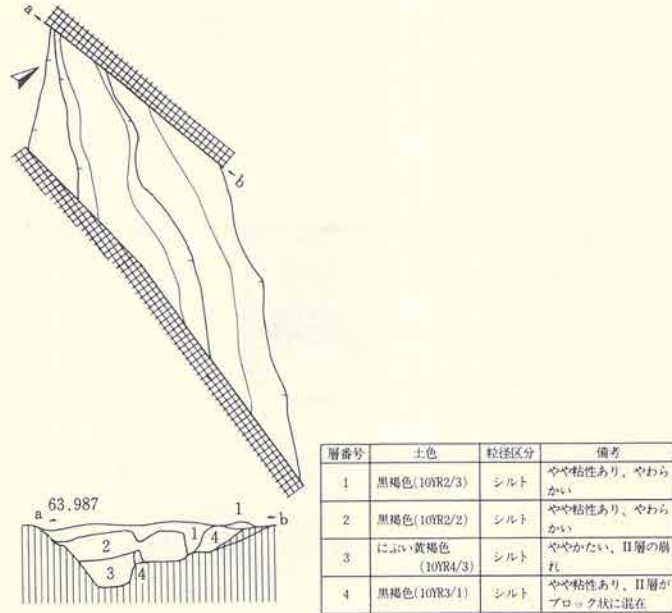
第168図 34号溝跡内出土遺物(2)

35号溝跡 (第169, 172図、写真図版44, 66)

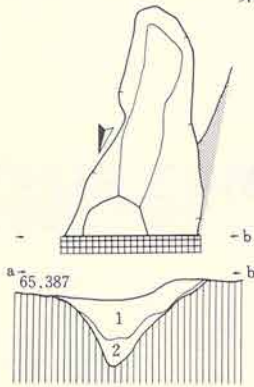
ごく一部検出されている。堆積の状況は不明であるが、埋土中にやや多く遺物を含んでいる。特に須恵器片の中にはその製作時期がかなり遡ると考えられるものがあり、遺構の年代決定は慎重になされるべきである。

37号溝跡 (第170, 171図、写真図版44, 66)

37号住居跡と重複し、それより古いことが明瞭である。一端行き止まることから人為的な掘り込みと考えられる。埋土中には礫を多く含んでいるが、レベル下位のものほどその径が大きい。従って自然堆積の可能性が大きいであろう。須恵器長頸壺が出土している。

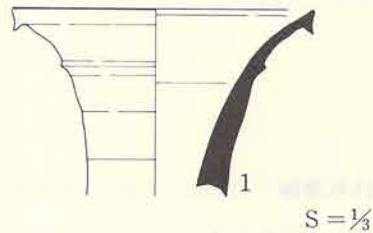


第169図 35号溝跡平面図および埋土断面図($S = \frac{1}{60}$)



層番号	土色	粒径区分	備考
1	黒色(10YR2/1)	シルト	礫(径2~10cm)混在、粘性あり
2	黒褐色(10YR2/2)	シルト	同上

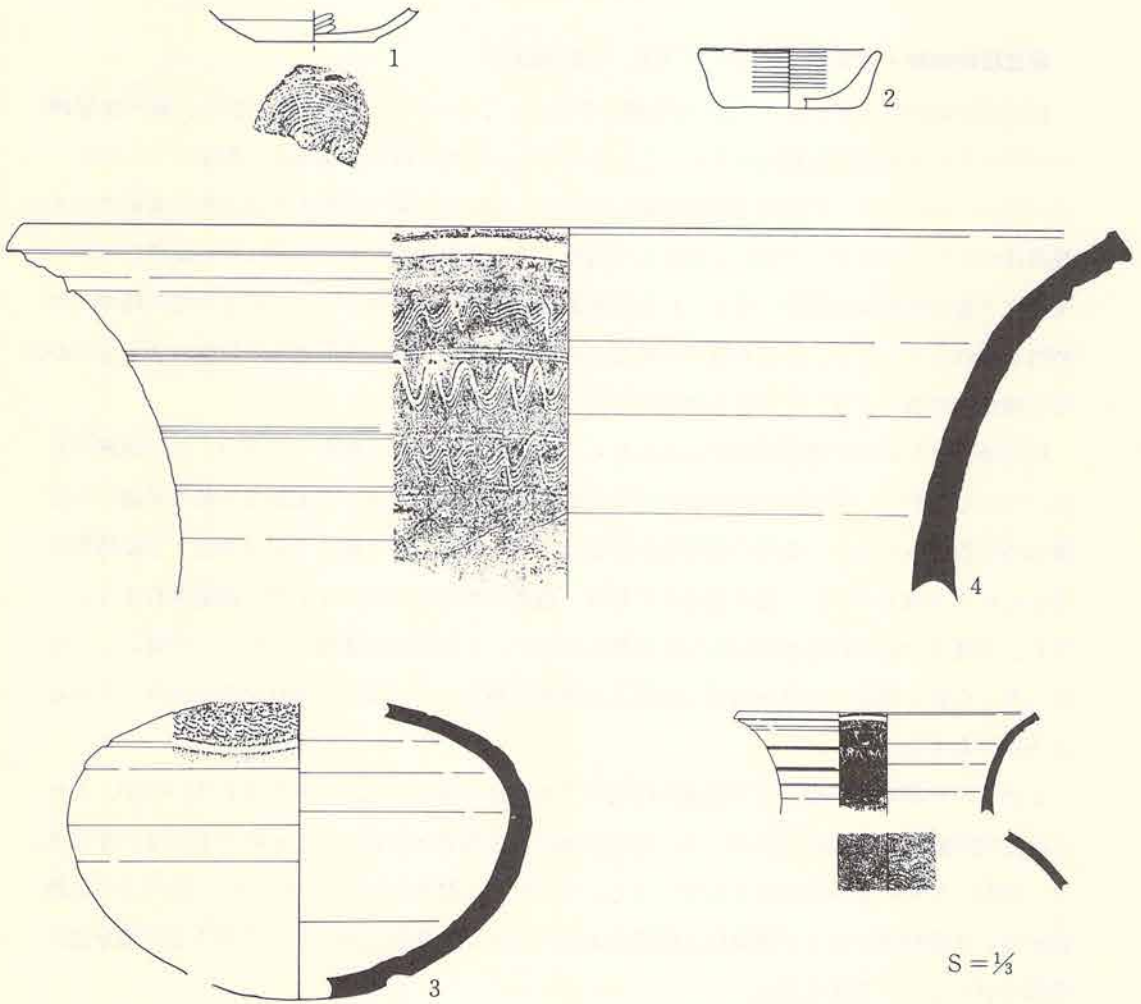
第170図 37号溝跡平面図および埋土断面図($S = \frac{1}{60}$)



第171図 37号溝跡内出土遺物

(土器観察表)

P-M-7		写真	登録番号	種類	器種形式	坯量			外面調整			内面調整			形成	切り離し	分類	その他
実測図	口縁径					底径	器高	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部					
172-1			37M-1	S	長頸壺													



(土器観察表)

実測図	写真	登録番号	種類	器種形式	口径			外面調整			内面調整			形成	切り離し	分類	その他
					口径	底径	器高	口径部	体部	底部	口径部	体部	底部				
170-1		35M-1	H	環	-	4.6	-	-	-	-	-	-	-	ロクロ	糸切り	d	
170-2	66-6	35M-2	H	環	7.3	5.3	2.3	n	n	-	n	n	-	非ロクロ			
170-3	66-5	35M-3	S	壺	-	-	-	-	-	-	-	-	-	ロクロ			
170-4	66-4	35M-4	S	大甕	-	-	-	-	-	-	-	-	-	ロクロ			

第172図 35号溝跡内出土遺物

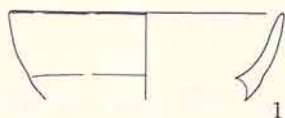
4. 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡・柱穴跡（第173、174図、写真図版45）

柱穴跡は石田II遺跡において計208個検出された。これらの柱穴跡群の分布は、竪穴住居跡の分布とはやや排他的な傾向がある。これらのうち、明確に掘立柱建物跡を想定しうるのは、186-188-189-191（1号掘立柱建物跡）であり、主軸は北東-南西または北西-南東である。規模は明らかでないが、一辺が2間以上である。出土遺物はなく所属時期は明らかでないが、国分寺下層式前期後の埋没と考えられる15号溝跡より新しい。概してこの付近の柱穴跡埋土は特徴が類似しているが、それが堆積の時期の近接によるものか、堆積過程の類似によるものか、単に地山の性質に依存しているものか明らかではない。

柱穴跡群は、相互に重複関係が認められることから単一時期の形成ではないことが理解される。しかしながら、時期決定の手がかりとなるのはNo.92から出土した土師質土器の系譜にある皿状の土器のみであり、資料の絶対数が不足している。これらは概して奈良時代・平安時代と考えられる遺構より新しく掘り込まれており、遺構の年代の大まかな上限が推定されよう。いずれ、何棟かの掘立柱建物跡の存在が予想されたが、1号掘立柱建物跡を除いて明確にしえなかった。なお、国道の北側と南側では埋土の特徴が異なっているが、それが何を反映しているか不明である。

また、野外調査の過程では寺領遺跡においても小柱穴跡状の土坑が検出されていたが、これらは石田II遺跡の柱穴跡に比して、1. 埋土と地山の遺構界面の存在がきわめてあいまいなこと、2. 規格・形態に統一性が見られないこと、3. 付近に遺物の出土がまったくないことの原因から、土壌作用によって遺構内と同様の土色・土性が、II層上面からある深さまで部分的に形成されたものと考えられる。

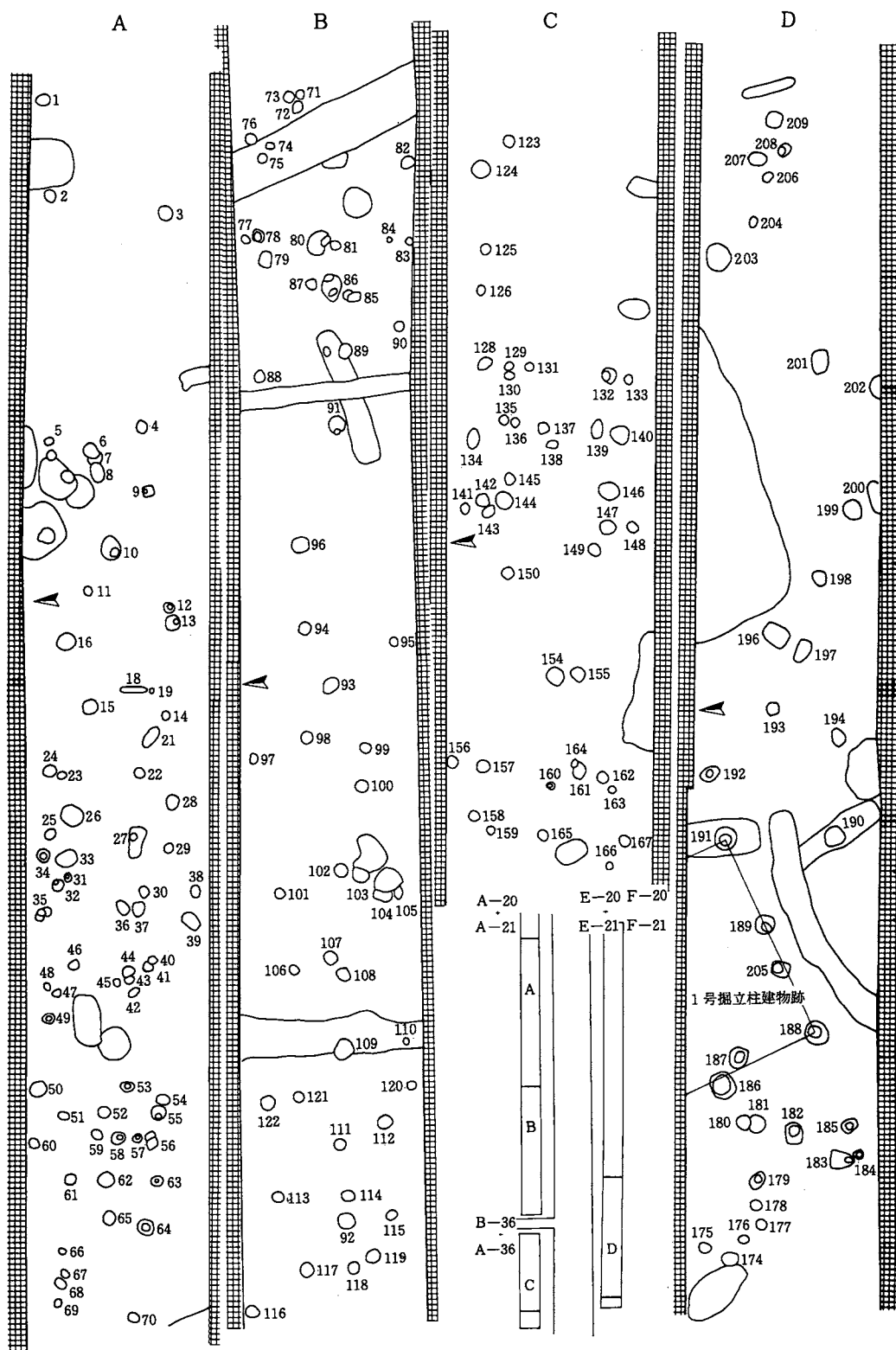


$$S = \frac{1}{3}$$

（土器観察表）

実測図	写真	登録番号	種類	器種形式	径量			外面調整			内面調整			形成	切り離し	分類	その他
					口縁径	底径	器高	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部				
		p.h.92-1	H	杯													

第173図 92号柱穴跡内出土遺物



第174图 柱穴迹群·掘立柱建筑物迹平面图 (S=1/50)

表4 溝跡属性表

No	検出区	規模		底面形状	方向	出土遺物	その他	
		長さ	幅					長さ
1	B 9	-	0.52	0.15	U	NE-SW	H	
2	B11	-	0.72	0.08	U	N-S		新
3	B11	-	0.25	0.07	U	NE-SW	H	
5	B11	-	0.16	0.1	U	N-S		
6	B12	-	0.97	0.2	U	NE-SW	H	礎
7	B11	-	0.27	0.1	U	NW-SE		
8	B15	-	0.34	0.1	U	NW-SE	H	
9	F 9	-	2.86	0.8	U	N-S	H, S	礎
11	B29	-	0.96	0.15	U	NW-SE	H	
12	B30	-	0.33	0.1	U	N-S		
13	B21	-	1.4	0.55	U	N-S	H, S	礎
14	B20	3.44	0.26	0.07	U	W-E	H	
15	F36	-	0.7	0.2	U	N-S		
17	F37	-	0.49	0.2	U	NW-SE	H	
18	F36	-	0.42	0.07	U	NW-SE	H	
19	F17	-	0.25	0.07	U	NE-SE	H	
21	F26	-	1.34	0.15	U	W-E	H, A	
22	F33	1.0	0.19	0.15	U	N-W	H	
23	F31	-	0.69	0.1	U	N-W		
24	B33	-	0.64	0.1	U	N-W	H, S	
25	P106	-	2.5	0.6	U	NE-SW	H, S	石部、礎
26	N99	-	1.6	0.4	V	NW-SE	H, S	
28	S113	-	2.55	0.2	U	NE-SW	H, S, A	
29	O114	-	0.72	0.2	U	NE-SW	H	
30	O113	-	0.82	0.15	U	NW-SE	H, S	
31	R110	-	0.56	0.25	U	NW-SE		
32	U119	-	0.49	0.2	U	NW-SE	H	
33	A'33	-	1.25	0.1	凹凸	N-S		
34	Z130	-	2.0	0.5	U	NW-SE	H, S	
35	A'34	-	1.68	0.4	U	NW-SE	H, S	
37	Y128	-	1.0	0.5	V	N-S	S	

単位14 m

表5 柱穴跡属性表

No	検出区	平面形状	規模		柱径跡径	出土遺物
			長さ	短径		
1	B-23	円形	25	23	38	-
2	B-23	円形	25	22	45	13
3	B-23	円形	29	27	8	-
4	B-24	円形	24	20	30	-
5	B-24	円形	17	15	15	-
6	B-24	円形	28	24	12	-
7	B-24	円形	29	26	6	-
8	B-24	楕円形	37	25	5	-
9	B-25	方形	25	20	8	7
10	B-25	円形	45	36	34	10
11	B-25	円形	17	16	18	-
12	B-25	円形	22	18	30	11
13	B-25	円形	30	28	25	11
14	B-25	円形	19	17	8	-
15	B-26	円形	24	22	42	-
16	B-26	円形	36	32	6	-
17	B-26	円形	30	28	35	-
18	B-26	溝状	49	11	6	-
19	B-26	楕円形	10	8	15	-
20	B-26	円形	17	16	23	-
21	B-26	楕円形	42	21	5	-
22	B-26	円形	22	20	8	-
23	B-26	円形	16	15	7	-
24	B-26	円形	25	23	9	-
25	B-26	円形	22	18	25	6
26	B-26	円形	42	39	15	-
27	B-26	楕円形	57	26	40	11
28	B-26	円形	28	24	15	-
29	B-26	円形	20	16	24	-
30	B-26	方形	18	18	30	5
31	B-26	円形	16	13	30	-
32	B-26	円形	24	22	20	9
33	B-26	楕円形	41	30	40	-
34	B-26	円形	24	23	32	13
35	B-27	不整形	34	17	25	-
36	B-27	円形	30	21	18	-
37	B-27	円形	28	24	14	-
38	B-26	円形	23	18	24	-

No	検出区	平面形状	規模		柱径跡径	出土遺物
			長さ	短径		
39	B-27	楕円形	38	21	6	-
40	B-27	円形	17	14	9	-
41	B-27	円形	20	19	6	-
42	B-27	楕円形	23	14	7	-
43	B-27	円形	18	14	15	-
44	B-27	楕円形	26	19	15	-
45	B-27	円形	16	12	27	-
46	B-27	円形	20	17	6	-
47	B-27	円形	15	15	5	-
48	B-27	円形	15	13	14	-
49	B-27	円形	22	19	22	11
50	B-27	円形	33	29	11	-
51	B-27	楕円形	22	15	8	-
52	B-27	円形	22	22	18	9
53	B-27	楕円形	25	17	20	9
54	B-27	円形	27	22	19	-
55	B-27	円形	27	25	12	11
56	B-28	円形	25	21	11	-
57	B-28	円形	18	17	10	6
58	B-28	円形	25	25	16	12
59	B-28	円形	22	17	25	-
60	B-28	円形	18	17	13	-
61	B-28	円形	22	19	15	-
62	B-28	円形	30	29	12	-
63	B-28	円形	22	21	13	8
64	B-28	円形	32	28	25	16
65	B-28	円形	25	22	26	-
66	B-28	円形	14	13	8	-
67	B-28	円形	17	13	12	-
68	B-28	円形	21	16	26	-
69	B-28	円形	16	12	7	-
70	B-28	円形	22	17	10	-
71	B-29	円形	16	16	11	-
72	B-29	楕円形	25	18	9	-
73	B-29	円形	22	21	8	-
74	B-29	円形	17	15	26	-
75	B-29	円形	18	17	30	-
76	B-29	円形	24	22	10	-

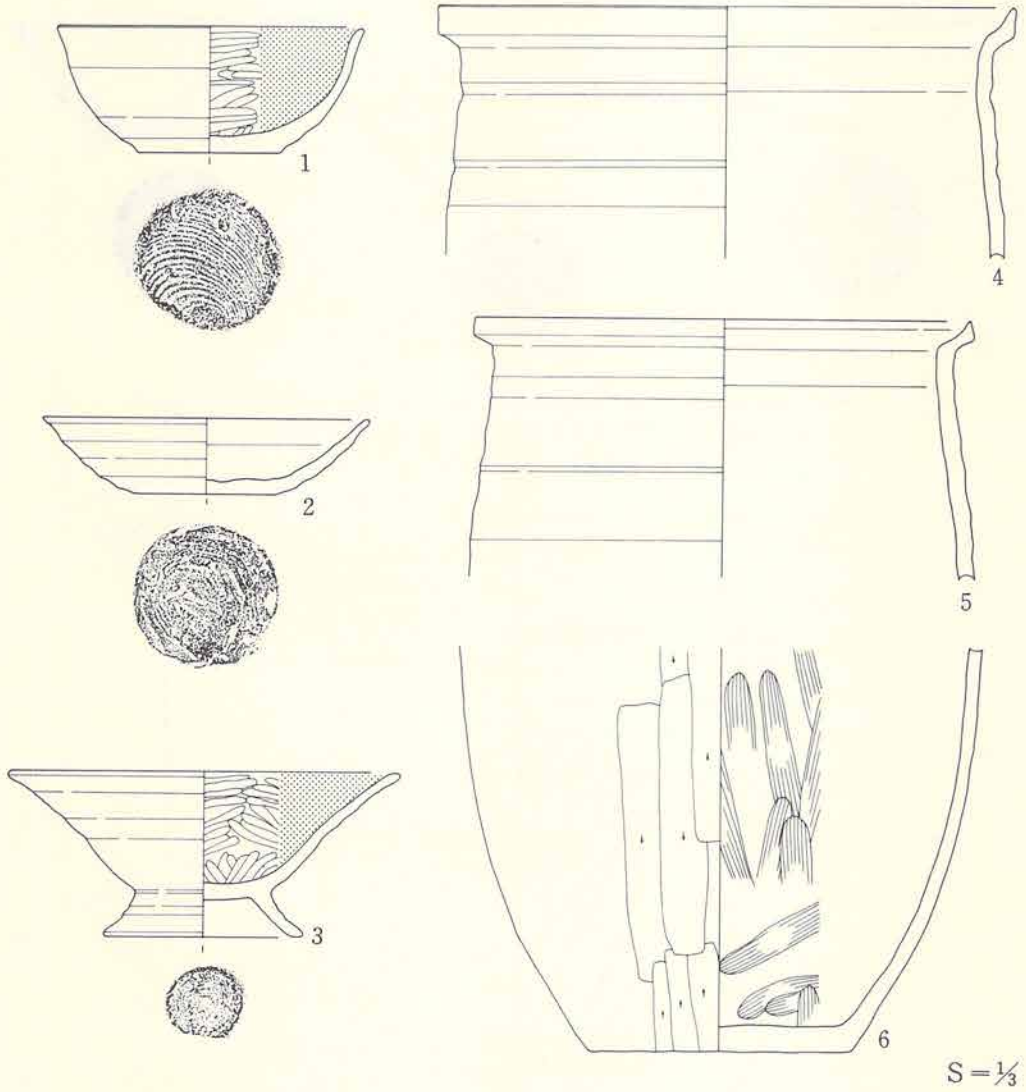
単位12 cm

No	検出区	平面形状	規模		柱径跡径	出土遺物
			長さ	短径		
77	B-29	円形	17	14	30	-
78	B-29	方形	22	20	17	12
79	B-29	方形	28	21	7	-
80	B-29	不整形	48	33	20	-
81	B-29	円形	18	16	8	-
82	B-29	円形	27	23	21	-
83	B-29	円形	16	15	18	-
84	B-29	円形	12	11	23	-
85	B-29	楕円形	27	17	23	-
86	B-29	楕円形	52	38	23	19
87	B-29	円形	20	19	23	-
88	B-30	円形	24	21	27	-
89	B-30	円形	28	25	35	-
90	B-30	円形	21	20	10	-
91	B-30	円形	31	31	16	-
92	B-31	円形	33	30	33	柱礎、土器
93	B-31	円形	34	26	26	-
94	B-31	円形	25	24	25	-
95	B-31	円形	18	16	20	-
96	B-31	円形	32	29	10	-
97	B-32	円形	20	14	16	-
98	B-32	円形	24	22	16	-
99	B-32	円形	22	20	16	-
100	B-32	円形	25	23	19	-
101	B-32	円形	20	19	11	-
102	B-32	円形	26	25	28	-
103	B-32	円形	33	26	18	-
104	B-32	円形	35	-	13	-
105	B-32	円形	26	22	16	-
106	B-33	円形	18	18	9	-
107	B-33	円形	26	25	14	-
108	B-33	円形	26	24	10	-
109	B-33	円形	38	34	36	-
110	B-33	円形	13	12	17	-
111	B-33	円形	26	24	28	-
112	B-33	円形	27	26	27	-
113	B-34	円形	22	21	15	-
114	B-34	円形	25	21	18	-

No	検出区	平面形状	規模		柱径跡径	出土遺物
			長さ	短径		
115	B-34	円形	20	20	7	-
116	B-34	円形	42	40	20	15
117	B-34	円形	28	25	21	-
118	B-34	円形	23	22	9	-
119	B-34	円形	28	25	9	-
120	B-33	円形	17	16	12	-
121	B-33	円形	20	19	16	-
122	B-33	円形	27	26	28	-
123	B-36	円形	22	21	15	-
124	B-36	円形	34	32	6	-
125	B-36	円形	21	19	5	-
126	B-37	円形	19	16	16	-
127	B-37	円形	30	22	13	-
128	B-37	円形	18	17	11	-
129	B-37	円形	17	15	5	-
130	B-37	円形	29	25	24	-
131	B-37	円形	17	16	8	-
132	B-37	円形	29	25	24	-
133	B-37	円形	17	16	12	-
134	B-37	楕円形	39	24	20	-
135	B-37	円形	20	18	5	-
136	B-37	円形	19	17	8	-
137	B-37	円形	22	18	16	-
138	B-37	円形	20	15	13	-
139	B-37	楕円形	38	20	13	-
140	B-37	円形	37	32	30	-
141	B-38	円形	20	16	15	-
142	B-38	円形	26	24	15	-
143	B-38	円形	26	20	18	-
144	B-38	円形	34	30	18	-
145	B-37	円形	24	20	18	-
146	B-37	円形	41	33	19	-
147	B-38	円形	30	26	18	-
148	B-38	円形	22	17	21	-
149	B-38	円形	25	20	10	-
150	B-38	円形	24	22	12	-
151	B-38	円形	14	14	6	-
152	B-38	円形	14	14	13	-
153	B-38	円形	20	20	19	-

No	検出区	平面形状	規模		柱径跡径	出土遺物
			長さ	短径		
154	B-38	円形	34	32	6	-
155	B-38	円形	27	27	7	-
156	B-39	円形	24	21	15	-
157	B-39	円形	25	24	18	-
158	B-39	円形	20	18	14	-
159	B-39	円形	16	15	10	-
160	B-39	円形	15	15	12	-
161	B-39	円形	27	24	27	-
162	B-39	円形	23	22	15	-
163	B-39	円形	15	13	12	-
164	B-39	円形	16	11	17	-
165	B-39	円形	21	20	18	-
166	B-39	円形	14	13	10	-
167	B-39	円形	22	22	18	-
168	F-19	楕円形	52	39	30	-
169	F-19	円形	27	26	14	-
170	F-19	円形	26	24	14	-
171	F-19	円形	37	28	29	-
172	F-19	円形	27	25	6	-
173	F-19	円形	44	37	8	-
174	E-38	円形	30	22	7</	

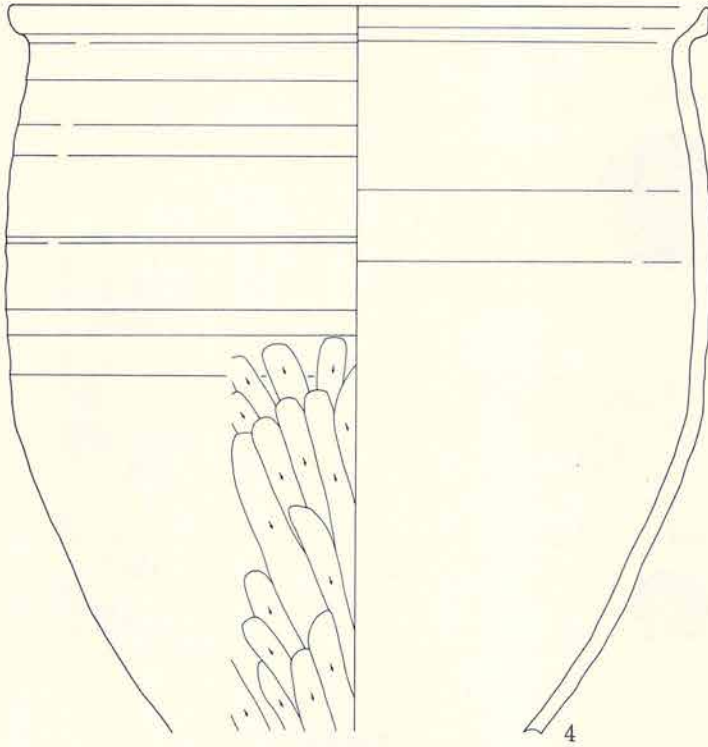
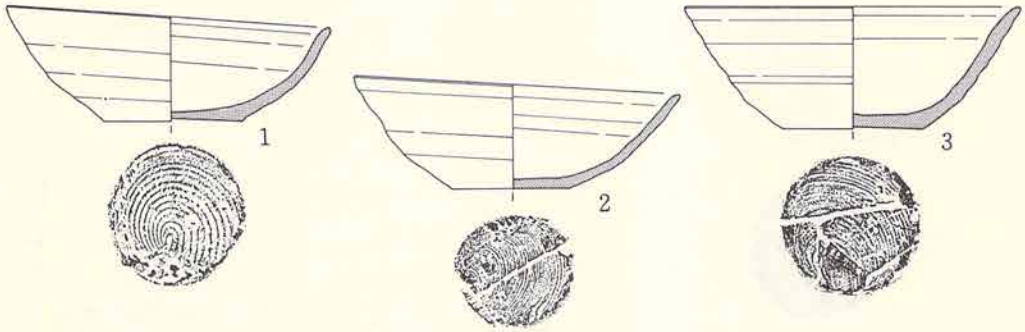
5. 遺構外出土の遺物



(土器観察表)

実測図	写真	登録番号	種類	器種形式	坯量			外面調整			内面調整			形成	切り離し	分類	その他
					口縁径	底径	器高	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部				
173-1	67-8	XXIX-1bW111	H	杯	12.2	5.6	5.1	-	-	-	m	m	m	ロクロ	糸切り	d	
173-2	67-7	XXIX区-Ib層119	H	杯													
173-3	67-13	XXIX-1bW115	H	高台付杯	15.7	7.9	6.6	-	-	-	m	m	-	ロクロ	糸切り		
173-4		XXIX-1bW124	H	甗	23.1	-	-	-	-	-	-	-	-	ロクロ		(d)	
173-5	67-5	XXIX-1bW115	H	甗	19.7	-	-	-	-	-	-	-	-	ロクロ		(中)	
173-6		XXIX-1bW123	H	甗	-	10.3	-	-	k	k	-	n	n	非ロクロ		(大)	

第175図 遺構外出土遺物(1)

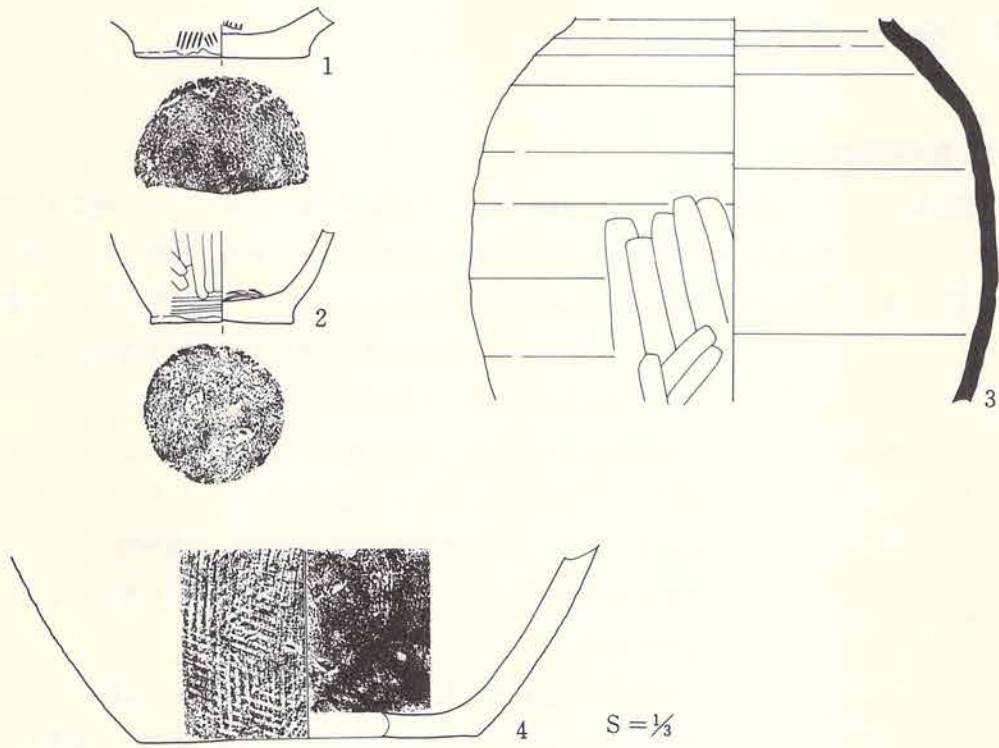


(土器観察表)

S = 1/3

実測図	写真	登録番号	種類	器種形式	坯量			外面調整			内面調整			形成	切り難し	分類	その他
					口縁径	底径	器高	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部				
174-1	67-10	XXR-1sW16	A	坏	12.8	5.5	4.1	-	-	-	-	-	-	ロクロ	糸切り	4	
174-2	67-11	XXR-1sW18	A	坏	12.9	4.7	4.1	-	-	-	-	-	-	ロクロ	糸切り	4	
174-3	67-9	XXR-1sW17	A	坏	13.3	5.5	4.8	-	-	-	-	-	-	ロクロ	糸切り	4	
174-4	67-4	XXR-1sW17	H	甕	19.6	-	-	-	k	-	-	-	-	ロクロ		(中)	

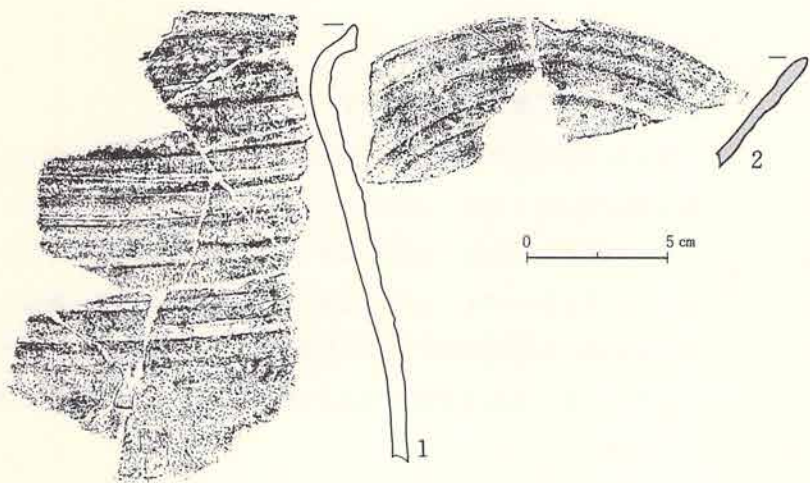
第176図 遺構外出土遺物 (2)



(土器観察表)

実測図	写真	登録番号	種類	器種形式	坯量			外面調整			内面調整			形成	切り離し	分類	その他
					口縁径	底径	器高	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部				
176-1		X II 区 231	H	鉢	-	6.9	-	-	h	-	-	-	-	非ロクロ	-		
176-2		X II 区 232	H	鉢	-	5.6	-	-	m n	-	-	-	k	非ロクロ	-		
175-3		X II 区 18	S	鉢	-	-	-	-	k	-	-	-	-	非ロクロ	-		
177-4		X VI 区 - 50	S	鉢	-	-	-	-	-	-	-	-	-	非ロクロ	-		

第177図 遺構外出土遺物(3)

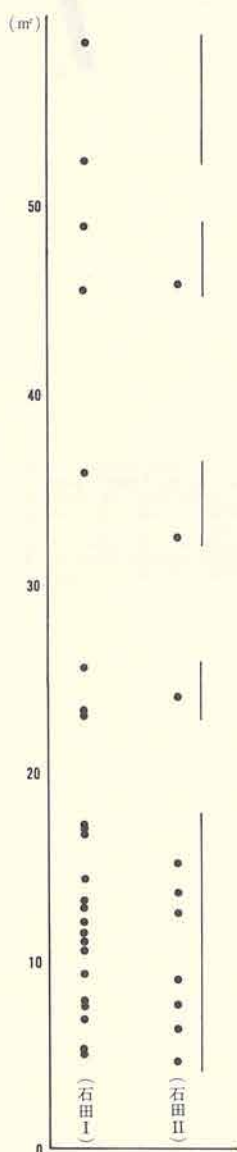


第178図 遺構外出土遺物(4)

VI 分析と考察

1. 竪穴住居跡について

今回の調査によって検出された竪穴住居跡の中で、平安時代（Ⅲ-1期以降）に構築されたと考えられるものは使用から廃絶に至る時期が明確でなく同時代性の確定が困難である。従って、出土土器と住居形態からほぼ同時期に営まれたと考えられる国分寺下層式期の竪穴住居跡



第179図 国分寺下層式期
竪穴住居跡の床面積

について検討する。この期の竪穴住居跡は、石田 I 遺跡においても多数検出されており、あわせて検討の対象としたい。

両遺跡はごく近接し、ほぼ同時期のものがあることから、この時代一つの単位をなしていた可能性が大きい。ただし、すべてが同時存在であったとは考えられていないし（八重樫他 1981）、その検証手段はむずかしい。数10年程度の年代幅を想定しておく必要がある。

住居跡の床面積を比較する（第179図）。床面積の広狭が何を反映しているか、この際問わない。図に明らかなように、石田 I・II 遺跡の竪穴住居床面積はそれぞれほぼ対応し、大きく5つのまとまりを見ることができる。20㎡以下のものが圧倒的に多い。20～30㎡のものは4棟、それ以上のものはそれぞれ1～2棟である。

このようなあり方が、この時期の平野部における一つの様相であろうと予想される。

2. 国分寺下層式土器について

国分寺下層式土器とそれに時間的に併行する土器群について、岩手県内ではⅡ-2群（高橋1982）、7-b群（遠藤他 1983）として把握されている。実年代は8世紀の後半と想定されている。今回の調査においても、2号住居跡・4号住居跡・7号住居跡・8号住居跡・9号住居跡・13号住居跡等より、当該土器型式期として考えられてきた土器群と共通する特徴を有している資料が得られている

ここでは、北上川中流域における国分寺下層式の一例として調

査によって得られた資料を掲げ、その特徴をほぼ同時期の他遺跡と比較する。^(注1)

石田II遺跡出土甕を、その形態的特徴から3類に分ける。

a類 丸底もしくは平底風丸底を呈し、体部ほぼ中央に段または沈線を有するもの

b類 丸底もしくは平底風丸底を呈し、段、沈線等が施されないもの

c類 平底風丸底を呈し、口縁直下に浅く太い沈線がめぐるもの

ただし、それぞれ中間的形態を認めうる。これら3類は多少の量的変異を有するものの、a中・b類において丸底・平底風丸底を問わず埋土中から出土している。出土状態に個々に変わった点は見られないことから、それらはほぼ同時期に堆積したものと考えられる。

次に甕を分類する。

中形甕 口一頸部高(深澤1985)が、おおむね20~25cm程度のもの

小形甕 口一頸部高が、10~18cm程度のもの

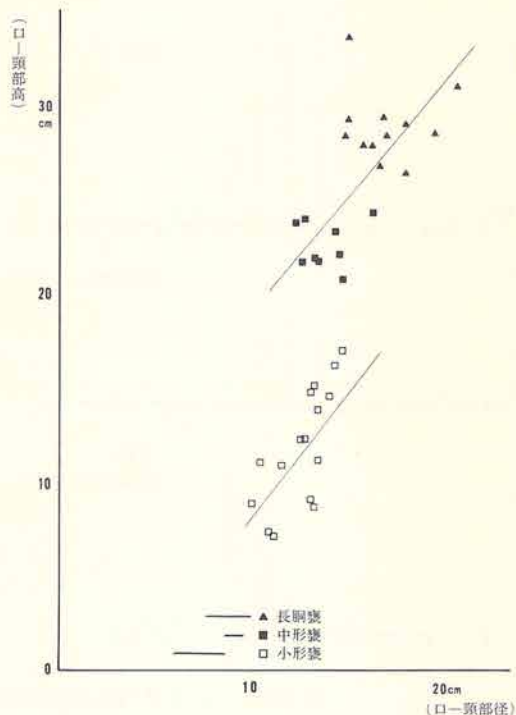
ただし、胴張りのものは壺、器高10cm未満のごく小さなものを小形鉢として分離した。しかし、今回の調査によって出土した甕の総量は少なく、しかも大形品ほど復元が困難であるという事実がある。そこで、石田I遺跡の出土甕を用い分類の一助とすると(第180図)

長胴甕 口一頸部高がおおむね27cmを超えるもの

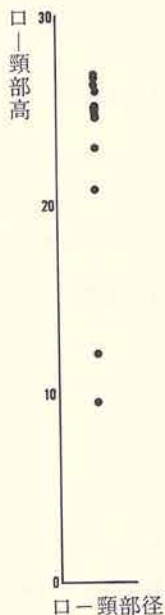
を加えることができる。従って甕も3類に分けられる。長胴甕と中形甕において口一頸部径と口一頸部高の間はほぼ一定に変化し、前者によって後者の推定がある程度可能である。^(注2)しかし、体部下半の場合は、中形甕の底径が長胴甕包括され、底径から口一頸部高の推定は不可能である。(第181図)。

従って、石田II遺跡出土甕の各々の量的割合の算出は断念せざるをえない。

まず、坏について見る。各類について口縁径を比較する。形態が単純でない場合、もっとも容易に大きさを比較することができる(第182図)。20cm前後あるいはそれを超える一群が存在する。a・b・c各類を含んでいる。一方、a類は12~13cmを頂点としてほぼ1つの山を形成する。ところがb類は、10~11cmのものと13~15cmのものに分かれる。その間をa類が補完しているような状況である。



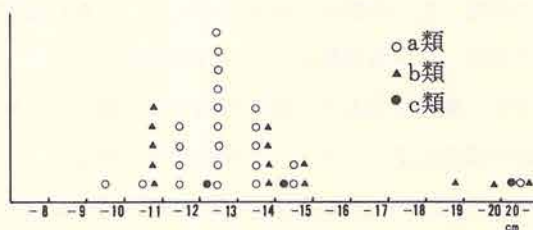
第180図 石田I遺跡出土甕の分類



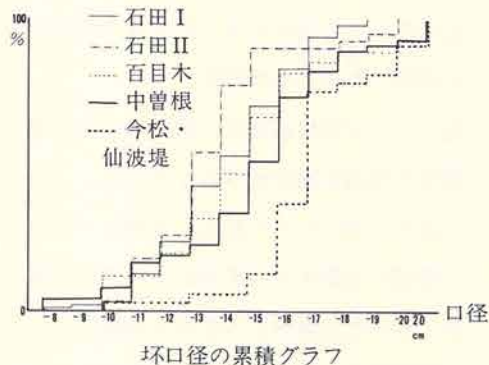
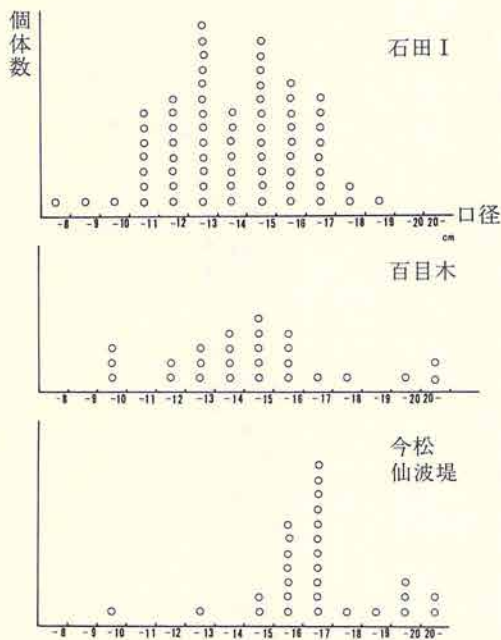
第181図 石田II遺跡出土甕の大きさ

c類は散在する。明らかに大形品と認められうるものを除外すれば、この結果だけから坯の大きさにいくつかのまとまりを認めることは困難である。同様なことは石田I遺跡出土資料についてもいえる。一方、北上川上流域あるいは馬淵川流域では多少明確に大きさが分化している傾向が認められる。こうした坯の大小が機能的に何を反映したものであるか不明である。今後資料を蓄積していく必要があるが、地域によってはこうした規準による坯の分類が可能となりその意味づけを行っていく必要がある。

しかし、坯の大きさは同時代の遺跡を単位として見た場合、ある程度地域差を反映していると考えられる。この時代、日常用土器について未だ狭い地域内での需給関係が保たれていたと考えられるからである。この考えのもとに同様のデータを累積



第182図 石田II遺跡出土坯の口径



第183図 岩手県内各遺跡の坯の口径とその累積グラフ

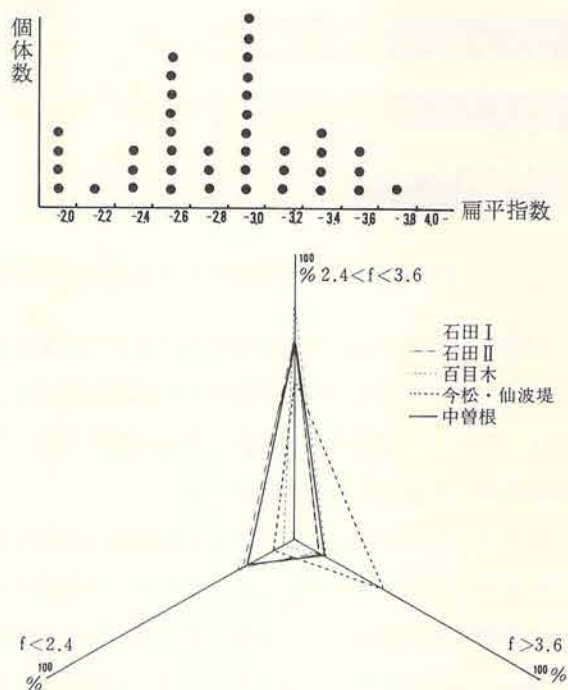
グラフ化してみる（第183図）と石田Ⅰ遺跡と中曽根遺跡の中間に百目木遺跡が存在しており、これについて地域差として解釈することができる。一方、石田Ⅱ遺跡と今松、仙波堤遺跡の場合は、あたかも線対称に3遺跡とかけはなれており、地域差として解釈できない差異を含んでいる。

この差異が偶然性によるものではないことを検証するために、坯の形態比較を行う。形態もまた土器製作段階における製作者の差を敏感に反映していると考えられる。形態を数量化する手段として扁平指数（口径／器高）を算定した。その結果は第184図のとおりである。明らかに今松・仙波堤遺跡の場合は扁平な坯の割合が多く、石田Ⅰ、石田Ⅱ、中曽根の3遺跡は程度の差こそあれ相似的な三角形を描いているといえるだろう。百目木遺跡は、中間的な形態が突出気味であるが、扁平な坯の割合が多くないことから程度の差に包括しうるものとする。

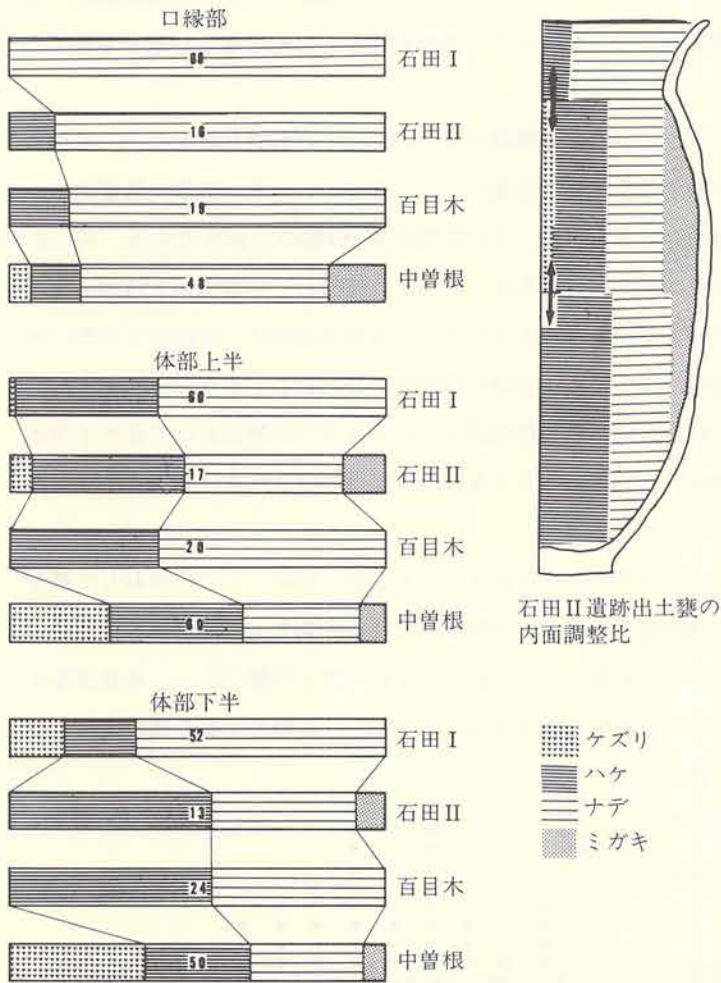
以上の2つの結果から、明らかに今松、仙波堤遺跡は坯の大きさ・形態において他の4遺跡とは異質である。型式論的見地から、このような大きさ・形態の坯はより古い栗園式的な様相を呈しているといえよう。

次に甕について見る。甕はその大きさが3分されうることを示したが、ここではおもに調整技法について検討する。石田Ⅱ遺跡出土の甕は、おおまかに粘土紐巻き上げ成形→各種調整→焼成の段階をへて製品化されている。長胴・中形・小形いずれの甕も同様である。各種調整は、ケズリ、ハケメ、ナデ、ミガキがある順序で配列される。しかし、実際の土器の観察において重なりあった調整技法の種類と順序を復元することはきわめて困難である。特に、器表面においては成形後複数の調整が加えられる場合が多いようである。一方、器内面については器表面ほど装飾効果が求められることもなく、比較的純粹に一次的な調整痕を残している場合が多い。これを観察し、数量化した（第185図）。

口縁部内面と体部上半・下半の内面調整の手法はきわだった相違を見せる。口縁部内面は、口縁部外面と同様にヨコナデが主流となる。ハケメは一次調整に伴うものである。体部上半・下半は、だいたい同じ傾向を示す。ハケメ



第184図 石田Ⅱ遺跡出土坯の扁平指数(f)と県内各遺跡との比較



第185図 県内各遺跡における甕の内面調整

とナデはほぼ同じ割合、ハケ調整の後へラナデされる例もごく少量観察される。ケズリよりミガキに近い調整が見られる。

これを、石田II遺跡・百目木遺跡・中曽根遺跡と比較し、甕内面の調整技法における地域性をうかがう。明らかに口縁部内面では北上するにつれてナデ以外の調整がその痕跡を残す割合が増加する。体部上半・下半は似たような傾向で、ハケとナデが相なかばする北上川流域からケズリ・ハケ・ナデの3者が鼎立する馬淵川流域へという流れが認められる。

甕内面の調整技法は、単に外見からのみ判断することは不可能である。だとすると、器外面の調整あるいは土器の形態が用意に模倣



の対象となり得ても、内面の調整技法はその対象となり得ず、変化しにくい土器の要素の一つと考えられる。従って、土器製作者の伝統的手法がより深く反映されるものと理解される。石田I・石田II・百目木の3遺跡と中曽根遺跡の間に見られる差異は、時間的な差異ではなく土器製作者の地域的伝統の差異であろう。

以上の分析の結果、これまでほぼ同時期と考えられていた遺跡の中でも、坏の大きさ・形態に差異の認められるものが含まれており、年代差である可能性を考慮することができた。また、甕の調整技法の相違から土器製作者の地域性を指摘した。こうした土器の種々の差異の問題は、今後同時期のものにとどまらず、前後の土器群をもその比較対象としていく必要がある。それ

によって国分寺下層式期およびそれと併行する時期の土器群の性質がより明らかになると考えられる。

3. 線刻のある土師器について (第186、187図)

今回の調査によって出土した土器に、線刻をもつものがある。須恵器坏1点、土師器坏13点計14点である。すべて坏の底部に限られる。この線刻はへら状の工具で描いているもので、「へら書記号」「刻印」などとよばれ、奈良・平安時代の土師器・須恵器・あかやき土器および擦文土器に広く認められるものようである(吉沢1984、松下1986)。特に、平安時代の土器に見られる線刻については墨書との関連が考えられている。

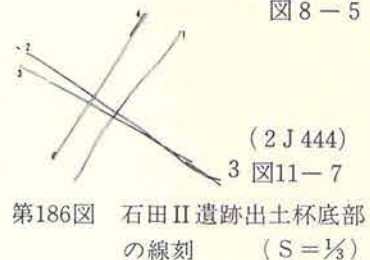
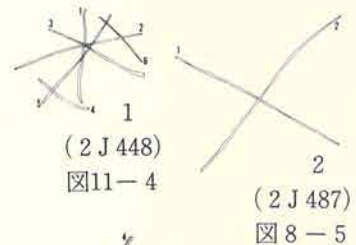
出土資料を検討しよう。須恵器坏底部の線刻は1例のみであるが、先端の鋭い工具で×を描く(第187図-23)。一方、土師器坏底部の線刻は、ごく細く先端の鈍い工具で×、、などを描いたものである。これらは、そのモチーフに類似する部分もあるが、施文具、掘り込みの深さ、土器自身の年代から、分けて考える必要がある。

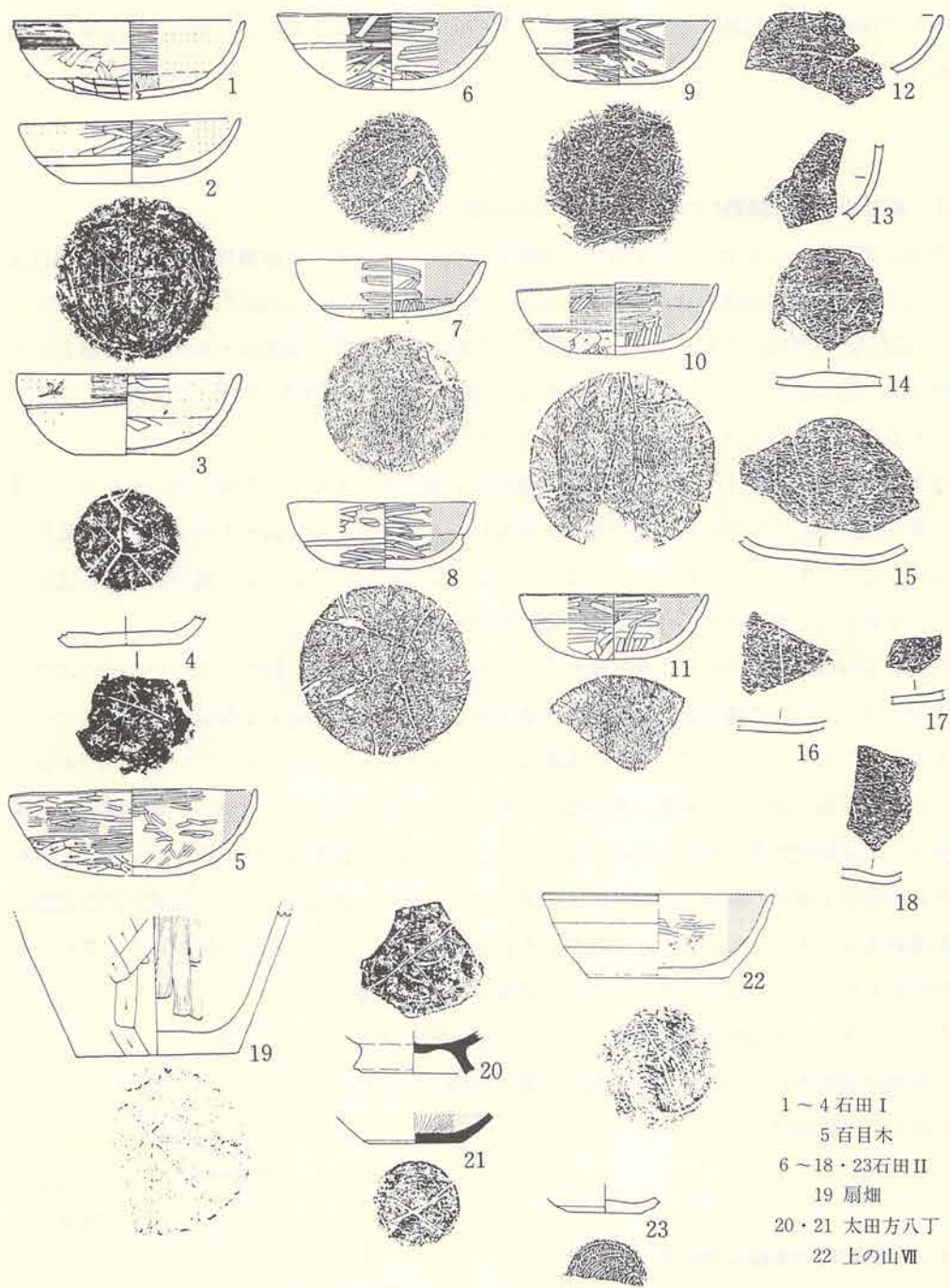
同様に岩手県域出土の当該期の線刻ある土器を拾ってみると、報告されているものは国分寺下層式坏4点、その他平安時代の土器が数点ある。これらに共通する部分は、文様モチーフが×を基盤としていること(注3)で、文様の変異はこれに描き加えて生み出されていることである。

しかし、今回の出土例と同様、他遺跡出土例についても例外なく、国分寺下層式坏底部の施文具と、平安時代土器とのそれは異なるものようである。前者は、坏の中でもa類に限定される。国分寺下層式坏底部の線刻報告例は多くなく、宮城・福島両県では、宮城県清水遺跡など数遺跡のみである。しかも、この線刻にきわめておぼろげなものがあり従来見のがされてきた可能性もあろう。今後、注意して事例を収集していく必要がある。いずれ、平安時代の土器の線刻と国分寺下層式坏底部の線刻は区別されるべきであり、擦文土器「刻印」との安易な結びつけは避けたい。

4. 平安時代の土器について

今回の調査において、平安時代の土器は寺領・西光田I遺跡を中心として出土している。しかし、今日まで当該期の土器研究は、奈良時代以前のそれに比して進展を見ているとはいえない。もちろん、遺跡の調査事例は決して少なくなく、





- 1 ~ 4 石田 I
- 5 百目木
- 6 ~ 18・23 石田 II
- 19 扇畑
- 20・21 太田方八丁
- 22 上の山 VII

第187図 石田II遺跡および県内各遺跡出土の線刻を有する土器

各種遺構の検出とともに相当の成果をあげているという事実はある。増大する資料をもとに、統計学的分析もなされてきている。土器製作の技術的復元が進められてきている。官衙遺跡出土資料を中心に絶対年代の比定もなされてきている。それにもかかわらず土器研究が混乱しているという印象は否めない。

二つの理由をあげよう。一つは編年研究の成果が充分でないことである。ロクロ使用以前の土器が、その細かな形態差に年代差を敏感に反映していたのに対し、ロクロ使用の土器については形態・調整技法のおおまかな推移がとらえられているだけである。しかも、それはある一定量の土器に対して総体的に与えられたものであって、個々の土器の年代を位置づけるものではない。例えば、森（1983）によれば、遺構内出土の一括資料によって口径に対する底径の割合を土師器坯について見た場合、50%を超えるグループ（第2段階）、40～50%のグループ（第3段階）、40%以下を含むグループ（第4段階）に分けられ、その順序における年代の変遷が認められるという。また、白鳥（1980）は多賀城跡出土土器を層位的に検討し、8世紀後半から10世紀後半にかけての土器群を5段階に区分している。前者は、それまで感覚的にとらえられていた土師器坯の形態変化を数量化したことに特色があり、岩手県域にも適用が可能であろうと考えられる。しかし、実際に編年研究に困惑を感じているのは、第4段階に相当する土器群の細分であり、今回の調査結果を見ても16号住居跡・67号土坑・68号土坑出土土師器はその段階とされる形態のものであった。

22号住居跡中・37号住居跡中・58号土坑出土土師器は量的にも恵まれず、この方法では明確に区分しえないと考える。後者は、土師器・須恵器から施釉陶器までをも含めた資料がそれぞれの段階において量的変化または調整技法を伴う変化が認められるとされるが、本遺跡のような例で個々の遺構ごとに見る場合、出土資料をただちにその5段階編年に否定することはかなりむずかしいのではないだろうか。一遺構内の資料はそれほど多くなく、ある段階を代表する土器群としての量的保証が得られないと考えられるからである。段階設定の示標が多いほど、一般的な集落遺跡ではこうした問題に直面することになる。

従って、今回の報告においては個々の遺構についての製作・使用・廃絶年代を考慮する際に、当該期土器群をⅢ-1期、Ⅲ-2期の2段階に区分するとどめた。それぞれ高橋（1982）のⅢ-1群、Ⅲ-2群に対応する時期である。前者は9世紀前半を中心に、後者は9世紀後半以降と考えられている。

もう一つの理由は、土器の定義をめぐる問題である。これは、そのまま「須恵系土器」「あかやき土器」「赤焼土器」「赤褐色土器」等をめぐる問題であると考えられるだろう。概念は異なるがほぼ同じ実体を示す土器の呼称についての議論が10年以上に亘って行われており、現在に至っても明確な結論が得られていない。この間の研究史とその問題点について、太平洋側を

中心に小井川（1984）が、日本海側を中心に渋谷（1984）がそれぞれ論じている。しかし、なぜ一定の共通した特徴を有している土器の定義の決定に長い年月を要しているのだろうか。その最大の理由は、この時代の全体的な土器生産体系の中で土師器・須恵器・あかやき土器を理解し定義づけようと試みられているためであり、その範囲は単に技術的な問題にとどまらず、国家体制の中での土器生産の歴史的な理解にまで及んでいる。また、技術的側面に立脚して当該土器の定義づけを試みる場合でも、製作のどの段階の技術を重視するかによって、個々の研究者間の定義が異なってくるようである。

ここで、該種土器についていかなる定義が妥当で、またどの名称を用いるべきかについて詳細に論じるつもりはない。本報告においてあかやき土器として報告したものは、内黒処理を伴わない酸化炎焼成の坏と、成形にタタキを用いた酸化炎焼成の甕を指している。この二者は、他の土師器、須恵器と明解に区別しうるものである。ただし、後者についてはタタキ後の調整によってその痕跡を残していない甕の存在を想定する余地があり、どの程度その全体を把握しているか検証が困難である。坏・甕以外の器種をあかやき土器と見なすかどうかとともに、今後の検討課題である。

5. 緑釉陶器について（写真図版60-5）

58号土坑埋土中より緑釉陶器片が1点出土している。碗の一形式でいわゆる稜碗と呼ばれているものである。内外面ともに非常に顕著に細かなへらミガキが施される。胎土は灰色ないし明灰褐色、緻密で軟質である。釉調は淡い若草色である。貫入は見られない。

伊藤博幸氏の御教示によれば、本陶器は尾北産、篠岡47号窯式または篠岡4号窯式のものであり、その年代は9世紀後半であるという。絶対年代の根拠として、胆沢城跡第43・44次発掘調査において出土した施釉陶器と承和10（843）年、嘉祥元（848）年の暦年代を示す漆紙文書との共伴があげられるという。

施釉陶器の実年代を知り得る資料が前川要氏によって集成されている（1987）。それによれば上記胆沢城跡のほか、以下の資料があげられている。

平安宮民部省出土灰釉陶器	9世紀後半	黒笹90号窯式
北野廃寺土壌S K20出土建物群	9世紀末	同 上
鴨遺跡出土資料	9世紀後半	同 上
平城京平城土皇関係資料	9世紀前半	黒笹14号窯式
城山遺跡出土資料	9世紀前半	同 上
恒川2号住居址出土遺物群		同 上

また、相対的編年順序として「黒笹14号窯式」から「黒笹90号窯式」への変遷がうたてられており、前者を9世紀前半を中心とする時期、後者を9世紀後葉を中心とする時期に比定することが可能であるという。

一方、岩手県内において今日まで知られている緑釉陶器を出土している遺跡とその資料の一部は表6のとおりである。このうち、胆沢城跡からは300点を超える施釉陶器が出土しており、また、このほか灰釉陶器を出土している遺跡が少数存在する（紫波郡紫波町比爪館跡、胆沢郡胆沢町小十文字遺跡、江刺市落合II遺跡など）。表中の窯式および年代はそれぞれ当該遺跡の報告によっているが、これらのうち、尾北窯産とされる万丁目遺跡と下羽場遺跡出土の資料は製作年代の再検討とそれに伴って資料そのものの有する性格を考慮する必要がある。

今回出土した資料についても9世紀後半の製作年代が与えられるが、共伴する土師器・あかやき土器の製作年代をそのまま表すものかどうか、なお検討の余地があろう。東海系緑釉陶器が「破損頻度の高い在地産土器のような日常什器としては考えられない」（前川 前揚 141頁）からである。しかし、少なくとも廃棄の同時性は良く表すものと考えられ、今後比較資料の増加を待ってこの問題を解決していく必要がある。

表6 岩手県内出土の緑釉陶器

No	遺跡名	所在地	種類	器種	窯式	年代	特徴	伴出遺物	文献
-1	胆沢城跡	岩手県本沢市宇内田、北極沢他	緑釉	瓶	黒笹14号窯式	9C後半	ヘラケズリ→ヘラミガキ 胎土須恵器色堅緻、深い緑釉	土師器、須恵器、あかやき土器 灰釉陶器、青磁、白磁、漆紙	伊藤他(1984)
-2	同上	同上	緑釉	瓶	同上	9C後半	ヘラケズリ→ヘラミガキ 胎土灰白色堅緻	土師器、須恵器、あかやき土器 灰釉陶器、青磁、白磁、漆紙	同上
-3	同上	同上	緑釉	瓶	同上	9C後半	ヘラケズリ→ヘラミガキ 胎土灰白色堅緻	土師器、須恵器、あかやき土器 灰釉陶器、青磁、白磁、漆紙	同上
-4	同上	同上	緑釉	瓶	同上	9C後半	ヘラケズリ→ヘラミガキ 胎土明灰色硬質	土師器、須恵器、灰釉陶器	同上
-5	同上	同上	緑釉	瓶	同上	9C後半	ヘラケズリ→ヘラミガキ	土師器、須恵器、灰釉陶器	同上
-6	同上	同上	緑釉	瓶	同上	9C後半	ヘラケズリ→ヘラミガキ 胎土灰白色、緻密、硬質	土師器、須恵器、あかやき土器 灰釉陶器、青磁、白磁、漆紙	同上
-7	同上	同上	緑釉	瓶	同上	9C後半	ヘラケズリ→ヘラミガキ 胎土灰白色軟質	土師器、須恵器、漆紙	同上
-8	同上	同上	緑釉	瓶	同上	9C後半	ヘラケズリ→一部ヘラミガキ 胎土明灰色硬質	土師器、須恵器、灰釉陶器 青磁	同上
-9	同上	同上	緑釉	皿	同上	9C後半	胎土灰褐色やや軟質 深い緑色		同上
-10	同上	同上	緑釉	皿	同上	9C後半	ヘラミガキ、若草緑 胎土赤褐色軟質		同上
-11	同上	同上	緑釉	皿	同上	9C後半	ヘラケズリ→ヘラミガキ 胎土灰白色緻密軟質、貫入	土師器、須恵器、あかやき土器 灰釉陶器	同上
-12	同上	同上	緑釉	瓶	同上	9C後半	ヘラケズリ→ヘラミガキ 胎土灰白色緻密、軟質		同上
-13	同上	同上	緑釉	瓶	同上	9C後半	ヘラケズリ→ヘラミガキ 胎土灰白色緻密、軟質		同上
-14	同上	同上	緑釉	瓶	同上	9C後半	弱ミガキ 胎土灰白色軟質、若草緑		同上
-15	同上	同上	緑釉	皿	同上	9C後半	ヘラミガキ 胎土暗赤褐色硬質、若草緑		同上
-16	同上	同上	緑釉	皿	同上	9C後半	ヘラミガキ 胎土暗赤褐色硬質、若草緑	土師器、須恵器、あかやき土器 灰釉陶器、青磁、白磁、瓦	同上
-17	同上	同上	緑釉	皿	同上	9C後半	ヘラミガキ 胎土灰白色、緻密、硬質、若草緑		同上
-18	同上	同上	緑釉	皿	同上	9C後半	ヘラミガキ 胎土暗赤褐色硬質、若草緑		同上
-19	同上	同上	緑釉	皿	同上	9C後半	ヘラミガキ 胎土灰白色、緻密、硬質、若草緑		同上
-20	同上	同上	緑釉	蓋	同上	9C後半	ヘラミガキ 胎土明灰色堅緻、深い緑色	土師器、須恵器、あかやき土器 灰釉陶器、瓦	同上
-21	同上	同上	緑釉	蓋	備後瀬原 黒笹90号窯式	9C後半	ヘラミガキ 胎土白褐色、緻密、軟質、若草緑	土師器、須恵器、あかやき土器 灰釉陶器、白磁、瓦	同上
-1	万丁目遺跡	岩手県花巻市中根子30	緑釉	瓶	備後瀬原 黒笹90号窯式	10C前半		土師器、須恵器 灰釉陶器	中川他(1986)
-2	秋子沢遺跡	岩手県北上市二子野秋子沢	緑釉	皿?	不明	9C~10C	淡緑色釉 胎土須恵器質、灰色、硬質	土師器、須恵器 あかやき土器	菊池()
-3	竹花前遺跡	岩手県盛岡市土蔵妻竹花前62-1	緑釉	皿?	?	11C	内外面緑釉	土師器、須恵器 鉄製品	三上()
-4	飯塚寺跡	岩手県北上市稲瀬新宮内門前30	緑釉	不明	備後瀬原系	不明	淡緑 貫入 胎土灰褐色、硬質 面較赤褐色、花文 胎土灰褐色緻密、硬質	表面採集	板橋他()
-5	下羽場遺跡	岩手県紫波郡都南村岩場11	緑釉	皿	尾北窯産	11C中葉		遺構外	八重樫他()

6. その他の遺物

(1) 須恵器

今回の調査において出土した須恵器のうち、坏以外はほとんどが小片であり原形をとどめていない。須恵器を出土している遺構は次のとおりである。

2 J、14 J、15 J、16 J、19 J、22 J、24 J、25 J、29 J、30 J、31 J、32 J、33 J、34 J
37 J、6 P、13 P、36 P、43 P、57 P、67 P、69 P、9 M、13 M、24 M、25 M、26 M、28 M
30 M、34 M、35 M、37 M

これらから出土した須恵器の一部については、すでに遺構ごとに観察表を付してある。竪穴住居跡出土の須恵器は、22号住居跡出土資料を除いて小片がほとんどであり、多くは住居跡埋土とともに混入したか、一部は後世の土壌作用によってその大部分を欠失したものと考えられる。従って、竪穴住居跡廃絶の年代と須恵器片の埋没年代が一致するかどうかは各遺構ごとに慎重に決定されなければならない。個々の須恵器片の出土状況は、同一遺構内から出土している他の土師器片等と特に変わるものはなく、それらの埋没過程と同様に考えうるであろう。

一方、溝跡出土の須恵器は埋没の時間幅を広く考える必要があろう。特に、34号溝跡・35号溝跡から須恵器大甕・台付壺の大破片が検出されている。注意しなければならないのは、35号溝跡出土の大甕・台付壺である。これらがその製作年代がそれぞれ6世紀末頃までさかのぼる可能性があると考えられる。しかし、埋没の年代については、埋土中に回転糸切りによる切離しの土師器坏が含まれることから、須恵器の製作年代よりだいぶ新しく考える必要があろう。なお、これら須恵器の産地については胎土分析からは明らかにされなかった。

(2) 青・白磁(写真図版67-2, 3)

出土磁器はいずれも耕作土中のものであり、遺構との関係は明らかではない。2点出土しており、いずれも舶載品である。

白磁碗の口縁部片はややふくらみの弱い玉縁をなし、外面の口縁部直下には条線状のロクロ調整痕が残る。内外面ともうすい暗緑色がかった色調を呈し、光沢がある。素地は均質でうすい灰白黄色を呈する。口径は14.2cmほどと推定される。

青磁碗の体部片は腰部が肥厚し、内面の見込み境にくびれをもつ。内外面ともうすい黄緑色釉が被い、内面にへらによる画花文が描かれる。胎土は均質であるが、焼成が弱くうすい浅黄色を呈する。

注

(1) 検討対象とした遺跡、遺構は次のとおりである。

石田Ⅰ遺跡 Bh03住、Bi53住、Bh68住、Bh77住、Ci30住、Da30住、Ee30住、Eg09住、Be50住
(水沢市) Cg06住、Ch21住、Da15住、Da68住、Dd03住、Dg09住、Dj18住、Df59住、Dh56住
Ea50住、Ec27住

百目木遺跡 17住、18住、23住、39住、42住、48住、63住
(都南村)

今松遺跡 3住、4住

仙波堤遺跡 1住、2住、26住
(岩手町)

中曽根Ⅱ遺跡 50址、56址、64址、171址
(二戸市)

今松・仙波堤遺跡は、地理的に近接し従来から同一に扱われてきているため、ここでも一括して扱った。また、このほか江釣子村猫谷地遺跡、同村鳩岡崎遺跡が同時期の集落跡として著名であるが、資料の絶対数が少なく、ここではとりあげなかった。

(2) 長胴甕・中型甕については $Y=1.2X+7$ 、小形甕については $Y=1.3X-5$ で口一頸部高を算出した。ただしこの割合は遺跡ごとに異なってくるようである。

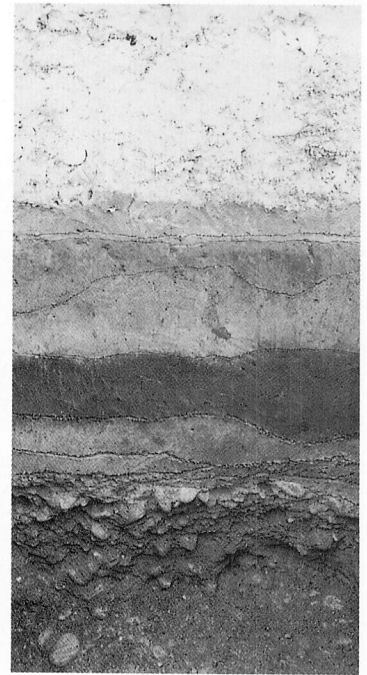
(3) 水沢市膳性遺跡は国分寺下層式期以前と考えられているが、やはり線刻ある坏が出土しているという。

参考・引用文献

- | | | | |
|--------------|-------|--|------------------------------------|
| 安部 庄 吉他 | 1981 | 『小文字遺跡発掘調査報告書』 | 岩手県胆沢 |
| 板橋 源他 | 1972 | 『北上市極楽寺跡』 | 北上 |
| 伊藤 博 幸 | 1976 | 「岩手県の古代土器生産について」 | 『岩手史学研究』61 29～47頁 |
| 伊藤 博 幸他 | 1981 | 『西光田遺跡発掘調査報告書』 | 水沢 |
| | 1983 | 『胆沢城跡昭和57年度発掘調査概報』 | 水沢 |
| | 1984 | 『胆沢城跡昭和58年度発掘調査概報』 | 水沢 |
| | 1987 | 『胆沢城跡昭和61年度発掘調査概報』 | 水沢 |
| | 1987 | 『水沢遺跡群範囲確認調査昭和61年度発掘調査概報』 | 水沢 |
| 伊藤 博 幸 | 1987 | 「七、八世紀エミシ社会の基礎構造」 | 『岩手史学研究』70 27～63頁 |
| 岩手県埋蔵文化財センター | 1985 | 『岩手の遺跡』 | 岩手県都南 |
| 氏家 和 典 | 1957 | 「東北土師器の型式分類とその編年」 | 『歴史』14 1～14頁 |
| 氏家 和 典 | 1967 | 「陸奥国分寺跡出土の丸底坏をめぐって」 | 『山形県の考古と歴史』77～88頁 山形 |
| 遠藤 勝 博他 | 1983 | 「岩手県南部(北上川中流域)における所謂第1型式の土師器、前期土師器の内容について」 | 『芹沢長介先生還暦記念論文集考古学論叢』東京 361～385頁 |
| 大塚 昌 彦 | 1987 | 『中筋遺跡発掘調査概要報告書』 | 渋川 |
| 小笠原 好 彦 | 1976 | 「東北地方における平安時代の土器についての二・三の問題」 | 『東北考古学の諸問題』407～422頁 東京 |
| 鎌田 裕 二 | 1983 | 『比爪館遺跡第6次発掘調査報告書』 | 岩手県紫波 |
| 川崎 利 夫他 | 1981 | 『境野遺跡』 | 山形 |
| 菊地 郁 雄他 | 1980 | 「毛越A・B・C遺跡」 | 『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書V』197～226頁 盛岡 |
| 草間 俊 一 | 1970 | 『仙波堤・今松遺跡』 | 岩手県岩手 |
| 桑原 滋 郎 | 1976a | 「須恵系土器について」 | 『東北考古学の諸問題』441～469頁 東京 |
| 桑原 滋 郎 | 1976b | 「東北地方北部および北海道の所謂第1型式の土師器について」 | |

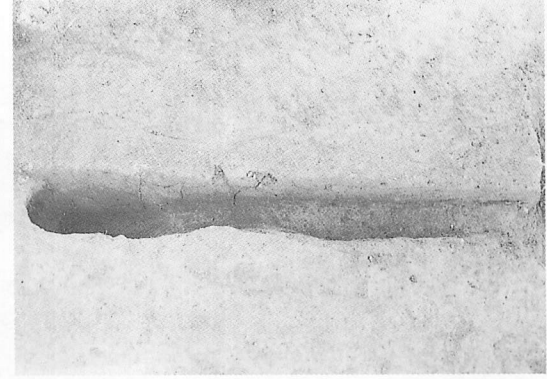
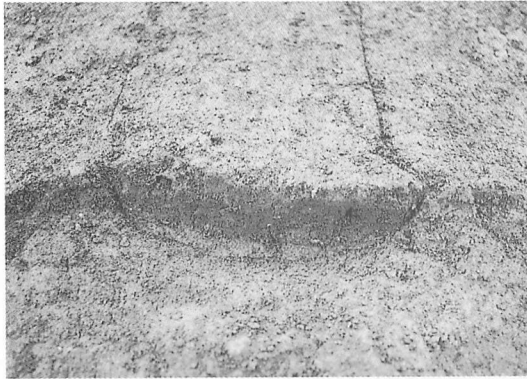
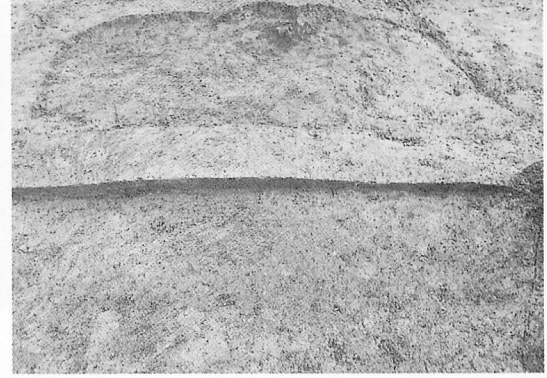
- 【考古学雑誌】61-4 1~20頁
- 小井川 和 夫 1981 「上新田遺跡」『長者原遺跡・上新田遺跡』 37~186頁 仙台
1984 「いわゆる赤焼土器について」『東北歴史資料館研究紀要』10 59
~74頁 多賀城
- 小 松 正 夫 1975 「秋田城跡昭和50年度秋田城跡発掘調査概報」 秋田
斎 藤 淳他 1982 『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書XVI (猫谷地遺跡)』
盛岡
- 佐久間 豊 1978 「奈良平安期土器の型式学的分析」『考古学研究』25-2 85~110頁
佐々木 清 文他 1981 『東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査報告書二戸郡安代町扇畑I遺
跡』盛岡
- 佐々木 勝他 1980 『東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書IV (宮地遺跡)』 盛岡
佐 藤 和 男 1979 『百目木遺跡発掘調査報告書』 岩手県都南
司 東 真 雄他 1968 『北上市史第1巻原始・古代(1)』 北上
渋谷 孝 雄他 1984 『境田C'・D遺跡発掘調査報告書』 山形
白 鳥 良 一 1980 「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要』VII 1~38頁 多賀城
1982 『多賀城跡 本文編』 多賀城
- 関 豊 1981 『中曽根II遺跡発掘調査報告書』 二戸
高 橋 信 雄他 1982 『岩手の土器』 盛岡
高 橋 文 夫他 1982 『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書XV-1・2』 盛岡
高 橋 与右エ門他 1982 『金ヶ崎バイパス関連遺跡発掘調査報告書II 水沢市膳性遺跡』
岩手県都南
- 玉 口 時 雄他 1984 『土師器、須恵器の知識』 東京
手 塚 均 1980 「山の上遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書III』 仙台
中 川 重 紀他 1986 『万丁目遺跡発掘調査報告書東北縦貫自動車道花巻南インターチェ
ンジ関連遺跡発掘調査』 岩手県都南
- 中 村 浩 1980 『考古学ライブラリー 5 須恵器』
長 橋 至 1986 『不動木遺跡発掘調査報告書』 山形
日 野 久 他 1977 『野形遺跡』 秋田
深 澤 芳 樹 1985 「土器のかたち一畿内第1様式古・中段階について」『(財)東
大阪市文化財協会紀要』I 41~62頁
本 堂 寿 一 1980 「極楽寺伝座主坊緊急発掘調査報告」『北上市立博物館研究報告』
3 13~50頁
- 前 川 要 1987 「平安時代における東海系緑釉陶器の使用形態について」『中近世
土器の基礎研究』III 117~142頁
- 松 下 亘 1986 「擦文式土器の刻印について」『物質文化』47 19~39頁
三 浦 圭 介 1977 「近野遺跡」『近野遺跡発掘調査報告書 (III) 三内丸山 (II) 遺
跡発掘調査報告書青森県総合運動公園建設関係発掘調査』 青森
三 上 昭 1979 「竹花前遺跡」『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書I』
309~339頁 盛岡
- 光 井 文 行他 1983 『上の山VII遺跡発掘調査報告書東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査』
岩手県都南
- 森 貢 喜 1983 「佐内屋敷遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書VIII』 293~546
仙台
- 八重樫 良 宏 1979 「下羽場遺跡」『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書II』
9~130頁 盛岡
1981 『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書XII (石田遺跡)』
盛岡
- 八 木 光 則他 1979 『太田方八丁遺跡昭和53年度発掘調査概報』 盛岡
吉 沢 幹 夫 1984 「宮城県出土の墨書土器について」『研究紀要』10 39~57頁

写 真 图 版



- a 石田II遺跡近景
 b 寺領遺跡近景
 b c 寺領遺跡基本層序

写真図版1 遺跡近景と基本層序



a 1号住居跡全景 b 1号住居跡埋土断面
 c 3号住居跡全景 d 3号住居跡埋土断面
 e 3号住居跡煙道部 f 3号住居跡煙道埋土断面
 g 6号住居跡全景

写真図版2 遺構(1)



上：2号住居跡炭化材・焼土検出状況　下：2号住居跡全景

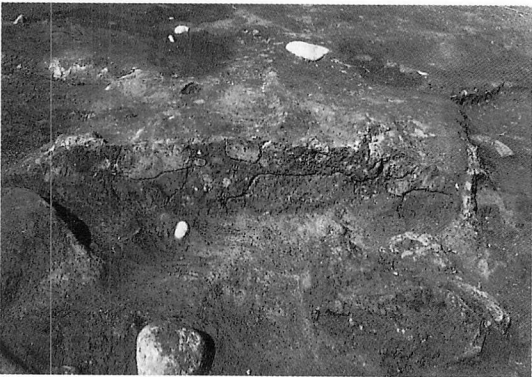
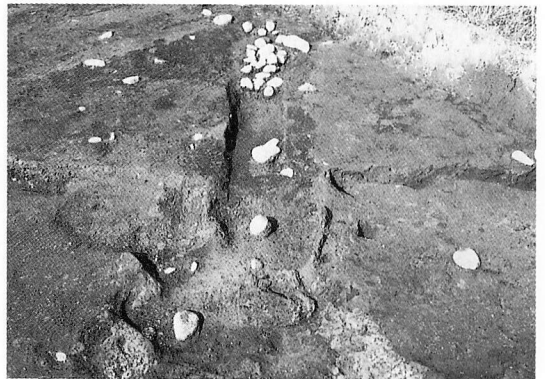
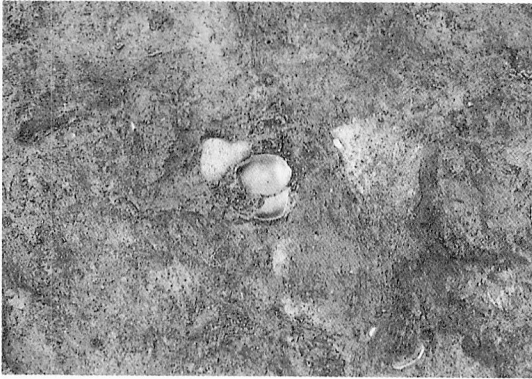
写真図版3 遺構(2)



- a 2号住居跡・炭化材出土状況(1) b 同 (2)
 c 同 (3) d 同 (4)
 e 同 (5) f 同 (6)
 g 同 (7)

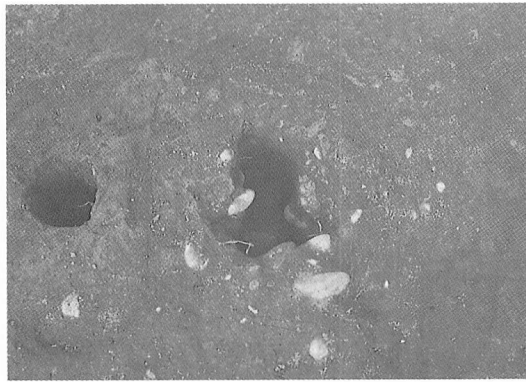
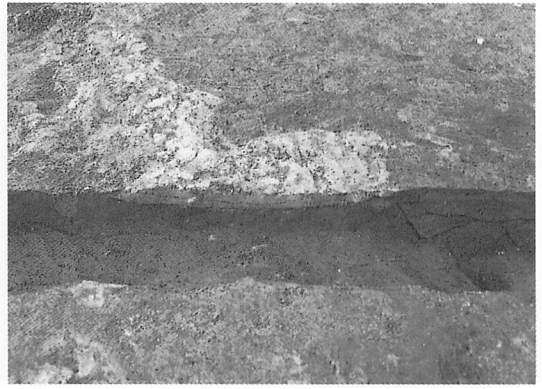
(西側隅より右回り)

写真図版4 遺構(3)



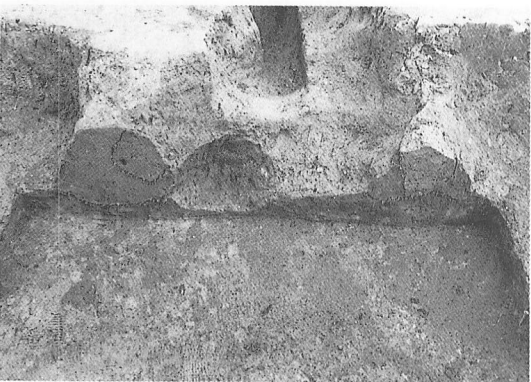
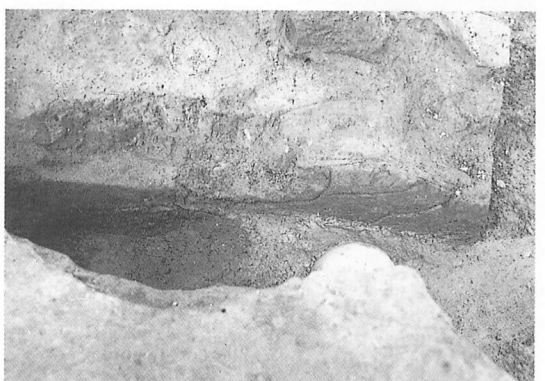
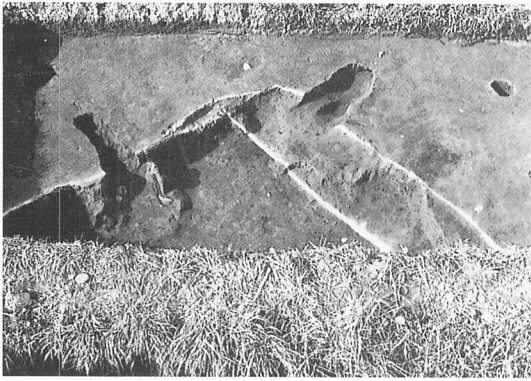
- a 2号住居跡遺物出土状況(1) b 同遺物出土状況(2)
c 同遺物出土状況 d 同カマド全景
e 同カマド断面 (1) f 同煙道埋土断面
g 同カマド断面 (2)

写真図版 5 遺構(4)



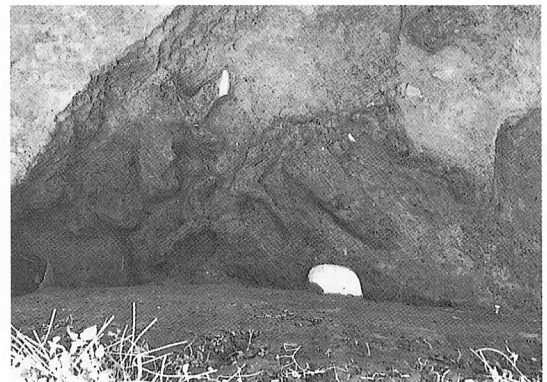
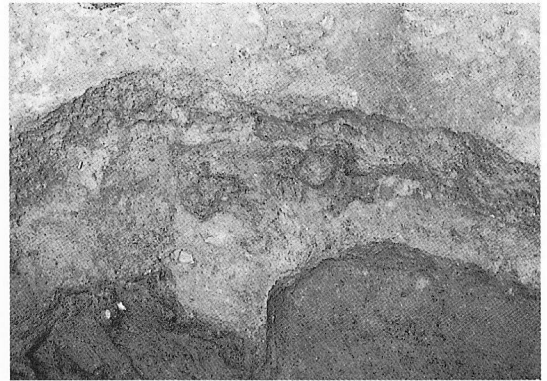
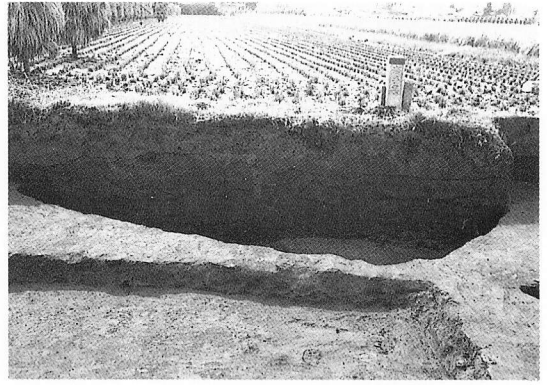
a 2号住居跡貼り床・床面焼土断面 b 同左
 c 同 p.h. 1 全景 d 同 p.h. 1 全景(2)
 e 同 p.h. 3 全景 f 同 p.h. 3 全景(2)
 g 同 p.h. 2 全景

写真図版 6 遺構(5)



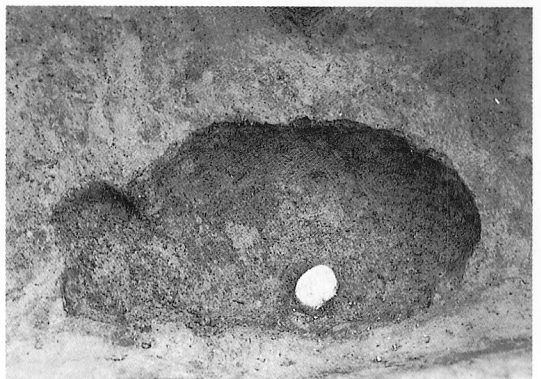
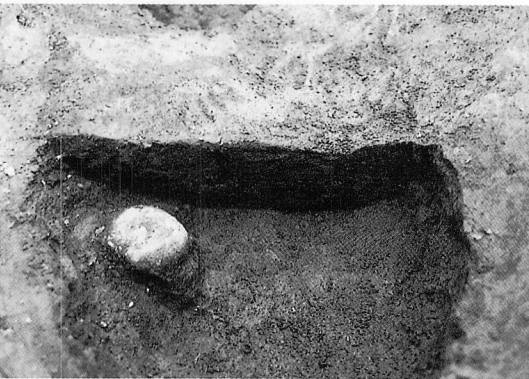
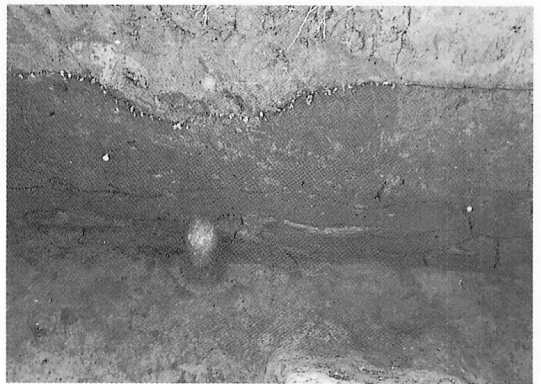
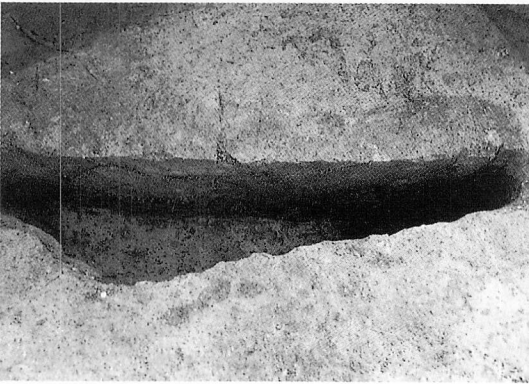
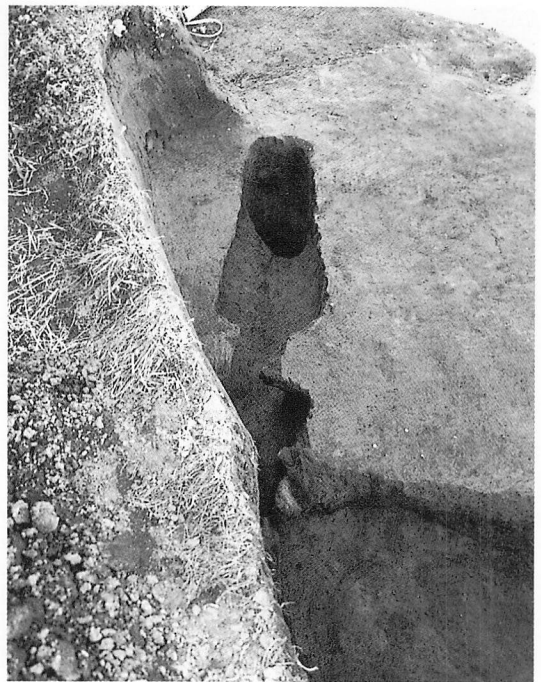
a 4号・5号住居跡全景 b 4号・5号住居跡埋土断面
 c 4号住居跡カマド全景 d 4号住居跡煙道埋土断面
 e 4号住居跡カマド全景(2) f 4号住居跡煙道埋土断面(2)
 g 4号住居跡カマド断面

写真図版 7 遺構(6)



a 7号住居跡炭化材出土状況
 b 同 全景
 c 同 埋土断面
 d 同 カマド
 e 同 炭化材状況
 f 同 炭化材状況

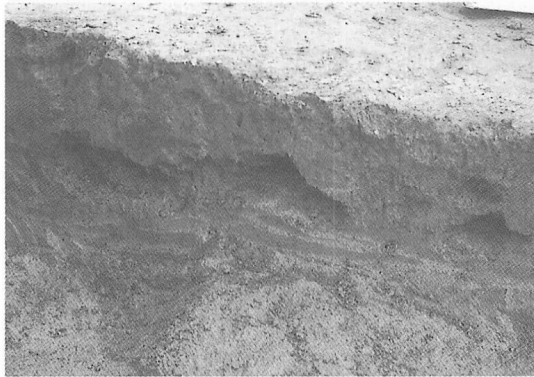
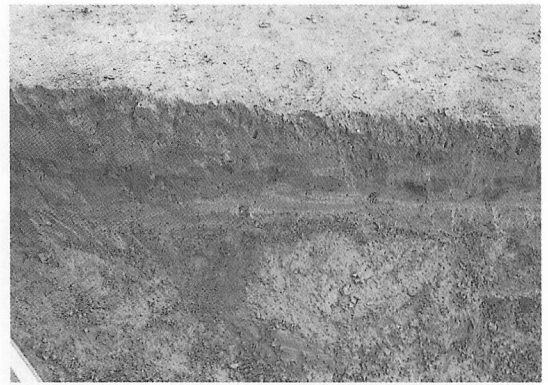
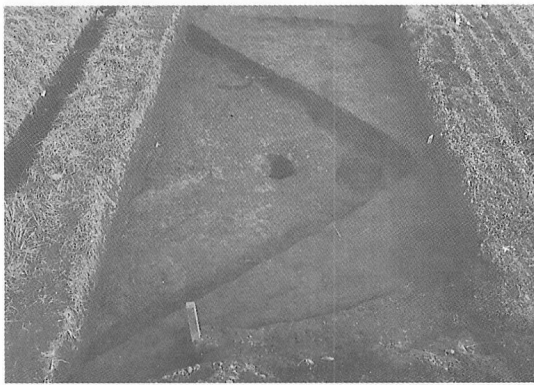
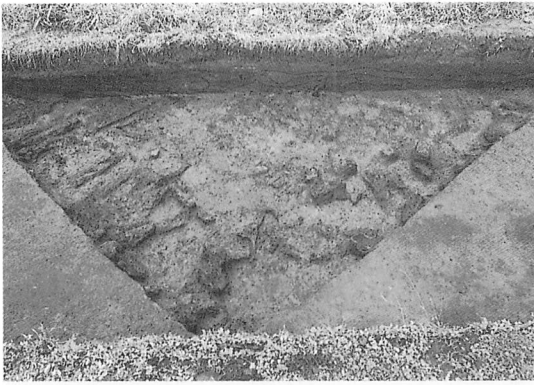
写真図版 8 遺構(7)



a 7号住居跡煙道部確認状況
 c 同 煙道埋土断面
 e 同 P1埋土断面

b 同 煙道部全景
 d 同 カマド断面
 f 同 P1全景

写真図版 9 遺構(8)



a 8号住居跡炭化材・焼土出土状況

c 同 全景

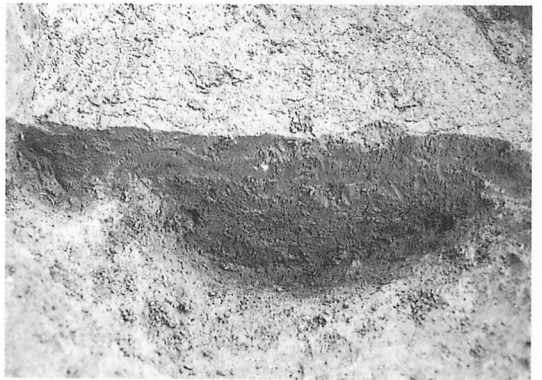
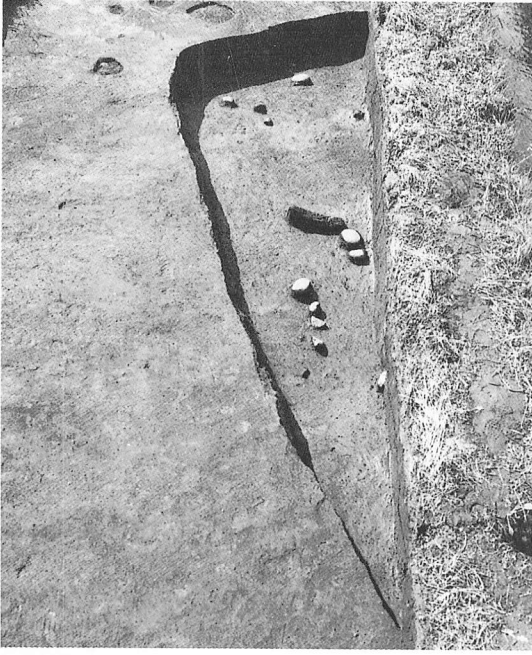
e 同 壁面の溝（炭化材除去）

b 同 埋土断面

d 同 壁面の炭化材

f 同 壁面の溝（炭化材除去）

写真図版10 遺構(9)

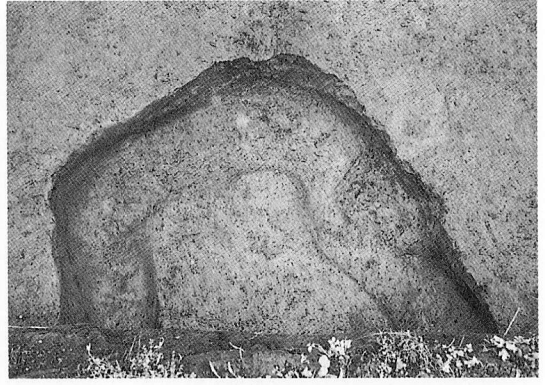


a 9号住居跡礫出土状況 b 9号住居跡全景
 c 9号住居跡 P1埋土断面 d 9号住居跡 P2埋土断面
 e 10号住居状遺構全景

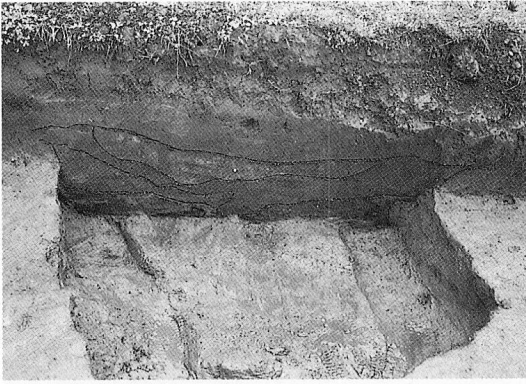
写真図版11 遺構(10)



a 11号住居状遺構炭化材出土
状況



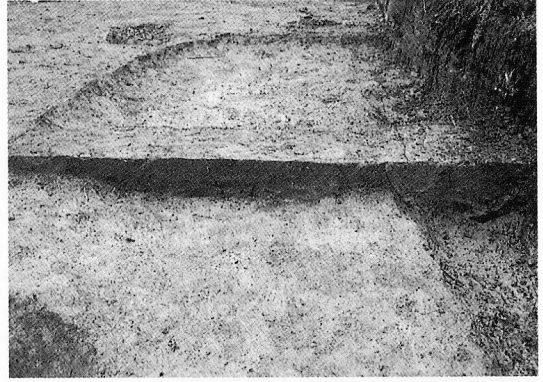
b 11号住居状遺構全景



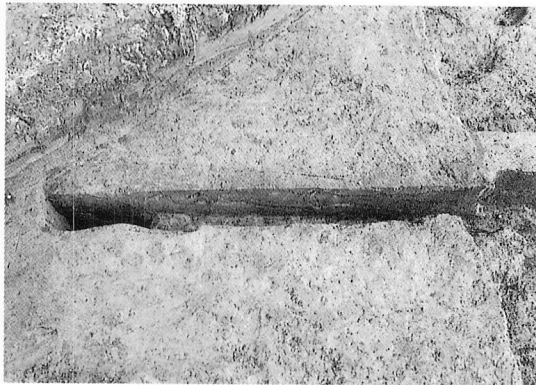
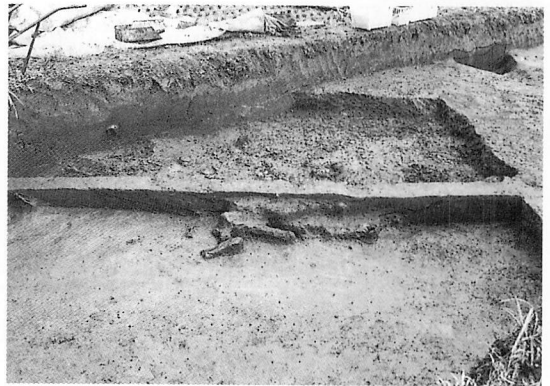
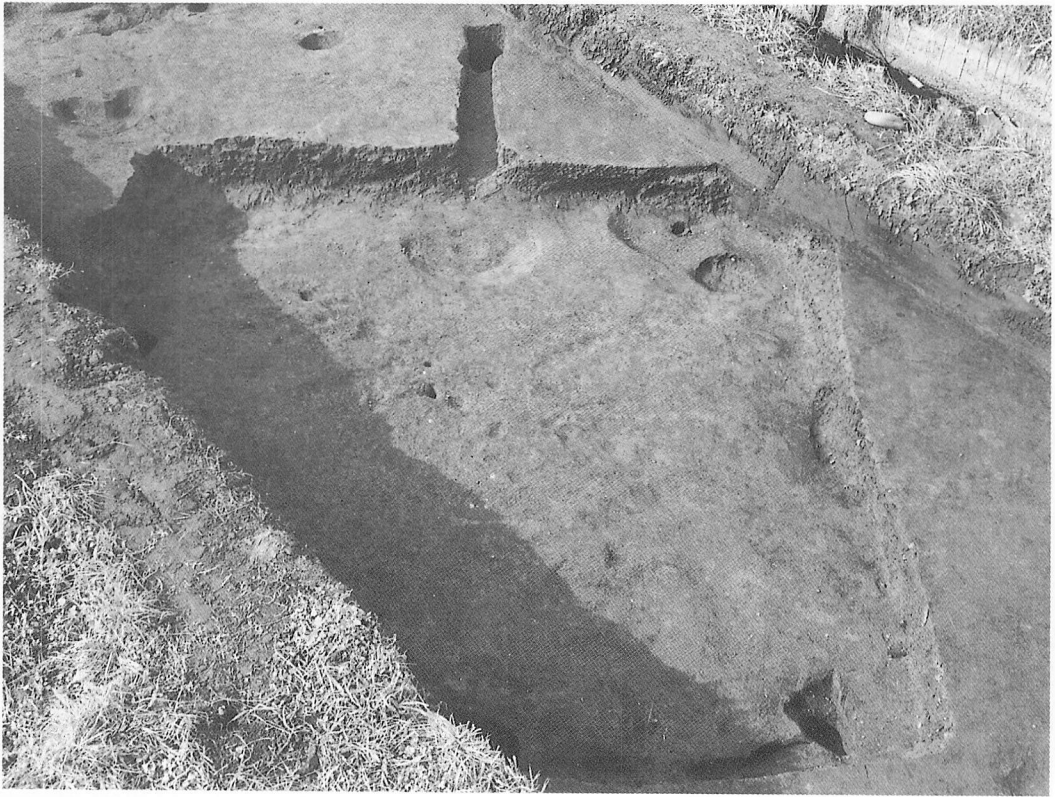
c 11号住居状遺構埋土断面



d 12号住居状遺構全景



e 12号住居状遺構埋土断面

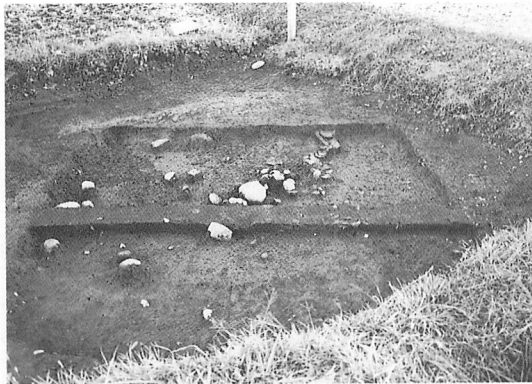
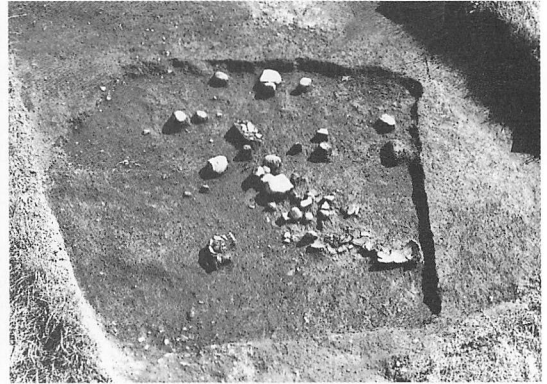
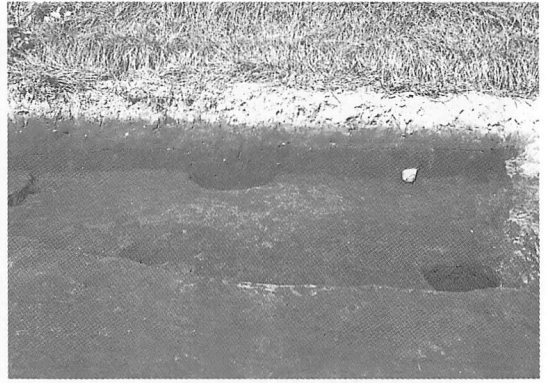
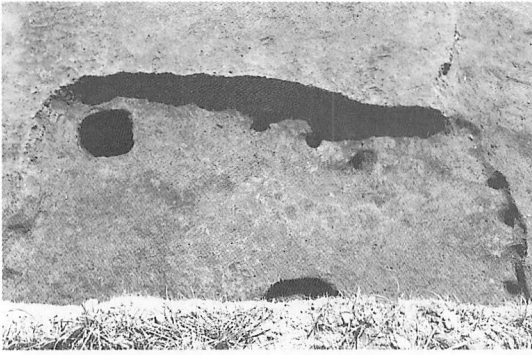


a 13号住居跡全景

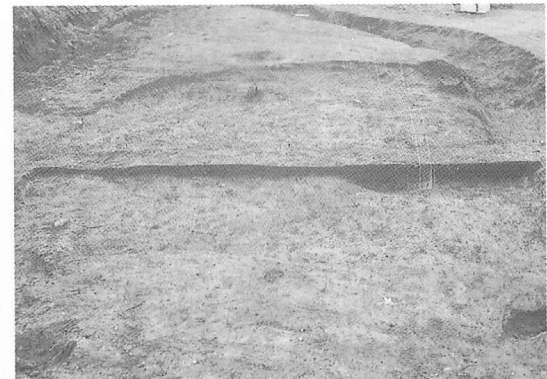
b 同 炭化材・焼土出土状況 c 同 埋土断面

d 同 煙道埋土断面

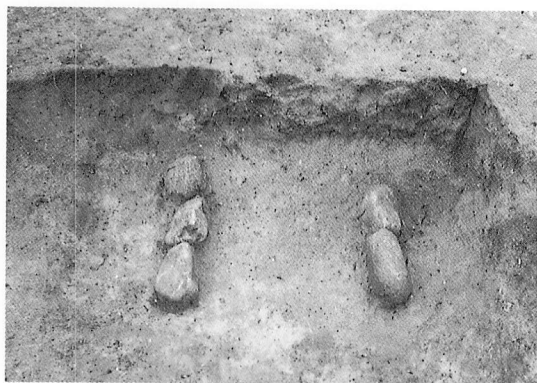
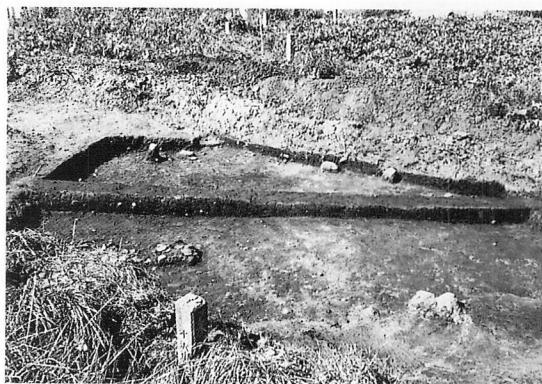
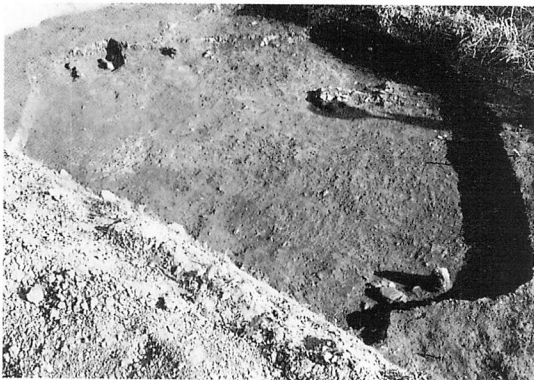
写真図版13 遺構(12)



a 14号住居跡全景 b 14号住居跡埋土断面
 c 15号住居跡全景 d 15号住居跡遺物出土状況
 e 15号住居跡埋土断面
 f 18号住居跡全景 g 18号住居跡埋土断面



写真図版14 遺構(13)



a 16号住居跡全景

b 同 遺物出土状況 c 同 埋土断面

d 同 張り出し部近景

写真図版15 遺構(14)



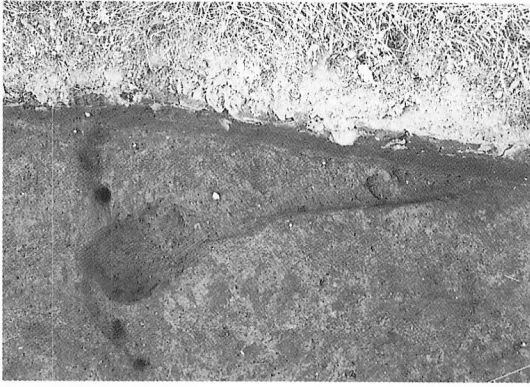
a 19号住居跡全景

b 19号住居跡埋土断面

c 20号住居状遺構全景 d 20号住居状遺構埋土断面



写真図版16 遺構(15)



a 21号住居状遺構全景



b 22号住居跡全景

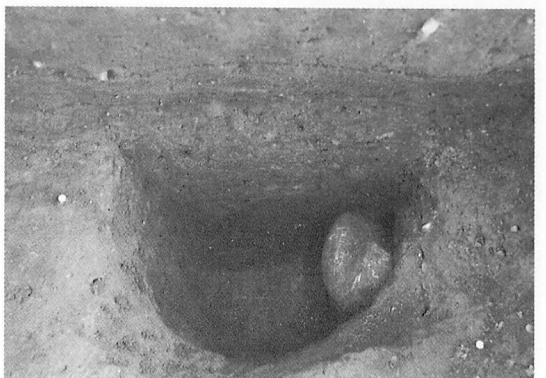
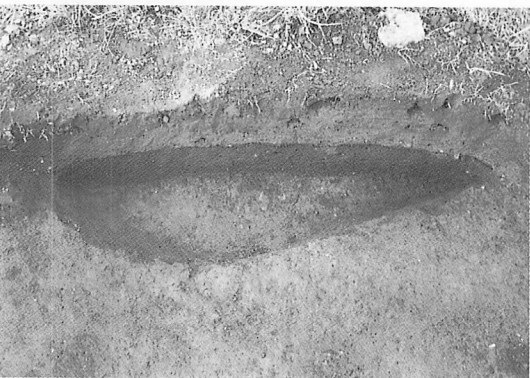
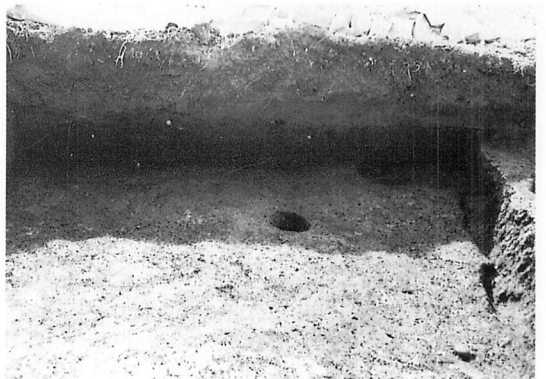
e 24号住居跡全景

c 22号住居跡埋土断面

f 24号住居跡埋土断面

d 23号住居跡全景

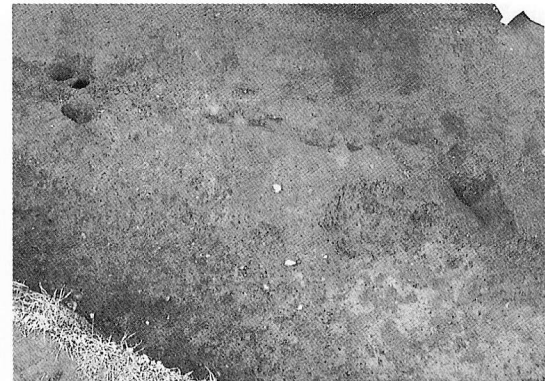
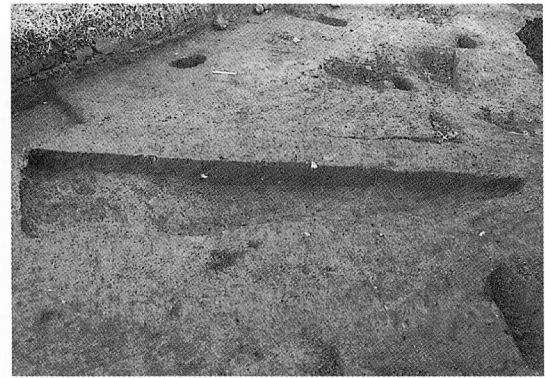
g 24号住居跡P1全景



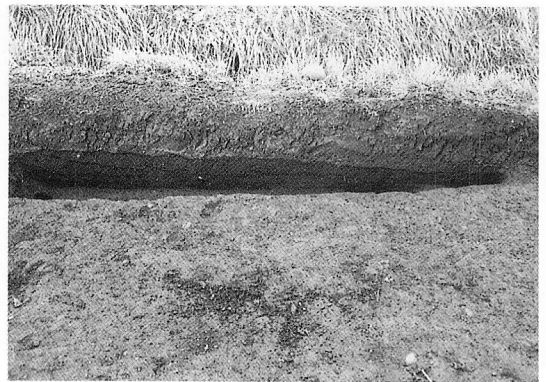
写真図版17 遺構(16)



a 25号・26号住居跡全景 b 25号住居跡埋土断面
 c 27号住居跡全景 d 27号住居跡埋土断面
 e 28号住居状遺構全景 f 29号住居状遺構全景



写真図版18 遺構(17)



a 30号住居跡全景

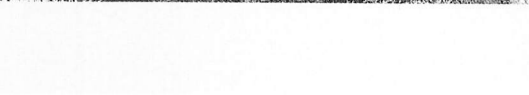
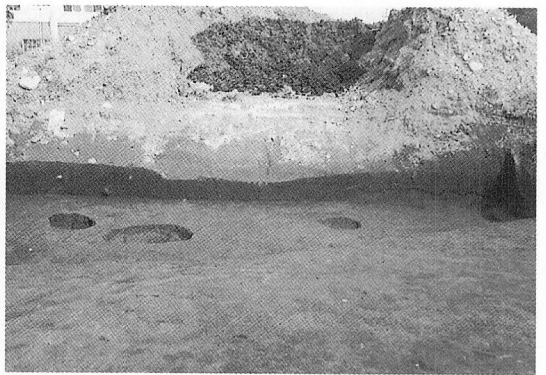
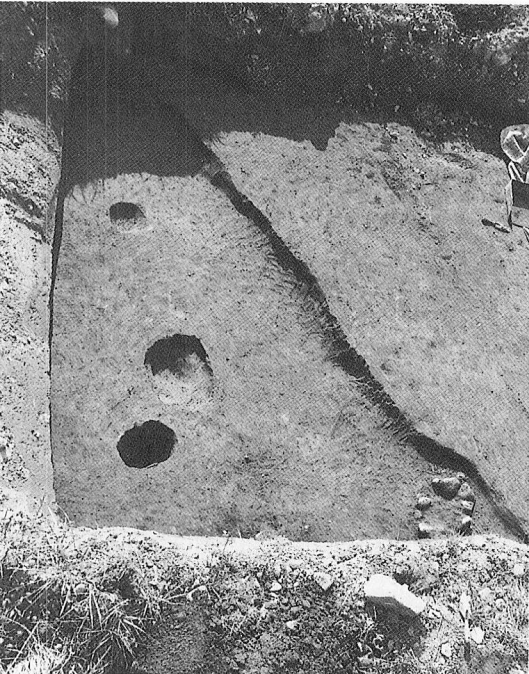
b 30号住居跡埋土断面

c 30号住居跡P 1 全景

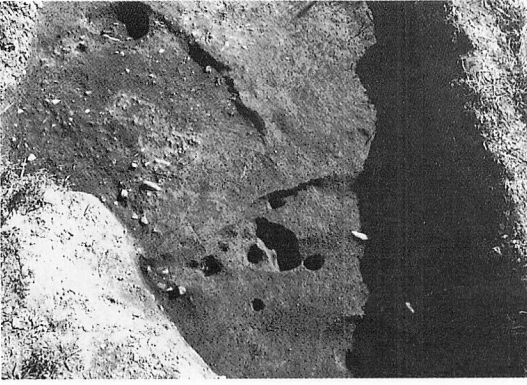
e 31号住居跡埋土断面

d 31号住居跡全景

f 31号住居跡P 1埋土断面



写真図版19 遺構(18)



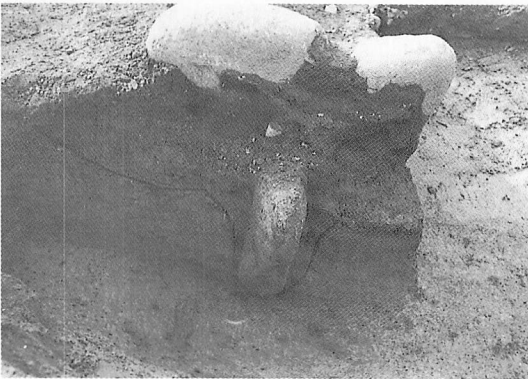
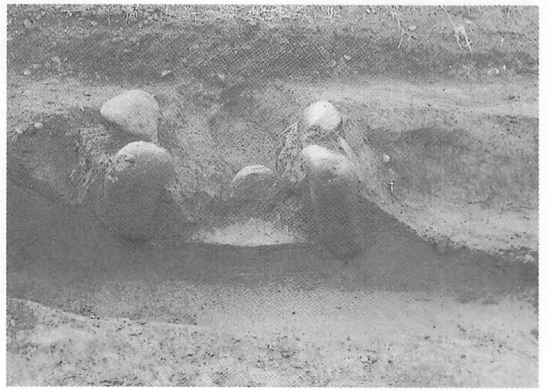
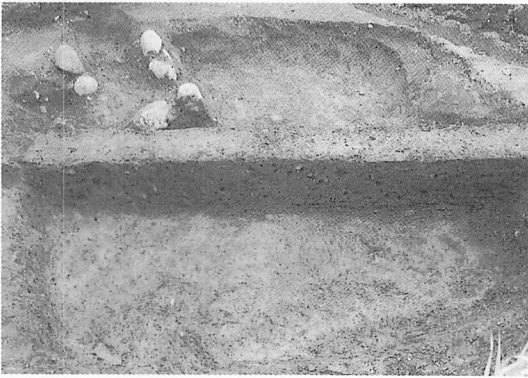
a 32号・33号・35号住居跡全景 b 32号住居跡埋土断面

c 33号住居跡埋土断面

d 34号住居跡全景

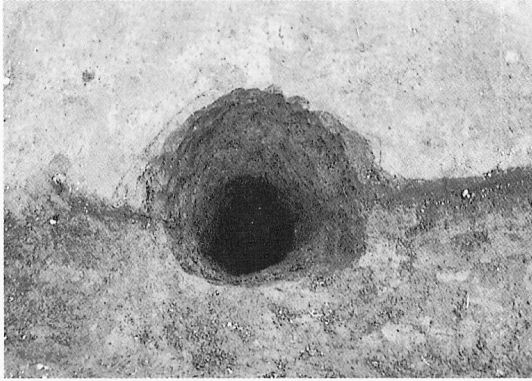
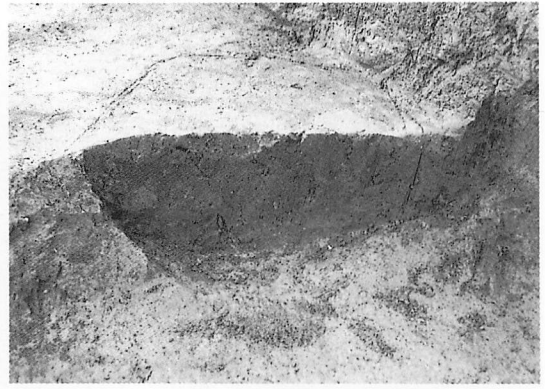


写真図版20 遺構(19)



a 37号住居跡全景
b 同 埋土断面 c 同 カマド断面
d 同 カマド袖断面

写真図版21 遺構(20)



a 1号土坑全景 b 1号土坑埋土断面

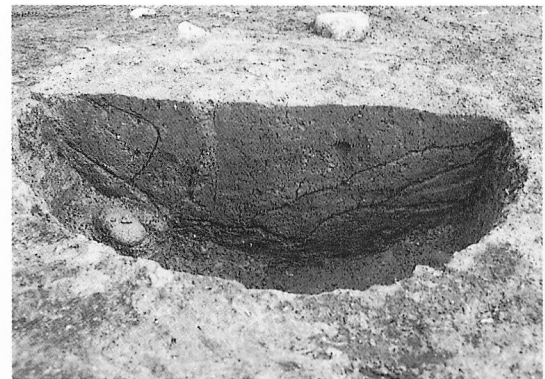
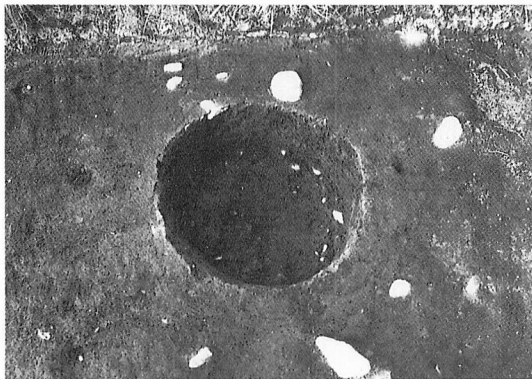
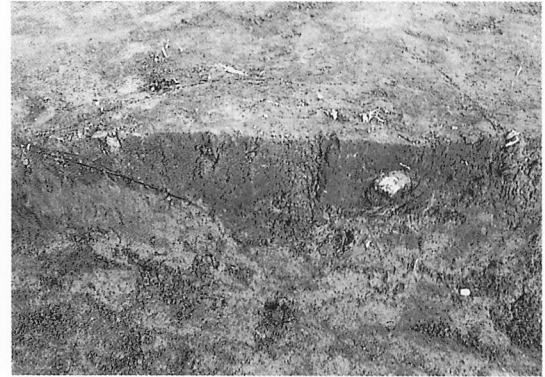
c 3号土坑全景

d 4号土坑全景

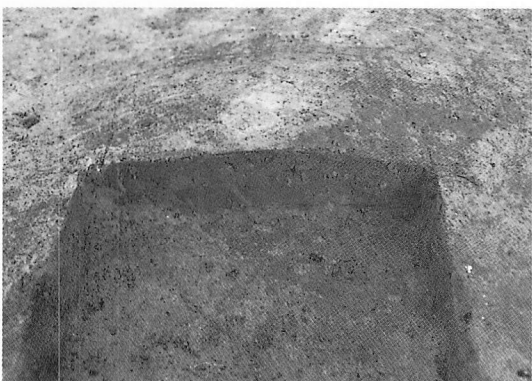
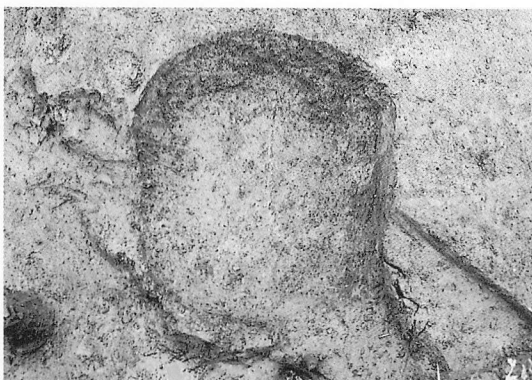
f 7号土坑全景

e 4号土坑埋土断面

g 7号土坑埋土断面

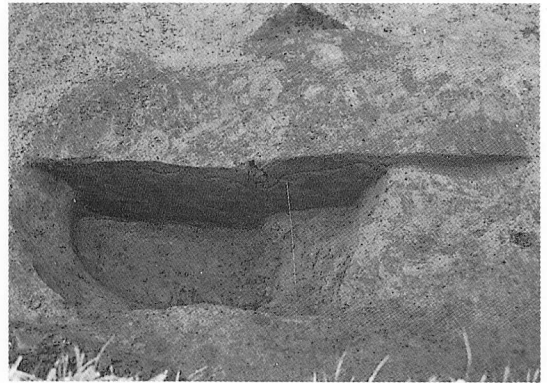
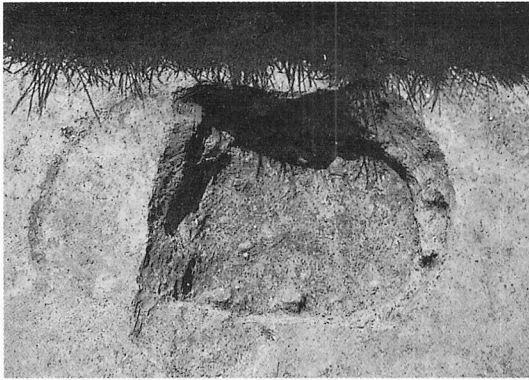
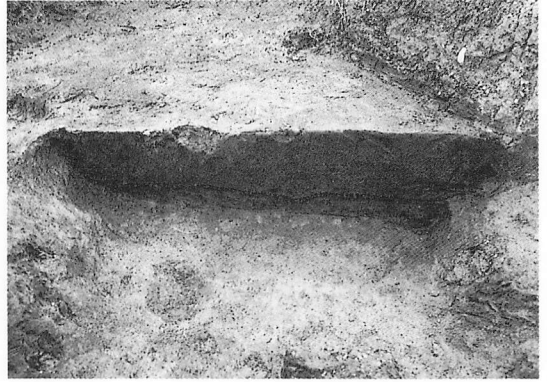


写真図版22 遺構(21)



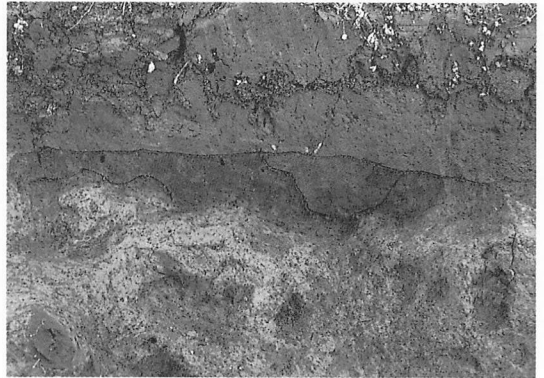
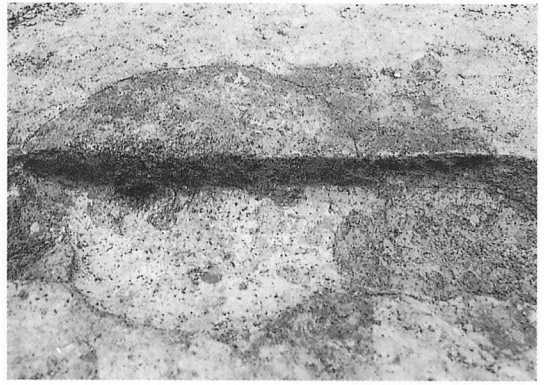
a 8号土坑全景 b 8号土坑埋土断面
 c 9号土坑全景 f 12号土坑全景
 d 11号土坑全景
 e 11号土坑埋土断面

写真図版23 遺構(22)



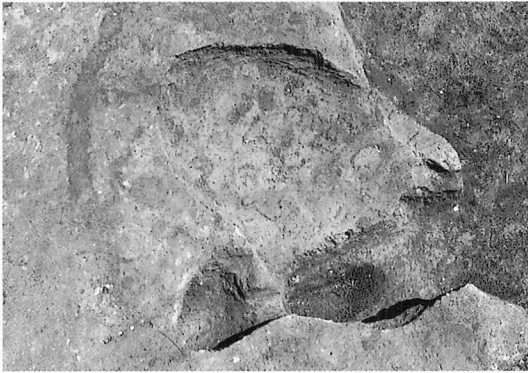
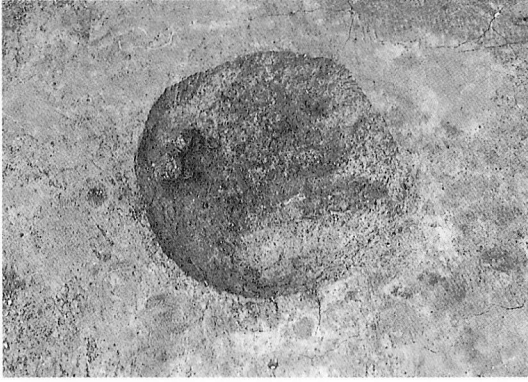
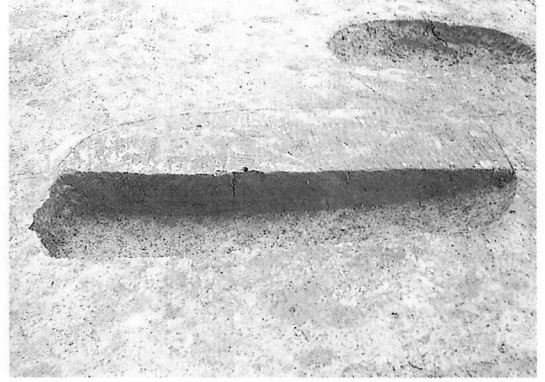
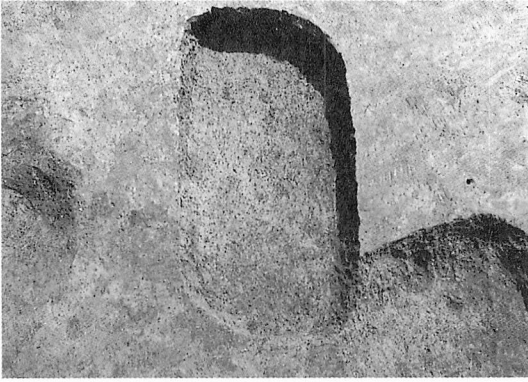
a 13号土坑全景 b 13号土坑埋土断面
 c 10号土坑・11号土坑全景 d 16号土坑全景
 e 14号土坑全景 f 10号土坑埋土断面

写真図版24 遺構(23)

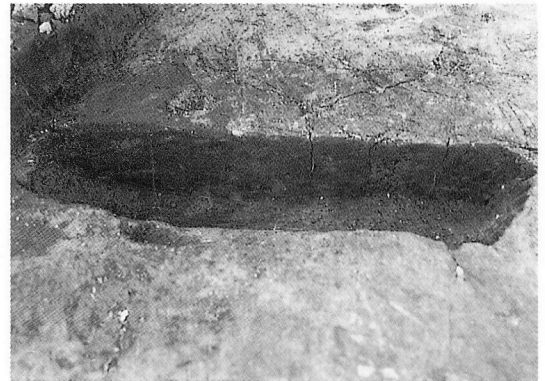


a 17号土坑全景 b 17号土坑埋土断面
 c 18号土坑全景 d 18号土坑埋土断面
 e 19号土坑礫出土狀況 f 19号土坑全景
 g 19号土坑埋土断面

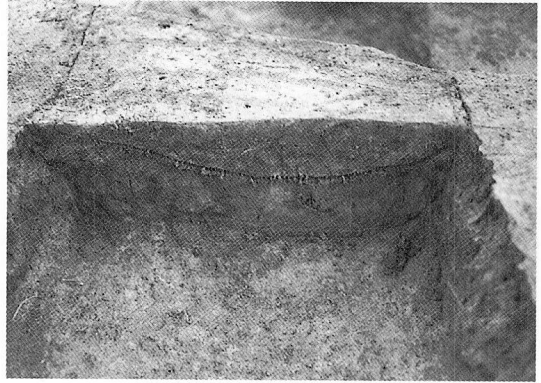
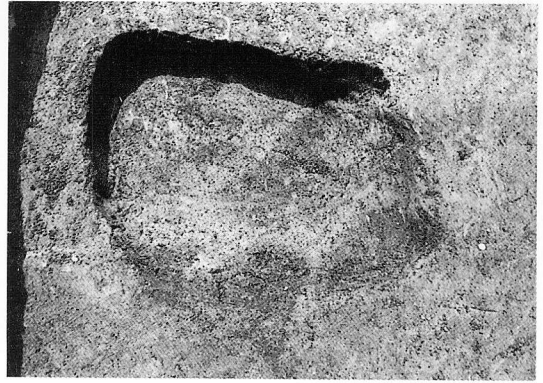
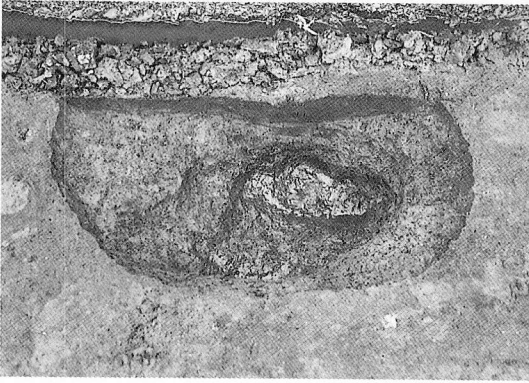
写真図版25 遺構(24)



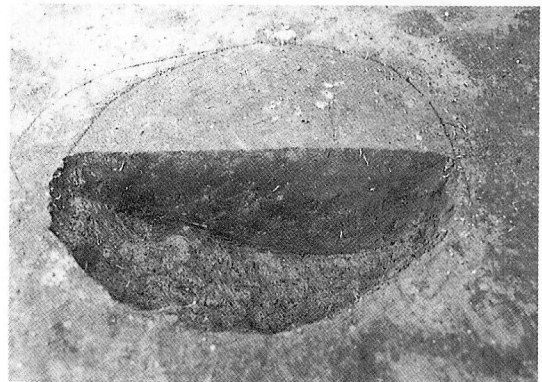
a 20号土坑全景 b 20号土坑埋土断面
 c 21号土坑全景 d 21号土坑埋土断面
 e 22号土坑全景 f 23号土坑全景
 g 23号土坑埋土断面



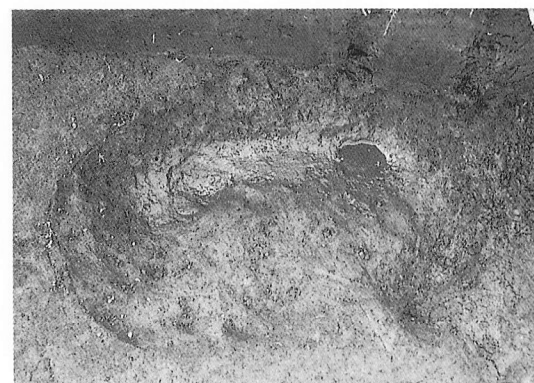
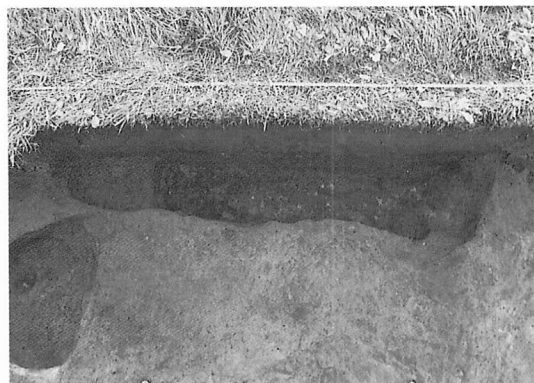
写真図版26 遺構(25)



a 24号土坑全景 b 26号土坑全景
 c 27号土坑全景 d 27号土坑埋土断面
 e 28号土坑全景
 f 29号土坑全景 g 29号土坑埋土断面

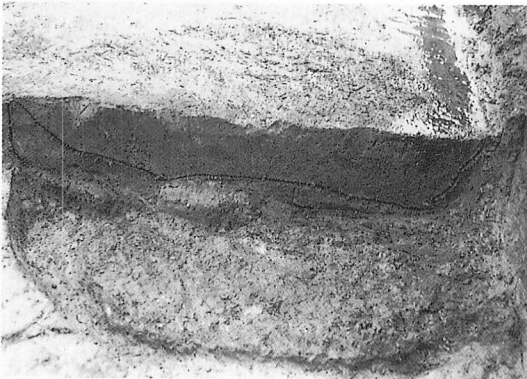
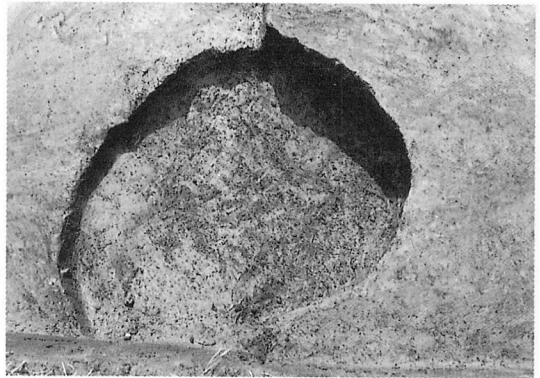


写真图版27 遺構(26)



- a 30号土坑全景
- b 30号土坑埋土断面
- c 31号土坑全景
- d 31号土坑埋土断面
- e 32号土坑全景
- f 33号土坑全景
- g 34号土坑全景

写真図版28 遺構(27)

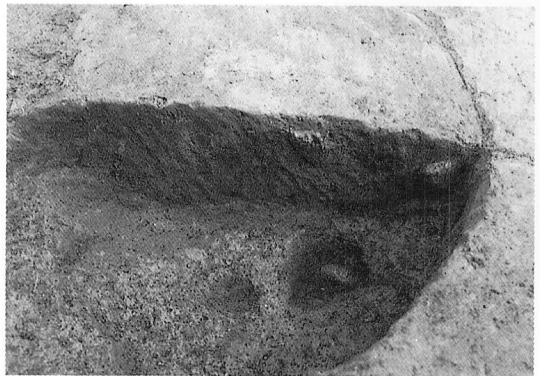


a 35号土坑全景 b 36号土坑全景

c 37号土坑炭化材
出土状况 d 37号土坑全景

e 37号土坑埋土断面

f 42号土坑全景 g 42号土坑埋土断面



写真图版29 遺構(28)



a 39号土坑全景

b 43号土坑全景

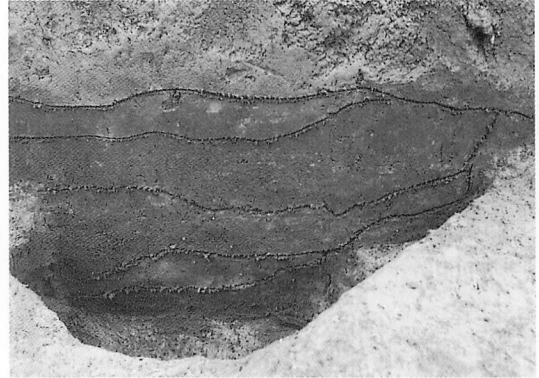
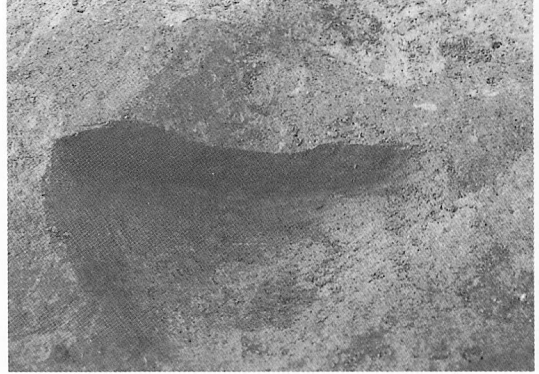
c 43号土坑埋土断面

d 46号土坑全景

e 46号土坑埋土断面

f 26·48号土坑全景

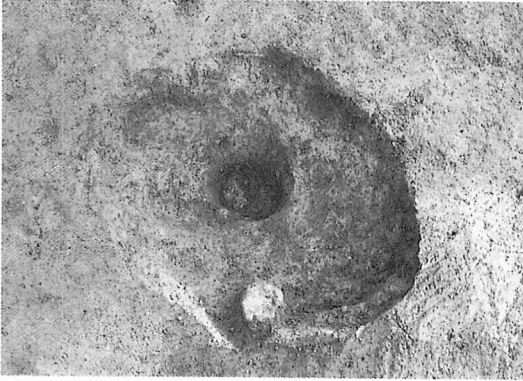
g 26·48号土坑埋土断面



写真図版30 遺構(29)



a 49号土坑全景



b 50号土坑全景

c 50号土坑埋土断面



d 51号土坑全景

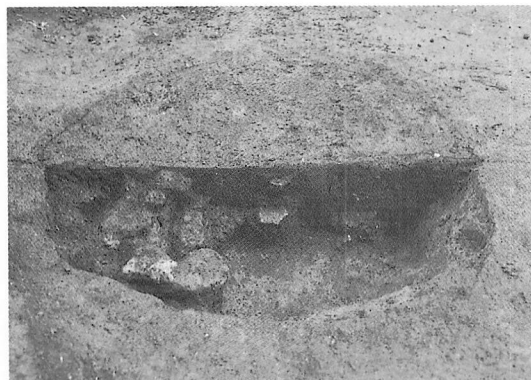
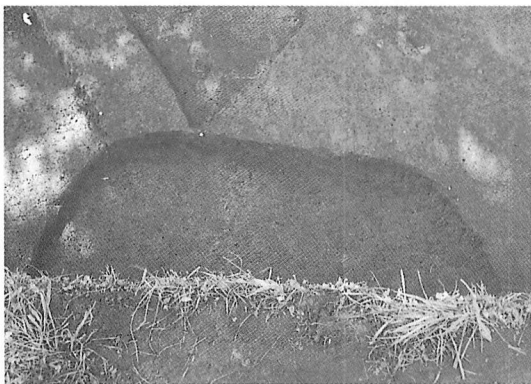
e 51号土坑埋土断面



f 52号土坑全景

g 52号土坑埋土断面

写真図版31 遺構(30)

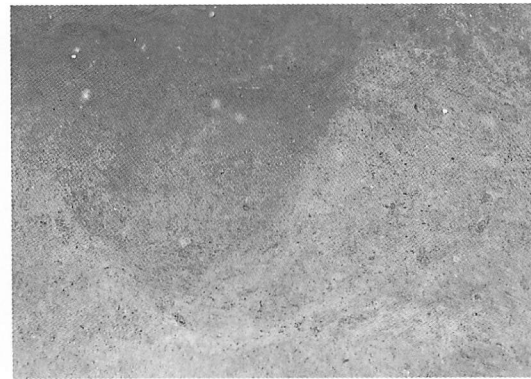


a 56号土坑全景 b 56号土坑埋土断面

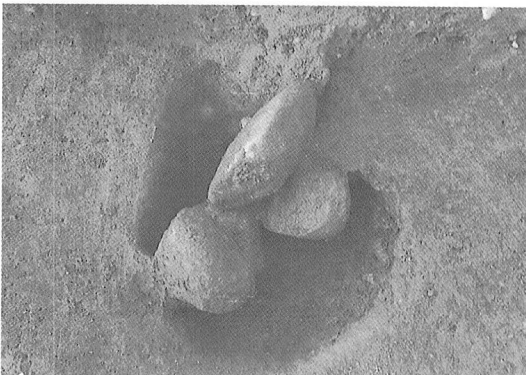
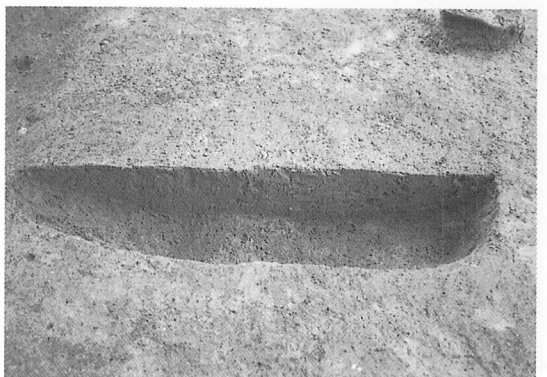
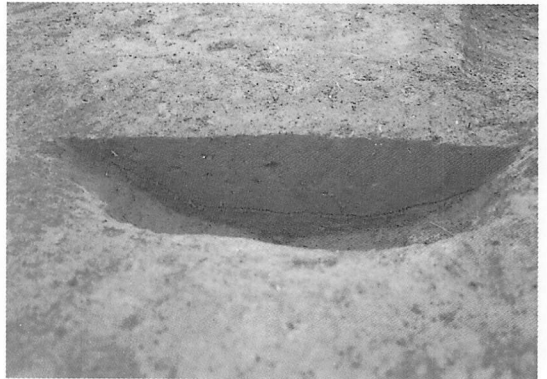
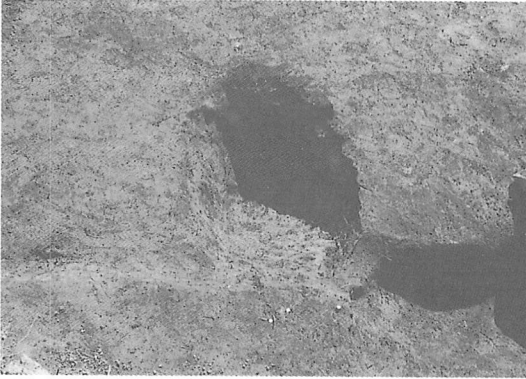
c 57号土坑鉄滓出土状況 d 57号土坑全景

e 57号土坑埋土断面

f 58号土坑遺物出土状況 g 58号土坑全景



写真図版32 遺構(31)



a 59号土坑全景

b 59号土坑埋土断面

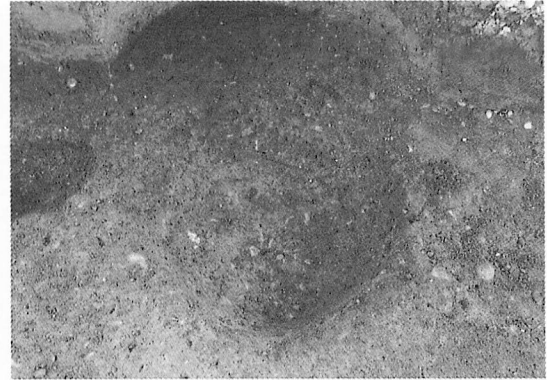
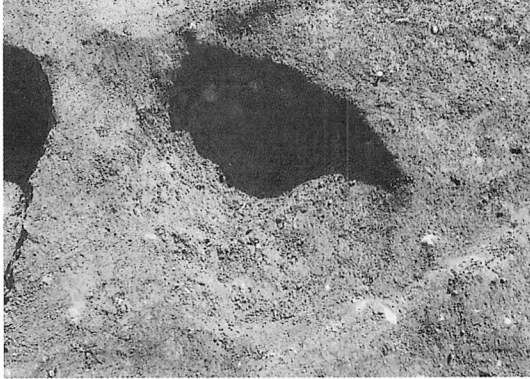
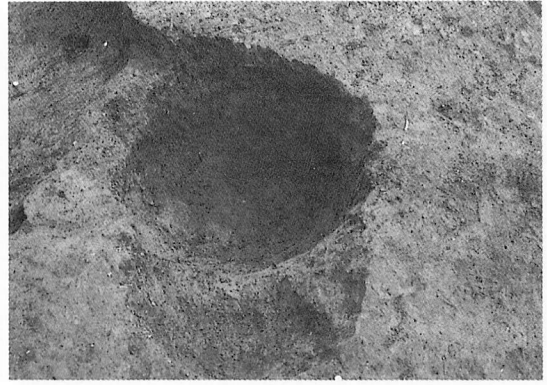
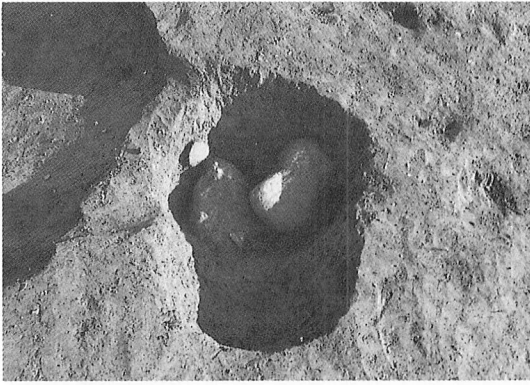
c 61号土坑全景

d 61号土坑埋土断面

e 62号土坑全景

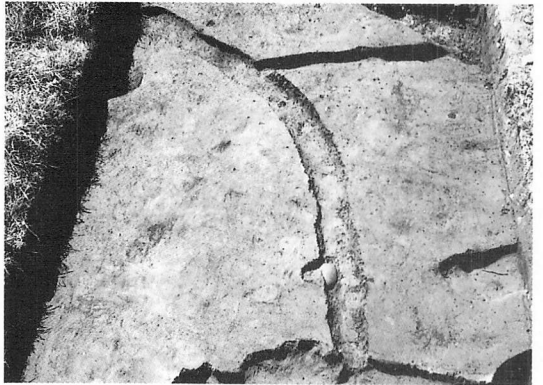
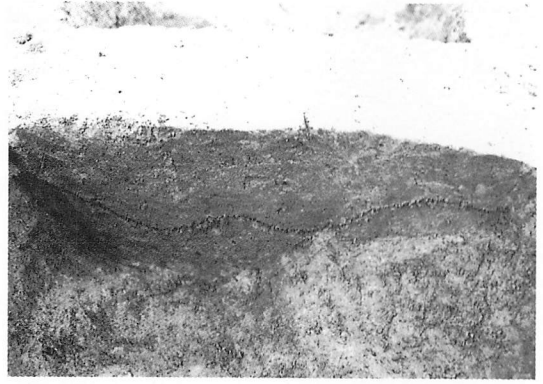
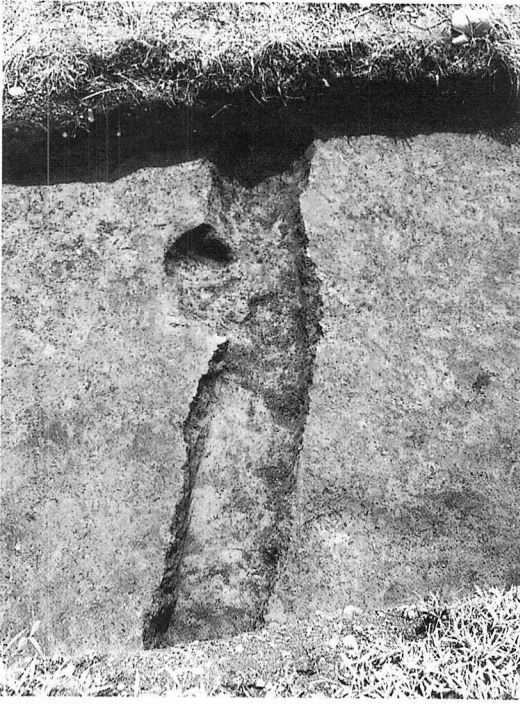
f 62号土坑埋土断面

g 64号土坑礫出土状况



a 63号土坑礎出土状況 b 63号土坑全景
 c 67号土坑全景 d 67号土坑埋土断面
 e 68号土坑遺物出土状況 f 68号土坑全景
 g 69号土坑全景

写真図版34 遺構(33)



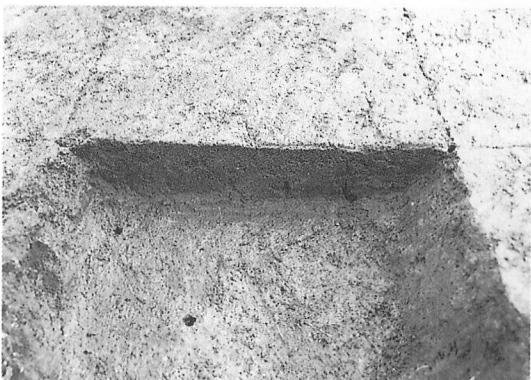
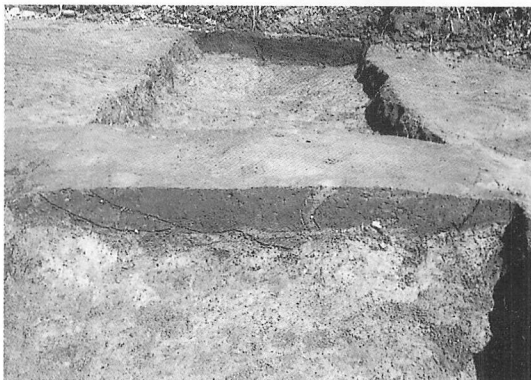
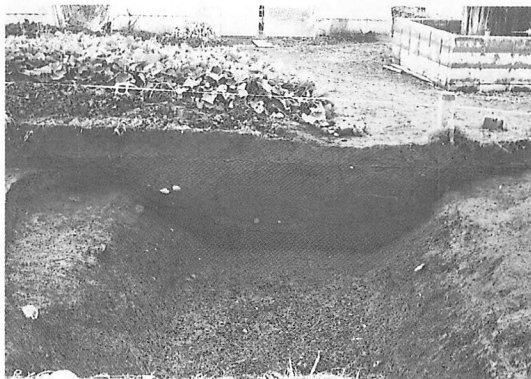
a 1号溝跡全景 b 1号溝跡埋土断面
 c 1号溝跡遺物出土狀況
 d 5号溝跡全景 e 3号溝跡全景
 f 3号溝跡埋土断面

写真図版35 遺構(34)

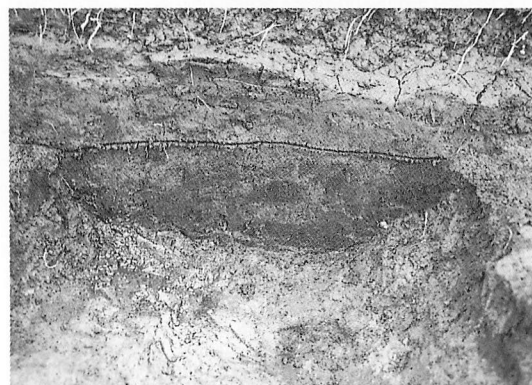
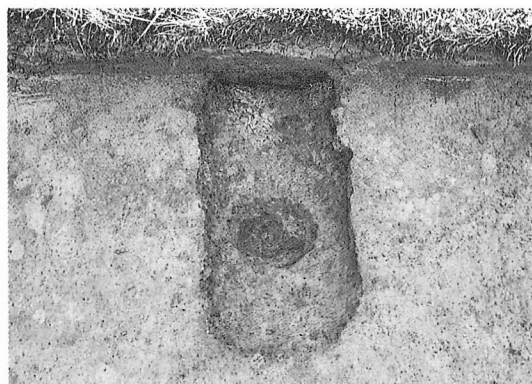
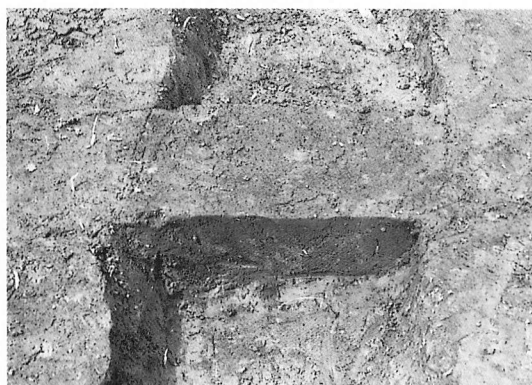


a 6号溝跡礫出土状況 b 6号溝跡全景
 c 7号溝跡全景
 d 8号溝跡全景 e 8号溝跡埋土断面

写真図版36 遺構(35)

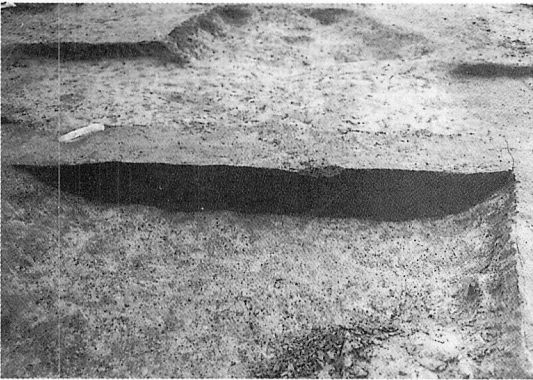
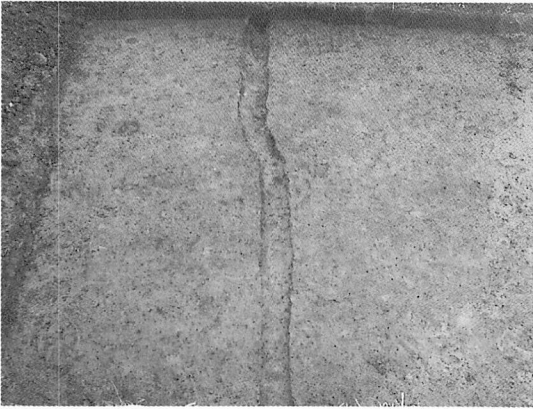
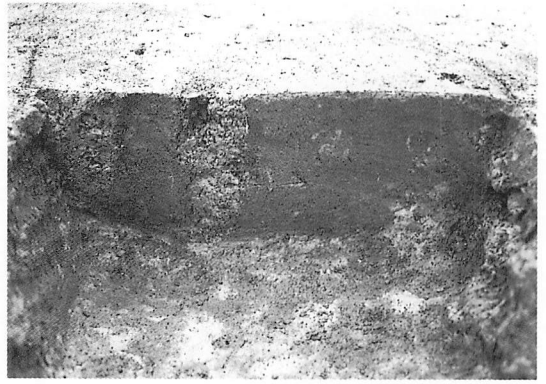


a 9号溝跡全景 b 9号溝跡・6号住居跡埋土断面
c 11号溝跡全景 d 11号溝跡埋土断面
e 12号溝跡全景 f 12号溝跡埋土断面



a 13号溝跡全景 b 13号溝跡礫出土状況
 d 14号溝跡埋土断面
 c 14号溝跡全景 e 15号溝跡全景
 f 15号溝跡埋土断面

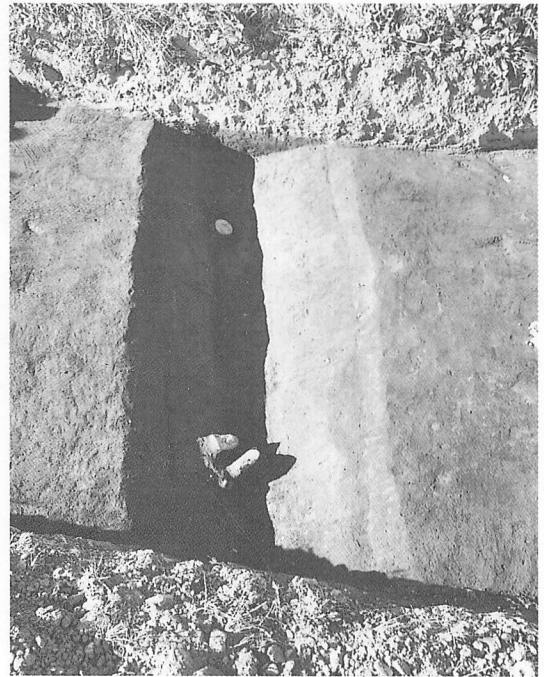
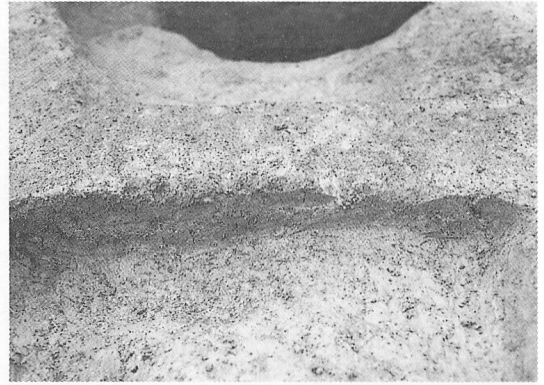
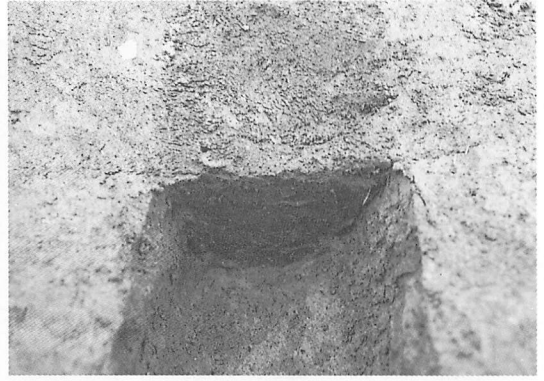
写真図版38 遺構(37)



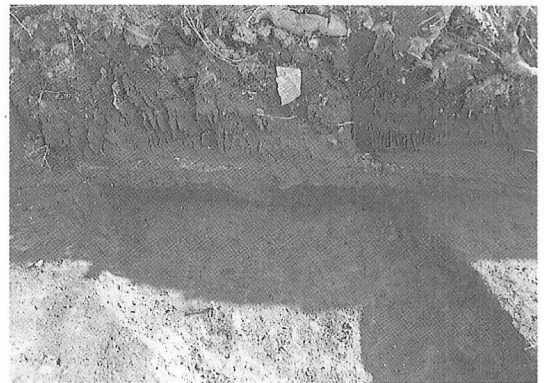
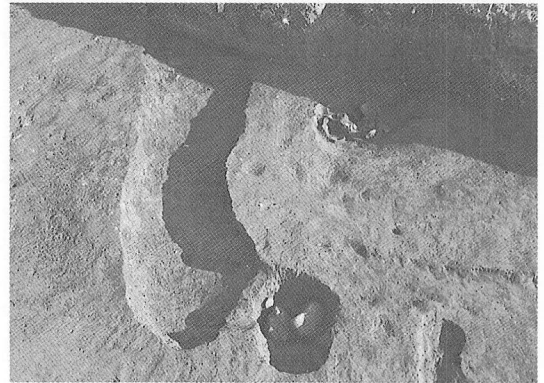
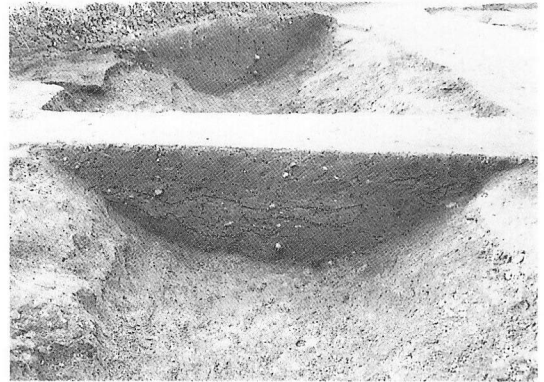
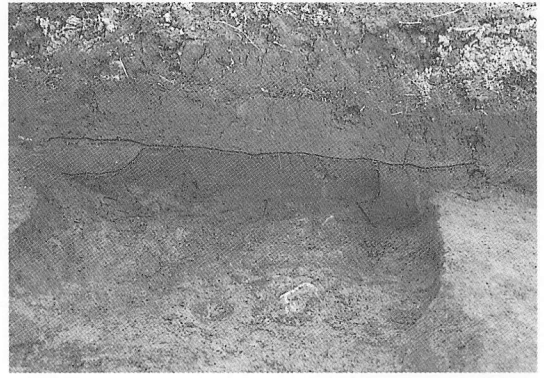
a 17号溝跡全景
c 19号溝跡全景
e 21号溝跡埋土断面

b 17号溝跡埋土断面
d 19号溝跡埋土断面
f 21号溝跡全景

写真図版39 遺構(38)

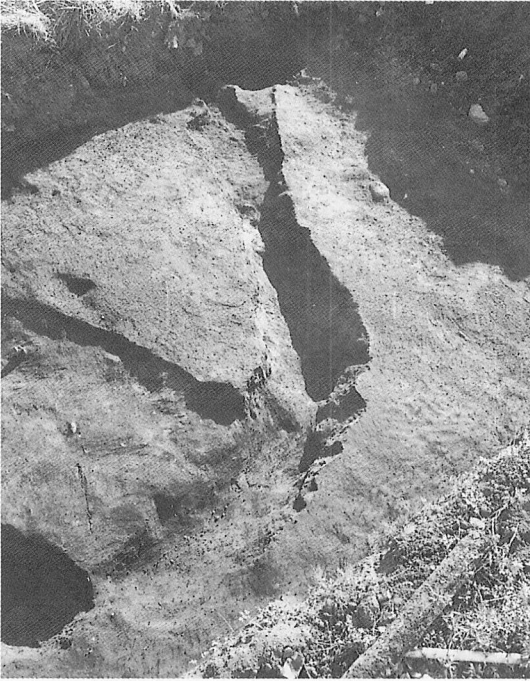
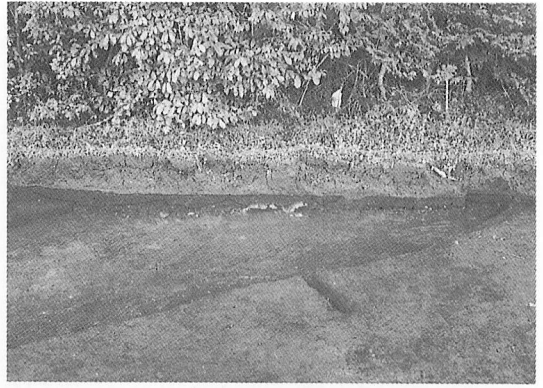


a 22号溝跡全景 b 22号溝跡埋土断面
 d 23号溝跡埋土断面
 c 23号溝跡全景 e 26号溝跡全景

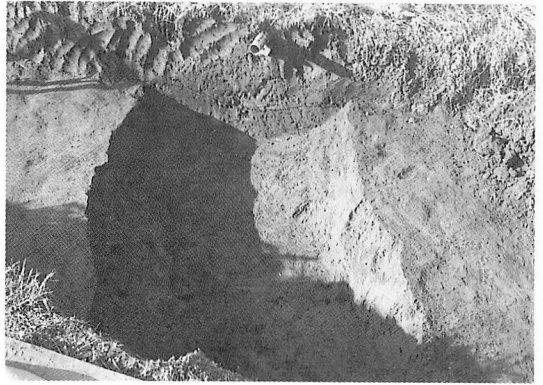
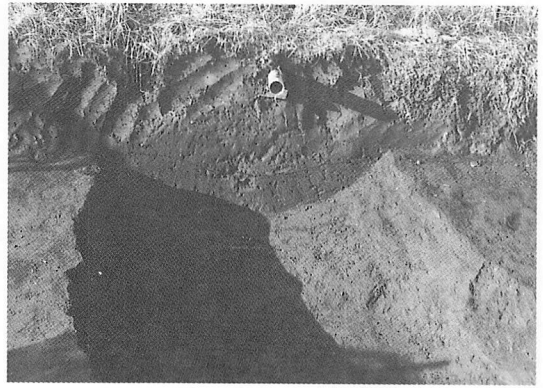


a 24号沟迹全景 b 24号沟迹埋土断面
 c 25号沟迹全景 d 25号沟迹埋土断面
 e 30号沟迹全景 f 30号沟迹埋土断面

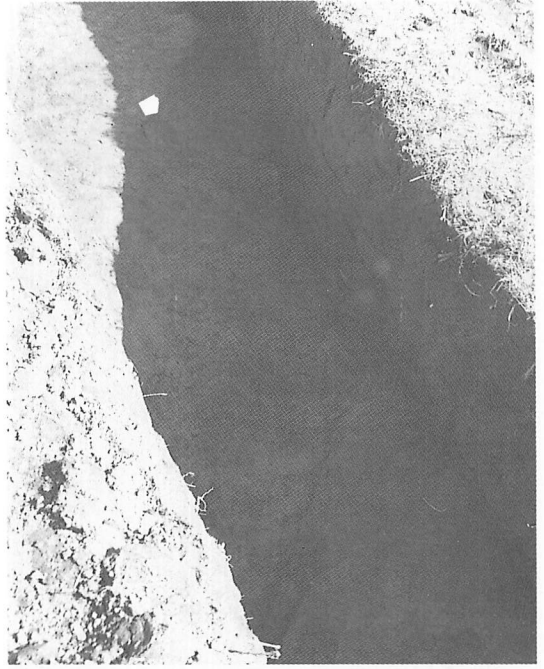
写真図版41 遺構(40)



a 28号溝跡全景 b 28号溝跡埋土断面
c 29号溝跡全景 d 29号溝跡埋土断面
e 31号溝跡全景



a 32号溝跡全景 b 34号溝跡埋土断面
c 34号溝跡全景
d 33号溝跡全景 e 33号溝跡埋土断面



a 35号溝跡遺物出土状況 b 35号溝跡全景

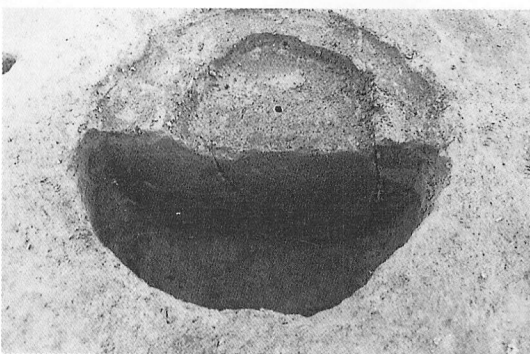
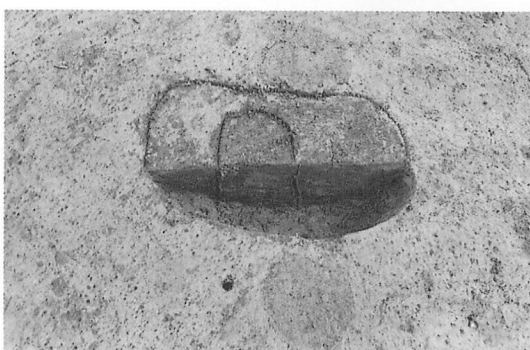
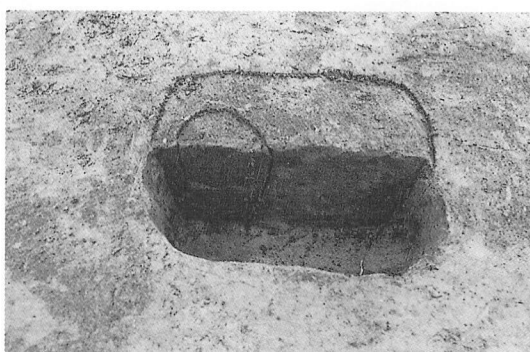
c 35号溝跡埋土断面

d 37号溝跡全景

e 37号溝跡埋土断面

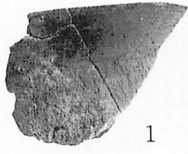


写真図版44 遺構(43)

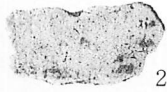


a 柱穴跡群検出状況 c 柱穴跡No.30埋土
 b aのつづき(手前) d 柱穴跡No.42埋土
 e 柱穴跡No.64埋土
 f 柱穴跡No.188埋土

写真図版45 遺構(44)



1



2



3

1 ~ 3 [1 J]

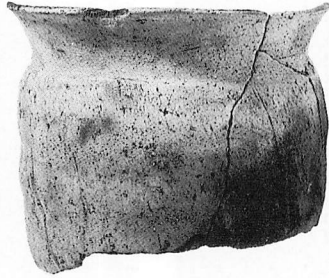
4 ~ 13 [2 J]

1 ~ 3 (S = 1/2)

4 ~ 13 (S = 1/4)



4



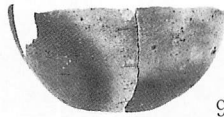
5



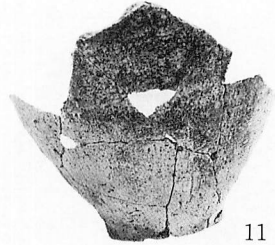
6



7



9



11



8 a



10 a



8 b



10 b

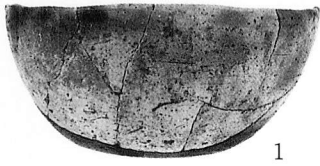


12

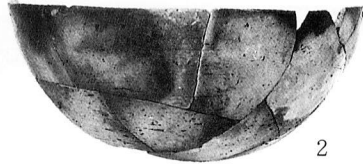


13

写真図版46 遺物(1)



1



2



4



3

1 ~ 17 (2 J)

1 ~ 4 (S = 1/4)

5 ~ 17 (S = 1/2)



5



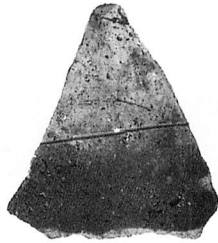
10



6



11



14



15



7



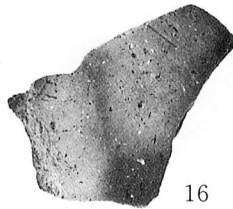
12



8



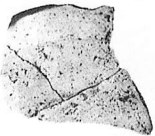
13



16



17

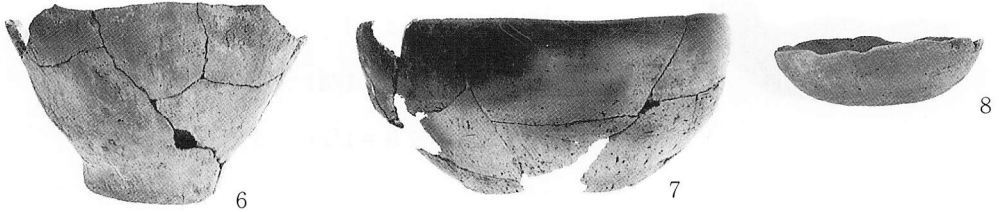


9

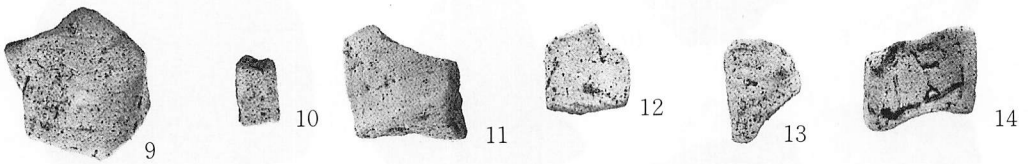
写真図版47 遺物(2)



1 ~ 5 [3 J] (S = 1/2)

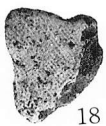
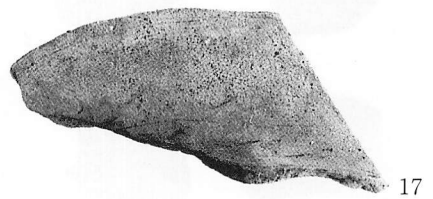
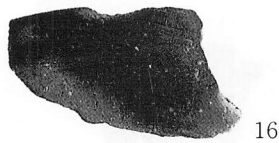


6 ~ 8 [4 J] (S = 1/4)

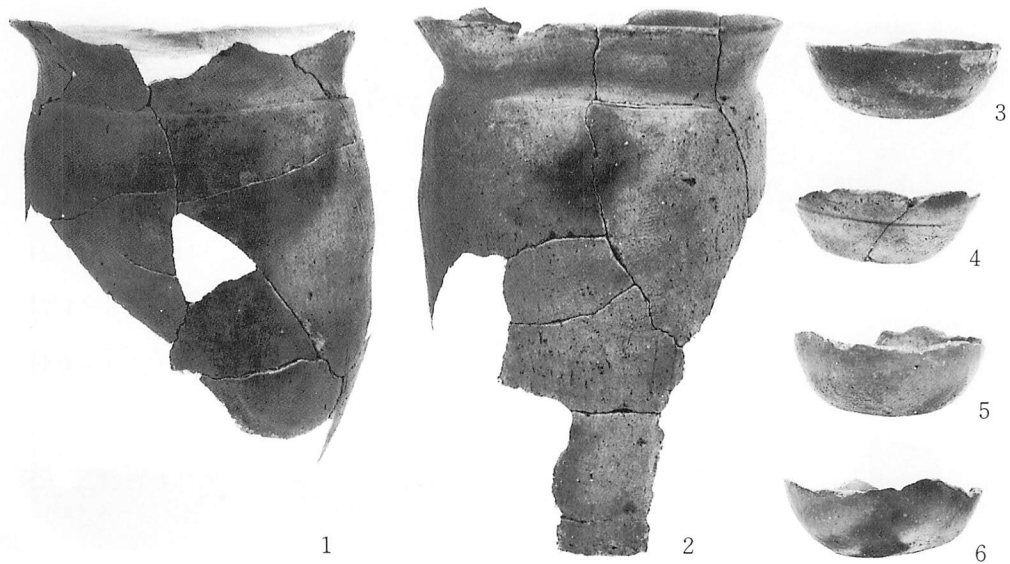


9 ~ 14 [6 J] (S = 1/2)

15 ~ 20 [7 J] 15 (S = 1/4) 16 ~ 20 (S = 1/2)



写真図版48 遺物(3)



1

2

3

4

5

6

1 ~ 7 [8 J] (S = 1/4)
 8 ~ 11 [9 J] (S = 1/4)
 12 ~ 15 [10 J] (S = 1/2)



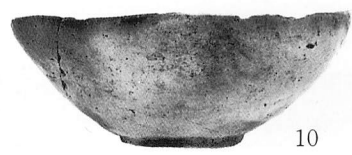
7



8



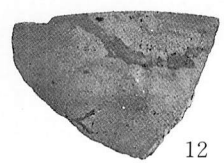
9



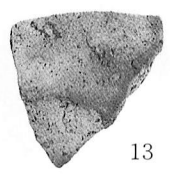
10



11



12



13

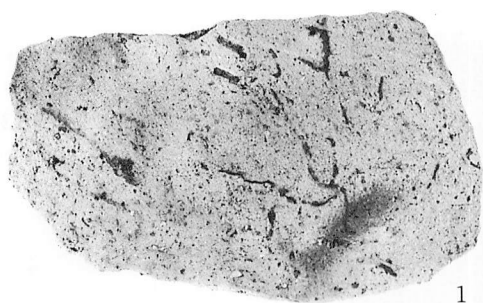


14

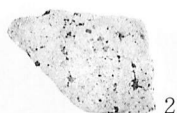


15

写真図版49 遺物(4)



1



2



3



4

1 ~ 4 [11 J](S=1/2)

5 [12 J](S=1/2)

6 ~ 25 [13 J](S=1/4)



5



14



20



6



9



15



21



7



10



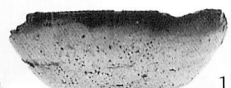
16



22



8 a



11



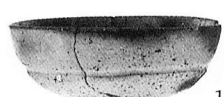
17



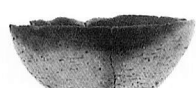
23



8 b



12



18



24

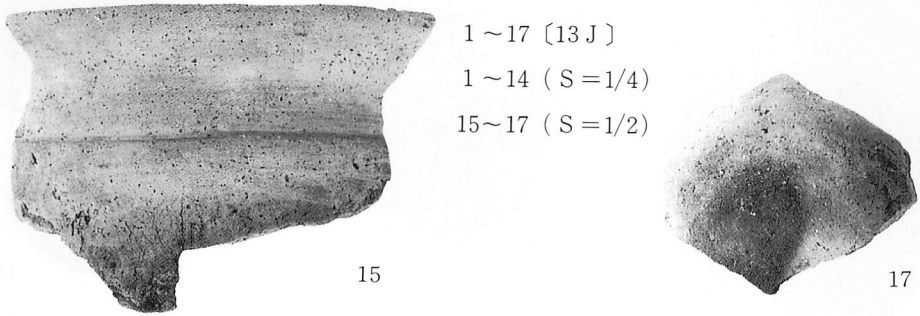
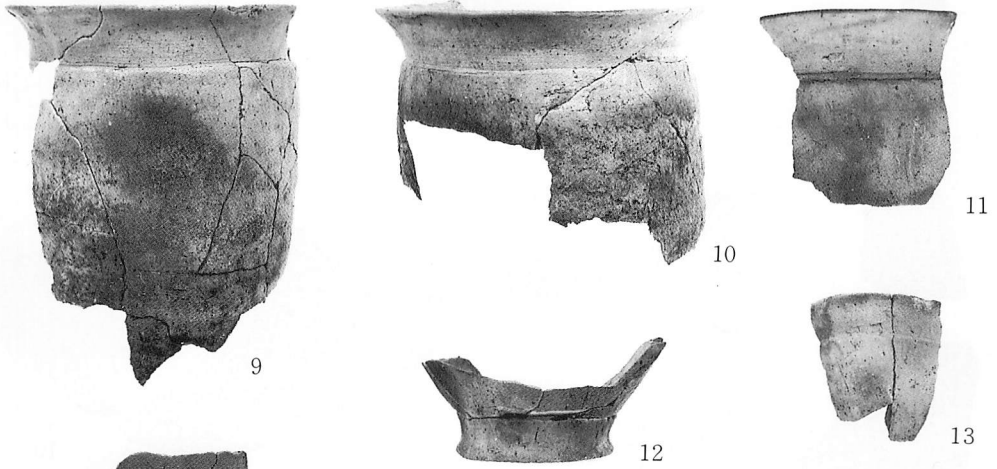
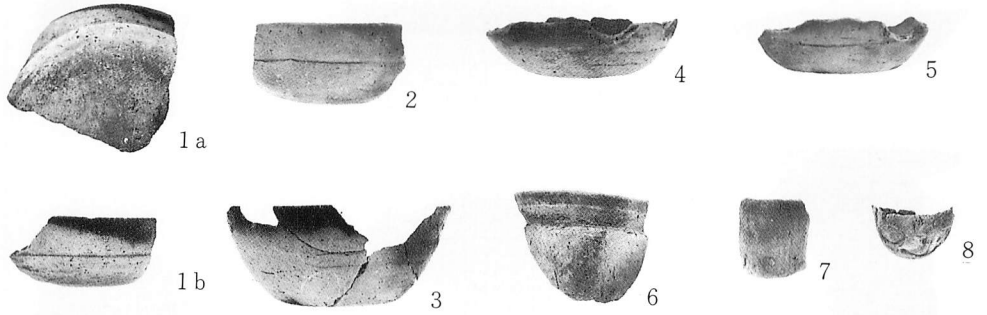


13



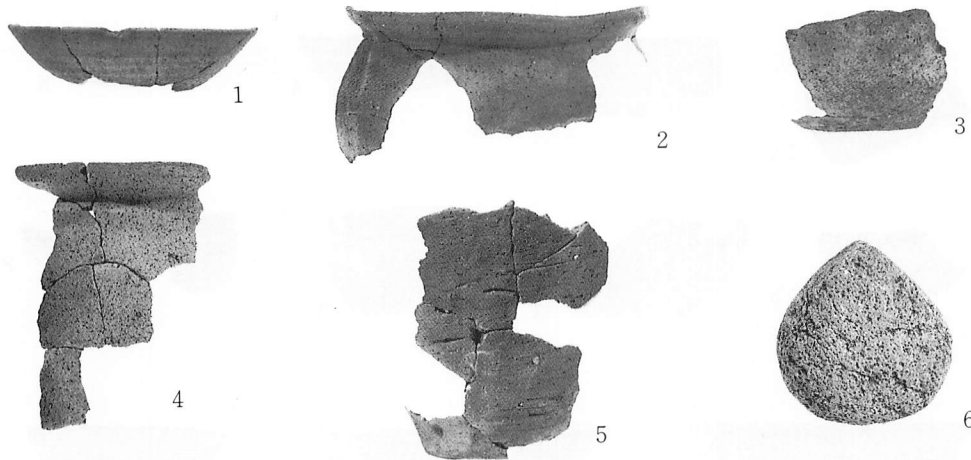
19

写真図版50 遺物(5)



1 ~ 17 [13 J]
1 ~ 14 (S = 1/4)
15 ~ 17 (S = 1/2)

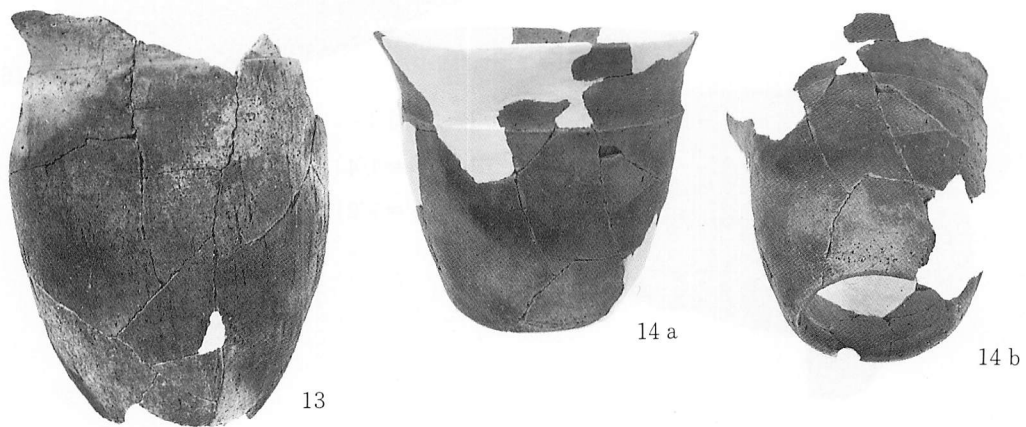
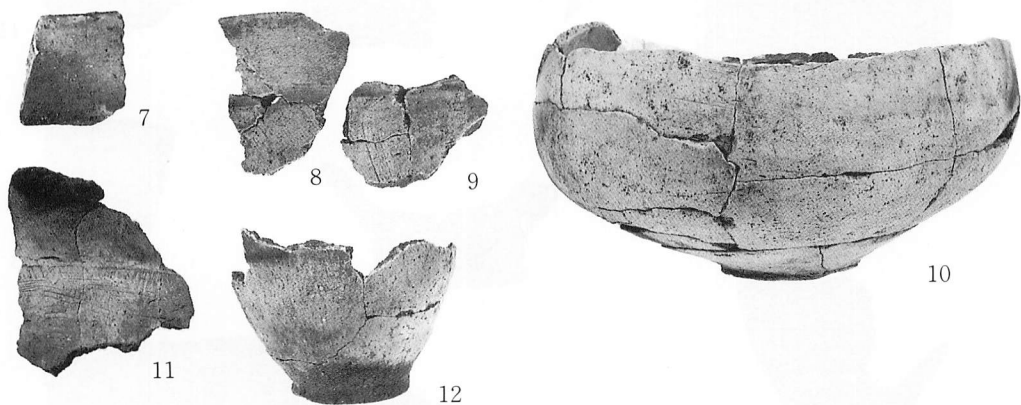
写真図版51 遺物(6)



1 ~ 6 [14 J]

7 ~ 14 [15 J]

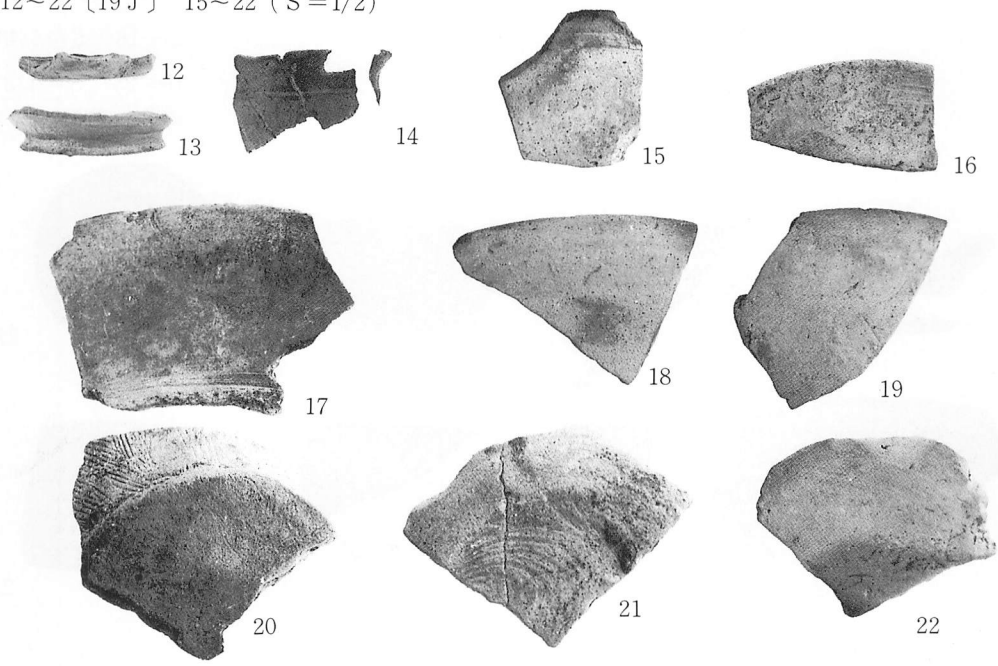
6 ~ 9, 11 (S=1/2) 1 ~ 5, 10, 12 ~ 14 (S=1/4)



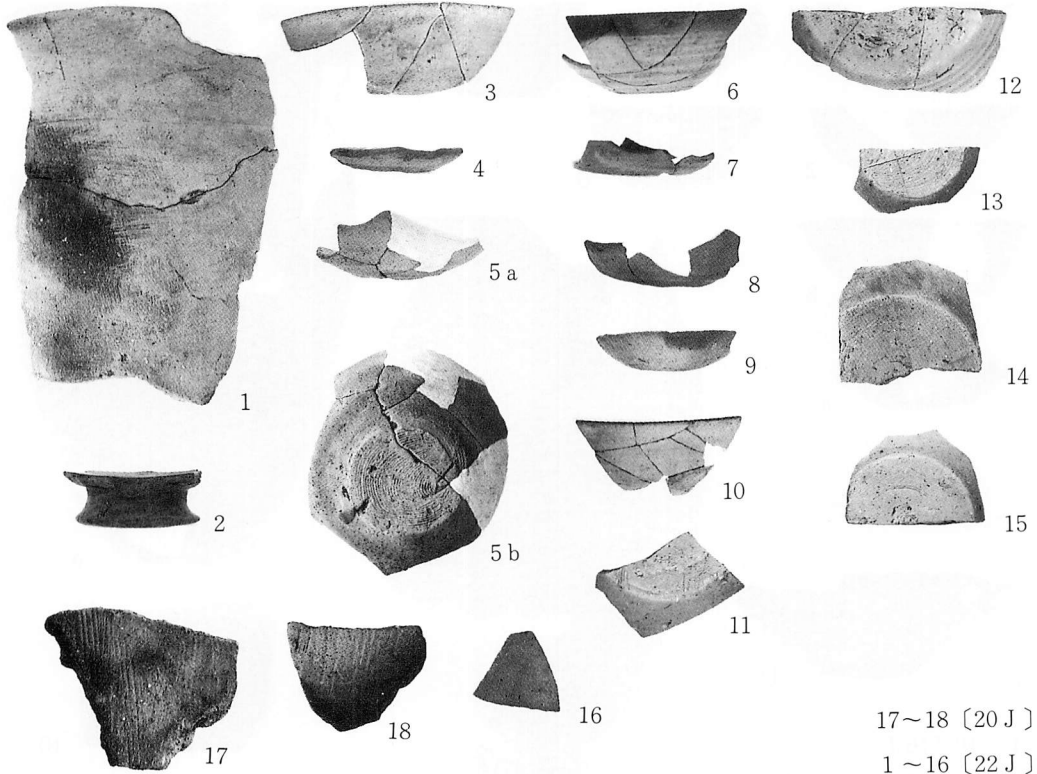
写真図版52 遺物(7)



1 ~ 10 [16 J]
 11 [18 J] 1 ~ 14 (S=1/4)
 12 ~ 22 [19 J] 15 ~ 22 (S=1/2)



写真図版53 遺物(8)



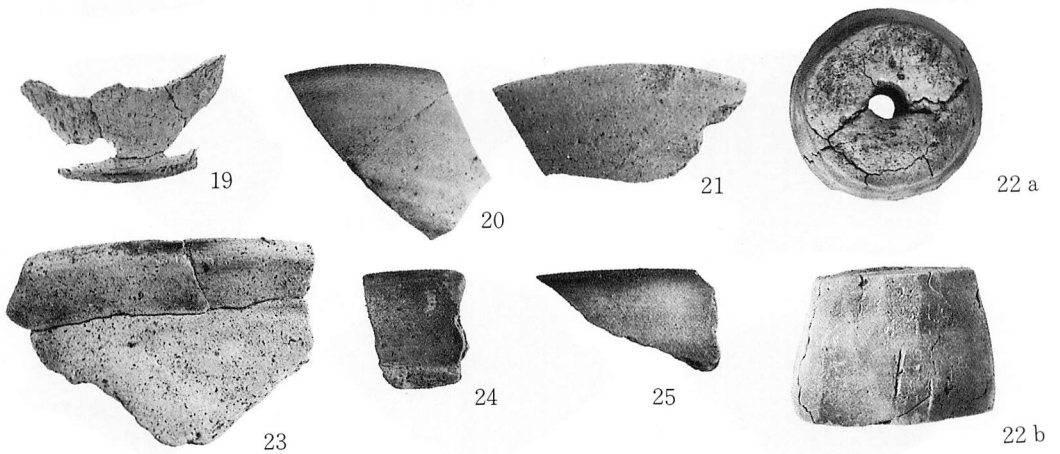
17~18 [20 J]

1~16 [22 J]

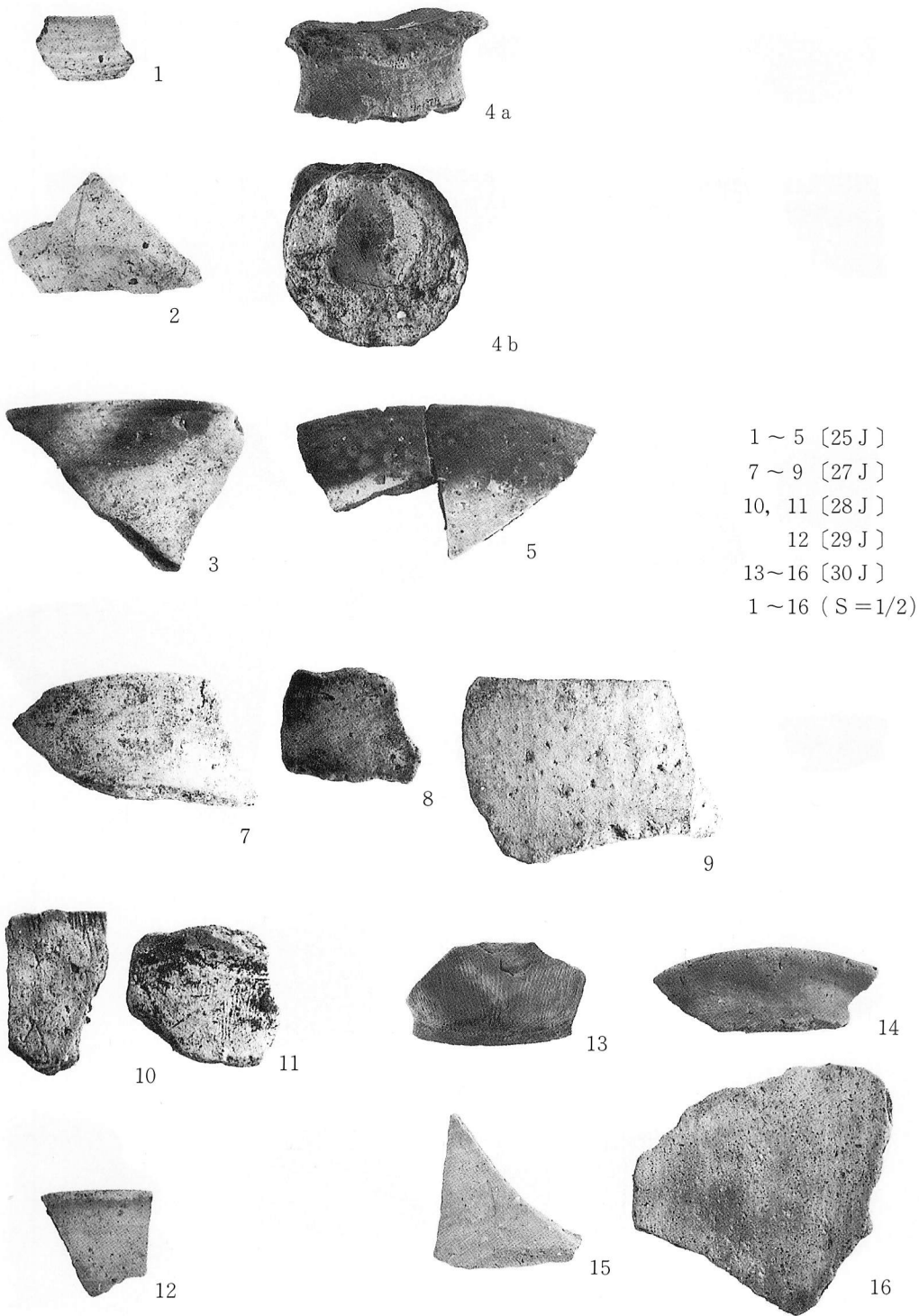
19~26 [24 J]

1~18 (S=1/4)

19~25 (S=1/2)



写真図版54 遺物(9)



1 ~ 5 [25 J]
 7 ~ 9 [27 J]
 10, 11 [28 J]
 12 [29 J]
 13 ~ 16 [30 J]
 1 ~ 16 (S=1/2)

写真図版55 遺物(10)



1



2

1 ~ 7 (31 J)

8 ~ 15 (32 J)

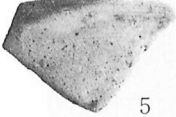
16 ~ 22 (33 J)



3



4



5



6



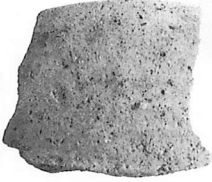
7

1, 2, 16 (S=1/4)

3 ~ 15, 17 ~ 22 (S=1/2)



8



9



10



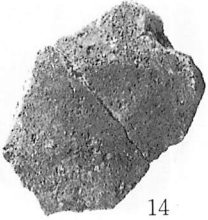
11



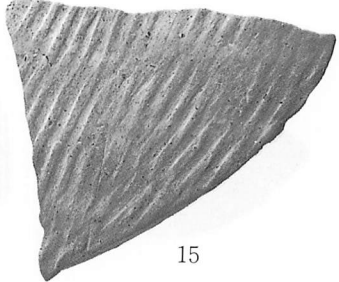
12



13



14



15



16



17



18



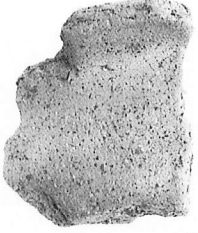
19



20

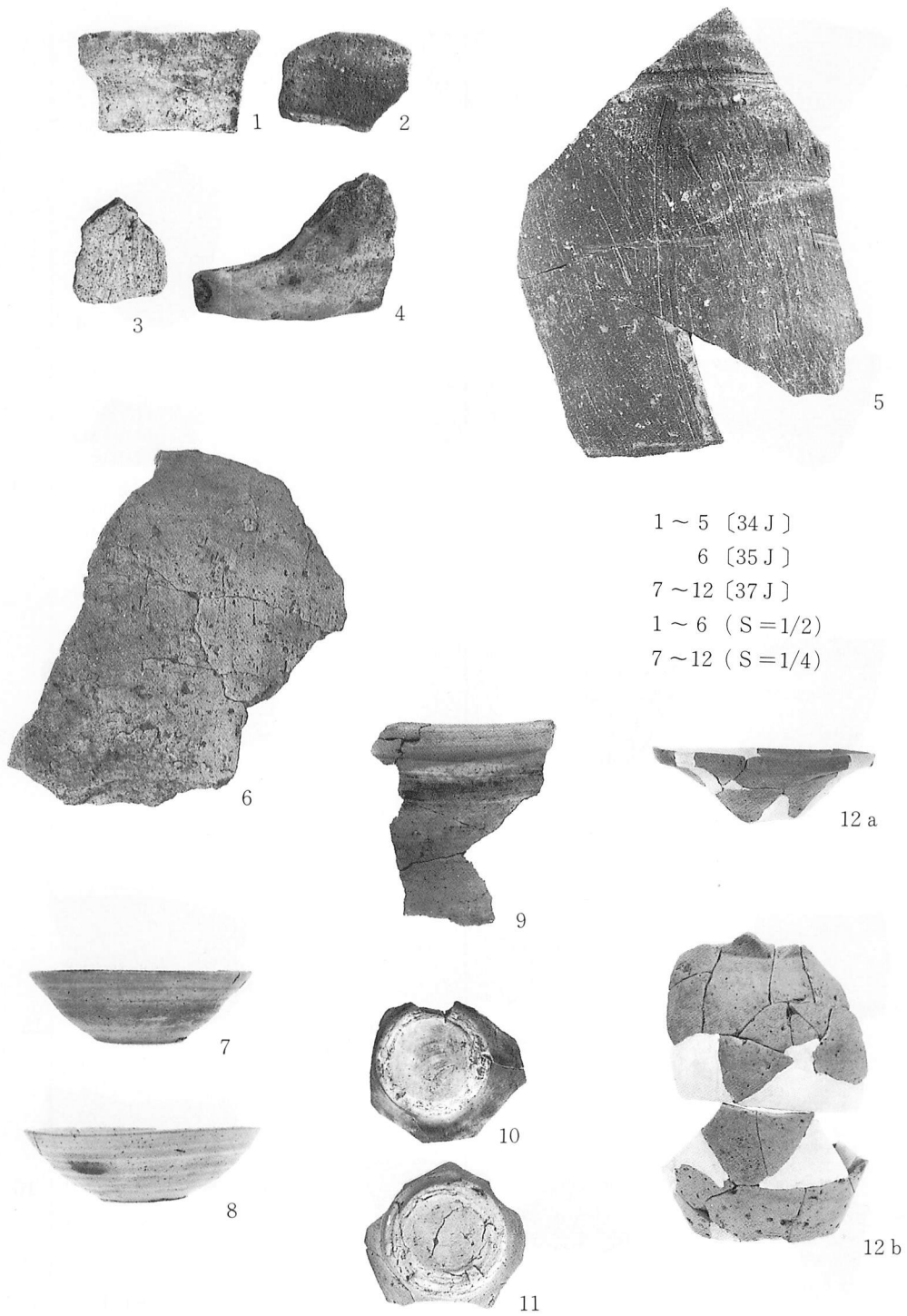


21



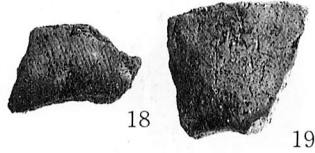
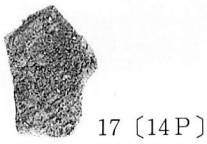
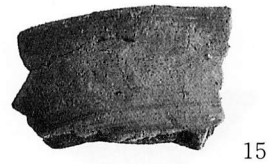
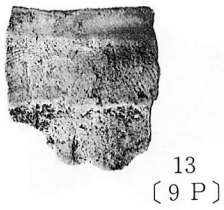
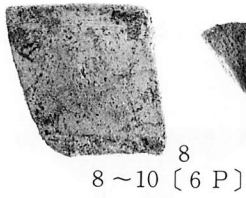
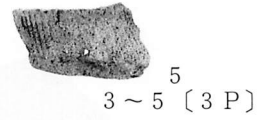
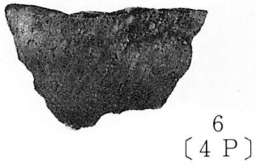
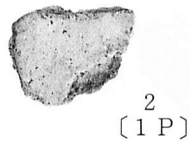
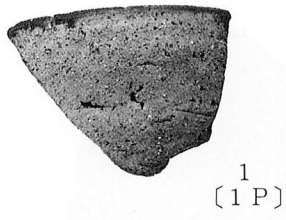
22

写真図版56 遺物(11)

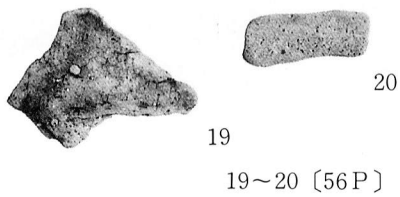
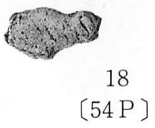
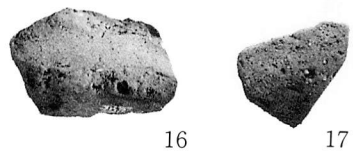
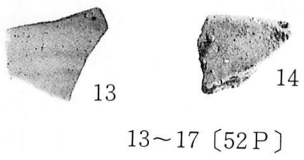
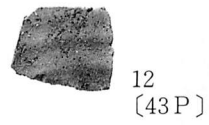
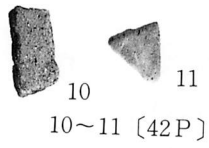
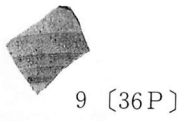
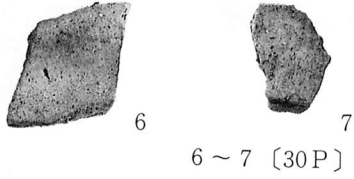
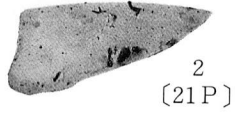


1 ~ 5 [34 J]
 6 [35 J]
 7 ~ 12 [37 J]
 1 ~ 6 (S=1/2)
 7 ~ 12 (S=1/4)

写真図版57 遺物(12)

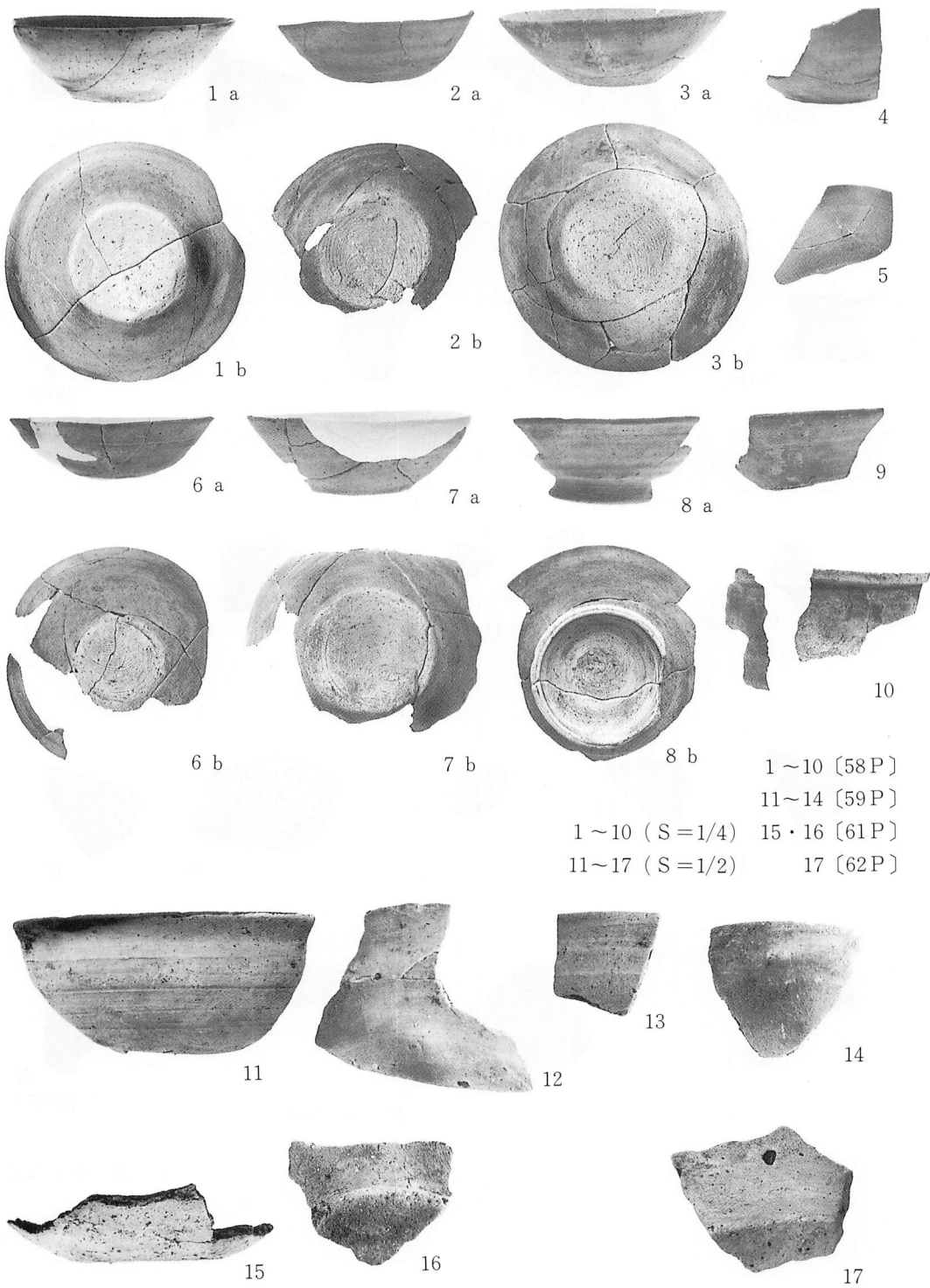


14 (S=1/4)
18~19 [10P] 1~13, 15~19 (S=1/2)
写真図版58 遺物(13)



1 ~ 21 (S = 1/2)

写真図版59 遺物(14)



1 ~ 10 [58 P]
 11 ~ 14 [59 P]
 1 ~ 10 (S=1/4) 15 · 16 [61 P]
 11 ~ 17 (S=1/2) 17 [62 P]

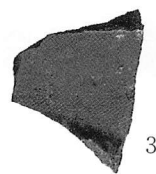
写真図版60 遺物(15)



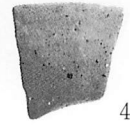
1 a



2



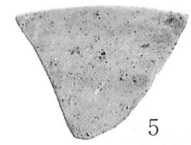
3



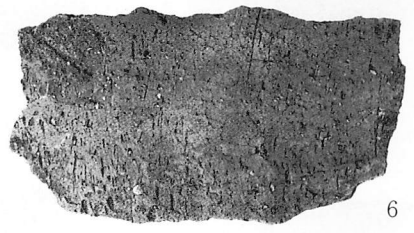
4



16



5



6

1 ~ 6 [63P]

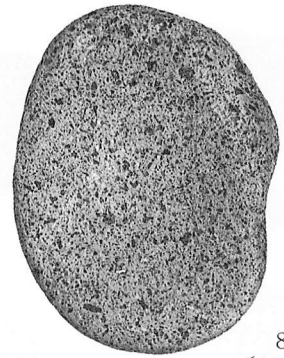
9 ~ 15 [67P]

1 ~ 8, 14 · 15 (S=1/2)

9 ~ 13 (S=1/4)



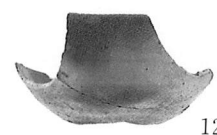
7
[65P]



8
[66P]



9



12



10



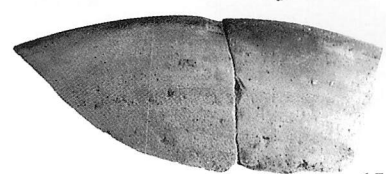
13



14

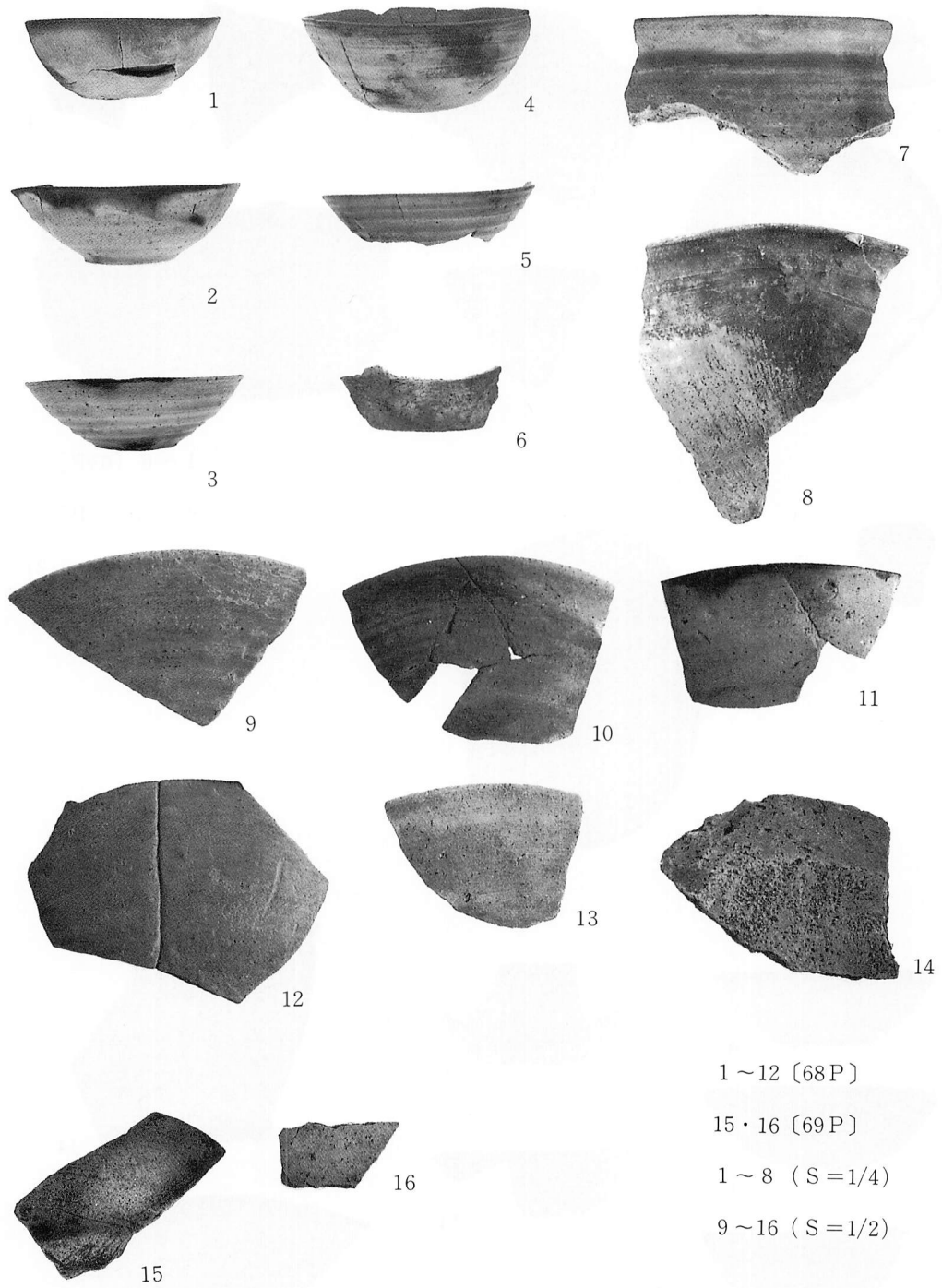


11



15

写真図版61 遺物(16)



1 ~ 12 [68P]

15 · 16 [69P]

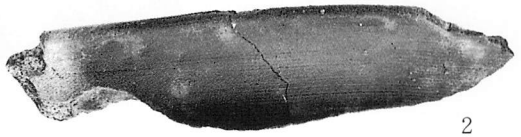
1 ~ 8 (S = 1/4)

9 ~ 16 (S = 1/2)

写真図版62 遺物(17)

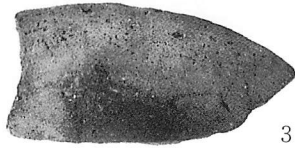


1



2

1~4 [1 M]
5~6 [2 M]
8~10 [6 M]
11·12 [8 M]
13~20 [9 M]



3



4

1 (S=1/4)
2~20 (S=1/2)



5



6



7

[3 M]



8



10



11



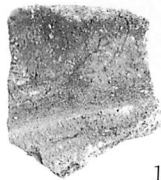
9



12



13



14



15



16



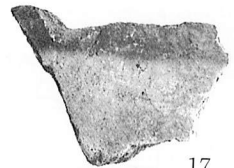
18



19

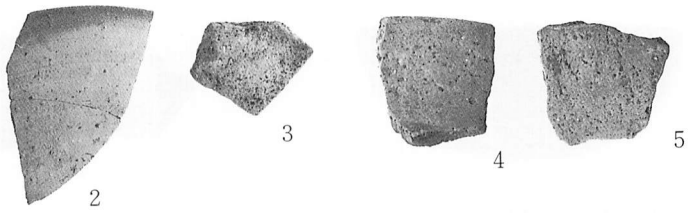


20

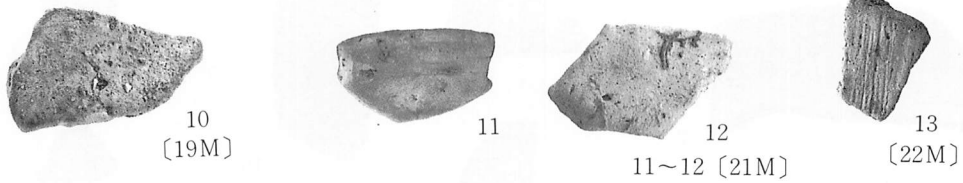


17

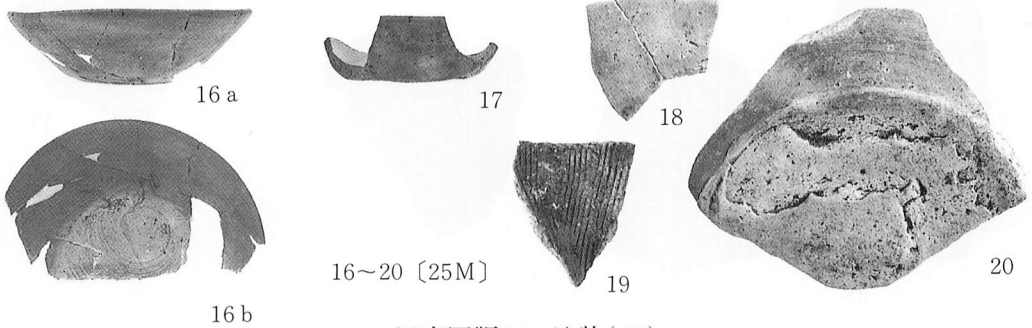
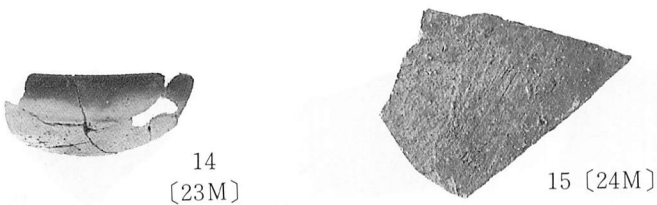
写真図版63 遺物(18)



2 · 3 [13M]
 4 · 5 [14M]
 6 ~ 8 [17M]



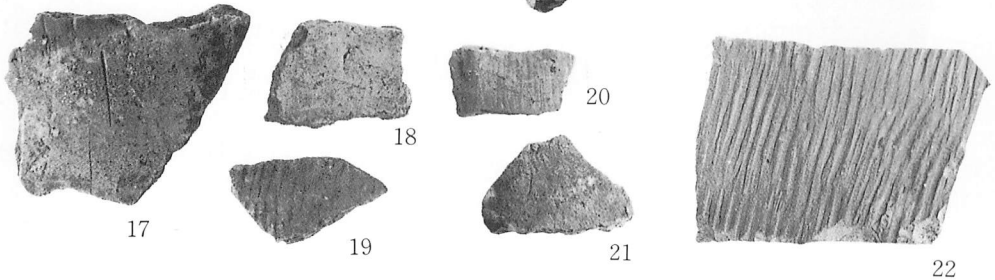
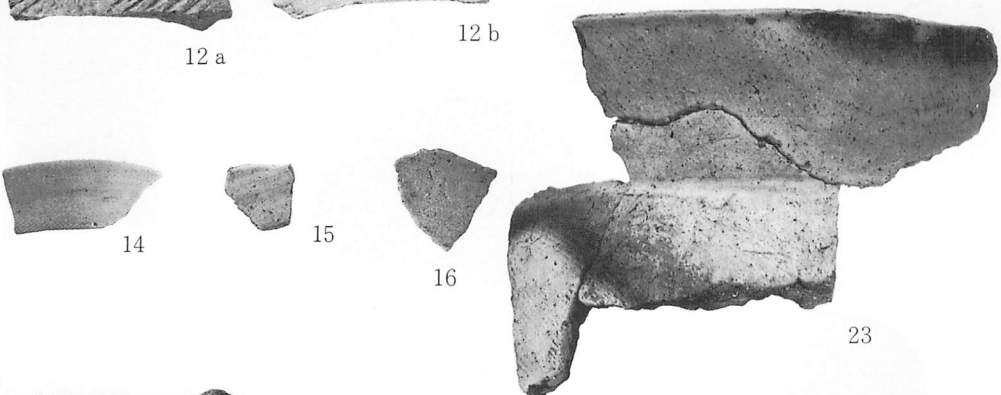
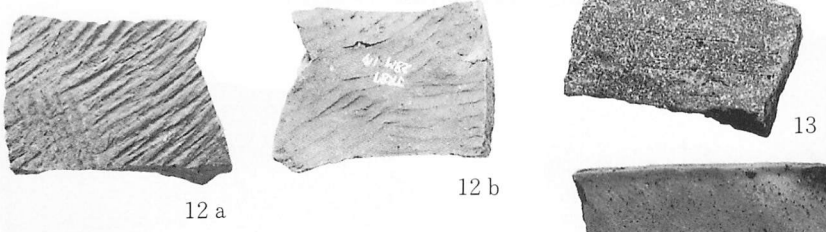
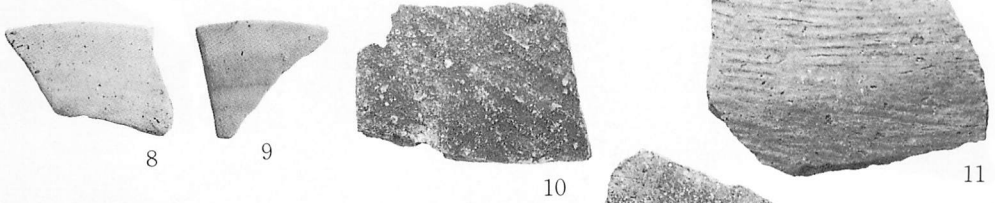
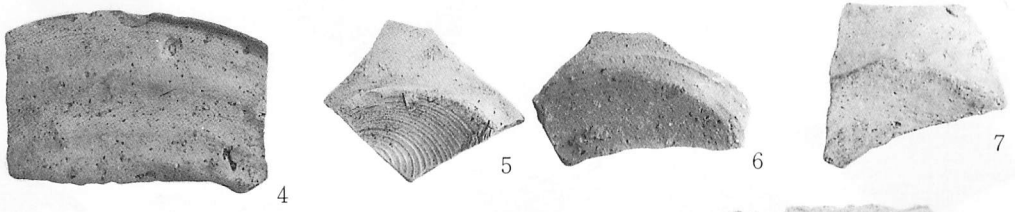
2 ~ 13, 15, 18 ~ 20
 (S=1/2)
 14, 16 · 17 (S=1/4)



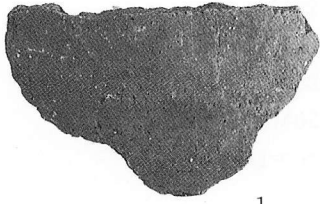
写真図版64 遺物(19)



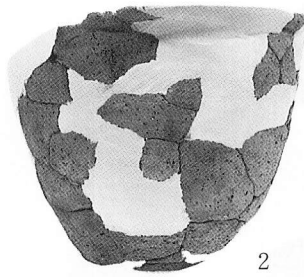
1 ~ 3 [26M]
 4 ~ 13 [28M]
 14 ~ 16 [29M]
 17 ~ 23 [30M]
 1 ~ 23 (S = 1/2)



写真図版65 遺物(20)



1
[32M]

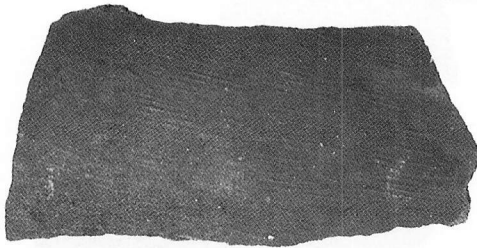
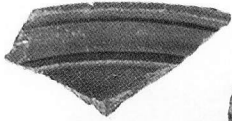


2



3

2 ~ 3 [34M]



4



5



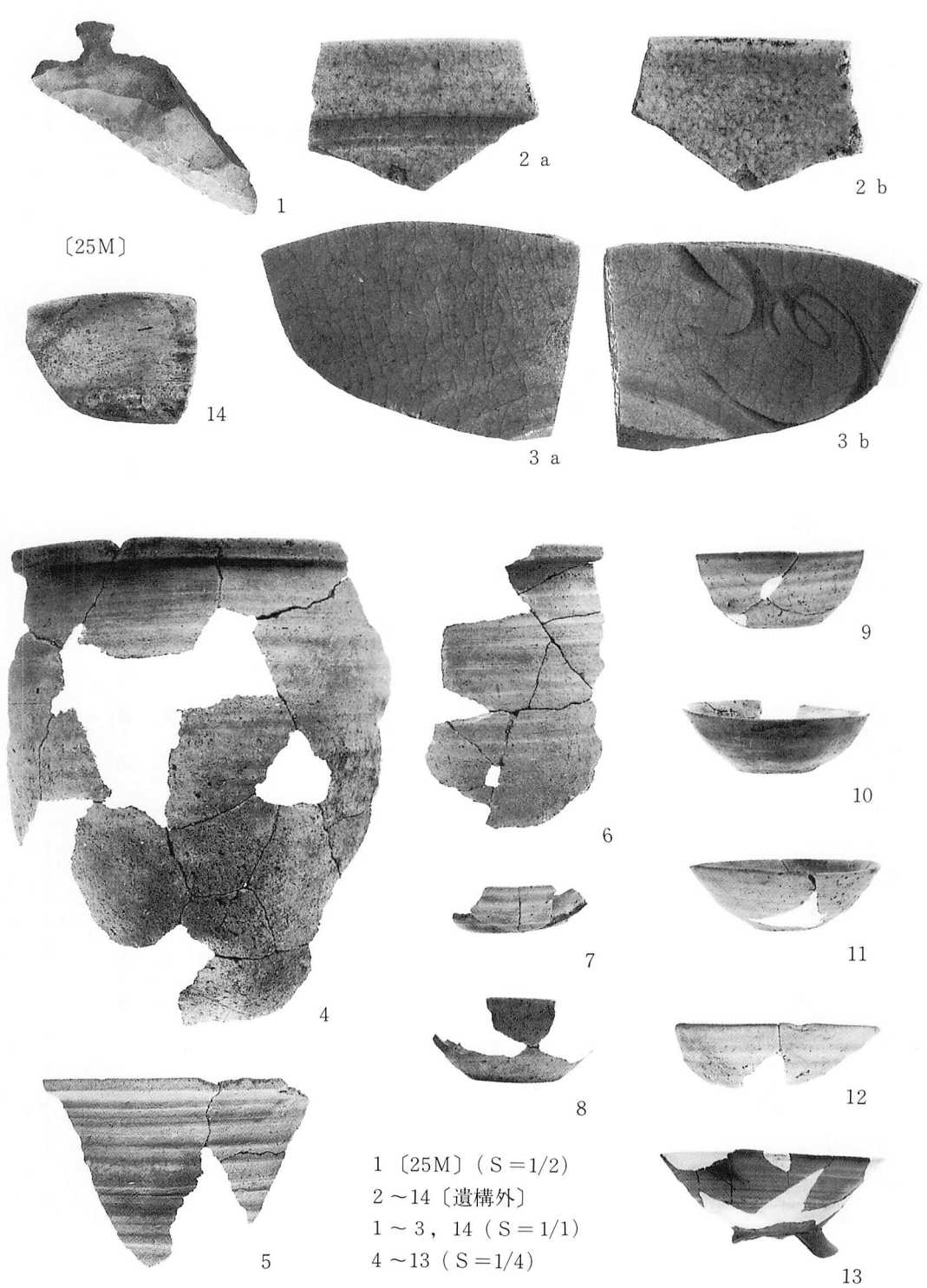
6

4 ~ 6 [35M]

1, 3, 6 (S=1/2)

2, 4, 5 (S=1/4)

写真図版66 遺物(21)



1 [25M] (S=1/2)
 2~14 [遺構外]
 1~3, 14 (S=1/1)
 4~13 (S=1/4)

写真図版67 遺物(22)

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所 長 及 川 昌 二

副 所 長 鎌 田 良 悦

〔管 理 課〕

管理課長(兼) 鎌 田 良 悦

管理課長補佐 伊 藤 吉 郎

主 事 阿 部 隆 広

嘱 託 似 内 喜 兵

運 転 技 士 佐 藤 春 男
兼 技 能 員

〔調 査 課〕

調 査 課 長 昆 野 靖

主任文化財 三 浦 謙 一
専門調査員

〃 工 藤 利 幸

〃 高橋 与右エ門

〃 田 鎖 寿 夫

〃 佐々木 嘉 直

〃 平 井 進

〃 中 村 良 一

〃 中 川 重 紀

文 化 財 光 井 文 行
専門調査員

〃 佐 瀬 隆

〃 玉 川 英 喜

〃 斎 藤 博 司

〃 東海林 隆 幹

〃 遠 藤 修

〃 斎 藤 邦 雄

〃 高 橋 義 介

〔資 料 課〕

資 料 課 長 新 田 和 雄

主任文化財 小 田 野 哲 憲
専門調査員

〃 酒 井 宗 孝

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第130集

石田Ⅱ・寺領・西光田Ⅰ遺跡発掘調査報告書

国道397号道路改良工事関連遺跡発掘調査

印刷 昭和63年 8 月25日

発行 昭和63年 8 月30日

発行 (財)岩手県文化振興事業団 埋蔵文化財センター

〒020 岩手県紫波郡南村大字下飯岡第11地割字高屋敷185

T E L (0196)38—9001・9002

印刷 三陽印刷株式会社

〒020 岩手県盛岡市肴町13—28

T E L (0196)51—1 3 2 1